



BOX-AiR (ボックスエア)

©KODANSHA2013

# 目次

第二十回BOX-AIR新人賞受賞作

覚悟してよねっ！ステラ☆ボーイズ

著＝馬見ヶ崎帖／illustration＝風乃

第十九回BOX-AIR新人賞受賞作

クラゲの食堂

著＝アオヤマミヤロ／illustration＝趙迎樂

第十八回BOX-AIR新人賞受賞作

# 勇者のお仕事

著 || 田中彼方 / illustration || 東京モノノケ

第十七回BOX-AIR新人賞受賞作

宇宙人と綴じたメモリア

著 || 折口哲 / illustration || 二月薫

第十六回BOX-AIR新人賞受賞作

ごあけん アンレイテッド・エディション

著 || 百壁ネロ / illustration || 櫻木けい

新刊予告

編集後記

表紙イラスト || シロタカ

アートディレクター || ナカノケン (アルフエイズ)

第20回

BOX-AiR新人賞受賞作品!

賞  
格別

# ステラ☆ ボーイシーズ



2013年度、  
最後のアニメ化候補作は  
アニメなんて  
大大大嫌い♡

第1話

大嫌いな  
はじめよう

著 馬見ヶ崎帖  
Illustration 風乃

秘

第二十回BOX-AiR新人賞受賞作選評

# 『覚悟してよねっ！ ステラ☆ボイシーズ』

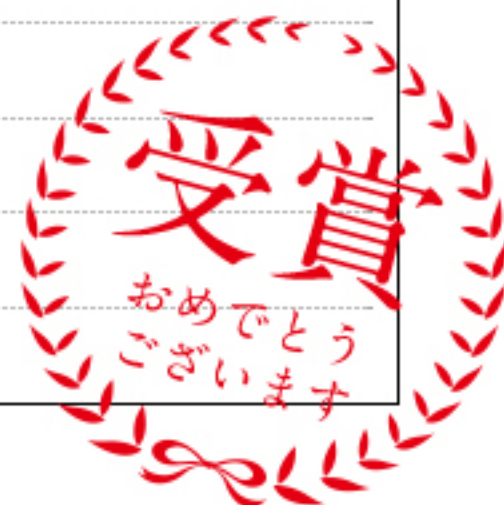
馬見ヶ崎帖

・アニメオタクの父親に嫌々アニメ知識仕込まれた女子高生が、反発を覚えながら目覚めていく……というある意味、少年マンガであれば王道のような設定とストーリー展開。純粹に読者を楽しませることを目指していて素晴らしい。

・軽快なテンポで楽しく読ませる。しかも先が気になる展開。上手い。

・サービス精神旺盛な作品。女子高生がいっぱい、謎の美形青年、展開の早いストーリーなど、いい意味でプロっぽい。

・非常にマンガやアニメっぽい作品。物語がドタバタする中で、キャラの魅力をどこまで引き出せるか……。





馬見ヶ崎帖——Mamigasaki Jou

山形県在住。本作品で第二十回BOX-Air新人賞を受賞。投稿時のペンネーム「荻野梓綺」おぎのしきより改名した。

風乃——Kazeno

イラストレーター。ゲームなどの仕事で主に活動する傍ら、「BOX-Airアニメイラストコンテスト2013」にて「Air賞」と「スターチャイルド賞」の2部門をダブル受賞する。

私は家に帰るのが嫌だ。

「……ただいま」

何が苦痛って、玄関先に半裸幼女の微笑<sup>ほほえ</sup>むポスターが貼つてあるのが嫌だ。

壁から眼を背<sup>そむ</sup>けても、キヤラ物スリッパ。お洒<sup>しゃ</sup>落<sup>れ</sup>なインテリ  
アシヨップなんかじゃ絶対お目にかかれない、ゲーセンのク  
レインゲームで積<sup>たぐい</sup>んでる類<sup>たぐい</sup>の。

「……………」

下駄箱げたばこを漁あさっても埒らちが明かない。ストツク全部、同じ様な萌もえキャラがプリントされたものしか入ってないから。

「……………」

仕方なく桃色の髪をした萌えキャラを履はいて上がれば、

『おかえりなさい！ お兄ちゃん！』

大画面から、その彼女が語りかけてくる。

「お兄ちゃんじゃないし……」

性別違れつきうから。歴とした女子ですから。

丁度良い具合にシンクロした『きずな色ファンタジエンヌ』。地上波では深夜にオンエアされてるアニメも、専門チャンネルならでの再放送タイム。

「萌えアニメって奴は……どいつもこいつもベタなキャラばかり……」

……嫌なら観るな？

ハッ！ それが出来たら、どれほど心穏やかになれるか？  
プチ……プチ……プチプチプチプチプチ！

在りし日の高橋名人も真っ青なくらい電源ボタンを連打してみても……反応なし。

「ハア……」

効かないリモコンを放り出して、ソファに横になる。

『どこ弄いじってるのよ！ お兄ちゃんのバカ！』

ささくれた気分さわに障りまくる、高音のアニメ声。

「もおっ！」

クッションを曲げて耳を覆おおつても、鼓膜に届いて来て。

『今日もウイルス退治お疲れ様！』

違う！ 私は禍々まがまがしい悪魔ウイルスを駆除する電腦戦士なんかじゃない！

「萌え萌えで胸焼けする……」

無糖のコーヒーで甘さを中和しようとしても、カップには媚び媚びの萌えキャラがプリントされてた……。

「はあ……」

気が重い。お風呂は特に声が響くから。

『お兄ちゃん！ お背中流してあげる！』

案の定、扉を開ければ幼女声が反響する。

「……」

全ての部屋にモニタが据え付けられている我が家。勿論、お風呂場にも防水万全のモニタ様が鎮座してて。幾ら掛かったのか考えたくもない、こんな無駄な設備に。

『見ちゃダメだよ……おっぱい小さいから……』

「いやいやいや！」

別に小さくないし！ 君の嘘みたいに細い体なら、十分にD

とかEとか有るから！ 何を以て貧乳と卑下するの？ デリカ

シー不足のリアリテイが同性には不快で仕方ない。

ビシヤツビシヤツ！ ビシヤツビシヤツビシヤツビシヤツ！  
ビシヤツ！

高速ピストンでシヤンプーを吹き付けても、防水パネルに跳はね除のけられる。

「チツ……」

無駄な抵抗を切り上げて湯船に浸かれば、真正面に大画面。

「しかし、最近のアニメって……こんなのばかり……」

「不幸だ、不幸だ」言ってる割には次から次へと女の子の取巻まきが増えてって、漏れ無くみんなが主人公を大好きって何なんだ？

「劣化コピーとは、よく言ったものよ」

一度流行ると手も品も変えないままギミックだけ似せて乱造するもんだから、身も蓋もない粗悪品の一丁上がり。

「うう……茹だっちやう……」

同じフオーマツトのはずなのに体感時間の長さで逆上せそうだよ。こんなんでも万単位でパッケージが売れるらしいから、摩訶不思議な世の中よね。

「やっとなEDか……」

ロールの最後で地味にクレジットされてる伊勢静馬。

「こんな退屈な作品ばかりなのに、なあんで監督を任され続けてるんだろ？」

エレクトリカル・プリンセスに参加してたスタッフとは思え



ないよ。

「作風合わないモノまでなんでもかんでもやらせるから……」

なんて愚痴愚痴呟つぶやいてると……アニメ専門チャンネルは容赦なく次の話をオンエアし始める。再び新たな苦痛の三十分の始まりだ。

『私あなた、貴男のことが気になります』

(酷ひどい……)

「端折はしよりすぎ！ ほとんどフラグ立ってないだろお！」

思わず画面に突っ込んでしまった。

「だいたい、猫も杓子しゃくしも売れっ子声優ばかりって舐めてんの？」

武田<sup>ただ</sup>かや菜<sup>な</sup>なんて、こんな淑<sup>しと</sup>やか系は合わないでしょ？

特にパックス・アソシエーションの関わる作品では顕著。役のミスマッチなんて屁<sup>かっぱ</sup>の河童、臆<sup>おそ</sup>面もなく人気声優をガンガン起用してくる（私の中で）悪名高き制作会社。

『この：泥棒猫！』

「いまどき泥棒猫とか言う？」

筆が速いことだけが取り柄の賀<sup>あ</sup>名<sup>の</sup>生<sup>う</sup>とかいうライター、頭が痛くなる。

「ここはさー！」

居ても立っても居られずに、浴槽から立ち上がり、

「《冗談よね？》……違<sup>ちが</sup>うかな、うーん……《そんなの信じら

れない！』」

ポーズをつけながら「正しい」台詞せりふを探したけれど……どうもしつくり来ない。

（彼とヨリを戻そうとする元カノに対して、彼女が採るであろうリアクション……）

湯冷めしそうになりながらも、私は探し続けた。心に刺さった小骨を抜きたくて。

（別れたのに今でも想いが通じあってる元カノに対して……）  
だったらやっぱりこう言うべきか。

「『何を考えてるの？』』」  
完璧なタイミングでシンクロ。

「このお！」

バシヤアアアツ！

無粋なちんにゅうしゃ闖入者に脊髄反射でお湯をぶっかけた！

「父に向かって何をするかせい星！」

文句を言いたいのはこっちだよ！

「お父さん！勝手に開けないでって何度言ったら！」

「お前こそ勝手にカーテンを掛けるなと何度言ったら！」

スイッチ切れないテレビを観たくなければ物理的に隠すしかないでしょ！

「お父さんが悪いんだ！リモコンを魔改造して消せなくしてるのが！」

「今どき、どこの家庭でもテレビなんか点けっばなしだぞ？」  
「だったら普通の番組見せてよ！　なんでアニメ専門チャンネルだけなの？」

「くだらん芸人のバラエティや演技力皆無かいむのイケメンドラマなんか見る価値無い」

「友達と話が合わせられないじゃない！」  
「そうなのだ。私は友達との共通の話題が酷く少ない子だった。」

原因は間違いなく、このバカ父のせい。

物心つく頃には、なんとなく友達との会話に違和感を感じ始めてた。会話の中で話題に挙がる番組やタレントに一切聞き覚

えがない。

それでもまだ低学年までは良かった。週末の朝アニメに共通性を持てたから。

ところが高学年にもなれば、それも通用しなくなる。仕方なく貝を貫くと「教育的観点からテレビを見せない家庭」と勘違いされたので、敢えて正さずに遣り過ごした。

「アニメ以外に、観るに値するコンテンツなど存在せぬわ！」  
だって、こんな身勝手な保護者だなんて説明したくないし！  
こんな人のDNAを受け継いでいるのかと思うと軽く死にたくなる。

「押し付けられても迷惑……」

『フリーメイソン・マテリアル、はっじまるよお〜っ♪』

「待ってました！ 世界一可愛いよっ！ ゆうーっ！

ゆうーっ！ ゆあーっ！」

雄<sup>おたけ</sup>叫びを上げて拳を突き上げるお父さん。仮にも、いい歳した娘を持つ大人が。

バタン！

視界に入れたくないので、自室の扉を閉じて断固拒否する！  
だけどそれだけじゃ不十分なの。

ギシッ！ ギシッ！

「一緒に観るんだ星！ この作品を押さえずして萌えのトレンドは語れない！」

ウチのドアというドアには鍵という物が存在しないのだ。なんて厄介な魔改造っ！

「嫌！」

力尽くで開けようとしてくるお父さんを必死に押し留める！

「一人で観ればいいでしょ！ 私はイーヤーだー！」

文字通りの押し問答を続けていると、フツ……と力が抜けた。

「星……ちっちゃい頃は膝の上で一緒に観てくれたのに……」

ドア越しに聞こえる、哀愁を帯びた声。

「……星はパパが嫌いになっちゃったのかい？」

「お父さん……」



グイ！

「させるかあ！」

情に訴えられても欺だまされるもんか！

「いーやーだあー！」

姑息こそくな魂胆こんたんを読み切って、渾身の力で抗あらがう！

「星！ 日本のアニメは世界最先端のコンテンツなんだぞ！」

若作りしていなくても若く見られがちなお父さん。身内びいき鼻屑びいを差し引いても、社会の垢まみに塗れた社畜カテゴリには相応ふさわしくない。髪はフサフサで白髪もないしね。

だけど嗜好まで永遠の少年を拗こじらせてるのはホントに困る！  
一般的な節度を超越してるお父さんなんて、とても人様に見

せられない！

「毎日毎日リッチなコンテンツに触れられる幸せを噛み締めずして、何が日本人か！」

身嗜みの整った社会人に諭されるなら、少しは揺らぐかもしれないけど……

「日本のアニメは世界一イイイイイイ！」  
マーチングバンド風衣装のロリキヤラTシャツ着用者に言われても！

『お兄ちゃん！ 急に入ってこないで！』

「んが！」

目眩がしそうな超絶テンプレのラツキースケベに、思わず脱

力。つい手を扉から離してしまった。

「おおおおおおお……」

なのにお父さん、尻餅をついた娘には目もくれずに、恍惚と画面を眺めてる……

「どうして……」

私は悩まざるを得ないよ。何度観たって割り切れない深夜アニメの《原罪》に。

「どうしてあからさまなHシーンが定期的に挟まれるのよ……」

「対象年齢が還暦以上の水戸黄門にだって風呂シーンがあるぞ？」

さも当然のようにお父さんは説明するけど、

「知らないよ！ 一度も見たことないのに！」

「だっけ？」

「てか、映らなくしたの、お父さんでしょ！」

知らんぷりしたって許さない！

「年頃の娘とこんなエロ……観ようとする親っておかしい！

絶対おかしい！」

「星……」

「観たいなら一人で観てよ！ 私見たくない！」

『そんな見ないで……』

頬ほおを赤らめたブルマのヒロインがハミパンを直しながらっぶや眩

く。

てか、ブルマって何？　なにその絶滅危惧種？　深夜アニメ以外じゃ見たことないけど？　おかしいと思わないの？　このアニメ作ってる人？

「よりもよって……こんなの……」

無駄にふるんぷるん揺れる水着シーンとか、無駄に胸が強調される制服とか！

当たり前のように挿入されるお風呂シーンとか、着替えシーンとか！

過激な作品に至ってはセツ……まが紛いの行為とか！

「お父さんおかしい！　父親失格だよ！」

「星！ お父さんは、お前のためを思っ……」

「全然思われてないよ！ ……死ね！」

（あっ……）

つい勢いで口を滑らせちゃった。

（しまった……いくらなんでも「死ね！」はないよ……）

「星……」

謝ろう……ここは謝るのが人として正しい。

「お父さん……ごめんなさ……」

ビシッ！

ところが、神妙な顔した私に、お父さんサムアツプを掲げ、  
「今の『死ね』は、最高に良かったぞ！ 心が震えたなっ！」

とか、言ってきたやつたの。

「お父さんのバカバカバアアアああーかああツツツ！」

前言撤回——「死ね！」でもいいかも。

『気に入らないところがあるなら言つてよ！　お願い！』

画面見なくても分かる。たぶん主人公を大好きなヤンデレが迫ってるんだ……あられもない格好でおっぱいでも押しつけながら。テンプレよ、テンプレ。

「さすが病んでるキャラの演技は一級品だな……遠山とおやまよもぎ」

我が家には逃げ場所など存在しない。全ての部屋に据すえられたモニタで、瞳孔が開ききった萌えキャラ（半裸）が大写しに

なっているはずだ。押入れに籠城ろうじょうしても、アニメ声が響いてくる。

「これだよ！この背筋をゾクゾクさせる病み芝居！これが堪たまらん！」

娘の部屋に居座ってアニメ鑑賞するお父さんって……なんなの？

（嫌！　こんな家、もう嫌！）

「お父さんのせいだ……」

押入れの闇が、黒い感情をぶちまけると背中を蹴り上げる。

「だから出てっちやっただよ……お母さん」

正確に言うなら、それは嘘。私が物心つく前に離婚したから



記憶には残ってない。

でも、お父さんとの結婚生活が破綻はたんした理由なんて、訊かなくとも察せられる。

消灯まで一日中流しっぱなしにされるアニメ。

チャンネル変更も出来ない魔改造リモコン。

トイレにも脱衣所にさえも備えつけられない鍵。

こんな強要みくだりはんされたら、即刻三行半みくだりはんを突きつけたくなつて当然だよ！

ピンポーン！

「またお籠こもり中？」

殺伐とした「団欒だんらん」へ、平然と顔を出してこれる女性。

「紫帆さん、今日は早いねえ♪」

宮井紫帆さん。

仕事帰りとは思えないくらい凜々しいスイーツの彼女は、少しだけ解れた髪がアフターファイブの色気を醸し出してる。

「お夕飯、まだでしょ？」

癒し系の容姿そのままに、さりげない気配り。溢れまくる女子力が眩しいよ！

仮に私が男なら、嫁にしたいランキング一位間違いないしただけ  
ど……

「ありがたく……ごちになります♪」

それよりまず、紫帆さんの手に握られた三人分のお重が恋し

い！

押入れから這はい出して、深々と頭を下げながら受け取った。

ダイニングに降りて、紫帆さんが持参してくれたお総菜そうざいに舌した鼓つづみを打つ。

「んまい♪」

紫帆さんが来てくれないと良くてコンビニの弁当、最悪カツプラーメンで済ませなきやいけなくなる。本当に天と地の差。

「悪いな、紫帆」

『べ、別に、あんたのために作ってきたんじゃないんだからね！』

絶妙なタイミングでツンデレ常套句が聞こえても、彼女は平然としたもの。

「今更気にしないで、かずひで和英君と私の仲じゃない」

なんでもお父さんと紫帆さん、学生時代からの縁らしい。だから、こんな病的アニメヲタクという生態も承知の上。

「私が来なくても、カップ麺めんで済ませたりしちゃダメよ？」

もしかして私のお母さんって紫帆さんなんじゃ？

疑ったこともあるけど、おそらく違う。だって紫帆さんおだ穏やかで柔和な性格だし。間違っても親に「死ね！」とか言っちゃうタイプじゃない。

たぶん、私のお母さんなら気の強い人じゃないかなと思う。

離婚以来、ずっと音信不通。夫どころか娘にも顔を見せたことなんて一度もないし。

「しばらく冷蔵庫は空のまま……アインちゃんを口ずさみながら料理作ってくれた星は何処どこへ……」  
確かに、料理に興味が湧いたのもアニメがきっかけだったけど。

「だあーれが、お父さんのために料理なんか！」  
「星ちゃんも星ちゃん忙しいんだから、負担かけちゃだめよ、和英君」

私が家出しないでいられるのは偏ひとえに紫帆さんのお陰。  
物心ついて以来、児童相談所に駆け込もうと思ったことも数

知れず。だけど、さすがに身内から犯罪者を出すのは忍びない……。

その溜まった鬱憤うっぷんの宥め役なだが紫帆さんだった。

男所帯にちよくちよく訪れては、甲斐か甲斐いしく世話してくれ  
た紫帆さん。父親じゃ対処しきれないの女子のアレコレも面倒  
見てくれた。私たち親子には感謝してもしきれない存在だよ。  
何も知らない人からすれば家族同然に見えちゃうかも。

「この古山こやまって演出、どっかで聞いたような……」

「シアトル☆ガンズで監督なさってた人ね」

「あー…だからか。チープな画作りで良い味を出してる」

「いかにも和英君が好きそう。玄人くろうと受けする作品ばかり手がけ

てるから」

一般家庭では、まず有り得ない話題を自然に交わせるのも、紫帆さんだからこそ。

「紫帆さんがアニメ観てるのって……お父さんと話を合わせるため？」

お皿洗いながらシンクに並んだ彼女へ訊いてみた。

「大人の嗜<sup>たしな</sup>み程度よ」

何気に最新作までフォローしてるのは凄いなと思うんだけど……忙しそうなのに……

「私と和英君の馴<sup>な</sup>れ初<sup>そ</sup>め、星ちゃんも知ってるでしょ？」

「アニメ系の専門学校だっけ……」

今じゃ紫帆さんからは全然そんな匂いがしない。全身隈なくくま キャリアOLの鑑かがみみたいにかまってて、趣味はゴルフと海外旅行ですって言われても違和感がない。

「紫帆さんは……結婚しないの？」

「誠に残念ながら、予定ございません」

お父さんに負けず劣らず、紫帆さんも良い意味で年齢不詳。

実際よりマイナス五ぐらいの過少申告でも全然イケそうな気がする。

（だからこそ余計に、独り身が信じられないよ……）

「あんなんで良ければ何時でも、熨斗のし付けて献上させて戴きま



すけど……」

ソファでアニメ鑑賞してるお父さんにイヤイヤ目線を送りながら尋ねてみたけど、紫帆さんは困った笑顔を浮かべて首を振る。

「やっぱり変人過ぎて論外かあ……あんなのが身内だって知られたくないもんね」

「星ちゃん」

「ん？」

「親子は選べないけど、お付き合いする人は選べるでしょ？」

「コーヒーで良かったよね、和英君」

「ああ」

リビングに戻ってお茶を給仕する紫帆さん、すつごく自然体。

『お兄ちゃんのパンツ……ハアハア……』

若干シユールだけど【画面さえ除けば】理想的な関係だよ。

（私も紫帆さんみたいな女になる！）

恋だの愛だの、そんなフワフワした気持ちに流されてちや、不幸になる

お父さんお母さんと同じ轍<sup>てら</sup>は踏まないよ。

お互いを認め合えるパートナーを探して、大人の間係を築くの。

紫帆さんを見倣みならって。

（そのためにも！）

「オーデイション、獲るよ！」

すがすが清々しい夏の朝を駆け抜け、一目散に旧校舎へ。吹奏楽部や

合唱部は真新しい新校舎へ移ってしまったので、それならば！  
と私たちが貰い受けた古い音楽室。

ギュワァアンツ！

本日も、星さんワンパ（ン）ク♪ 響くデイストーションに

運指も弾む♪

（首尾よくデビューしちやっつて！ スターダム駆け上がった

ちやつて！)

「アイドンウオンチユーーウフリイイイーダあム♪」

(一分一秒でも早く、あの異常ハウスから脱出するの！)

「秋田音頭デス！」

即興のデタラメフレーズを弾き切って、大見得を切る！

「朝もはよからテンション無茶苦茶じゃん」

「オハヨ！ 英里子<sup>えりこ</sup>、崇子<sup>たかこ</sup>！」

約束の時間になると、メンバーたちも音楽室に集って来た。

ベン、ベレレレン、ベレベレベレベレベレベレ……

早速二人も練習用のジャージに着替え始めたんだけど……

パツヘルベルのカノンとかビバルデイの四季とか弾きたくなる

のよね、この二人の前だと。

「やだ、星。そんなマジマジ見ないで♪」

「ミス前女ツートップの着替えなんて……眼福過ぎて寿命が伸びそうだよ」

そんな神々こうごうしい下着姿を晒されちゃ、巣鴨すがものお婆ちゃんたちみたいみに拝みみたくなる。

名門女子校として名を馳みせる御前女子学園みさきだけど、別に全員が全員、良家の子女なんてことはない。私みたいな普通の子も沢山いるんだよ。夢見る男の子には悪いけど。

だけどここの二人は、世の男子が妄想する『ザ・お嬢様』を具現化した存在と言っている。元々、箱入り娘養成校として認知

されていた御前女子で、アカデミッククさとは無縁の軽音楽部は完全なアウトサイダー。そこに二人が揃ってるのは奇跡と言つていい。

「なに言ってるの。星も可愛いよ」

うわ：至近距離でくちや撮かれると変な気分になりそう：女の子同士なのに。

「どのクラスでも上から五番目ぐらいには」  
グサリ。

この放言癖ほうげんへきさえなければ完璧なのに……英里子さん。

「星は可愛い♪」

すると、崇子が後ろから毛繕けづくろいするみたい慰なぐさめてくれる。私

だって髪ブラでできるくらいの長さだけど、英里子を前にしたら自信なんて吹き飛んじやう。

「確かに『可愛い』としか言えないけど……万人ウケしない可愛らしさよね」

「アンテイクな美少女？」

とか、アンテイクドールみたいな崇子に言われてもさ。そのフワフワ巻き髪、いったいどんだけ手間暇とお金が掛かってるんだ？

「どおーせ、垢抜けないって言いたいんでしょ？」

私にも分かりやすいフェイッシュなチャームポイントがあればいいのに……美少女カタログアニメなら癒し系とか巨乳担

当とか。

「落ち込まないで星」

むぎゅ……

ああ、だめだ。それも完っ全に崇子に負けてるわ。

「……………」

揉みこめど 揉みこめど 猶なお わが身体 豊かにならざり ち

つと乳を見る……

(ならばこそ！)

蹴り込んだエフエクターふんまんに憤懣をぶつけて、泣きのフレーズを搔かき鳴らす。

「ノーギター ノーライフ！」



（あらゆる女子力で敵かなわない私にはギターしかない！）

ほぼ初心者も含め、寄せ集めの三人が数カ月。連日の朝練&放課後特訓でメキメキ頭角を現した、我ら私立御前女子学園軽音楽部『カミング☆ハーツ』！ 今や、可憐かれんなる対バン荒らしとして勇名は他校にも轟とどろいてる。

だけど、ミーハーだらけのファンと違って、オーディションでは耳の肥えた業界関係者の前で演やらなきやいけない。演奏力だって大いに問われるに違いない。

（その時こそ私の出番だから！）

「練習しよう！」

着替え終わった二人に発破はっぱをかける！

『これ私のお古で申し訳ないけど……良かったら使ってみて』  
紫帆さんから貰ったエフエクターの威力を早く試してみた  
かったし！

『ありがとう紫帆さん！』

本当、紫帆さんには何から何までお世話になりっぱなし。

『いいの、若い子の夢を応援するのが大人の役目だから』

ああ、あの馬鹿お父さんに爪の垢でも煎じて……

（でも内緒……バンドでエクソダス計画。お父さんに知られたら、どんな妨害されるか分かったもんじゃないし！）

「張り切ってこ！ かまんえびばでいとうれつげつとうー  
ないっ♪」

「ストップ、ストオオストップ！」

い、イケてない……なんだこの演奏？？？？？

「こんな簡単なところでミスるなんて、どうしたの二人とも？」

ドラムパートをシーケンサーに任せ、三人で流してみただけど……こんなに気もそぞろな演奏になっちゃうなんて。

「集中できてくない？」

「ごめん……」

歯切れが悪い崇子と英里子……てか、謝罪の言葉も若干上の空？

「ちよ、ごめん！」

なのに、バイヴの振動には超反応で携帯を取り出す二人！

「……………」

なんだいその手は？ コードを抑えるより、よっぽどスムーズにフリックしてない？

心ここに在らず。意識がパケット越しの誰かに向いている。

「もう中弛なかだるみしてる暇なんてないんだよ？ 演奏の完成度を上

げていかないと！」

「うん、そうだね……………」

ビクッ！

とか会話してる間にも、着信バイヴに反応しちゃう崇子と英里子。

「集中して行こ。も一回最初から……」

切れかけた堪忍袋かんにんぶくろの緒を結び直して、二人に促すうなが。

ガラツ！

「美術部に発注した衣装、上がってきたよ」

そこへハイテンションな一衣ひとえが帰ってきた。

「可愛いい♪」

不穏な空気になりかけた防音室には、渡りに船だったんだけど……

「……なんじゃこりゃ？」

「衣装だよ。オーデイション用のを新しく発注しようって話、してたじゃない」

「えー？ 制服でいいよ」

「星……合唱コンクールじゃないんだから……む！」  
ポロロロン。ピルル、ピルル。ピリーン。

三人が一斉に携帯を覗き込む。そして同じ様にニヘラ……つて笑いを浮かべて。

（お前ら……）

いけない。短気を起こしたって良いことなんて一つもないんだから。

「確かに可愛いけど、他のバンドもこういうのだよ？ 多分」

沸騰ふっとうしそうな苛立ちを押し込めて、出来るだけ穏やかに異議を唱える。こちらが感情的になったら説得できるものも出来ない

くなるし。

「個性的なようで、没個性。いかにも、って感じが過ぎるでしょ？」

黒ゴスを基調にサイケデリックなアクセサリーをちりばめた、ガールズバンドらしい衣装。確かに可愛いけど……埋もれるよ、絶対。

「だから制服で？」

「それって悪目立ちじゃない？ イロモノっぽくなっちゃうよ？」

メンバーたちに承伏しかねる表情で反論されたけど、

「イロモノ結構！ 目立ってナンボ！」

私も退くに退けない。

「あのKISSやチエツカーズだって最初イロモノ扱いされたんだよ？　まずはアピール優先！　私たちのウリは現役JKってトコよ！」

悠長に構えてられないの。これ以上、あの家に縛られてたら私はおかしくなる！

この暗黒状態からピツクアップして貰えるなら、悪目立ちだつて構いやしない。

「でもね……」

「うん……」

「何よ？」



「なるだけ可愛い衣装を見て欲しいし……」

ヴヴツ！ 着信バイヴに超反応して携帯に齧<sup>かじ</sup>り付く三人。

「……………」

で、一様に呆けた顔をしやがる。

（色気づきやがって……）

薄々分かってた。三人とも南高生とのミーティング（と称したコンパ）以来、全然練習に身が入ってなかったから。

「はあ……」

ジツトリと嫌な汗が纏<sup>まと</sup>わりつく、一人の帰り道が……私<sup>さいな</sup>を苛<sup>さいな</sup>む。

『あのさ、星。あたしたち言いたかったことあんの』

『厳しすぎないかな？　朝も放課後も練習練習で…夏休み以来、毎日でしょ？』

『自由時間なさ過ぎ。ちよっと、ついてけないよ』

『せめて朝練は止めにはませんか？』

『放課後も休みの日を設けない？』

今まで、そんな不平なんて全然言わなかったくせに……練習して上手うまくなるのが楽しくて仕方がなかったのに……

『……じゃいいよ……明日から朝練来なくても……』

『星……』

『てゆか、もう部室来んな！』

『星！』

『練習したくないならバンドなんか続ける意味ない！  
解散だ  
よ、解散！』

「はあ……」

四人なら何でも出来そうな気がしたんだ。皆となら、どんなハードルも越えられそうなくらい、体が軽く感じた。

「こんな重かったっけ……」

だけど今は、ギターケースのストラップがズシリと肩に食い込む。

（今頃みんな男の子とデートでもしてるの？）

駅前ロータリーでじゃれ合う制服カップルに、バンドメン  
バーの影が重なる。

（私だけ除け者にしてさ……）

ひっきりなしに人が行き交うアーケードなのに……孤独の渦  
に吞まれそう。

「一人じゃ、何も出来ないよ……」

得体の知れない不安が心をガリガリと摩耗させていく。

「う……うわあああ！」

（やっぱり恋は魔物だ！）

夕刻の商店街を駆けた。

儘ままならない現実から逃げたくて。

（あれだけ盛ってた情熱を根刮ねこそぎ奪つちやう、食いしん坊の怪物だ！）

「ハア！ ハア！ ハア！」

また私は、恋という名の悪魔に人生を狂わされる？

（恋なんて嫌い！ この世から消えちやえばいいのに！）

「ハア！ ハア！ ハア！ ハア……ハア……」

ジャララン…

「……！」

雑多な音が入り混じる商店街で、私の耳を惹いた音。

「へエエイ、ジュウウ♪」

シヤッター前を占拠したストリートミュージシャンが緩いギ

ターを奏でてた。

「ドンツレミイダ〜ン♪」

恋人らしき子を前に、せつないけど多幸感あふれる曲を掻き鳴らして。

（そうだ）

この世界をおかしくするのは恋だ。

脳に予めセツトあらかじされた恋愛回路が世界を墮落させるんだ。

そいつが諸悪の根源だ！

「ふごおおおおおつ！」

——気づいた時には殴り倒していた。

右ストレートが綺麗にギタリストの頬ほおを抉えぐり、堪らず彼は地

べたへと倒れ込む！

「何しやがる！」

「排恋無罪！」

無理矢理プラグを引っこ抜いて、自分のギターに差し直す。

「造反有理！」

私には、恋を打ちのめす理由がある！

ギユワアアアアアン！

荒々しいカッティングに激情を乗せれば、行き交う人の足も止まる。

「前女の子が路上ライブかい？」

お転婆てんばなお嬢様もいたもんだ

ね」

「でも、なかなか巧いじゃん。プロ級じゃね？」

（遊びじゃないの。一分一秒でも早く、あの狂った家から出るための手段だもの！）

タンツ！

乱暴にアンプを踏みつけ、上から目線で速弾きを見せつける。ソロなら発展途上のメンバーに合わせる必要もないし、気兼ねなく限定解除。可愛げないと退かれそうなピッキングをリア充ギタリストに披露してやる！

（どやっ！）

熱を帯びる私の演奏に、聴衆の輪もどんどん大きくなつて。

見物人の中には指笛で私を囃し立てる人まで。みんなが求めて



いるのはどつちか？ 誰の目にも一目瞭然！

「畜生！ 覚えてろ！」

スカした金髪ギタリストは結局、捨て台詞を残して退場して行つた。

（わははは！ リア充破れたり！ 恋に現を抜かしとる輩なんぞに負けるもんか！）

敗残者を勝利の凱歌で追い立てる。

（やっぱり私にはこれしか！<sup>ギター</sup> これで一旗揚げるんだ！）

爽快なギターソロを弾き切れれば、聴衆からヤンヤの喝采が。

やっぱいい！ オーディエンスを前に盛り上がれるのって最

高だよ！

「崩うーれたーああ♪」

（しまった！）

「……！」

油断した！

練習気分で調子に乗り過ぎた！

「………」

恐る恐る目を開けてみれば：やっぱり。眉を擡ひそめた顔、顔、

顔、顔、顔、顔……

「ひ、ひでえ……演奏は超巧うまいのに」

「ヘタクソすぎる……」

無慈悲な聴衆が一人また一人と輪から離れてく。

(……ま、いいや)

別にライブじゃないしさ、客なんかどうでも。今は、ただ唄えればいいよ。張り裂けそうな喪失感を叫ぶ、この曲を。

「ところでコレ何の曲なの？」

「随分とドラマチックなメロディだけど……映画の劇伴とか？」

(残念、不正解)

分からなくていいよ。これは私の自己満足。壊れそうな心を慰めるマスターベーションだから。大切な戦友が凶弾に倒れ、上司は裏切り、孤立無援となったヒロインに自分を重ねているだけだもの。

「《もう誰も私を助けてくれないの！》」  
突然台詞を語り始めた私に、残っててくれた人たちも口あんぐり。

「《辞めます……私エレクトリカル・プリンセス辞めます！》」

「……行こうぜ」

つきあっていられない、とばかりに輪から離れていく。

まあ、当然だよね。誰も知らないマイナーアニメに共感なんて抱けないよ。

かくして私は、ぼっちの自己満プレイヤー……

「……………」

の、はずが一人……ヘッドホンを掛けた男の子が残ってるし。むしろ誰も聴いてない方が気が楽だ。まるで彼だけのために弾いてるみたいで妙に気恥ずかしい。

（早く行ってくれないかな？）

なのに、彼と来たら、

「……！」

音の出ないフィンガー・スナツプを私に向けてくる。

（え？ それってキューサイン？）

確かに、このタイミングで洋子の<sup>ようこ</sup>台詞がインサートされるんだけど……

チツチツ、首を振って、人差し指を立てる彼。

(……ワンスモア?)

指示されるがまま、終わるはずのフレーズを繰り返せば、再度、同じタイミングでキューサインが来る。

「《来ちやダメ！ 分倍河原君！》」

深く頷うなずいて笑顔まで浮かべちやってるし……機を見て逃げ出すべきかな？

「ストップ」

「……は？」

不審者A君は勝手に演奏中止を求め、ゴソゴソと配線作業を始めた。

「あの……その機材、私のじゃないんだだけで……」

ら、  
だけど彼はお構いなし。ラインをノートパソコンに繋げなが

「七話じゃ辛気くさい。もつと楽しいトコ演って。序盤がい  
い、三話とか」

（この人、エレクトロリカル・プリンセス知ってる…）

コアなファンしか知らない隠れた名作を、話数まで正確に把  
握してる……

「はい、キュー」

「あ、はい」

促されるまま弦を弾くと、

「えっ？」

（腰が……砕けちゃう！）

自分で弾いてるのに……脳髄まで響いてくる甘美な音色！

「……ッ！」

快楽中枢を抉られる！ 指が震えて、ピツクスら持てなくな

りそう！

「ひゃう！」

（痺れる……身体の芯から気持ちいいところ……揺さぶられちゃう！）

公衆の面前で頬ほおを紅潮させたまま膝をが震えて……これじゃ変態だよ！

（だけど……止まらないの、止められないんよお！）



身体が求めるんだ！ もっともっとキモチイイコトしたいって！

「ハア……ハア……ハア……」

《音》にキメられたまま息も絶え絶えの私に、

「続けて」

ようやく彼がリズムパートを出してくれた。

「はあ……はあ……」

濃密な原液の濃度も薄まり、ようやくペースを掴むと、

「……お？」

道行く人たちの顔色が目に見えて変わる。独り善がりの演奏にそっぽ向いていた関心が、再び自分に向けられたのを肌で感

じる。

「……これは？」

波のように伝わっていく興味の連鎖。単純なりズム&ベースのループがトランス感を生み、そこにキモチイイ弦を重ねれば……《世界》が創られる。

これは——「音楽」。

ただ単にテクニクをひけらかすだけの技巧パフォーマンスじゃない、旋律メロディが聴衆の意識を揺り動かしてく。

（これって……この人が？）

ヘッドホンを耳に当てながら即興で音源を繰り出す彼。

（……何者？）

細身の眼鏡君<sup>めがね</sup>、年の頃アラウンド二十歳……んにゃ、同級生と言われても違和感ないかも。容姿だけならハーレムアニメの主人公級。恋愛脳に冒されたバンドメンバー間なら、軽く女の暗闘が起こってもおかしくないくらいのルックスではある。

ただ、全く以って人の話を聞いてなさそうな……ナチュラルボーンな天然さんの気配が。何考えてるか分かんない人種かも。アニメなら超絶ハツカー役とか充てがわれそうな雰囲気だけど。

(当たらずとも遠からず?)

このよく分かんない即席音楽も彼の手際なんだよね？

「……あれ？」

（音が増えてる？）

オペレーションに没頭する彼を眺めてたら……いつの間にか音の厚みが増していた。

（……楽器じゃない？）

耳を擦くすくすってくる不思議な音色。それは聴き慣れた音源じゃなくて、工事の騒音や雑踏の靴音、お店の呼び込み……それらを絡ませている。

（なにこれ？）

聴けば不協和音のようで……だけど全体を俯瞰すれば絶妙なミクスチャーになつて。

（サンプリングした音を再構成してる？ 即興で？ この人

が？)

いつしか何重にも重ねられた音の洪水が、私のギターを飲み込もうとしてた！

(このままじゃ……音に負ける！)

即興のDJなんかを負けてなるか！ と、ギターを構え直したら、

「え？」

パチン！ PCを覗き込んでた彼が、急に頭を上げてフィンガー・スナップ。

(台詞ってこと?)

確かにここ、劇中でも屈指のドラマチックなシーンだけど

……

(また、退かれちゃわない?)

いくら自己満足でも、集まった客にそっぽ向かれたら凹へこむんだけど。

「……………」

でも彼は涼しい顔で、珍妙な手振りしながら私を急せかす。

(仕方ないな……………)

気持ちいいエフエクターを貸してくれた恩もあるし、一度だけ……

すう……

「《分倍河原君!》」

ビリビリビリッ！

音が《視えた》気がした。

いや、そんなの錯覚って分かってるよ。でも、視えた気がしたの。

「……！」

音の波が色んな物を伝って……世界の色を変えていく。商店街の隅々まで、些ちまたかもスポイルされることなく《音》で満たされていく。

「《だから君は駄目なんだ！》」

今度は誰も首を傾げたりしなかった。みんな、さも当然の様に私の台詞を受け止めてくれる。





まるで仕込んであつたみたいアーケードを編隊飛行していく鳥の群れ。奥で飼われていた犬や猫も顔を出して、さながら小さなサファリパークみたい！

だけど……それでも不協和音に感じないのは何故？

即製された幻想劇場に、誰も知らないアニメの台詞が流れてく。混沌とした渦に見えて、実は計算づくの音洪水を遊泳する、私の声。

「……！」

何時の間にかピツキングも忘れ、自分じゃないみたいな声に酔っていた。

（あなた……あなた誰？）

突然、商店街を幻想郷に変える——君は何者？

バルン！

無粋なエキゾーストが《公演》に水を差す！

「おうおう、どいつや？　ウチの舎弟に、ナメた真似まねしくさつたんワ！」

物騒な武器を手にしたアロハが、怒り肩で商店街へ現れた！

「やばっ！」

間違いなく標的は私。リア充排除パンチの代償が最悪の形で戻ってきた！

（私が悪いよね？　一方的に……土下座でもすれば許してもら

えるかな？)

「こつち！」

「えっ？」

「《エクソダス……するんだ！》」

劇中で分倍河原君が洋子に掛けた台詞を叫びながら、彼が私の手を引いた。

「おいゴラァ！逃げんなよ……ウギヤァァーッ！」

尻尾を踏まれた犬の鳴き声と脛すねを噛まれたチンピラの絶叫が木霊こだまする商店街。

彼と私は、混乱の不協和音の中を逃げ出した。

(覚悟してよねっ！ ステラ☆ボーイズ 第一話／おわり)



著 アオヤマミヤコ

Illustration 趙迎樂

新連載  
第一話

# のククラゲ の食堂

波打ち際で拾った、  
嘔吐き少年。

透明で、静かで、少し冷たい――。  
そういう海辺の物語。  
第19回BOX-INAR新人賞受賞作。

秘

第十九回BOX-AiR新人賞受賞作選評

## 『クラゲの食堂』

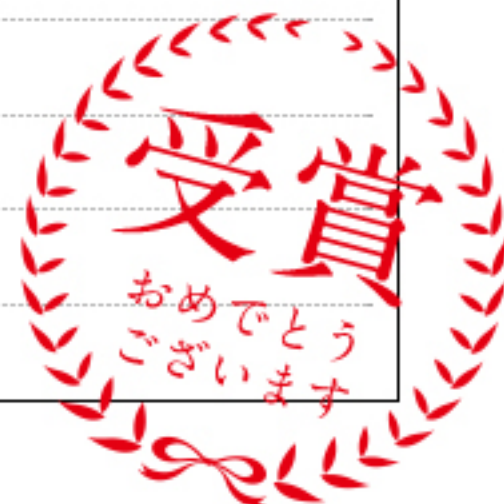
アオヤマミヤコ

・文章がうまく、比喩なども美しい。そのため、物語全体にしっとりとした雰囲気醸成されていて、読んでいて心地よい。

・主人公や登場人物の過去、病気など、「謎」の提起があるので、先を読みたい気持ちが高められる。

・繊細な内面が描写される主人公はもちろん、その他の登場人物からも誠実さ、優しさが伝わってきて、思わず応援したくなる。

・大きな事件が起こるわけではないので、どうしても物語が淡々としがちなのが難点。



**アオヤマミヤコ**——Aoyama Miyako

1990年生まれ。茨城県出身。水が好き。本作で第19回BOX-AIR新人賞を受賞、デビュー。

**趙迎樂**——Zhao Yingle

中国・雲南省の昆明に住んでいます。好きなものは宇宙と科学です。今の夢はきれいなところに住んで、毎日面白い生活を送ることです。

「无背景的Z的背景」 <http://blog.sina.com.cn/u/2097898837>

目を開くよりも先にふつと意識が浮上して、ああ俺は起きたのだなと思った。起きたということとは今日も生きているということだった。それを喜ぶべきなのか嘆くべきなのかわからなかった。

横向きに寝転がったまま手のひらを畳の目に擦りつけるつもりで、代わりにあったのはざらざらした細かな土の感触だった。渴いた表面を撫でるうちに埋まった指先と指の股に少しだけ湿った下の方の砂が触れた。それが冷たくて心地よく、俺は



しばらく手のひらを砂の中に埋めてじつとしていた。

そのうち手のひら以外の器官にもゆっくりと染み込んでいくように、感覚が生まれた。ざあ、ざあ、と鼓膜こまくを撫でていく波の音ですぐ傍そばに海があることを知り、そして砂に触れた耳たぶをのろのろ這はい上がってくるみたいにも、そこら中の音が遠く響いてくる。自分の血潮ちしおと砂浜の呼吸がざっくりかき混ぜられてそこにあった。

ようやく目を開いてまっすぐ視界に入る海原うなばらを眺めていると遠くへ来たのだなという思いがぽつと浮かんできて、なんとなくなく切ない気がした。

故郷は山に囲まれた小さな町で、バスと電車を乗り継いで何

十キロも走らなければ海岸線に出ることはできなかつた。以前海へ来たのは十年以上前のことだろう。小学生になつて初めての夏に家族で海水浴に行つた記憶がある。

故郷の山も青々としていたが、目の前にある海はそれとはまた別の深い青色をしていて、まだ明け染めない大気も、夜明け前に特有のうつすらと青く冷たい匂いがしている。それがなんだかとても孤独の感じを俺に与え、胃の真上の辺りをじくじくと苛さいなんだ。

双子の弟が死んだ。先月末のことだつた。

あいつは自分で自分の腹を包丁で刺して死んでいた。朝、柘ざく榴ろの花の咲く庭に倒れていて、青々とした葉の緑と濁いた砂に

まみれた弟の白い手足を初夏の日差しがゆるやかに焼いていた。腹から流れ、すでに乾きつつあった血が柘榴の花をより濃密な赤色に染めていた。

俺はそれを見て、自分が死んだらこういう顔をするのでろうかと思った。少なくとも弟と同じように自ら腹を刺せば全く変わらぬ死に顔ができあがるのだろう。俺はそれを想像して、少しだけ朝食を吐いた。

弟の死体が火に焼かれたあと、家の中はなんだかひっそりとした息を潜めてひそしまった。あの日から、父母も畳も食卓の机も、家の中にあるほとんどすべてが慎重に細い呼吸をしていた。生の輝きを保っていたのは柘榴の木のみだった。それはたぶん晴れ

た日の光をまっすぐに浴びていたからだけれど、別の理由がある気がしてならず、それが俺には少し怖ろしかった。

こちらへ寄せては引き、引いては寄せる映像は目の粗いあらフルターを間に挟はさんでいて、端の方がぼやけているために目を凝こらして見ないと全体像がはっきりとしなかった。それは実際に俺の目で見たはずのものが現実から少しずつ遠ざかっていることを表しているようだった。

遠ざかる映像とは裏腹に、海の真ん中から人影がのっそり立ちのぼり、波間を渡って俺の方へ近づいてきた。いつのまにか青い大気は朝日の暖かさによって溶かされて、砂浜は白く光っていた。水平線から昇る日を背負った人影は次第に大きくな

り、しまいには俺の前で朝日を遮かざってしゃがみ込んだ。

「大丈夫か」

それは俺の映像にこびりついていた人物とは違う見知らぬ男だった。濡ぬれた手に肩を揺さぶられ、あ、今の俺は行き倒れに見えているのか、と気づいた。

大丈夫ですと返そうとして、「だ」が喉のどに引つかかって出てこなかった。小さな咳せきを三回繰り返してやっと言葉らしきものを発した。

「へいきです」

「すごく枯かれた声だな」となぜか彼は感心したように頷うなずいた。

「昨晚は深夜に少し雨が降ったから、冷えて風邪かぜを引いたのか

もしれない。夏とはいえ、まだ夜は冷える」

他人にそう言われてみると急に身体がからだずっしり重たくなつて、ずぶずぶと砂浜に沈んでいきそのような気さえしてきた。

沈んでいく俺の腕を男の手ががっしりと掴つかみ、持ち上げた。

「立てるか」

男は黒いウエツトスーツを着ていて、近づくと潮の匂いが鼻に広がった。それで今やっと海に来たのだと実感した。

男の肩を借りて随分長く歩いたようで、その実、俺の横たわっていた浜からほんの数分の地点に彼の家はあった。入り口を出て一秒で砂浜という場所だった。

ぼやけた頭で見渡した室内は普通の家屋ではなくレストラン

を思わせた。等間隔に並んだボックス席のテーブルと椅子は白いペンキで塗装されていて、入り口の傍に大きな水槽すいそうがあった。その中を一匹のクラゲが漂っていた。

一脚の長椅子に横たえられた俺は瀕死ひんしの魚に似ていた。とはいえ魚よりも悪く、手足をばたつかせて無力感を味わうこともできない。

なんとか足先を動かそうとしているうちに、俺を椅子にうち上げたさっきの男が戻ってきた。ウエットスーツから白いシャツに着替えてきた彼は俺に毛布を巻きつけ、背中に負ぶさるように指示した。俺は大人しくそれに従った。

男の背は初めひんやりとしていたが、俺が凭もたれるうちに温か

くなっていた。ざくざくと同じリズムで砂を踏む男の足音と背中の揺れが心地よく、俺は再び眠りの淵ふちに立っていた。けれども身体が怠だるいのですぐに淵の前でしゃがみ込んで、眠りの深く暗い穴をただ眺めていた。

そこへおい、と声が掛かり、俺は反射的に「はい」と声を出したつもりだったが、もつと曖昧あいまいな言葉を発していた。

「今、病院に向かっているんだが、君、家はこの辺りなのか」と彼は重そうな声で言った。

俺は物事を考えるのも口を動かすのも億劫おっくうになっただけで、わかりませんとぼそぼそ答えた。

「じゃあ、君、名前は」



「わかりません……」

「……」

それきり男は黙って、俺はずっと眠りの崖つぶちに脚あしを垂たれてぶらぶらさせていた。現実にある脚は動かす気力もなかった。

頭の後ろの遠い方でピンポンという軽快な音を聞いて、俺はいつのまにか閉じていた目を開いた。俺の四肢ししはまださつきさつきの男の背中せちゆうにあった。

「佐藤医院さとういん」という文字の掠かすれた看板とすれ違い、門のように頭上を渡る松の木の下を通ると引き戸が開いた。そこに立って

いた「佐藤先生」であろう男が眼鏡めがねのブリッジを持ち上げる。彼の眉間みけんには年季の入っいていそうな皺しわが刻きまれていた。

「どういう症状だ」

「熱があつて怠怠そうです。恐らく風邪です」

「そうか。意識はあるようだな」と言いつてここちらを覗のぞいた佐藤先生と目が合あつた。

「ええ。でも、どうやら彼、記憶がないようです」

「何？」

歩き出した足を止め、佐藤先生は俺を背負かかつた男の顔を怪訝けげんに睨にらんだ。

「ここへ来るとき家と名前を聞ききましたが、わからないと言いわ

れました」

「こいつはお前の知り合いじゃないのか」

「いや、さつき海辺で拾いました」

「拾っ……」

佐藤先生は暗い目を俺と男へ向けたが、疲労感の色濃い息を吐いて再び眼鏡を上げた。

「嘘か否か知らんが、そんな患者をこんな小さな小さな医院に連れてくるな」

「はあ。すみません。病院と思ったら、ここしか浮かばなかったのです」

「うちは内科だぞ」

「それじゃひとまず風邪だけ治してください」

佐藤先生は今にも舌打ちをしそうな表情になったが、黙って踵きびすを返した。

次に目を覚ましたとき、初めに目にしたのは見知らぬ色の箆たん筥すだった。手のひらに触れた布団も知らない匂いをしていたが、畳だけは記憶にあるものと同じ匂いがした。

布団からずり落ちて畳に顔をつけていると、「寝相ねぞうが悪いな」という声が降ってきた。

「おはよう」

「おはようございます……」

俺の顔の前にしやがみ込んだ男は、俺の額ひたいに指を当てて、注射が効いたなと呟つぶやいた。

「少し元気が出たなら、何か食うか」

「あ、はい」

男の後に続いて細い木の階段を下りる。薄暗い段は踏むたびに、ぎし、ぎし、と鈍い音を立てた。

階段を下りてすぐ、初めこの部屋に入ったときには気づかなかったキッチンがあった。大きな鍋から温かな湯気が立っている、腹の空すく匂いがする。

キッチンに一番近いボックス席を指差され、待っているとスープが運ばれてきた。

「食えるならパンもあるが」

「いえ、これだけで十分です」

「そうか」

「あの」

「なんだ」

「記憶が曖昧あいまいなんです、俺をおんぶして病院に連れて行ってくれ……ましたよね」

「ああ」

「すみません、ご迷惑を」

「困ったときはお互いさまだ」と言っつて彼がストローで牛乳を吸い上げたので、俺もスプーンでスープを掬すくって飲んだ。温か

く、ほっとした。

室内の左右に取り付けられた窓から光が射し込み、まだ暖まりきらない朝の空気を弱い火でじっくりと煮込み始めていた。

その中で見知らぬ男と向かい合い、朝食をとっている不可思議な状況に何事か言うべきだったが、渴いた身体はそれよりもまず栄養を欲していたので、俺は黙ってスープを飲み、味が染みたキヤベツとニンジン<sup>うるお</sup>を噛んだ<sup>か</sup>。空っぽだった身体の足先から潤い、少しずつスープの水位が上がって血肉に染みていく。

つむじの辺りに男の視線を感じていた。しかし俺は俯<sup>うつむ</sup>いてひたすらに口を動かした。こんなに一所懸命になつて食事をしたのは生まれてから初めてのことだったかもしれない。そのせい

かなんだかすぐに疲れてしまつて、白いスープ皿にはしおれた野菜が半分くらい残つていた。

「残していいぞ」

「いえ、あの、ゆっくり食べます」

「そうか」

彼はテーブルに頬杖ほおづえをついてパンを噛んだ。そつと覗き見た

顔はつまらなさそうな、というより眠そうな目をしていて、

シャツの袖そでを捲まくつた腕が細いうえに随分と色白なため、不健康

そうな見た目であつた。耳まで伸びた髪は茶とも金とも言いがたい不思議な色をしていたが、海辺の家にはよく似合っている気がした。



「君、何か覚えていてることはあるか」

「え？　えーと、病院へ連れていってもらったあとのことはほとんど……あ、その前に砂浜で寝ていたところを……」

「そもそもどうしてあんなところで寝ていたんだ」

俺は男の顔を見て一秒停止した。

「どうしてでしたっけ……」

「俺が聞いているんだが。それ以前のことは何も覚えていないのか」

「ああ……はい……たぶん」

俺は嘘を吐いた。

はつきりと覚えている。弟が死んだ朝のことも、その後の家

族のことも、家出をした夜のこともすべて。むしろ、いつとき解放されたいのに、いつまでも俺の眼前に張り付いて離れようとしないのだ。

「名前もわからないとなると不便だな」

「嵐あらしくん！」という突然の声が、男二人の食卓に割って入った。「嵐さん」は、席を立って扉を開いた。

外にいたのは髪の毛の長い、若い女性だった。軽トラツクの荷台にかかっていた緑の幌ほうを捲り上げて彼女が取り出したのはレタスだ。続いてジャガイモやニンジンなんかをぽんぽん出して嵐さんの手に持たせている。それが長方形のドア枠の中に写っていた。

山盛りの野菜を抱えた嵐さんが室内に戻ってくると野菜の女性も一緒に入ってきた。

「あれ？ 誰？」

「どうも……」

「昨日、海で拾った。名前はまだない」

「拾った!？」

女性は至極健全な反応をしてみせた。俺は、人間を拾ったなんて言う人はあんまりいないよなあと思いつつ、丸くした目をこちらへ向ける彼女に苦笑いで返した。

「拾ったって何？ どういうこと？ 嵐くん、彼、どう見ても

人間だよ」

「まあそうですね」

「猫じゃないのよ」

「そういえば、この前の三毛猫は元気ですか」

「元気すぎて私の部屋の柱がぼろぼろだけど、その話はあとにして。ねえ、君、どこから来たの？」

女性は俺の向かいに座ってずいと身を乗り出してきた。彼女の丸い目が生の輝きに満ちているので、ひどく眩まぶしかった。

さつきまで遠くから室内をのんびり暖めていたはずの日の光が、突然部屋の中にどんと飛び込んできたみたいだった。

「夏子なつこさん、彼、記憶がないので家がどこにあるとか、自分の

名前とか、わからないんですよ」

「はあ!？」

目の前の女性、夏子さんは、いよいよ目玉が落つこちてきそうな顔で俺と嵐さんを交互に見た。

「なんかもう疲れてきた……まだ九時前なのに……」と彼女は頭を抱えた。

「あの、俺が嵐さんに拾われたのって、今朝？　じゃないんですか？」

「いや、昨日だ。昨日の朝、佐藤先生に診<sup>み</sup>てもらってここへ連れ帰って、布団に入れてから丸一日眠っていた」

「ま、丸一日……」

「よく寝たな」と嵐さんは夏子さんの隣で牛乳を飲みながらの

ん気に言った。

「え？ 何？ だから昨日はお店、休みだったの？」

「ええ、まあ。彼、熱があつたので放っておくのもどうかと」

「何から何まで本当にすみませんでした」

「別に大したことはしてないから、気にするな」

「ねえ、ちよつと待ってよ……そうじゃないでしょ……記憶がないって何なの、病院は？」

「佐藤先生には診る前から匙さじを投げられたので、まだ。とりあえず風邪が治ってから考えようと思つてました」

「ああ、そうなの……君も、なんていうか、大変なことになつたねえ……」

夏子さんが親身な同情の色を目いっぱいにして言うので、はあ、とかどうも、とか、よくわからない返事とともに俺は頭を下げた。罪悪感がじくじくと胸を刺していた。

「それで、ええと、この子、名前もわからないんだっけ」  
「はい。だから名前を付けようと思うんですけど、何がいいですかね」

「あのね、だからあんたがいつも拾ってくる猫とは違うのよ」  
「でも不便でしょう」

「まあそうだけどさ」

「あだ名を付けるようなもんですよ」

「ごめんね、この子こんなで」と俺に例の憐憫れんびんの目を向けてく

る夏子さんは、嵐さんの姉のように見えた。でも顔が全然似ていないからきつと違うのだろう。

二人が言い合っているのをぼんやり眺めながら、悪いことをしてしまったという思いがようやく全力でもって胸に迫ってきて、俺はすっかり冷めているであろうスープレ皿に視線を落とすた。

これから俺はどうするのだろう。病院へ連れて行かれても異常なんてどこにもないのだから、嘘を吐いていることはすぐにばれてしまうだろう。そもそも受診する金もないし、昨日の治療代も嵐さんに返さなくてはならないが、そういえば財布がなくなっているし、それどころか今着ているのは俺の服ではな



い。記憶喪失の嘘が露呈ろていしてここを出たとして、いったいどこへ行けるといふのか……

「ねえ、君はカラスよりカモメの方がいいよね!？」

「は」

「夏子さん、カモメの頭は白いですよ。彼の髪は黒じゃないですか」

「ユリカモメの夏羽なつばねは頭だけ黒くなるんだってば！ 私、あれが好きなの」

「でもそれって夏だけ黒いってことですよ。カラスは年中黒いですよ」

「もう、ああ言えばこう言う……そもそもカラスはイメージが

よくないよ、イメージが」

「ひどい言い草だ」

「君、呼ばれるならカラスよりカモメの方がいいでしょ？」

二対の目に見つめられ、はあ、と頷くと嵐さんは微かすかに不満気な顔になり、対して夏子さんは勝ち誇った表情をした。

「それじゃ、カモメくんがいい？」

「いやあ……えつと……カラスよりはいいんですけど」

「お前、恩を仇あだで返したな」

「あ、すみません」

そもそもどうして候補が鳥になったんですかと尋ねると、嵐さんと夏子さんは顔を見合わせて、なんでだっけと首を傾げ

た。

「もういい。君、ラーメンは塩と味噌みそと醤油しょうゆ、どれが好きだ」

「え？ し、塩です」

「わかった。君の名前はシオだ」

「えーっ、そんな名前いやだよね」

「カモメよりは……」

夏子さんは今朝一番の大声で「えーっ」と叫んだ。

その日、俺はまだ風邪が完治していないという理由で、朝起きたときと同じ二階の一室で過ごした。見慣れぬ天井を仰あおぎながら、窓の外の音を聞いていた。圧倒的に強く大きな波音が終

日部屋を満たして、ほんの十数メートル先を泳ぐ波の端が俺のいる部屋にまで入り込んでいる錯覚さっかくさえ覚えた。その波間を縫ぬうようにして、階下で嵐さんが野菜を切る音、食器の触れ合うかちやかちやという音、ドアベルの揺れる音が聞こえた。

嵐さんはここで一人、食堂を営んでいる。店はクラゲの食堂と呼ばれているらしい。だから店の大きな水槽でクラゲを飼っているのか、クラゲを飼っているからその名なのかわからないが、飄々ひょうひょうとした嵐さんの雰囲気に合っていると思えた。

夏子さんはあの後、八島やしま夏子です、と名乗った。商店街にある実家が八百屋をしていて、野菜の移動販売を担当しているらしい。そのため毎朝食堂にも寄って行って、野菜を売りつけて

くるのだと嵐さんは言った。夏子さんはそれに対して嵐くんが  
出<sup>で</sup>不<sup>ぶ</sup>精<sup>しょう</sup>だから来てあげているのだと返した。

彼らの会話が、この場所の雰囲気があんまり居<sup>い</sup>心<sup>ご</sup>地<sup>ち</sup>のいいものだから、俺はつい数日の滞在を自分に許してしまった。風邪が治ったら考えるという嵐さんの言葉のとおり、風邪が治るまでここで世話になろうと思った。それも明日かあさつてのことだからいいだろうなんて己を甘やかした。

なにしろ丸一日もぐっすり眠ってしまいうくらいだったのだ。眠るか眠らないかの浅い睡眠を繰り返してばかりだったこのひと月のことを考えると、それだけでもうここが素晴らしい寢床に思えてならなかった。

財布も部屋の文机ふづくえの上にきちんと置かれていたから、これで注射代と薬代を嵐さんに返すことができる。残った金でまた電車に乗って、もう少し南へ下ろう。

そんなことを考えているうちにまたまぶた瞼が重くなつて、俺は布団の浜に沈んだ。

起きると夜だった。開け放たれた窓からちよつと涼しすぎるくらいの風が入り込んでいて、俺は鳥肌が立って腕をさすつた。すっぽりと青い闇に包まれた室内は冷たく暗かったが、月と星の照明で物の位置は存外はつきりと見えた。

実家の自室もちょうど夏の細い月明かりが窓から射し込み、

街灯がなくても十分明るかった。だから少しだけ胸が痛んだ。けれどもあの部屋に波の音は入ってこなかったし、潮の匂いもなかった。

俺は部屋を出て、暗闇の廊下を壁伝いに移動した。階下から話し声が聞こえる。嵐さんとお客さんの声だろうか。俺はぎしぎしいう階段の上、極力音を立てないよう腐心ふしんして一段下りた。

キッチンと食堂が左側に見える形になって、俺は階段の半ばからそつと顔を覗かせて明るい室内の光に目を細めた。

話し声で一人は嵐さんだとわかった。シンクの前でコップを磨みがく背中が見える。それはすでに慣れた白いシャツの背中だった。

た。

対面式に設けられたカウンター席に、佐藤先生が座っていた。朦朧もうろうとした意識の中で見た、眼鏡のブリッジを持ち上げる指先を俺は不思議に記憶していた。

佐藤先生以外に客の姿は見え、彼は嵐さんの作った料理を頬張っている。嵐さんは一つコップを磨いて脇へ置いて、次のコップを手を取った。後ろ姿でさえ、丁寧ていねいに水滴を拭っているであろうことがわかった。そういう甘い仕草だった。

「君はまだ海に潜もぐるのか」

「はい」

「クラゲがいて危ないだろう」



「いや、まだ一度もクラゲを見つけれないんです」

佐藤先生は食事の手を止めて嵐さんの顔を見上げていた。その顔は遠目にも険しく、しか顰められた眉がなだらかな山を形成していた。

「俺は早くクラゲを見つけない」

「仮にクラゲを見つけたとしても、それはお前の兄ではない」  
終始俯きがちだった嵐さんの首が上がり、佐藤先生の顔を見ているようだった。佐藤先生は嵐さんをほとんど睨みつけていた。嵐さんもそんな表情をしているのではないかと思われた。それほど二人の間に落ちた沈黙は重く苦しく、俺はいつのまにか手の内に汗をかいていた。

先に折れたのは嵐さんだった。うなだれるみたいにして頷いた彼は、再び布巾ふきんを動かし始めたが、さきほどよりもすねたように動きは雑だった。

「君の方はどうなんだ、具合は」

「前よりも広がった気がします」

「そうか」

そう交わしたきり二人は黙ってそれぞれの作業に戻った。嵐さんはコップを磨き終えて、店のテーブルを拭ふき始める。

佐藤先生はよく噛んでものを食べる人だった。一度口に入れば何十回も噛んだ。

嵐さんがテーブルを拭き終える頃、佐藤先生は横を通った嵐

さんに「会計」と告げた。

「六五〇円です。どうも」

カラカラとドアベルを鳴らして佐藤先生が店を出て行ったあと、俺は勝手に立った断崖絶壁からようやく抜け出した気分です。細く長い息を吐いた。

ほとんど意図を汲み取れない奇妙な会話だった。わかったのは、嵐さんが海に潜ることと、どこか具合が悪いことだ。

「おい」

「あつ、ど、どうも」

嵐さんが階段の一番下に立っていた。

「いつからいた」

「今さっきです」

「どこから聞いていた」

「……海に潜るとかクラゲがどうのとか……」

「そこからか」

嵐さんは疲れた肩をほぐすみたいに首を回して、手招きをした。俺がそつと足を踏み出すとやはり階段はぎしぎし鳴った。

彼がカウンター席を指差すので、俺はやはり大人しくそれに従った。嵐さんは無表情のまま鍋に火を掛けて、中をおたまでかき混ぜ始めた。

「あの、すみませんでした。盗み聞きして」

「まっただ」

「それに、具合が悪いのに、俺の看病をさせてしまい」  
「そんなことは別にいい」

火を止めた嵐さんは鍋の中のものを皿に盛った。温まったその匂いでシチューだとわかる。その皿は銀のスプーンとともにやはり俺の前に置かれ、俺は頭を下げてスプーンを握った。

嵐さんはカウンターの方へやって来て、佐藤先生の使った食器を下げた。それを洗う水がばたばたとシンクに落ちて流れていく音が響く。

いかに沈黙がどろどろと降りかかってきても、首を突っ込まないのは当然のことだ。なにしろ嵐さんと初めて会ってからまだ丸二日も経っていないのだから。記憶喪失などと嘘を吐き、

盗み聞きをした俺でも、そのくらいのモラルはあるつもりだった。

俺はシチューを口に含んで、ジャガイモを何度も噛んだ。欠片かけもなくなくなるくらいに噛んだ。自分の考えも噛み砕いてしまえるくらい長いことそれを繰り返した。佐藤先生も今の俺と似たような心持ちでものを噛んでいたのではないかと思えた。

二人の口振りは淡々としていたが、嵐さんのお兄さんが亡くなったか、よくて失踪しっそうしたかなんて、すぐに感じ取れてしまった。

俺だって新鮮な死にまだかさぶたも出来上がっていない状態で、膿うんだ腹の切り口を両手で覆おおって抱えている。結局、俺は

自分の傷を抉<sup>えぐ</sup>って痛い思いをしたくないだけだ。嵐さんを気遣うとかモラルとか、そんな綺麗な気持ちで聞かないわけじゃない。己の傷口を後生大事に守りたいだけだ。そうして鮮烈な死の匂いと、それに付随するさまざまな記憶のしこりから遠ざかりたくて仕方がなかった。

「薬を飲んだら、もう寝た方がいい」

嵐さんはキッチンの方から身を乗り出して、空になった俺のシチュー皿を取り上げた。その代わりに佐藤医院と印字された薬袋と水の入ったコップを置いた。

「あ、薬代。今、財布取ってきます」

「気にしなくていい」

「よくないです」

「じゃ、明日でいい」

そう言つて嵐さんは自分も別の薬袋を取り出して、黄色が  
かつた錠剤じょうざいを一錠呑み込んだ。

「すみません」

何に對して謝つたのか、自分でもよくわからなかつた。

翌日も朝からよい天気で、まだ冷たい朝の空気の中、俺は畳  
の上で目を覚ました。しっかり布団に枕を置いて眠つたはずな  
のに、頭だけ畳の上に落ちていた。

頬の肉に刻まれた畳の目を指でなぞりながら窓を開けると、



しよっぱい潮の匂いがざばつと部屋の中へ浸水してきて、俺は思いきり息を吸い込んだ。そして同じだけ大きく息を吐きだした。身体はすっかり軽く、熱も下がっていた。

喉が渴いたのでキッチンでコップをはいしゃく拝借して水道水を飲んだ。水は冷たく、うまかった。

一階に嵐さんの姿はなく、食堂はしんと静まり返っている。シンクの前からは食堂全体をすつきりと見渡すことができる。

白いテーブルの並ぶ中、視界の左隅に大きな水槽がふいに浮き上がった。ぼうつとしているときは部屋の中にうまく溶け込んでいるのに、ひとたび焦点をしょうてん合わせるとそれは抗あらがいようもなく目についた。なにしろ大きいのだ。その水槽は成人男性が一

人のびのびと寝転がれてしまいそうなくらいに大きい。そして実際は、中にクラゲが一匹いるきりだった。

水族館に行ったことがないからこんなに間近でクラゲを見たのは初めてだった。それは直径二十センチくらいの丸い傘を収縮させ、触手を尾のように揺らしながら人工の水流の中を漂っていた。仄ほのかに白っぽいクラゲの身体を通して水槽の向こう側が透けて見える。傘の中央に馬蹄形ばていがたをした乳白色にゅうはくしよくの模様が四つ並んでいてなんだか可愛らしかった。

じっと見つめっていると少しグロテスクで、しかしその透明感  
は美しい。こんなにシンプルな生き物なのに、なんだかとても  
もなく人智じんちを越えた存在に思えた。

俺は随分長い時間、クラゲの動きを見つめていた。

「楽しいか」

「おあつ、おかえりなさい」

「ただいま」

嵐さんはウエットスーツからぼたぼたと水を滴したたらせながら俺の後ろを通り、冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出してぐいぐい飲んだ。

「具合はどうだ」

「あ、もうよくなりました。ありがとうございます」

「そうか」

「あの！ 今日、店、手伝わせてもらえませんか」

一宿一飯いっしょくいっばんどころではない恩である。嵐さんは相変わらずの眠そうな目を俺に向けた。彼の髪から海水が滴り続けていて、邪魔そうに見えた。

「料理でできないんで、掃除とか、皿運んだり洗ったりするくらいしかできませんですけど」

「ああ」

嵐さんは頭を掻きながら奥へ消えてしまった。「ああ」という返事がいいのか悪いのかいまいちわからなかったが、ひとまず肯定として受け取っておくことにした。

徐々に天へ昇る日の光が、窓から射し込んでクラゲの水槽を照らした。水中に白い光の帯が射す。その帯に包まれたクラゲ

の輪郭りんかくが淡く水に溶けた。

嵐さんは今朝も海に潜った。俺を拾った朝もそうだったのだ。それはクラゲを見つげるためで、そして佐藤先生は「クラゲはお前の兄ではない」と言った。

もしかすると、嵐さんはとても淋しい人なのかもしれない。

「おはよう、シオくん」と、巨大な肉塊にくかいを抱えた夏子さんの笑顔に迎えられて俺は今の自分が「シオ」という名前であることを思い出した。そして、記憶喪失という設定だということも。

「おはようございます。でかい肉ですね」

「お肉屋さんで買った牛と豚の合挽あいびきだよ。今日はハンバーグ

を出すっていうから」

「この店、メニューって決まってるんですか？」

「基本決まってるけど、嵐くんの気分によってけっこう変わるよ」

なるほどと頷いて受け取った肉塊は見た目以上にずっしりきしたが、俺はなんとか持ち堪えた<sup>こた</sup>。

砂浜に停車した軽トラツクの荷台で、嵐さんは両手に持ったタマネギをひっくり返して吟味<sup>ぎんみ</sup>している。今日の彼は白いTシャツに細身の青いジーンズを穿<sup>は</sup>いている。手にしているのはタマネギだというのに、海を背負った彼の姿はちよつとびっくりするくらい画になった。

特別に顔が整っているとかそういうわけではないのに、彼の色素の薄い感じが人間離れして海に映えた。そんなふうにな人間に平凡な人間の背比べから頭一つ抜けた、もしかしたら全く別の場所に立っているような雰囲気の人間を俺は初めて目にしている。同じ部屋で、あの食堂の中で話をする瞬間はそれをはっきりと感じることがないのに、他の誰でもなく嵐さんが海とともにあることがたった一つの正解であるような、ぱきつとはまる感覚がそこにあつた。

ふいに隣を見ると夏子さんは手で庇ひかを作つて眩しげに目を細めていた。日光が反射した白い砂浜は正視が難しいほどに輝いている。けれども夏子さんが見ているのは浜でも海でもなくや

はり嵐さんだった。そしてそれはひどく懐かしげで優しい視線だった。

「俺、昨日初めて会ったときから、夏子さんは嵐さんのお姉さんみたいだなって思っていました」

「ええ？」と彼女は笑い混じりに答えた。

「姉ねえ、あながち間違いでもないかなあ」

「え、やっぱり」

「実の姉弟じゃないよ？ 全然顔の系統が違うでしょ。……あのさ、嵐くんにお兄さんがいたって、聞いた？」

「聞きました」

「その人がね、私の好きな人だったの。で、その人も私のこと



が好きだった」

夏子さんは内緒話をするみたいに声を小さくした。それでも彼女の声のトーンや下がった目尻、甘い曲線を描く唇が、喜びとほんの少しの切なさを隠しきれないまま、囁いた。

「彼がいなくなってから、しばらく嵐くんと二人でこの家に住んでたこともあるんだ。だから姉弟が板についちやっただのかも」

「……そうでしたか」

「そうなんです」

夏子さんは明るく快い<sup>こころよ</sup>笑みを湛<sup>た</sup>えて嵐さんの元へ駆け寄った。

嵐さんだけではなく、夏子さんもそうだった。俺は髪の毛の一本や、爪先つまさきや何かで知らぬ間に拾い上げていた、やわらかで暖かそうな色をしているのに冷たく、それでいて肌に馴染なじむものの一片をようやく知った心地になった。

ここに来てから感じた居心地のよさは、それだ。ここは、切ないもの、淋しいことで心を痛めて、その痛みと長い時間をとりに過ごした人たちが作ってきた場所なのだ。異物である俺を受け入れるおおらかさがある。夜の波音のように穏やかに、生き物を毛布に包んで健やかな眠りを与えてくれる。そうしてやわらかな痛みを今でもずっと抱えている。喪失そうしつを抱えて生きている。

彼女は、自分が誰かに好かれていたという事実を当然のよう  
に信じきって、言葉にして宙に放つことがどれほど幸福なこと  
か、きちんとわかってしまっているのだ。だから、横顔が明る  
く切ないのだ。

それがどんなにすごいことで、苦しく心を削る生なのか、渦  
中ちゅうにあることで俺は少し知った気になっている。しかし、俺に  
とってその段階は途方もなく遠いところに思えた。

嵐さんのお兄さんで、夏子さんの恋人である人は、もう亡く  
なっているのだらうかと確信をもった。この、気持ちの  
いい人たちに愛されている彼がどんな人物だったのか、じつと  
りと聞く機会はきつともうないだらう。なぜなら、俺は今夜こ

こを出る。

クラゲの食堂は、はっきり言って辺鄙へんぴな場所にある。そもそも海水浴向けの大きな浜ではないからそれほど人通りもない。けれどももまったく客足がないかというとなんなことはなく、意外にも営業中は途切れずにどこかしらのテーブルに人がいた。開店後には近所の商店街から来たおばさん連中が騒がしかったし、昼を過ぎれば近くの港で働いているらしい男性がいて、昼営業の最後の一時間は学校を終えた女子高生が数人水槽の前のテーブルを陣取ってクラゲを眺めたり談笑したりしていた。

新参者しんざんものの俺は、まあ嵐くんバイトの子雇やとったのと、ちよつと

だけおばさんの話題に上って、嵐さんはお客にも素そっ気けなくええまあなんて答えていた。

食堂にはいろんな人が来る。その人が帰れば別の人が来る。俺は注文を取って、それを嵐さんに伝えて、出来上がった料理をテーブルに運んだ。恐らく繁華街にあるレストランのウェイターに比べたらのんびりしたものだろうけれど、こんなに忙せわしくなく手足を動かしたのはいつ以来のことだったろう。

店は四時すぎに一旦CLOSEの看板をかけて一息ついた。

「けっこう人が来るんですね」

「意外か」

「意外じゃなくなりました」

「そうか」

嵐さんはアイスコーヒーのコップを俺に差し出して、コーヒーメーカーのフィルターを捨てた。それから自分のコーヒーをストローで吸いながら外へ出た。俺も彼に続いた。

一步店の外へ出ると思いのほか涼しい風が吹き抜けて、俺たちの髪を軽く撫でていった。嵐さんは扉の横にある、ペンキの剥げはかかったベンチに腰掛け、一度肩で息をした。

「なんか、楽しいです」

「何が」

「ここで働くのが」

「そりゃ、よかったな」

彼は細い脚を斜めに組んで、海に目をやった。透明なストローの管をコーヒーが上っていき、やがてするすると落ちていく。

俺は外階段の一番上の段に座った。真正面に光の海を望むロケーションは随分と心を平らかにした。

夜の営業中には、仕事帰りらしい三十歳前後のカップルや、俺と同世代風の学生たちが来て、彼らが帰ったあとに夏子さんがやって来た。

「今日、オムライスもあるんですよ。嵐くんのオムライス、好きなんだ」

「あ、俺も皿運びながら卵うまそうだなって思ってたよ」

「見た目通りおいしいよ」

夏子さんはクラゲの傍のテーブルに座った。俺がキツチンでおしぼりとお冷やを準備していると、嵐さんは、「今、人いな  
いし、お前も飯にしろ」と横顔で言った。

「オムライスでいいだろ」

「はい」

「シオくん、一緒に食べよう」

夏子さんと向かい合って席に着き、黄金色の卵包みを目の前に置いた。スプーンをくぐらせると半熟の卵が震えて、ケチャップライスに垂れていく。口に含めばケチャップのしょつ



ばさに対して卵が甘く、交互にやってくる味の調和が心地よかつた。

「うまいです」

「でしょ」

彼女は誇らしげに目を細めた。嵐さんの方を見やるとこっちのことなんて少しも気に留めない様子で、夏子さんの方がよっぽど嵐さんの料理に自信を持っているみたいだった。

彼女は、ひと掬いひと掬いを丁寧<sup>ていねい</sup>に食した。伏し目がちに皿を見つめながら、口に含んだものを咀嚼<sup>そしゃく</sup>する唇がやわらかな弧を描く。

味わうって、こういうことをいうのだ。彼女の食事は、なん

だか見ていて温かい。

やがてサラダとスープまでしつかり腹に収めて、食べた食べたと夏子さんは背凭れに寄りかかった。

「ねえ、こんなこと私が聞いていいのかわかんないけどさ」

「なんですか？」

「何か、思い出したこと、あつた？」

「あ……いや……何も」

「そっかあ」

困ったねと眉を下げる夏子さんの目を見ることができず、俺は頷くままに俯いた。腹の中にあるオムライスだったもののがにわかにはずっしりと沈み込み、俺の胃を重くした。

「明日、大きな病院に連れて行きますよ」と嵐さんは独り言の  
ように言った。

「あ、そうなんだ」

「風邪も治ったようですよ」

「私、車出そうか？」

「いや、いいです」

心臓が大きく響いているのを感じる。俺はスプーンを握った  
まま、卵の足りなくなつたケチャップライスの、最後の一口を  
噛み続けていた。

店の片付けが終わつたあとはもうやるこゝろがなくなつてし

まっつて、俺は早々に部屋へ戻った。

それまで嵐さんの服を借りていたから、元々着ていた自分の服に着替えた。何の変哲もないTシャツと少し緩いジーンズが息苦しいほど懐かしかった。

俺は借りていた服も布団も静かに整えて畳の上に置いた。

砂浜にぽつんと建った食堂は静寂に包まれている。俺は一階に下りて、まず通路を挟んでキッチンの向かいにある店のレジカウンターにいくらかのお札を載せた。それから扉の鍵を開けて外へ出た。

「なんだ、帰るのか」

「うわっ」

扉のすぐ脇、ベンチに腰掛けているのは嵐さんだった。

月のある夜だ。表は街灯もないのに思いのほか明るく、彼の茶色がかつた瑞々みずみずしい網膜もうまくの表面が今は黒く光っていた。

「ち、違います。帰るんじゃない」

俺は耳元で鳴り響く心臓の鼓動を聞いて、はっとした。

「俺、どこに帰ればいいのかわからないですし……」

「そうだったな」

嵐さんはベンチの背凭れに肘をかけて怠そうに寄りかかり、俺ではなく海の方を見ていた。

おかげで助かった。自分の放った言葉が腹の深いところに突き刺さって、顔が歪ゆがんでいた。

本当に、俺はいつたいどこへ帰ればいいのか。唯一帰る場所だったはずの家から逃げてきたのだから、もう他に帰る場所なんてない。

独りだ。

俺の足が踏む木板の踊り場、その下で支える砂浜が、ざらざらと崩れていった。崩れる砂に逆らわず落ちていくようにふつと脚の力が抜けて、踊り場にしゃがみ込んだ。

「嵐さん」

「なんだ」

「ごめんなさい。俺、嘔吐いてました。本当は記憶喪失なんかじゃないんです」

「ああ、知ってる」

のろのろ顔を上げて見れば嵐さんは頬杖をついたまま俺を見下ろしていた。いつもと変わらぬ無表情で、強<sup>し</sup>いて言えば眠そうな目をしていた。

潮の匂いがひどく鼻をついた。今夜の海は秘密の話でも囁き合っているみたいになざわめいている。

嵐さんはゆるやかにまばたきをした。

「嘘を吐いていることは、少ししてわかった。記憶がないっていうのに落ち着きすぎているし、自分の名前を覚えてないのに好きなラーメンの味は覚えてるっておかしいと思わないか。どれだけラーメンが好きなんだ。……しかしまあ、最初にお前が

思いついて嘘を吐いたわけじゃない。俺が熱に浮かされている人間の曖昧な返答を変に解釈して、お前がそれに便乗した」

「そうです」

「だから俺は別に怒ってない」

だが恐らく夏子さんは怒る。嵐さんは気軽に言った。

「お前、家出して、海で死のうとしてたのか」

「わかりません。死にたいわけじゃなかったけど、でも生きていたっていう自然な、なんていうか生きてるってことが当たり前で、それがいいことだっていう感覚が、そういう気持ちがいかに全然湧いてこなかったんですよ」

「ああ」



嵐さんは胸のうちの心当たりを一つ拾い上げたみたいなの、そういう頷き方をした。

俺は膝を抱えて波の音を聞いた。この浜辺で目を覚ました朝に見た映像はまだそこにあつた。しかし以前あつたフィルターが消えて、映像はより鮮明なものになっていた。

柘榴の庭、横たわる弟、そして明かりを一つ点けたきりの食卓で話し合う両親の背中が。

深呼吸をすると肺いっぱい潮が充滿して、それが俺の身体を新しくしていくようだった。俺は新鮮な潮の匂いのする声を出した。

「先月、双子の弟が自殺しました。自分の腹を包丁で刺して。

一卵性で、俺と同じ顔をした弟でした。でも、何であいつが自殺したのか、誰も知らないんです。死んだっただけできついのに、死んだ理由がわからなくて、家の中もひどかった。父と母と俺の三人がいても、誰もいない家みたいだった。母の落ち込みようが特にひどくて」

「ああ」

「……あの、嵐さん。俺が家出した理由、すごくつまらないんです。他人からしてみれば何でそんなことであって思うような理由なんです」

嵐さんは意味がわからないというふうに、首を傾げた。

「他人にとってつまらなくても、お前にとっては大事だったん

だろう」

「それは、そうですね」

「他に何を気にする必要はある」

ざわついていたら波が一瞬止んだ。そうして再び動き出した。

折り重なる沖からの波は砂や石を丁寧<sup>ていねい</sup>に撫<sup>な</sup>で、ゆっくりと浅瀬へ運んだ。白い波の端を、砂が吸<sup>す</sup>って消えるのを俺は見た。

俺はそつと潮の息を吐き出して、わななく唇を開いた。

「俺の顔を見ていると、弟のことを思い出してつらいって、母が。父に話してるところを聞いてしまったんです。俺、どうすればよかったんでしょうか。なんでかわからないけど、その言葉だけが本当に刺さったみたい<sup>みたい</sup>に痛くて、つらくて、逃げたん

です。俺だって悲しかったんですよ。だって、弟と仲が悪かったわけじゃないし、庭の柘榴の木が好きで、いい奴だった。だけどそんなふうになら、俺は自分のことを可哀想って思っちゃうんですよ。なんか、悲しいって気持ちに不純物があるみたいで、どうしてもいやだった。俺だって、弟がもう帰ってこないんだってこと、ちゃんと悲しみたかったんだ……」

喉で息継ぎをする苦しさが、肺を痙攣けいれんさせている。俺は手の甲で顔を拭いた。拭いても拭いても涙は止まらなかった。

弟が死んで一週間後、俺は二人で使っていた部屋でふいに思い出したことがあった。弟と二人で歩いた小学校の帰り道のころ。飽きるほど並んで歩いた夕暮れの田舎道を。

どうしてかその景色が、そのときの屋根の色や草の匂いが、驚くほど鮮やかに五感に蘇よみがえって、疲れ果てて眠るまで泣いた。

あの孤独の一室が今、まったく異なる夜の海を前に、圧倒的な突風みたいに勢いよく俺の全身を貫いていった。

ぼさぼさの髪をした俺の隣で、いつのまにか嵐さんがあぐらをかいていた。

「ちゃんと悲しんでるじゃないか」

「はい」

「それが本当のものじゃないって思ったら、何が本当なのか、もうわからないだろ」

「はい」

優しくなつた夜の波に包まれて、俺はできる限り古い時間から思い出そうとした。家族で海水浴に行ったこと。山遊びであいつが腕の骨を折ったこと。中学を卒業するまで二段ベッドで眠っていた。高校生になつたら二人でいるより別々の友人とつるむことの方が増えた。春の終業式のあと、あいつは隣のクラスの子に告白されて、それを断ってしまった。そのすべてがありふれていた。

柘榴の赤色と、涙の垂れたあいつの死に顔がよぎる。俺は電車に乗ってこの町に来て、どうしようもなく、力が入らなくなつてしまつて、そうして目を覚ましたら夜明けとともにこの人が現れた。

「嵐さんに拾ってもらってよかった」

「まあ、家の近くで人が死んだら寝覚めが悪いしな」

「そうですけど。ここに来た理由だって海が見えたからなんとなく駅に降りただけで、本当はどこでもよかったです」

「だろうな。初めはどこでもいいんだ。どこでもよかったのに、そのうち、どこでもよくなるんだ」

それはとても幸せなことだと嵐さんは呟いた。深い溜め息み  
たいな声だった。

「実は、俺も人に拾われてここにいます」

「え」

「今から二十年くらい前のことだ。元々この食堂をやっていた

のは一人の爺さんじいだった。俺は兄と二人、気がついたらこの浜に転がっていた。そこを爺さんに拾われた」

「俺と同じじゃないですか」

「ああ。だからお前を見たとき、もしかしたら俺たちと同じじゃないかと思ったんだ」

「何がですか？」

言うなり嵐さんは立ち上がり、家の中へ入った。そして、いきなり上も下も服を脱いでパンツ一枚になるものだから俺は涙の筋が張りついた顔をひきつらせた。

「な、なにやってんですか」

「見てろ」



嵐さんは水槽の前に立った。水槽の中では相変わらずクラゲが漂っている。嵐さんは腕の力で身体を持ち上げて、水槽の中に入ってしまった。そのままとっぷり頭の先まで水に潜った。

俺は声も出せずに嵐さんの奇行を見つめ、その瞬間はつと息を吞んで一点を凝視<sup>ぎようし</sup>した。

彼の左胸の辺り。心臓だ。心臓の鼓動が見える。違う。透けている。嵐さんの左胸の肌が半透明になって、筋肉も骨も心臓も、同じように水に溶けてなくなつて、鼓動の輪郭だけがはつきりと見えた。その向こうにある白い壁が嵐さんの心臓を透かして見えている。

それはちょうど彼の隣を漂うクラゲの傘が収縮する姿とまっ

たく同じだった。

(クラゲの食堂 第一回／おわり)



著＝アオヤマミヤコ

Illustration＝趙迎樂

# クラゲの食堂が



ゼリーなハートが震えてる。  
ぼんやりとした光だけを感じながら揺れている――。  
そういう海辺の物語。第19回BOX-AWARD新人賞受賞作。

第一話

嵐あらしさんの左胸はまぼろしのように透すき通っていた。心臓を中心にして、テーブルクロスに水を零こぼしたように広がった半透明の膜まくが彼の肌を覆おおっていた。その真ん中で穏やかに鼓動こどうを繰り返す、心臓のぼんやりした輪郭りんかくから目が離せなかった。身体からだの一部分がクラゲになったみたいだった。

「なん……なんですか、それ……」

「クラゲだ」

その場で立ち上がった嵐さんは、濡ぬれた髪を乱雑らんざつに搔かき上げ

て言った。水から出た彼の左胸は元の人間らしい肌色を取り戻していた。

「俺はクラゲ病と呼んでいる。肌が水に触れると、肉体がクラゲのような半透明のゼラチン質に変わり、骨も筋肉も区別なくゼリーのようになる。俺はまだ左胸周辺だけだが、七年前に兄はこれが全身に至って、行方ゆくえをくらましました」

「ち、ちよつと待ってください……病気？ そんな病気、聞いたこともないですよ」

「俺だって聞いたことはない。しかし兄の身体が水に触れるたび半透明になって、ゼラチンみたいになるところを俺は見てきたし、そして今度は俺の番だ。初めは心臓から、次第に手足

の先にまで至る」

嵐さんの髪から落ちた水滴が左胸を滑り<sup>すべ</sup>落ちた。水滴の跡を辿<sup>たど</sup>るようにして透明な肌の筋が一本通り、すぐに消えた。

「その反応を見るに、お前は違<sup>ちが</sup>うらしいな」

「……………」

「わけがわからないことを言っている自覚はある。夢だと思ってもらっても構<sup>かま</sup>わない。ただ最後に確かめたかっただけだ。奇<sup>き</sup>天<sup>てれつ</sup>烈<sup>れつ</sup>な人間と同じ家で眠りたくなければ、今から夏<sup>なつこ</sup>子<sup>こ</sup>さんに連絡してもいい。そして朝になつたら電車に乗って自分の家に帰れ」

「それはいやです！」



反射的に大声を出していた。嵐さんは髪をばさばさと振って水を落とした。食堂の床を海水が濡らした。

彼は再び俺を見た。

「ここに置いてください」

「どうして」

「俺、ここにいたいんです。出て行けって言われても、だって、どこでもよくなかったんですから」

「病気がうつるかもしれない」

「うつったって構いません」

「それは勢いで言っているだけだ」

「勢いで言っても、本心なんです！」

嵐さんは斜めに視線を落として、腕を組んだ。眠りそうな瞳ひとみで水槽の中のクラゲを見つめている。あのクラゲの傘と嵐さんの心臓が同じものになってしまふなんて、この目で見たはずの現実を見失ってしまいそうだった。

けれども俺は嵐さんの料理がうまいことも、親しい人に真顔まがおで冗談を言うことも、人に優しいことも知った。それだけ知っていたら十分じゃないか。身体がクラゲになるからなんだ。

随分長い間、二人揃って立ち尽くしていたように感じる。クラゲの浮遊をじっと眺めていた嵐さんは、やがて溜め息を吐ついた。

「とにかく、お前は無事であることを家族に知らせるべきだ」

「それは……」

「電話でも手紙でも、なんだっていい。自分の都合しか考えない奴をうちに置く気はない」

嵐さんは淡々と告げて二階へ上がっていった。彼が、怒っているふうでもなく、諭<sup>さと</sup>す物言いに近いものだから、俺はかかりそこなつた船のエンジンみたいにぷすぷすと勢いをなくしてしまつた。

部屋に戻って布団に入ってもすつかり目が冴えてしまつていて、ずっと波の音を数えていた。

水中に潜<sup>もぐ</sup>つた嵐さんの姿が目<sup>ほの</sup>に焼きついて離れない。暗い水の中で灰かに発光するクラゲに負けず、うつすらと頬を白く浮

かび上がらせた彼は、微かすかな水音とともに圧倒的な存在感でそこにいた。そして彼の心臓は隣のクラゲと同様のやわらかな光を湛たたえていた。あの軽やかに深い海のような輝きが、まばたきするたび俺の瞼まぶたの裏に過よぎつた。

まったくわけがわからない。その通りだ。部屋で一人きりになつて冷静に考えても、夢だつたと思う方がよほど健全である。

まぼろしのような美しさだつたのだ。人間の肌が半透明に透き通る異様な光景は、現実だなんて信じられないほどに綺麗きれいだつた。

俺は横向きに寝転がり、開け放つた窓の直線上にぽっかり浮

かんだ白い月の、少し歪ゆがんだ円を睨にらむ。

次の朝早く、俺は嵐さんが夜明け前の浜辺を歩いている姿を見た。彼はいつものウエットスーツで全身を包んでいた。

クラゲを探しに行くのだろう。「それはお前の兄ではない」という佐藤さとう先生の鋭い一声を思い出す。

嵐さんは、お兄さんを捜しているのだろうか。七年も前にいなくなつた兄を。まだ生きていると信じて？

俺は窓の棧さんに手をかけて、彼がまだ冷たいであろう海水に足をつけ、少しずつ四肢ししを海に沈めていくその背中を見守つた。ふらふらと風に揺れる髪の毛の先から波を搔き分ける指の先まで、

どこからどう見たって普通の人体だった。

「……はあ」

窓枠に頭を寄りかからせると、ごんと鈍い音がした。

海から戻ってきた嵐さんを、俺は食堂のテーブル席の一つに座って待っていた。

ドアベルを鳴らして入ってきた嵐さんは、俺の顔を見るなりすたすたと横を通り過ぎていった。そうしてレジ横にある電話機を俺の目の前まで引っ張ってくる。電話のコードが限界まで延びてぴんと張っていた。

「なんですか」

「電話しろ」

「まだ朝早いですよ……」

「関係ない。さっさと済ませてしまわなければ、面倒なことをずるずると先延ばしにするのが人の常だ」

ぐつと息を詰つまらせた俺のつむじを見下ろし、彼は受話器を取った。

「電話をしたら、帰らなくてもいいんですか」

「家に帰る、帰らないは俺が強制できることじゃない」

「それじゃ」

「だからと言つて、ここにいていいというわけでもない」

「え、ええ……」俺が肩を落とすと嵐さんは受話器をテーブル

に置いた。

「第一、どうして俺がお前を家に置かなければならない」

「逆にどうして昨日まではよかつたんですか……」

「風邪かぜを引いていただろうが。風邪は治って、記憶喪失でもない人間を、どうして居候いそうろうさせなければならぬんだ」

嵐さんの濡れた髪からぽたぽた水滴が落ち続けている。こめかみから頬へ、それから顎先あごさきへ流れた。嵐さんからは海の匂いがした。

顔色一つ変えないこの人は、もちろん意地悪で言っているわけではなく単に正論を述べていて、そして純粹に疑問なのだろうなあと俺は思い、視線を伏せた。



確かに嵐さんには俺を住まわせる必要なんか一つもないのだ。俺がここにいたいというだけでしかない。

そのとき、カランカランと小気味よい鈴の音がして、店の扉が開いた。

「おはよう」と夏子さんは控えめな笑顔で言った。

「お邪魔だったかな」

「いいえ」嵐さんは水滴を振り撒いて静かに首を振った。

「嵐くん、またそんなかっこう恰好でいるの？　ちゃんと着替えて髪乾

かしなさいよ」

「わかってます」

嵐さんはそう答えながら尚も腕を組んで、悪事をはたらい

弟を叱るしかような立ち姿で俺を見下ろした。

「それで、どうするんだ」

「……手紙を。手紙を書きます」

「そうか。……夏子さん、帰るときついでにこいつを商店街の文房具屋まで連れて行ってください。うちには便箋びんせんなんてないので」

「うん？ よくわかんないけど、わかった」

彼女はぱつと明るい笑みになって、今日は夏野菜がいっぱいだよと言いながら外へ出た。嵐さんは彼女に返事をして、俺の方を見向きもせず店奥へ行ってしまった。

「なに、喧嘩けんかでもした？」

夏子さんは車のステアリングを握りながらからからかう笑みで言った。

彼女の運転する軽トラは砂浜から続くコンクリートのゆるいスロープを上り、公道へ出た。彼女は片側一車線のどこまでも続く直線を飛ばしていく。

全開にした窓から吹き込んでくる朝の風に髪を逆巻きながら、俺は助手席で背中を丸めた。

「喧嘩とかじゃないですけど」

「けど？」

「あの……その前に一つ謝らなければならぬことがありますし

て……」

「何？」

記憶喪失というのは嘘でした。そう告げた三秒後、夏子さんの大声は車内から砂浜へ、そして海原へ鋭い勢いで駆けていった。

「はあ!? 何? 嘘？」

「誠に申し訳ありませんでした……」

「ちよつと、ちゃんと説明してよ。あ、もしかしてそれで嵐くん、さつき怒ってたの？」

「ええと、嵐さんが怒ってたのはそれとはまた別だと……思います。俺、家出してきたんですけど、ちよつとどうしても家に

帰りたくなくて……。もうしばらく嵐さんのところに置いてほしいんですけど、だめだと言われて。とにかくまずは家族に無事を知らせると、手紙を書くことに」

「はあー、なるほどね。家出少年だったのか、君は。それにしても記憶喪失って」

夏子さんは笑い混じりの声で呟き、くつくと喉を震わせた。

「怒らないんですね」

「怒るっていうか、もうびっくりしたよ。何それ！　ほんと」

「すみません。でも、嵐さん、夏子さんは怒るって言うてましたよ」

「ちよつとー、あの子また印象操作してる」

生意気な弟だわと肩を落として、夏子さんは右カーブを滑らかに曲がった。

海側の左車線を走る軽トラは荷台に載せた野菜の段ボールを時おりかたかた言わせた。道路の右手は高台になっていて、道はゆるやかな坂道が続いている。コンクリートで固められた高台の上には松の木がずらりと並び、夏子さんの横顔越しに見上げた車窓の四角い枠には、白雲のたなびく青空と青松が映えた。

「俺、どうしてもまだこの町にいたいんです。というか、あの食堂が、なんだかとても居心地よくて」

「そうねえ。いいところよね、あそこ。私も大好き」

「あの、夏子さんは……」

「んー？」

ぐるりとハンドルを切って、車は坂道を上りきった。ざらざらしたアスファルトの直線が、住宅の狭小な道に切り替わる。左右に連なる家々に圧迫されるような感じを受ける道で、がたがたとひび割れた黒いアスファルトの隅っこに生えた小さな花や雑草が通りすぎていくのが一瞬見えた。

俺は左手の窓を流れていく家屋の薄汚れた壁を眺めながら言葉を探した。

「夏子さんは、クラゲ、好きですか」

「……うん。好きよ。あんなに奇妙で美しい姿、他に知らない

わ」

彼女の声はさつきまでの明るい声と打って変わって、ちよ  
ど何か遠い日のことを思い出すようなしみじみとした深い響き  
をはらんでいた。

「見たんだね」

「はい」

「そっか」

「嵐さんが見せてくれました。俺、嵐さんのあの姿を見たか  
ら、追い出されたんでしょうか」

「いやあ、それはちよつと違うんじゃないかな」

「そうでしょうか」



「だって嵐くんが自分から見せたんでしょ」

「はい」

「普通、追い出したい相手に、あんな秘密、見せる？」

「気味悪がらせて、俺が自分から出て行くようにしたかったのかも」

「なるほど、一理あるな」

夏子さんが神妙な顔をして頷くので、俺はちようなずつと口元の力が抜けた。

「それで実際、気持ち悪いと思った？」

「まさか。真逆です。綺麗すぎてびっくりしました」

「そうだよねえ……本当に、びっくりするほど、綺麗なんだよ

ね……」

車は開けた場所に出た。静かに商店街のアーチをくぐり、ただ人通りの少ない道をゆつくりと進んでいく。

やがて夏子さんがブレーキを踏み、車は停車した。八島青果店という看板を掲げた店の前だった。

「とりあえず移動販売は嵐くんのところで終わりだから、先に残った野菜を店頭に置いてきちやっついていいかな」

「あ、俺も手伝います」

「ありがとう、助かる」

彼女はまたぱつと明るい笑顔を取り戻した。

透き通るゼラチン質の肌を綺麗だと言ったときの彼女の横顔

は、もう帰ってこないものの懐かしさに思いを馳せるように穏やかだった。そこには夜の海のように優しく切ないきらめきがあつた。

嵐さんのお兄さんは、左胸だけでなく全身が半透明になつて、失踪しっそうしたのだ。そしてその人は夏子さんの恋人だった。

俺はキャベツの入った段ボールを抱え上げ、夏子さんの姿を盗み見た。視線に気づいて首を傾かしげた彼女に、心の中で謝罪をした。

「そうだ。うちで朝ご飯食べていきなよ。まだ食べてないでしょ?」

「え、でも、いいんですか」

「いいよ、いいよ。うちの母もいるけど、それでもよければ」

「あ、じゃあ、はい。お邪魔します」

「はい」

ぎつしりと並んだ野菜の間を縫<sup>ぬ</sup>って進み、おかあさあんと大きな声を出しながら店の奥に入っていく夏子さんのあとに続いて、土間に脱いだ靴を並べた。

土間から一段上がってじゃらじゃらしたのれんをくぐると他人の家の匂いがして、畳の踏み心地や初めて見る飾り物、知らない机に、ほんの少しだけ居心地の悪さを感じる。

嵐さんのところでこの感覚がなかったのはなぜだろうと考え、あの家はそこから中が潮の匂いに満ちているからだと気づい

た。たぶん、あそこは人間の生活感に乏しいのだ。

俺は食卓と思われる丸いちやぶ台の傍そばに突っ立って、台所へ行った夏子さんを待った。

真正面に仏壇ぶつだんがあり、そこに男性の写真が飾ってある。夏子さんの父親だろうか。俺は写真の中の男と目を合わせてどきりとした。

あんまりじろじろ見るのも悪いと思うけれど、物と生活音に溢あふれた一室はまさに生を感じさせて、つい耳を澄ましてしまう。それらは俺の肌をぴりぴりと刺激して、指先を震わせた。

なんだかすごく、泣いてしまいそうだ。

「いらっしやい」

奥から、夏子さんと夏子さんのお母さんが出てきた。二人が並んで立っているところをつとした目がよく似ていて、親子なのだという当たり前の事実を強く感じた。

「お邪魔します」

「あなたが嵐くんとこのバイトくんね。若い男の子が来るなんて珍しいからうれしいわ！ いっぱい食べていってね」

「朝からすみません、ありがとうございます」

「いいのよ。今、運ぶから座っていて」

「すみません」

夏子さんのお母さんが台所へ戻ると、夏子さんが顔を寄せて囁いた。<sup>ささや</sup>

「バイトってことにしといたから。あとお母さん、嵐くんとは顔見知りだけど、クラゲのことは知らないから」

「わかりました」

俺たちは頷き合い、夏子さんは台所へ引っ込んだ。

三人で囲んだちゃぶ台に、炊きたての白米とあさりのみそ汁、焼きたての鮭さけに、カボチャの煮物や漬物が並んだ。

俺は久々に物をよく噛まないまま口の中に掻き込んだ。同じものを食べてもきつと他ではこういう味わいを感じることはないだろう。

八島家は温かい家なのだろうと思った。夏子さんとお母さんを繋つなぐやわらかな円がある。そういう円を外側から眺め、羨うらやま

しいと思うよりは、ただただ眩まぶしかった。

「嫌いなものはなかったかしら」

「はい。おいしいです」

「ありがとう。嵐くんの料理に比べたら、すごーく物足りないでしょうけど」

「そんなことないです。俺、料理できないので、どつちがというか、どつちもすごいなってます」

夏子さんのお母さんは、みそ汁の椀わんを手に持ったまま真剣な顔を夏子さんの方に向けた。

「どうしよう夏子、この子、とてもいい子だわ」

「でしょお」



家族の団欒だんらんというものに箸を持った指の先だけ微かに触れさせてもらいながら、俺は少し笑った。

後片付けは夏子さんがするといふので、俺はそれに甘えて、彼女のお母さんと二人で丸いちやぶ台を囲んだ。食後の冷たい緑茶がさらりとおいしく、膨ふくれた腹を優しく湿らせていった。

夏子さんのお母さんは、一度台所の方を見やって、俺に向き直った。

「あのね、鉄治てつじさんが……、昔あの食堂をやっていたお爺じいちゃんね、あの人が随分前に亡くなって、そのあとすぐ嵐なぎさくんとか渚なぎさくんが食堂を継いだのよ。でも、何年か前に渚くんもいなくなっちゃってしまっつて。嵐くんは本当に淋しい思いをしてきたと思う

の。だからあの食堂にあなたのような男の子が来てくれて、私は、それに夏子も、とつてもうれしいのよ」

ありがとうねと微笑む目尻の下がり方が、夏子さんと同じだった。大事な人を愛おしむ夏子さんの目元と。

嵐さんの兄であり夏子さんの恋人である人の名前を、そういえば俺は今初めて知ったのだった。渚さん。その響きは、遠い沖波が浅瀬の砂に染み込むのと同じように俺の胸にとてもよく馴染んだ。

二人の兄弟を海で拾った鉄治さん。クラゲのように透明になつて消えてしまった渚さん。二人はどんな人物で、あの食堂でどういう生活をしてきたのだらう。それを尋ねてみたかった

けれども、夏子さんが台所から戻ってきたためにそれは叶わなかつた。

「ねえお母さん、吉原さんよしわらとこつてもう開いてるかな」

「ええ？ さすがにまだでしょう。今、まだ八時よ」

「えー、じゃあどうしよう」

「なに、なんか買うの？」

「便箋と封筒」

「うちにあるのじゃだめなの？」

「あ、うちにある？」

「あるでしょう、その辺に」

どこよあつちよと戸棚を漁りあさ始めた二人を前にどうしたらよ

いかわからぬまま立つか座るかさえ迷っているうち、お母さんの方がほらあつたわよと白いレターセットを取り出した。それは夏子さんの手へ渡り、そうして俺の元までやってきた。

「あら、手紙書くの？」

「はい。でも、俺、自分で買いますし……」

「いいから。うちにあつたつて手紙なんてめつたに書かないんだから」

「そうよ。せつかくだから使つて」

「……はい、じゃあ。あの、いろいろとありがとうございます。本当に」

八島母娘は二人揃つて似通にかよつた声のトーンでいいえと笑つ

た。

二人はそのまま店へ出てしまつて、俺は居間に一人残されることになつた。急にしんとした室内に、古い壁掛け時計の針の音が浮いている。のれんを渡した向こう側から女性二人の軽やかな笑い声が時おり聞こえてきて、それが近いようできてひどく遠く響いた。

丸いちやぶ台には便箋と封筒が置かれている。俺は鉛筆えんぴつを握つたまま後ろに体重をかけて、天井を仰あおいだ。白い円の蛍光灯の光が目を刺激する。俺は一度立ち上がつて電気を消した。室内は外光で十分に明かりをとれた。

ほんの少しだけ影の濃くなつた室内で、手の中の鉛筆をくる

りくるりと回しながら、灰色の罫線けいせんが引かれた真っ白の紙をじいと見下ろした。

書くことは決まっているのだ。無事です。でもまだ帰れませぬ。心配しないでください。

俺は鉛筆をきちんと握り直して、便箋の真ん中の三行にそれらを並べてみた。ぽつんと淋しげに置かれたいくつかの言葉はやはり頼りなく、便箋を軽く振ったなら途端にばらばらと落っこちてしまっそうだった。

便箋を三つ折りにして、宛名あてなを書いた封筒に閉じ込める。紙の擦すれる音は、俺の記した文字が便箋からはらはらと剥はがれる音のようでもあった。俺は水糊みずのりで無理に封をした。あとは切手

を貼<sup>は</sup>って投函<sup>とうかん</sup>するだけだ。

便箋を手に店の方へ戻るとちようど夏子さんがレジの前に座っていて、こちらを振り返った。

「あ、書けた？」

「はい」

「じゃあ煙草屋<sup>たばこ</sup>で切手買って、ポストに出してきちやいな。車で来た道をちよつと戻って最初の角に煙草屋、あるからさ。行けばわかると思うよ」

「わかりました」

「そのまま帰らないでね。うちに戻っておいで」

「あ、はい」

店先で客と談笑していたお母さんに会釈えしやくをして、俺は商店街の道へ出た。

車で来たときよりも人通りは増えていて、年配の人々もいれば、笑いながら駆けていく小学生くらいの子どもたちともすれ違った。通りの天井を覆おおうサンルーフから日光が眩しく射して、足元の色褪いろあせたタイルを焼いている。

少しして角に朱色のポストが見え、煙草屋はすぐにわかった。お婆ばあさんが一人窓口まどぐちに座って新聞を読んでいた。

「すみません、八十円切手を一枚ください」

「はいよ」

封筒の隅に切手を貼って、店先のポストの口にそつと差し込



む。奥まで指先を入れて、力を抜けばすぐに封筒は俺の手を離れていった。カタンという微かな物音を聞き、俺は自分の肩にいつのまにか力が入っていたことに気づいた。

たった今投函した手紙は、いつあちらに届くだろう。三日後だろうか、四日後だろうか……。それを知りたいような、知りたくないような、奇妙なマーブル模様が胸に広がった。

八島青果店に戻ると八島母娘は店奥の家に繋がる一段高い床に並んで腰掛けていた。

ああ本当に仲のよい親子なのだ、と思う。二人の姿を見ると心臓の辺りがじくじくと疼うずいた。

俺の存在に気づいた夏子さんが立ち上がり、それじゃあと友

人にするみたいに母親へ手を振った。

再び軽トラの助手席に腰を落ち着けた俺は、てっきり嵐さんの食堂へ戻るものだと思っていた。しかし運転席の夏子さんは、来た道と反対の方向へアクセルを踏んでいた。

「どこ行くんですか？」

「いいところ」

彼女はにっこり笑い、それきり黙ってハンドルを切った。

俺は、窓に映る古い町の風景を真新しい気持ちで眺めていた。商店街の近くには民家の細い路地が多く、木造住宅の群れに埋もれるようにして神社がひっそりと建っていた。鳥居の左側に木々が生おい茂しげり、車で走り抜けたときに見えたのは木漏こもれ

日の光る境内けいだいだった。

毎年ここで夏祭りを行うのだと夏子さんは言った。そして同じ時期に花火も打ち上がるのだと。

「嵐くんの家の二階は一番見やすいスポットなんだよ」

「ああ、そうでしょうね。あそこで見られたらいいのに」

夏子さんはうんと頷いて目を細めた。

「あのさ、嵐くんはたぶん、君が家にいるのがいやなわけじゃないよ。むしろ逆だと思う。あれでけっこう人の好きな子だから。でもきつと何か意地があるんだろうね。いや、意地っていうと少し違うかなあ。その何かを上回るものがないと、うんと言えないんだろうね」

「それは……それって、やっぱりお兄さんと関係あるんでしよ  
うか」

「どうかなあ、どうなんだろう」

彼女は、嵐くんってよくわかんないところあるからと苦笑ま  
じりに呟いた。

住宅街を抜けると車通りの多い広々とした国道に出た。道路  
の左右に椰子やしの木に似た高い木がずらりと並んでいて、夏子さ  
んの軽トラが走り抜ける横をその木がリズムよく後ろへ過ぎて  
いった。

俺は彼女の横顔を見て、いくらか逡巡しゆんじゆんした。けれども結局口  
を開いた。

「夏子さんにこんなことを聞くのは、きつとよくないんでしょうけど。渚さんのこと、少し教えてくれませんか。というか、嵐さんと渚さんがここへ来たときのことを」

「うん。私もそれを話そうと思ってね、ここに来たんだ」

そう言って車が入っていったのは、水族館の駐車場だった。

夏休み直前の平日であるためか意外と車の台数は多くなかった。

巨大なレジヤ―施設に不似合いな軽トラックから下りて、入り口へ向かう道すがら、彼女は言った。

「渚くんのこと、あんまり気を使わなくていいよ。私はむしろ彼の話をしたかったんだ。だって、私が話せば君も渚くんのことを

知ってくれる。そうしたら渚くんがどんな人だったのか覚えて  
いる人が増えるでしょう。その分だけ、なんていうか、渚くん  
の思い出とか、彼の気配が濃くなる気がするんだ」

「……すごいです。そんなふうに見えるのは」

「いやあ、これ、母親の受け売りだから。それに、こういうふう  
に考えられるようになるまでやっぱり時間はかかったよ。だ  
けど今は、渚くんのことをずっと覚えていたいから、何回だつ  
て彼の話をしたい」そう言って彼女は笑った。

俺たちは入り口でチケットを買って、館内へ入った。案内図  
を見ると思いのほか順路は長いようだった。しかし夏子さんは  
一つ一つの水槽を見て回るといふより、たった一つの目的へ向

かう足取りで薄暗い館内を進んだ。

そこへ着くまでに俺はさまざまな海の生き物とすれ違った。

浅瀬に棲<sup>す</sup>む生き物や、この町の海で見られる魚たち。水の中を悠々<sup>ゆうゆう</sup>と泳ぐ彼らの姿はとても自由なのに、その自由の範囲はとても狭いのがなんだか心苦しかった。

わかっていたことではあるけれど、水族館というのはこういうところなのだ。なと少し裏切られたような気持ちになりながら足を進めた。そうして辿り着いた先に、その空間はあった。

「クラゲの海」と銘<sup>めい</sup>打<sup>う</sup>たれたゾーンは空間の中央にドーナツ型のソファがあり、その周りを囲うようにして壁際に水槽が並んでいた。

夏子さんは入り口から入ってすぐ右側の水槽の前で足を止めた。水槽を真っ直ぐに見上げる彼女の視線の先にいたのは、食堂で飼っているものと同じ種類のクラゲだった。壁にあるパネルには「ミズクラゲ」とある。

ミズクラゲの群れは、水槽の中で所狭しと浮遊ところせましている。無数の白い傘が水中に揺れる姿は幻想的だった。

「最初から話そうか」

彼女は他の客を気にしてか、低い声で話し出した。

「私が生まれるずっと前から、武藤鉄治さんむとうというお爺さんがあの食堂を切り盛りしていたの。鉄治さんは早くに奥さんを亡くされていて、子どももいなかったから、長いこと一人で暮ら



してた。でも町の人たちは鉄治さんの料理が好きで、港のおじさんたちなんか毎日のようにあの食堂でご飯を食べてた。私も父と母に連れられてよく夕飯を食べにいつて、可愛がっててもらってたの。

私が小学校に入る年のことだから、もう二十年くらい前になるね、鉄治さんのところにあの兄弟が現れたのは。鉄治さんはみんなに、こいつらは孫だって嘘を吐いていて、私も初めはそれを信じてた。でもその年の花火大会の日にね、私は食堂の裏口から忍び込んで、二階の特等席で花火を見ようとしたの。そこで見たのは、あの大きな水槽の中で眠っている渚くんの姿だった。ちゃんと水が入ってる水槽よ？ 私、初めは渚くんが

死んでると思ったの。だからびっくりして、二階にいた鉄治さんを泣きながら引っ張っていった。そこで渚くんが『そういう性質なんだってことを知った。渚くんは水の中で眠るのが好きだった。びっくりだよ。だって普通の人間が水の中で何時間も眠れるわけがないもの。それまで食堂にあったテーブルを一つ減らして、鉄治さんがどこからかあの大きな水槽を持ってきたのはそういう理由だった。渚くんが特殊なのは幼い私にもわかったから、絶対誰にも言わなかった。それで私と渚くん、弟の嵐くんはよく一緒にいるようになった。

渚くんと嵐くんは、鉄治さんに海で拾われるまでの記憶がなかったのね。だから名前も年齢もわからなかったけど、渚くん

は私と同じくらいに年に見えたから、仲良くなるのは早かった。嵐くんは二つ下ってことになった。渚と嵐って名前を付けたのも鉄治さんだった。

初めはね、渚くんも肌が透けるとかそういう変化はなかった。でも、十年前の夏、鉄治さんが亡くなって。二人を引き取ろうかって話が大人たちの間であっただけど、渚くんは食堂を離れたくないし、二人で生活できるって真剣に言うから、二人は食堂に残って、商店街の大人たちがサポートしていきこうってことになった。鉄治さんはあの二人にお金を残していたし。でも、どうしても渚くんが食堂を離れたくなかったかっというところ、水の中で眠る性質も理由の一つではあったけど、もう一つ理由

が増えてたんだよね。その頃、彼は水に触れると、肌がクラゲみたいになってた。初めは心臓の周りからだった。三年かけてそれが全身に広がっていったんだ」

夏子さんはそこまで話して、ふうと肩を落とした。水槽を照らす青白いライトが彼女の頬や髪にかかり、それはまるで彼女を頭から濡らしているように、彼女が水の中に立っているかのように見せた。

他の客はいつのまにか姿を消していて、彼女は「座ろうか」と俺の方を見た。

ソファに腰掛けて、ミズクラゲの水槽を真正面に見た。彼女はそれ以外のクラゲには見向きもせず、ただそれだけに集中し

ていた。

「どうして水に触れると身体がゼラチンなんかになるんですしよ  
うか」

「わからない。……あのさ、さつき来たとき、この水族館の隣  
に大きな建物があつたのわかった？」

「ああ、はい。あれも水族館の一部なのかと思つてましたけ  
ど、違うんですか」

「うん。あれは研究所なんだ。海洋科学研究所。実は嵐くん  
が、あの研究所に行つてみたらどうだって、渚くんと言つたこ  
とがあるの。でも渚くんは解剖かいぼうされたくないからいやだよつて  
のん気に笑つてた。たぶん、渚くんは自分の身体があんなふう

になつていくことに抵抗がなかつた。むしろ強く治したがっていたのは嵐くんの方だつた」

「その嵐さんが今度は」

「うん。どうしてあの兄弟だけがあんなふうになるのか……嵐くんはあまりその話をしたがないんだ。あんなの病院にも診みせられないし。診せたら研究所行きだろうから」

「でも、佐藤医院の先生は、知っているみたいでしたよ」

「ああ」と夏子さんは少しだけ表情を緩めた。

「だってあの人は、渚くんの身体を治すために医者になつたんだもの」

「えっ、そうだつたんですか」

「十代の頃から渚くんとよくつるんでた。なんだかいつつもふわふわしてた渚くんと堅物かたぶつの佐藤くんって、全然タイプが違ってたけど妙に気が合ったみたい。だから佐藤くんも本当に必死に研究をしていたけど、結局渚くんを治すことはできなかつた。それで、今度は嵐くん。たぶんこれからまた嵐くんのクラゲの部分には広がっていく。渚くんみたいに三年かかるのか、もつと時間がかかるのか、逆に早く進行するのか、まだわからないけど」

夏子さんはソファに後ろ手をついて、ミズクラゲの水槽を見上げた。真摯しんしな視線だった。

「渚くんはね、最後の方はもうずっと水の中にいないと生きて

いられなかったの。だから食堂もしばらくお休みして、ほとんどずっと水槽の中にいた。人型のクラゲというか、身体が全部水分でできた人間みたいだった。でも表情はよく見えて、私が水槽の前に来るといつも笑いかけてくれた」

彼はあ那个时候にはもう、陸の生き物じゃなくて、水の生き物になってしまったんだね。夏子さんは眩いてゆっくりとまばたきをした。

俺も水槽の中のクラゲを見上げた。大きな、しかし海原に比べたら本当に狭い世界で、クラゲたちは気ままに浮遊しているように見える。

恐らくほとんどの人にとってこの光景はごくありふれたもの



で、ただクラゲの美しさを、その生の一瞬を観賞する装置にすぎない。しかしながら、夏子さんはきつとそこに大切な者の生きることすべてを感じ取っていた。

好きな人と生きる世界が違うというのは、どんなに切ないことか。

「水槽の中のクラゲからしたら、ここにいる俺たちってどんなふうに見えているんでしょうか」

「うーん。たぶんね、どうでもいい存在だと思うよ。彼らは自分ただよがそこにいるから、いるだけ。漂ただよってるだけ。それって悪い

意味ではなくて、すべてがすごくシンプルなの。ただ、クラゲの目は明暗とか光の方向しかわからないらしいから、実際私た

「ちのことなんか見えていないはずだけどね」

「そうですか」

水槽の中の渚さんはどうだったのだろう。彼は水の中で何を感じて、何を見ていたのだろう。きつと夏子さんもそういうことを何度も、何度も、何度も、繰り返し考えていたのだろう。

そして、それでも答えは見つけるのはひどく困難だ。

夏子さんは目を伏せて、息をついた。

「私の推測でしかないけど、たぶん嵐くんは、そういうことを気にしているんじゃないかな」

「そういうこと？」

「自分がどんどんクラゲに近づいていくことで、普通の人間の

生活ができなくなっていくでしょう。そうするとどうしても他人の手を借りなければならぬ。例えば、あの大きな水槽の海水を入れ替えたり、店の後始末だったり、そういうこと。いつ自分の身体が変わってしまいかかわからないのに、まだ会って間もない君に、それをやらせることになってしまいかもしれないのがいやなんじゃないかな」

夏子さんはすっかり姉の顔をして、困ったように眉を下げた。

それから何時間も俺たちはクラゲを眺めて過ごした。昼を過ぎてから俺の腹の虫が鳴ったので、水族館に併設へいせつされたレスト

ランへ行つた。そのレストランからは海が一望できた。俺が来た浜とは別の方向にあるからあの小さな食堂は見えなかつたけれど、代わりにもう使用されていないらしい灯台が見えた。

水族館を出たあと、俺は夏子さんの案内で町中を見て回つた。大学や公園に入つて散歩をしたり、休んだりした。

食堂に帰つてきたのは午後八時を過ぎた頃だった。普段ならばまだ食堂は開いている時間なのに、室内の明かりは一つも点いていない。

俺と夏子さんは車から下りて、中の様子を窺うかがった。

「もう閉めたのかな。それか今日は休んだのかも」

「ですかね」

夏子さんがドアノブを回すと扉は容易に開いてしまった。

食堂の中は冷たい静寂せいじゃくに満ちている。かつて渚さんがいた水槽には、クラゲが一匹いるきりだ。

二階の嵐さんの部屋にも彼の姿はなかったので、俺は自分にあてがわれている部屋へ入った。開けたままの窓から入る風に白っぽいカーテンが揺れている。今夜の月はほとんど雲に隠れていて、時おり晴れた雲間からその半身を覗かせた。

ちようど月が見えて、窓から見える真っ黒の水面に淡い光が反射したときだった。浅瀬より少し先に、海面でぼんやりと浮かび上がるものを見た。

背筋に予感が走った。特別いやな予感だった。

俺は階段を駆け下りて、最後の数段を跳とんで床に下りた。俺の騒々しい足音を聞いた夏子さんが風呂場からどうしたのと焦あせった顔を出した。

「わからないです、けど、海に人影みたいな」

薄闇うすやみの中で彼女の顔は青白く見えた。俺たちは食堂を出て、砂に足を取られながら浜を走った。夏子さんは途中で脱げたサングダルをそのままに駆けた。

暗闇かたまりの塊かたまりがただ鎮座ちんざしているような夜の海のなか、まだぷかぷかと浮いている何かがかろうじて判別できて、その何かは力なく波に揺れているように見えた。

「嵐くん！　嵐!!」

彼女は裸足はだしのまま冷たい波をざばざばと掻き分けていった。遠くの黒い影しか目に入っていないようだった。

「夏子さん、岩が多いから裸足じゃ危ないです」と掴んだ俺の手を、彼女は渾身こんしんの力で払った。

「足なんかどうだっていい！ 嵐がいなくなったらどうするの！ 早く……」

「待って、待ってください。俺が連れてきますから」  
振り返った夏さんはもうぼろぼろ泣いていた。俺が押さええた肩は震えている。それなのに彼女の濡れた目は力強く真っ直ぐだった。だから、俺は余計に切なくなつた。

それはそうだ。大事な人の死が視界の隅、常に見えるところ

にあつて、それで悩んだり苦しんだりしないはずがないのだ。彼女があんまり平常心でいるからと、つい脇へ置いてしまつていた当たり前の事実が、目の前に引っ張り出されていた。

それは弟が死んだあと、俺が見ないよう忘れるよう努めていた現実と同様だった。

「待ってて」

俺が言うのと夏子さんは、震える手でわななく唇を押さえた。

俺は彼女に背を向けて、できるだけ速く水を掻いた。夜の海は暗く深く、足のつかない場所にくれば一気に胸のうちへ恐怖心の波が押し寄せてくる。俺はそれを払うように水を掻き、黒い影だけを一心に見つめた。



ふらふらと揺れる人間の手足はほとんど水の中に沈んでいて、俺が傍に着いたときには唇から上だけがようやく海上に出ている状態だった。

「嵐さん」

影はやはり嵐さんだった。俺が呼びかけると彼は瞑つむっていた目をぼんやり開き、ああ、と掠れた返事をした。

「お前か……」

「何してるんですか、こんなところで」

「何って……、寝てたな」

彼は大きなあくびとともに海水を飲み込んだが、歯し牙がにもか  
けない様子だった。

いつものウエットスーツではなく普通の海パンを穿<sup>は</sup>いただけ  
の彼は、海に浸<sup>つ</sup>かっている左胸をぼうつと青白く発光させてい  
た。月明かりの屈折<sup>くっせつ</sup>で揺れ動く透明な心臓は、彼が体内にクラ  
ゲを飼っているかのようににも見えた。

俺はなんだかだんだん腹が立ってきて、嵐さんの腕をがっし  
り掴んで浜辺の方へ引<sup>つ</sup>張<sup>つ</sup>た。

「なんだ」

「いいから、早く海から上がってください」

俺が嵐さんを浅瀬まで連れてくると夏子さんはさつきと同じ  
場所に突<sup>つ</sup>立<sup>つ</sup>ていて、まだぼろぼろと涙を零<sup>し</sup>ていた。

そして彼女は、「なに泣いてるんですか」と怪訝<sup>けげん</sup>な顔をした

嵐さんの腹にグーでパンチをした。

「痛い」

「ばかやろう！」と夏子さんはもう一発拳を入れた。

「何なんだ」

嵐さんが俺の方を見て珍しく眉まゆを下げるので、ひとまず三人揃って水から上がった。

ぐっしより水を吸った服を絞しぼる俺と夏子さんを前に一人砂浜であぐらをかき、嵐さんは弁解をした。

「久々に月が雲に隠れたので、人が通っても気づかれないかと思つて泳いでたんです。そうしたらなんだか居心地よくて、ついうたたねを」

「ばかじゃないの。なにがついななのよ。なんで海の中で寝るの。バカ」

「そう言われても」と彼は濡れた頭を掻いた。

「俺まで海に行方をくらますわけないじゃないですか」

「……………」

夏子さんは唇を噛んで、嵐さんの疲れたような、しかし真剣な光を帯びた目をそれでも睨み続けた。

俺は睨み合う二人の間で溜め息を吐いた。

「嵐さん、やっぱり俺、嵐さんのところに置いてください。と  
いうか、いやでも居座ります」

「は？」

「嵐さんがこうやって危なっかしいことしないか見張る人間がいないと、だめです」

「お前……」

彼が顔を顰<sup>しか</sup>めるのがなんだかおかしくなつて、俺は頬を緩<sup>ゆる</sup>めた。

「というのは半分冗談ですけど。やっぱり俺、ここにいたいし。嵐さんの家にいると俺、よく眠れるんです。いやな夢を見ないんです。それに、身体がクラゲになるなんて言われてあんなもの見せられて、こんなに変で、綺麗なもの、忘れられるわけないじゃないですか。これ全部、俺にとってはずごくでかいことなんです。ずっと居候させるなんて言いません、もし嵐さ

んが本当にいやになっただら俺のこと海に放り出したって構いません。お願いします」

濡れた髪から水滴をしたたかせながら俺は深く頭を下げた。嵐さんがうんと言うまで頭を上げない心積もりでさえあった。

目を瞑っていると波の音が本当にクリアに聞こえる。そしてより近く、深く、潮の匂いがする。踵かかとを冷たい波の先端に撫でられながら、俺はじっと待った。

しばらくして、波間に、手紙は。という平坦な声が溶け込んだ。

「今朝出しました」

「本当に」

「本当よ」

夏子さんが涙に濡れた声で不機嫌そうに加勢してくれた。

「……それで、お前、名前は」

「名前？」

虚を突かれて思わず顔を上げると嵐さんはもう平生へいぜいの無表情に戻っていた。

「名前がわからないと不便だと言っただらう」

「三崎みさきです、三崎葉太郎よしたろうです」

「そうか。三崎か。塩よりずっといい」

嵐さんは一つ頷いて、たくさんの砂を付着あしさせた脚で立ち上がった。

「風呂入って、寝る」

そう呟き、嵐さんは食堂へ向かって歩き出した。その背中を髪から落ちた水滴が流れて、一筋、肌が透明に光った。

俺と夏子さんは顔を見合わせて、それぞれの溜め息を吐いた。



(クラゲの食堂 第二回／おわり)



第一話

魔王討伐

プロジェクト、  
参画

# 勇者のお仕事



著 田中彼方

Illustration 東京モノノケ

第18回BOX-VAIO新人賞受賞の  
ガテン系ファンタジー!

魔王退治は  
初心者歓迎、  
高収入、  
楽しい仲間と  
やりがいのある仕事...  
ですか!?

秘

第十八回BOX-AiR新人賞受賞作選評

# 『勇者のお仕事』

田中彼方

・何やら作者の自伝のようなリアリティがある。報告書の描写など主人公が働く企業のディテールがしっかり描かれていたのが評価できた。

・主人公の勇者が仲間をまとめる場面などで人を使う大変さが描かれてあり、そこに共感できた。マネジメント的な要素に新しさを感じた。

・企業小説としての面白さがある。ブラック企業あるあるをもっと盛り込めば、さらに面白くなるかも。

・いまいち世界観がはっきりしない。主人公が暮らす世界のルールをじっくり練り直してほしい。

受賞

おめでとうございます  
ございます

## 田中彼方——Kanata Tanaka

ソフトウェアをハードに構築するこうちく システム・エンジニア S E。第18回BOX-AIR

新人賞受賞。本当に驚きました。ありがとうございます。

『一』と『八』は、私のラッキーナンバーにします！

## 東京モノノケ——Tokyo mononoke

静岡県静岡市を拠点に活動する、モンスターレベル1の絵描き。出現頻度はきわめてまれ。専門学校卒業後、Web制作会社、一般企業勤務を経て2013年に独立。普段は妖怪や和風少年少女、縁起物、胡散臭い街並を好んで描いている。仏像と幕末浮世絵を中心にした日本美術、児童文学、おいしいごは

ん、昭和モダン、ひと昔前の少年漫画、江戸庶民、NHK教育番組等が好き。久々にTRPGがやりたい。

「茶番」 <http://cha-bang.fakefur.jp/>

pixiv ID=1649322

アエルシテイの魔王城、その最奥の間——

五メートルを超える巨体が蹲っていた。

「マジっ!？」

剣先から放たれた衝撃波が魔王を痺れさせている。おそらく最初で最後だろう。ここまで防戦一方だった俺達に初めて訪れたチャンス。た好機。

——ここで決めるしかない、勇者が！

この機きを逃のがせばサンデンに、多くの……赤い、赤い血が流れることは必至ひっし。

残る力を振り絞しぼって跳躍ちようやくした。

「うおおおおおー！！」

今こそ、今こそ正義の刃やいばで悪を打つ瞬間とき——  
そう思っていたんだ、奴の顔を見るまでは……



# 第一話 魔王討伐プロジェクト、参画

バツカス左大臣さだいじん、サンデン国のナンバー2。

あの大広間に飾かざられた絵画そのままの……実物が目の前に  
……

「用件から言おう、フレデリック。君、勇者になつてみないかね？」

SE——Software Evolution——二二三年。

ミナト帝国の統治下とうちかであるサンデンは、頻出ひんしゅつする魔王達によつて度重たびかさなる被害ひがいを被こうむっていた。奴等の生み出す魔物は田畑

を枯らし、家畜を殺し、果ては人にまで害を為した。

事態を重く見たサンデン国王は、魔王を掃討すべく勇者の増員に尽力。各地からの依頼を受けては、その討伐に当たらせてた。

しかし、倒せども倒せども新しい魔王が出現。逆に勇者には死傷者や行方不明者が相次ぎ、ジリ貧の様相を呈していた。

そんなある日のこと――

「フレデリック様、バツカス左大臣が呼びです」

「えっ？ バツカス……」

バツカス左大臣――サンデン城の大幹部。

もちろんこれまで面識めんしきは無い。

とはいえ当然こちらは見知った存在だが、逆があり得るのか  
と言えばNOだろう。

たかが城内の一警備員いちけいびいんである俺を、左大臣が知っていると  
思えない。

「……これは失礼。しかし……その……人違い、じゃないです  
か？」

「いえ、貴方様あなたさまへと伝言を預かって参りました」  
鼻筋はなすじの通った家事使用人かじしようにんは流れるように一礼する。

その品位溢あふれる所作しよさから上級ランクの使用人メイドであることが伝  
わってくる。

「チユウブ警備保障けいびほしょうをお調べしたところ、同名の方は他におりませんでしたので」

「そう、ですか……」

バツカス左大臣が俺に？　魔王を一〇〇〇匹も倒しただと

か、数々の逸話いつわを囁ささやかれるあの左大臣が？

「……その、何と？」

「大変申し訳ありません。そちらは直接お伝えしたいということとで……」

……嫌な予感しかしない。

左大臣は広く人格者じんかくしやとして知られているが、こと城内で耳に

する噂うわさは真逆まぎやくだ。

それは『不正や横領おうりょうで私腹しふくを肥こやし、何人もの美女を使用人として侍はべらせている』という、許しがたいもの。

特に後者は羨うらやま……許せない。

「そうですか、分かりました。では……すぐに伺うかがいます」

「ありがとうございます。突然申し訳ありませんが、宜よろしくお願い致します」

まさかこんなに礼儀正しい彼女にも、あんなことやこんなこととを？

……それが本当なら、絶対に許せん！

「やあ、よく来てくれた。忙しいところ悪いね」

悪評あくひよう高い裏の顔を持つとの噂のある権力者は、見慣れた絵画の前で同じ姿勢をとっていた。

顔の前で手を組み、机りようひじに両肘をついている。

至近距離しきんきよりで見ると左大臣は、まるで漆黒しっこくのカノン砲だ。突きつけられる高圧的な緊張感きんちようかんは、何度も見回りした役員室やくいんしつを狭くせま感じさせる。

絵からは読み取ることの出来ない脂あぶらぎった野心が、よりその攻撃性こうげきせいを強調しているように見えた。

「君もそこへ掛けたまえ。まあ、そう緊張するな」

年は還暦かんれき前後。もちろん、それ相応そうおうの肥満ひまん体ではある。

しかし太ってはいるが筋肉質きんにくしつで、小柄だけれど威圧感いあつかんたつぷ

り。

その脂肪しぼうに隠かくされた屈強くつきやうな体躯たいくが余計に緊張を煽あおってくる。

元伝説の勇者テイラーのパーティー、その一角を担う戦士だつたという噂も、あながち嘘うそではないのかもしれない。

「さっそくだが、話を始めていいかね？」

「あつ、はい。どうぞ……」

こんな部屋に呼び出して……何の用だ？

「用件から言おう、フレデリック。君、勇者になつてみないかね？」

——ッ!?

「どうかね？」

「……ああ……えっ……ゆ、勇者……ですか？」

何を言い出すんだよ！ このジジイは!?

「どうかね？」

「いや、あの、サンデンには既に……多くの勇者が……いるの  
では？」

「それでも不足しているのだよ。今は一人でも多くの勇者が必  
要だね」

「それで……私に？」

「悪いが経歴を調べさせてもらった。おい——」

左大臣が手を叩くと、資料を運ぶ者が入ってきた。後ろに紅  
茶を持つ者が続く。



先程の彼女とは別の、しかしどちらにも負けず劣おとらずの美しい女性達。

「おお、ありがとう。いつも、悪いな」

黒をベースとしたその制服コスチュームには、白のレースがあしらわれていた。

一般的な使用人のそれと同じだが、スカートの丈だけが不自然なほど短い。

いつも何してるって？ このスケベジジイめ!?

「まあ、遠慮えんりよせず飲んでくれたまえ。さて、これによると、二八歳独身。うん、この独身というのは良い。年齢もこれくらいがベストだろう。身長一八〇センチ前後、体重八〇キロ前

後。持病じびょうはなく、至いたって健康。体力には自信あり、といったところか」

「……は、はあ……まあ」

「近接格闘系きんせつかくとうけいの高校を卒業し、その後、補助魔法系ほじよまほうけいの大学に進学。そこでも格闘サークルに所属し、補助魔法はもとより経営学も専攻していた。間違いないね？」

「え、ええ……」

どれも優秀な成績は残せておりませんが、一応……

「それから『責任感が強く前向きな性格』とも記されておる」  
それはもしかして……小学校の通信簿つうしんぼに書かれたコメントで  
は？

「ふむ。それに……なかなかの好青年……だ」

てらてらと脂あぶらぎった頬ほおが片側だけグニヤリと歪ゆがんだ。

その醜しゅうあく悪な笑みのせいで、この莊そうごん嚴な役員室まで歪ゆがんでしま  
いそうだ。

なんともいやらしい……如何いかにもという悪巧わるたくみ顔だった。

「……似ているな……やはり」

えっ？ 何だったって？

今、何か眩つぶやかなかったか？

「あ、ああ……すまん、すまん。何でもない」

何だ？ どうしたんだ？

さっきまでの威いげん嚴が……急に萎しおれて……

「いや、少し見惚みほれてしまっっていたよ。君がなかなか凜りり々しいものでね」

……どうしたっていうんだ、本当に？

正しょう真しん正しょう銘めいの大物ながら、突然そわそわと小物感を漂ただよわせ出でした。

「う、うむ。間違まちがいない。君は……そう、実に勇者向きだ。うん、素晴すばらしい！」

じろりと睨にらんだのは、ささやかな抵抗だ。

そんな取り繕つくろった安やすいおだてに乗せられるほど馬鹿ばかじゃないい。

「う、うむ。君になら出来る！ 間違まちがいない、君になら……」

何が「君になら」だよ！

勇者が足りないって？　それはつまりヤバい仕事だからだろ  
う？

アンタの挙動不審きょどうふしんさが、それを如実にょじつに物語ものがたってるんだって。  
それを隠して勇者をやらせたいんだろ？

「うん、君なら間違いない。一目で気に入ったよ。私は君が好  
きだ！」

本当にろくでもないジジイだ。

その不自然な挙動の数々、バレやしないか心中おだ穏やかじゃな  
いらしい。

もういいって。完全にバレてるって。

「……どうした？ なりたくない、のかね？」

どうせ、一警備員の俺に選択肢なんか無いんだろ？

「どうした？ 浮かない表情をしているが。んんっ？」

このジジイ、分かっているクセしやがって……

「どうなんだね？ んんっ？」

無言の圧力が押し寄せてきた。とてつもないあっぱくかん圧迫感だ。

いつの間にか左大臣は、肩書き相応のかんろく貫禄を取り戻してもいた。

しかし、俺だって簡単に屈くつするつもりはない。

どうせ拒きよひ否なんて出来ないのだから、こつちにも意地がある。

「……ふむ。ところでフレデリック、君の一カ月の給料はいくらだね？　だいたい一七〇〇〇〇〇デンあたりではないのかね？」

「え、ええ……そうです」

「満足しているのかね？」

「もちろんです」

どうせ、あんだの一〇分の一にも満たないんだろけど……

しかし、この答えは嫌味いやみではなかった。

安月給ではあったが、俺は十分満足していた。

なんせ警備とは言っても、このサンデン城まで魔物が迫って来る事など殆どほとんど無い。

もつぱらの職務は勝手気ままなトレーニング。それから指示された場所を、指示された時間に、ぶらぶらつと見回るだけ。それでこれだけ貰えるなら万々歳だ。

「……満足している、だと？」

あてが外れたのかな、左大臣様？

「しかしそれでは生活費と娯楽費を除けば、貯金に回せるのは月八〇〇〇デンくらいではないのか？」

アンタと違って庶民しょみんなんでね。

この不景気に、それだけ貯金できれば御おんの字じだ。

後は彼女さえ出来れば言うこと無し！

「ふむ……」



再び左大臣の手が叩かれた。

またしても別の美女達、今度は六人もだ。

ふわりと華の香りが広がった。部屋のあちこちに置かれた装飾品の数々も鮮やかさを増した気がする。

もちろん、皆、スカートは短い。

左大臣と違って見慣れていない俺としては、目のやり場に困ってしまう。

そんな彼女達が持つ、盆の上には……

「ここに一〇〇〇万デンある」

——一〇〇〇万っ!?

「見えるね？」

いや、見えないって……全く……

まるでブロッケン<sup>べい</sup>堀。左大臣の姿は、すっかり向こうに隠<sup>かく</sup>れてしまっている。

「ほいっと。邪魔<sup>じゃま</sup>だから横によけてつと……」

「一……一〇〇〇万……」

「アエルシテイは知っているね？」

「え、ええ……まあ、場所くらいは……」

「そこに新しい魔王が現<sup>あらわ</sup>れたらしい」

「は、はあ……」

「三カ月で討伐してもらいたい」

「あつ、いや……」

「この金は好きに使っていい。余れば全て君のものだ」

——マジっ！　こんな大金を!?

「上手くやれば名が売れる。経歴にも箔はくが着く。悪くない話だろう?」

「……しかし私には……警備の仕事が……」

「心配無い。そちらの社長には話を通してある。OKだそうだよ」

……でしようね。それは、そうでしよう。

左大臣はサンデン城じょううんえいしや運営社の重役じゅうやくを担になう傍かたわら、チュウブ警備

保障ひじょうきんとりしまりやくの非常勤取締役ひじょうきんとりしまりやくでもあつたはず。俺の勤つとめているチュウ

警けいはサン営えいあつてのこと。いわゆる子会社、断ことわれるわけがな

い。

「後は君次第だしだい。どうだね？ やつてくれないかね？」

「ええ……つと……」

「魔王といたって新参だ。たいしたことは無いだろう。大金は手に入るし、ビッグチャンスだと思わないかね？ 君にならば簡単にこなせる職務だと思うぞ？」

何がビッグチャンスだ。俺の父親は勇者だったんだよ。

仕事内容までは知らないけれど、その大変さは幼いながらにひしひしと感じた。

あれが簡単な仕事のはずがない。

「どうしても警備の仕事がやりたいわけではないのだろうか？」

「それは、そうですが……」

「では、決定で良いね？」

「いや、しかし……」

「——バツカス左大臣、そろそろ次の予定が迫っております」

またまた新しい美女がドアを開けた。

「すまないが、そろそろ失礼させてもらおうよ。詳細しょうさいについて

は、後ほどグレースから聞いてくれ。明朝みょうちよう八時三〇分に十二

階のフシミ会議室で待つよう指示してある」

やっぱりかよ！

断るって選択せんたく肢しなんか無かつたんだろう、最初から。

「君にイシドールスの加護かごがあらんことを祈っているよ」

……去り際まで変わらぬの、纏わり付くような嫌な視線。  
不気味な笑みもあいまって、鳥肌は立ちつぱなしだ。

このジジイ、やはり噂通りだな。

どう見ても、ろくなことを企みそうにない。

明けて翌日。

こちらが眼鏡を掛けた螭螂……もとい、グレース少納言……  
のはず。

無機質な会議室同様、表情というものが一切見えない。

年齢不詳で、驚くほどの痩せ型。

まるで骨と皮……そして気難しさと眼鏡だけで構成されてい

るようだ。

「話は聞いている。では、さっそくだが……」

細い顎あごが気になっっていた資料の束たばを指した。

紙といつても元は木。これだけ積み上げれば丸太と変わらな  
いだろう。

「マニユアルだ。一通り目を通しておくように。次に――」

「あの……」

「なんだ？」

あつ、いや……すいま……せん。

彼の「なんだ？」は「黙だまれ」とイコールだった。

かぶせ気味の切り返しに拒絶きよぜつの色が滲にじんでいる。

見ればやはり、その白い顔には不機嫌ふきげんさが浮かんでいた。そういう表情だけは持っているのね……

「これ……何ページある……のでしょうか？」

「一〇八万七三ページだ」

——一〇〇万ページも!?

察したのか、少納言のこめかみに青い筋すじが浮いた。

眉間みけんにも神経質しんけいしつそうな皺しわが刻まれ、「質問は一切受け付けない」と暗あんに示していた。

いや、でもマニュアルでしょ？

つまり最初に読む『説明書』みたいなものだよね？

普通は新人用に要点をまとめた簡易版とかがあるんじゃないや……



これじゃあ三カ月フルに使っても読み切れないうつて！

「次に行くぞ。左大臣より預かった討伐資金は、すぐに銀行へ預けておけ。必要な時に必要な分だけ下ろして、自由に使って良い。当然だが魔王討伐に関する費用としては、自由という事だ。それ以外への使用は認められない」

「……は、はあ……」

「次に――」

よし、後で質問しよう。

今は……口を挟はさむのは止めた方が良さそうだ。

「次だ――」

「次――」

……ペンとノート、持ってくるんだっただな。

「次だ——」

気づけば小一時間経っていた。

引っかかる点は山ほどあったが、今となつてはその全てを覚えて  
えている自信がない……

特に最初の方はヤバい。

なんとか覚えている内容だけでも質問を……

「最後に、質問はあるか?——無いな」

——早っ!?

「では、すぐに討伐に掛かれ」

えっ?  
終わり?  
嘘うそでしょ?

長い首の上に乗る逆三角の輪郭りんかくには、とうとう親密しんみつさが浮かぶことは無かった。

何一つ質問できぬまま、グレース少納言は会議室を後にしていった。

殺風景さつぷうけいな大部屋に残されたのは、俺とマニユアルだけ……

「よおっ、お前がフレデリックか？」

——えっ!? いつの間に？

歴戦もさの猛者もさに違いない日に焼けた中年オッサンが、呆然ぼうぜんとする俺の後ろで苦笑していた。

俺とマニユアルとゴリマッチョ。うん、語呂ごろが悪い。

「事態じたいが飲み込めていない、ようだな？」

「あつ……ええ……すみません」

「まあいい。これから実戦の中で学んでいけば。習うより慣れろだ」

「……は、はあ……」

「心配すんな。アエルの魔王はたいしたこたねえはずだ。なんだ？ ビビってんのか？」

ええ、かなり。魔王じゃなくアナタにだけ……

「俺はデニス。勇者長つてのをやってる」

スキンヘッドとニアリーイコールの刈り上げられた頭。

支える首は俺の太ももくらいあり、むないた胸板はあの螭螂眼鏡の二

倍も厚い。

頭頂部より左目を縦断する形で裂傷痕が走り、その風貌を一段と勇猛に飾っている。

どこからどう見ても……知力より体力派だ。

「そう心配するな、勇者なんてたいした仕事じゃねえさ。楽勝だ」

……とてもそうは見えないんだけど。

鎧の下から剥き出した上腕には、無数の傷がちりばめられている。

「あん？ どうした？」

「あつ、いいえ……なんでも」

肩や足、至るところにも歴戦の記憶が刻まれている。

おそらく魔王との激闘の痕あとだろう。

「ん？ これか？ まあ、勇者長つていっても……な。俺はこの現役時代の鎧姿が性しょうに合つててよ。管理職つってもグレースみたいな白の法衣ほういなんて柄がらじゃねえからな」  
……でしょう、ね。

「もう四二になるんだが、たまに一勇者として出ることもあるんだぜ。だから格好かっこうとか細かいことは気にすんな。そうそう、こんなオツサンでも務まるんだ。勇者なんて、たいしたこたあねえだろ？ 楽勝だ、楽勝！」

いや、それはアンタだからだつて!?

俺が魔物ならアンタを見掛けたら逃げ出すよ！

「さあ、じゃあ行くぞ」

「あ、え？　ど……どこへ？」

「準備だよ、魔王討伐のな。ついてこい！」

全然ついていけてないんだけど……大丈夫なんだよな？

「ああ？　グレース？　あのせつかちは俺と同期だぞ」

「えっ、そうなんですか？」

だから呼び捨てだったのか。

「同期の中での、まあ出世頭しゅっせがしらってやつだ。もともと出が違うか

らな。サンデンの、あのK O総合大学院をストレートで卒業してやがる。しかも回復魔法の科をな」

あの超一流校をつつ!?

「大卒からの叩き上げじゃあ、俺みたい在现场管理止まりがいとこでな。院卒でなけりや、判官じょうレベルの役職につけることは少ねえんだよ。あいつは次官すけまで狙ってやがるみたいだな。まったく、たいした奴だよ」

マジで！ そんな凄い人だったの!?

って、そんなことより……此処ここは？

「おい、アラン！ アランいるか？ おお、アラン。こいつがフレデリックだ。あとは頼むぞ。フレデリック、こっちがアラン。三二だ。お前と近えだろ？ 準備について細かいことはコイツに聞いてくれ」



「あ……はあ……」

また別の人？ この短時間で何人目だ？

何ともいええない、たらい回し感が……

「宜しくね、フレデリック」

「よ……宜しくお願い……します」

しかも今度の彼は……なんとも、まあ……

「勇者長は、これからどうするんスか？」

「あと二人ばかり新人を迎えに行つて、それから勇者長会議だ。それが終わつたらシヨーゲンジに……な。あそこはまだエドガーには早かつたかもしれん……」

「うわ、エドガーさんところ、また火噴きひふそうなんスね。あつ

「ちやー」

「そういうことだから、俺はもう行くぞ」

「ウイッス。お疲れッス」

「つとということの後を任された先輩勇者が、彼<sup>アラン</sup>。」

「なんとも驚きの優男<sup>やさおとこ</sup>だ。しかも、ちよつとチャライ。」

「現役勇者なの、本当に？ ピアスとかしてるんだけど……」

「何より驚いたのはその端正な顔立ちだ。」

「女性のように整ったそれは、今流行<sup>はやり</sup>の草食系男子そのもの。」

「醤油<sup>しょうゆ</sup>ベース AND ベビーフェイス AND 長髪。」

「日々、魔王と戦っているようには見えない。」

「（ちなみに俺は、今や廃<sup>すた</sup>れたソースベース AND アダルト

フェイス AND 短髪。年上に見られること早二八年)

「フレデリック、いきなりで悪いけど魔王討伐についてざっと説明するよ。僕もいろいろと忙しくてさ」

「あつ、はい。お願い……します」

「ああ、そんなに緊張しなくていいよ。さらつと聞いてくれればいいからさ」

さらつと……つで、いいの？

「まず最初に僕等勇者は、魔王討伐にあたってパートナーを探さなければいけない」

「パートナー……ですか？」

「そう、パートナー。そうだね、まずはプロパーから説明しよ

うか。僕等の国では『ONEサンデン』って言って、親子ひつくるめて大きな一つの会社って考えがあるんだ。だから言ってみれば<sup>フレデリック</sup>チュウ警もサン<sup>ぼく</sup>営も同じ会社、同じ社員ってことになる。そのサン営やその子会社の社員のこと、中でも魔王討伐専門<sup>もん</sup>の勇者をやってる人のことを、プロパーって呼ぶんだ」

「プロパー、ですか……」

「そう。それでパートナーってのはそれ以外の人のこと。派遣<sup>はけん</sup>戦闘員<sup>せんとういん</sup>とも呼ばれる協力会社の人達のことだ」

「協力……会社？」

「勇者だけじゃ魔王は倒せないでしょ？ だから戦士とか僧侶とか武道とか、パートナーが必要なんだ。彼等は魔王討伐以外

にも、要人警護ようじんけいごだったり、いろんな仕事を受けてるんだけどね。それこそ城の警備とかもやってるよ」

「ああ、なるほど！」

確かに警備をしている時、一時的に助っ人が来ることがあった。

あれがパートナー、か。

「それで、僕の後ろ。この建物が酒場兼パートナー申請所しんせいじょ」

先輩は親指で肩越しに自分の背面を指した。

看板には——KEIYAKU——その下に酒場という文字がある。

よおーく見ればさらにその下に小さくパートナー申請所とい

う文字。

丸太で組み上げられたロツジのような建屋は、如何にも遊び場然と飾かざられている。

「……やっぱり此処……なんですか？」

外壁には眩まばゆいばかりの色とりどりのランプ。

内から漏れ聞こえるのは酔っ払いの大声。

さつきから気にはなっていた、が……まさか……

てつきり歓迎会でもやってくれるのかと。まだ一四時だけど、あの勇者長なら「よしっ、飲むぞ！」という展開は十分に有りそうで、腹を括くつてもいた（この体格ガタイでなんなんだが、俺はほとんど酒が飲めないのだ）

……が、まさか……ここで仕事だなんて!?

「初めは顔が利かないでしょ。だから先輩と一緒に回らないと。まあ、顔見せだね」

「ここで……魔王討伐の仲間を集める……んですか?」

「そっ。この職業の、この人にしようって決めたら、本人もしくはその上司と交渉<sup>こうしょう</sup>。っで、契約書<sup>けいやくしょ</sup>を書いてもらえたらパート

ナーGET」

「は、はあ……」

「さあ、行くよ」

「ああ、アランさん久しぶり」

「どうも。お久しぶりです」

「ああ、アランさん。またうちの奴、何人か使ってやってくださいね」

「ええ、ぜひお願いします」

「アランさんじゃないですか？　最近どうですか？」

「ええ、まあまあですよ」

次から次へと……まるで芸能人のサイン待ちだ。

先輩がアイドルや俳優ばりのハンサムであるため、余計にそう見えてしまう。

「いらっしや〜いまっせえ〜」

「彼と二人、あの辺の席いいかな？」

迷惑めいわく掛けてたらゴメン



ね」

「そおくんなあ、アランさあくん。もおくんう迷惑だなんてえ。すぐにオシボリお持ちしますねえ」

この猫撫ねこなで声……上目遣うわめづかい……彼女、先輩に惚ほれてる。

対するハンサム勇者は涼しい顔だ。指定した一番奥のカウンターにすつと進む。俺も続いて隣の席に掛けた。

「マスター、生なま二つね。フレデリック、生、いけるよね？」

「……ええ、大丈夫です」

むしろ好き。ただ……アルコール自体が合わない体質らしい。

俺の父親もそうだったと、よく母親から聞かされたものだ。

だから後からがヤバいんだよなあー……

「んっ？　どうかした？」

「あっ、いや……先輩、も、生とか……飲むんですね？」

「えっ？　なんで？」

「なんか……ワインとかカクテルってイメージが……」

「えっ？　そう？　僕、最初はビールで途中から焼酎しょうちゆう。たまに

ウイスキーって感じだよ。ワインとかダメなんだ。カクテルも

ちよつとね……甘いのが苦手だから」

「そうなの？　それは意外な……」

「って、そんなことより本当に此処ここでパーティナー集めるの？」

「完全に飲み屋……俺がいつも通っている居酒屋と大差ない。」

いや、セクシーなお姉さん達がいる分、こっちの方が客層が悪い気さえする。

「あっ、マスターありがと。じゃあ、このまま注文いい？」

えーと、枝豆二つとタコワサね。それからキムチ盛りにエイヒレ。とりあえず、それで宜しく」

し、渋いっ!?

「よし、まずは乾杯しようか。フレデリックが食べたい物は、後からゆっくり選びな。とりあえず、間が持つように適当に注文したからさ」

「あ……はい、ありがとう……ございます」

「じゃあ、乾杯！」「か……乾杯」

カチツと先輩より低い位置でジヨツキを合わせた。

先月で社会人七年目に入ったのだから、さすがにこれくらいは心得ている。

「くああ、美味しい。やっぱいいね、春のビールも悪くない」

い、意外にオツサンだな。この人……

「あつ、でも飲み過ぎちやダメだよ。あくまで仕事だから。ほら、ここからだと店全体が見渡せるでしょ。ちよつと飲んだら、いろいろと教えるからさ。まずはざつと店内に目を通しておいてよ」

「あつ、はい……お願いします」

俺に限っては、その心配は無用。

ほとんど飲めないから、過ぎるなんてのは有り得ないのだ。

「はいよ、枝豆」

「ありがと、マスター」

当初の心配通り、結局昼間から飲んでいた。

普段はまだ仕事している時間だ。

贅沢ぜいたくといふのか何といふのか……こんなんでいいの？

者つて？

もしかして、うちの父親もこんなだったのか？

「魔王討伐でも何でも、結局は人と人との繋つながりがあつて、だ

からね。そこは忘れちゃいけないよ。どんなに強くても一人

じゃあどうにもならないから。集めたメンバーじようずを上手にパー

「ティーとして機能させるのが重要なんだ」

……枝豆の豆を全部皿に出してから食べるのね。

そんな人、初めて見た。

気になって、せっかくのアドバイスが全然入ってこない。

「勇者ってさ、強くて、偉そうで、派手であってイメージあるで

しょ？ 意外とそうでもないんだよ。内輪揉めうちわもの仲裁ちゆうさいしたり、

地味なことばっか。まあメンバー間の潤滑油的な役割だね。も

ちろんガツと、リーダーシップはつき發揮して、パーティーを牽引けんいんし

なきやいけない時もあるけど、大抵は……そうだね、事務作業

みたいな感じ」

「そ、そうなんですか？」

「そう。意外に地味。面倒くさい仕事だよ。まあ、でも安全ではあるかな。魔物との戦闘とか、ヤバそうなことはパートナーにやらせとけばいいからさ」

……き、気のせいかな？

綺麗な顔して、とんでもない毒を吐いたような。

「コツはね、『嫌な仕事を如何いかに他人にやらせるか』だよ。

じゃないとすぐに白髪しらまみれになっちやうからさ」

……途中まで良い話っぽかったのに。

顔に出てないけど、もう酔いが回っちやったのか？

「ほらっ、フレデリックも何か頼みな。今日は最初だし、僕が奢おごるよ」

「えっ、い……いいんですか？　あの……ありがとう、ごさいます」

「まあ、あ、アランさん。そちらの彼はあく新人君ですかあ〜？」

「ああ、そう。フレデリックだよ。これからちよこちよこ来ると思うけど、宜しくね」

「どうもお〜。勇者なんて凄お〜いですよえ〜。いくつなんですかあ〜？」

うん、君、あきらかに俺に興味無いよね？

彼女はオシボリを持ってきてからも、何かと切欠きっかけを作っては声を掛けてくる。



仲が良いのか隣にはいつも同じウエイトレスの子を引き連れていた。

「確か、二八だったよね？ 君より一つ上だよ」

「ああ、そうなんだあ。じゃあ、このシヤノンちゃんより三つ上ねえ」

ち、近いって。ちよつと……

エナメルのボディースーツに網タイツ、ウサギ耳に丸しっぽ。ブルーのアイシャドーに、縁ふちからはみ出るように太く引かれた赤い口紅。

この距離で見ると……もう、凶器……

俺をのうさつ悩殺寸前に追い込んでいるこの衣装は、コスチュームどうやら店のコ

ンセプトらしい。

中でもこの二人は、一、二を争うほど目立っている。

白い肌とブロンドの髪がバニースタイルによく映えているし、店内でも有数の膨らみを装備していた。

並んで立つと、なんとも壮観そうかん。

絶景ぜっけいというか、何というか……ありがとうございます！

「アランさんはあゝ、次はどちらにお出掛けするんですかあゝ」

「ああ、センガクジにね。明後日、出発するよ」

「いいなあゝ、ワタシも行って見たあゝい」

さすがは歴戦の手練てだれ（俺の予想）、実に鮮やかな受け答え。

「センガクジのお店ってえ〜、ナーススタイルらしいですよお〜」

「へええ、そうなの。僕、初めてなんだ。楽しみだね」

「ええ〜、ダメですよお〜。お仕事なら仕方無いですけどお〜。あんまり行っちゃダメですからねえ〜」

「ええつ、そうなの？　じゃあ、ジーンちゃんがお酒注ぎに来てくれる？　そしたら、寂さみしい宿の夕食でも我慢まなできるかもなあー」

うーん。勇者のイメージって、もっところ……

実直で、武骨ぶこつで、不器用ぶきようでって思ってたけど、こんな人もいるんだなあー。

デニス勇者長も案外気さくだったし、分からないもんだな。

適当な肴さかなを注文してから、まずは言われたように店内を見回した。

すぐにバニースタイルの店員さんに目を奪われそうになるが、ここは我慢。

俺は勇者で、これは仕事なのだから。

端から見えていけば、剣を差している者、杖つえを持っている者、

拳法着に身を包む者。大荷物を背負う行商のような者までいる。

厳しい表情で話し込むテーブルもあれば、楽しげに談笑しているカウンターもある。

ここには老若男女、いろんな人達がいる。

そんな様子をビール片手に眺めた。

そして一杯目のジョッキが空になろうかという、その時だ。

ドンツと脇腹わきばらを小突かれた。

気のせいか？ アラン先輩はこちらに背を向けたまま、さっ

きのジーンちゃんと盛り上がっている。

「あの、すいません……離してください」

んっ？ 声の方を振り向けば、シヤノンちゃんが絡からまれてい

た。

相手は三人組、あきらかに酔っ払いだ。

二メートル超えの鎧姿、となれば戦士だろう。

三人とも同じ会社の同僚なのだろうか？

「いいじゃねえかよ。なあ、姉ちゃん」

「そうそう、そんな格好してるんだし。ちよつとくらい付き合えよ」

ドンツと再び肘撃ち<sup>ひじうち</sup>。

……なるほど、「助けてこい」ってことらしい。

「ほら、ちよつとこつちで酌<sup>しゃく</sup>でも——」

「その辺で止めとけよ」

おそらくこれも勇者業の一貫なのだろう。

俺は立ち上り、彼女の前に割って入った。

「ああ、なんだテメエは？」

こうなるよなー、やっぱり。

うつわあー、すっげえ酒臭いし……男臭い。

仕事帰りかな？ ご苦労様。

「なんなんだテメエはって聞いてんだろ？」

「俺？ 俺は警備……じゃなくて勇者。そう、勇者。まあ、なんだ……気持は分からないでもないけど、その辺で止めとけて。なっ？」

「勇者……だと？」

途端に男達の顔色が変わった。

「あ、あの、フレデリックさん……私は大丈夫ですから……」  
つて、言われてもね。

放つとけないでしょう、これは。

先輩命令でもあるし。

「見ねえ面つらだな。本当に勇者なのか、テメエ？」

「うん、今日からね。バリバリの新人。昨日まで警備員だったからさ」

「ほう、そうかそうか。新人なあー」

「なってるほどねえー」

「おい、お前ら。今日は帰るぞ」

どうやら面倒は避けられたようだ。



さすがは『勇者』の肩書きと云ったところか。

揃そろって浮かべる嘲笑ちやうしょうが気に入らないが、彼等は大人しく店を後にしてくれそうだ。

「あの、大丈夫だっ……た？」

——って、なに？

せつかく追っ払ったつていうのに、シヤノンちゃん表情は冴さえない。

「あ、あの……」

「あつ、ごめんなさい。その、ありがとう……ございしました」

「……もしかして、俺、余計なことしちゃった？」

「いえ、そんな……助かりました」

「そう、なら良かった。大変なんだね、こういうところで働くのって」

彼女は相変わらず複雑そうだ。

「んっ？　どうかした？」

「いや、勇者さんの方が……大変だろうな……って」

えっ、やっぱり？

やっぱり大変なの、勇者って？

「しかも、あんなこと……」

あんな……こと？

「大丈夫なんですか？　パートナーさん相手にあんな無茶して

……」

「ああ、大丈夫大丈夫！」

警備員の頃から飲み屋でのいざこざには結構慣<sup>な</sup>れている。

さすがに三対一はキツいけど、こっちにはアラン先輩もいるし。

何かあったらその時だって。

それに結局今日は何も起こらなかつたんだしね。

「ああいうことするとパーティー集めに支障<sup>ししょう</sup>でちやうんですよ

ね？ ただでさえ新人さんは大変だって聞くのに……」

——えっ!?

「あのソルジャーコーポの戦士さん達、他の会社の人にまで変なこと言わなければいいんだけど……」

それはつまり、俺のパーティーには入るなって吹いて回るってこと？

「それでも大丈夫って言えるなんて、自信あるんですね。新人さんなのに凄いです！ 久しぶりに見ました、こういうことが出来る勇者さん。フレデリックさん、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

シヤノンちゃんの表情がパツと晴れやかに変わった。

……対する俺の表情が急速に曇っていく。

「あ、ああ……うん。そんなに自信は無いんだけど……」

「じゃあ、頑張ってくださいね！」

「は……はい」

あっちゃー、そんなことがあるの？

やっべ、全っ然気にしてなかったよ。

……大丈夫かな？　今からパーティー集めだっというのに。

「つて、あれ？　先輩？」

気づけばアラン先輩の姿が見当たらない。

「えっ？　あれ？」

代わりに隣の席には、一枚のメモ――

『ごめん。気分悪くなっちゃったから、先に帰るね。』

紹介する予定だった会社を書いておくから、頑張って一人で

回ってみて。

じゃあ、また！』

ええーっ!? 嘘でしょ？

ジーンちゃんも見当たらない……ってことは、お持ち帰り？

散々たらい回しの拳句あげく、とうとう放置プレイ？

おいおい、それはないでしょ！

新人研修は？ OJTは？

……俺、本当に勇者なんだよね？

警備員の仕事ですらOJTはあったのに！

そもそもついさつき新人は顔が利かないって言ったのは先輩

でしようが!?

こんなにかワイイ後輩おいて、一体どこ行つちやつたんだよ!

つていうか、今日は先輩の奢りだったんじゃないの!!

《オススメのパートナー（会社）》

【戦士】 戦士派遣、ソルジャーコーポ

【僧侶】 僧侶の会、回復支援社

【武道家】 武道一心社、スピードキング、コーポ・モンク

【商人】 町々交流社、せどり商会

《オススメのパートナー（フリーランス）》

【戦士】 ラードフ（男性）

【僧侶】 アイク（女性）

【武道家】 ウルフラム（男性）、バベツジ（男性）

裏面にはアラン先輩のオススメパートナーが書いてあった。

……ソルジャーコーポって、そことは数分前に揉めちゃったんですが。

初っ端から急速に立ち込める暗雲。

俺、ちゃんと討伐できるのか？ 魔王なんて？



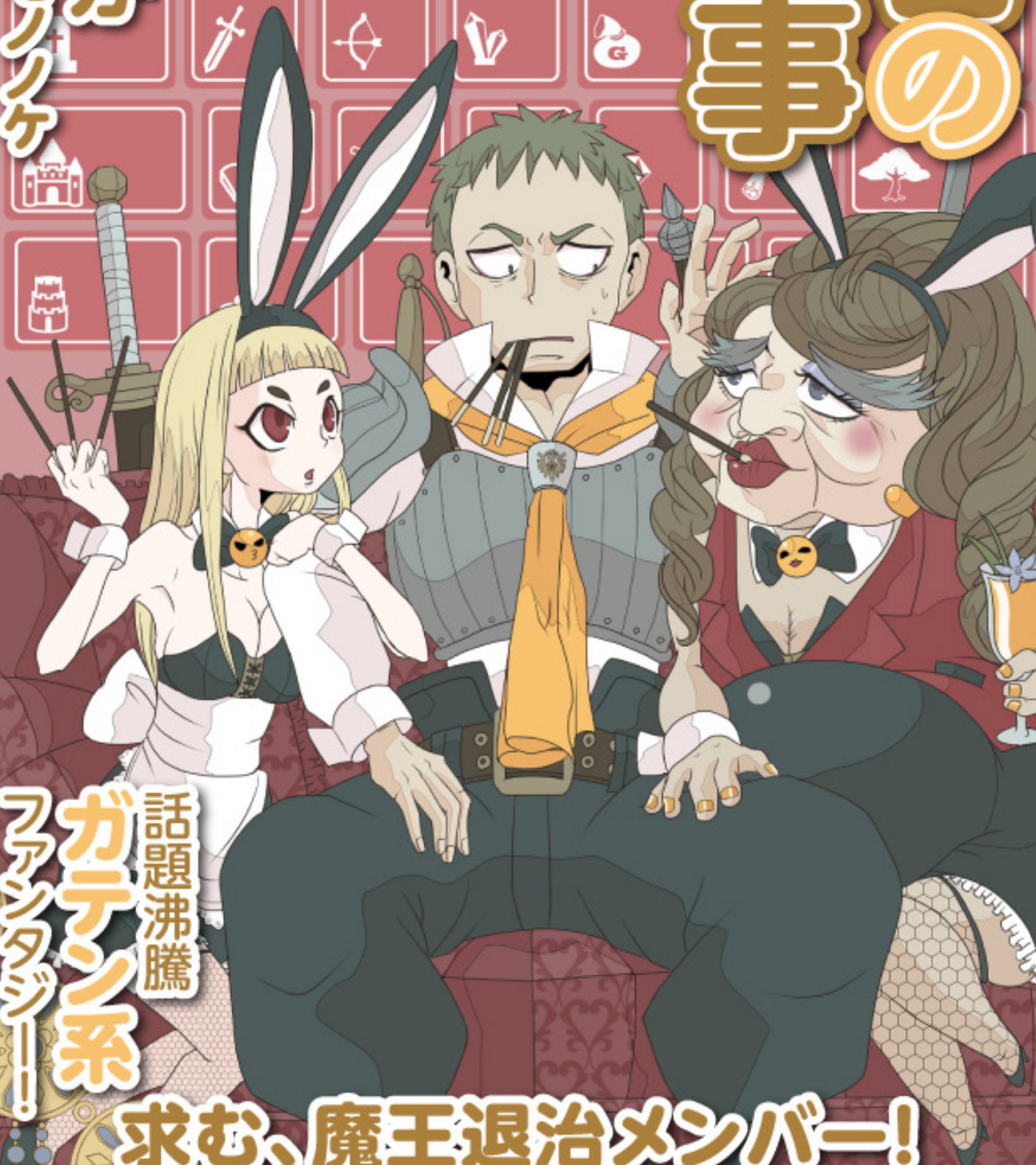
(勇者のお仕事 第一話／おわり)



# 勇者のお仕事

第三話 とうぼつ  
魔王討伐パーティー、  
結成

著 田中彼方  
Illustration 東京モノノケ



話題沸騰  
ガテン系  
ファンタジー!

求む、魔王退治メンバー!  
いっしょに夢をつかみませんか?

「はい、フレデリックさん。ウーロン茶です」

「ああ、シヤノンちゃん。ありがとう」

「どうですか？ お仕事の方は？」

もちろんじゅんちよう順調……では、ありません。悠々ゆうゆう自適じてきな警備員けいびいん生活せいかつ

を送っていた俺が突如とつじよ抜擢ばってきされての勇者業ゆうしやぎよう、それは当然簡単な

ものではなかった。まだ始まったばかりだというのに、既にすで勇

者の辛つらさを実感していた。こんな調子で本当にアエルシテイの

魔王を倒せるのだろうか？ しかも三カ月以内に……

シヤノンちゃんがウエイトレスとして働くここは、パートナー申請所を兼ねた酒場KEIYAKU。俺は魔王討伐パーティーを結成するために連日足を運んでいた。パートナーを捜すこと、早一〇日。朝の五時から夜二三時まで、毎日声を掛けて回っている。しかし未だに一人のパートナーとも契約を結べていない。色とりどりのランプにバニーガール姿のウエイトレス、丸太で組まれた店内は今夜も鮮やかに飾られているが、俺の心は灰色一色だ――

「ああ？ あんた、フレデリックとかいう勇者だろ？　うちはダメだね。ソルジャーコーポさんとは仲良くさせてもらってるんだ。あそこがダメというなら、うちもダメだ」

「あんだ、パートナーに対して随分偉そうにするらしいじゃない。自分一人で魔王を討伐できるとでも思ってるの？ こっちはだって同じように命懸けてるんだ。馬鹿にしてもらっちゃ困るんだよ、勇者様！」

パートナー会社の間で、俺はすっかり『傲慢勇者』のレッテルが貼られてしまっている。先日、シヤノンちゃんに絡んでいたあの酔っ払い戦士達の仕業に違いない。俺に追っ払われた腹いせに、有ること無いこと吹聴してくれたいらしい。

加えて新人で魔王討伐実績もゼロときている——

「新人？ ダメダメ。少なくともうちは魔王を三匹以上討伐してる勇者でなきや！」

「えっ？　それは無理だね。新人になんて、うちの社員の命を預けられないって」

さらには頼みの綱つなだったアラン先輩の力ちから添ぞえも無し。これでは交渉するためのテーブルに着くことすらままならない。

「フレデリック……さん？」

「んっ？　ああ、ごめんごめん……何でもないよ」

バツカス左大臣さだいじんやデニス勇者長ゆうしゃちょうは、アエルシテイの魔王はた

いしたことが無いという。しかし魔王は魔王だ。サンデン国に溢あふれている他の魔王に比べれば弱小でも、新米勇者である俺が相手にするには強敵の可能性だってある。ここは、ぜひとも強力な仲間が欲しいんだけど……

「……すいません、私のせいで」

「き、気にしないでよ。シヤノンちゃんは悪くないんだから」

そう、悪いのは彼女ではない。全部あいつ等。老舗しにせのパートナー派遣会社はけんだか何だか知らないが、あんな素行の悪い社員がいるようでは高たかが知れてる。俺はもうソルジャーコーポのメンバーだけは頼まれても雇やとわない！

「……あの、そういうえばフレデリックさんって、どうして勇者になつたんですか？」

「どうして……って、そりゃあどこかの悪代官あくだいかんに無理矢理

……」

「えっ!? 凄い! スカウトなんですか!？」



「ああ、まあ……一応。でも、誰でも良かったんだと思うよ」

あの時の左大臣の拳動不審さきょうどうふしんから見れば、勇者不足は相当深しん刻こく。手当たり次第にスカウトしているはずだ。俺も、ただサンじょううんえいしやデん城運営社（サン宮）のグループ傘下さんか、つまり子会社の社員という理由だけで選ばれたのだろう。

「そんなはずないです！　勇者ですよ、勇者！！」

どうもこのシヤノンちゃんは、勇者を高めに評価している節ふしがある。特別な力を持った優秀な人間にしかなれない職業とでも思っているのだろうか？

「やっぱり魔法とかも使えちゃうんですか？」

「いや、それは無理……」

やっぱり相当勘違いしている。魔法は極ごく一部いちぶの人しか使用で  
 きない高度なスキル。確かに俺も補助ほじよま魔法系ほうけいの大学は出ている  
 が、それで魔法が使えるかといえは別問題。理論りろんや概念がいねんを知識ちしき  
 として学んでいても、それを体現たいげんできるのは同学年に一人か二  
 人。当然、俺なんかでは使えない。

店内を見回しても、それは一日瞭然いちもくりようぜん。客の大半は斧おのや槍やりな  
 どを持った戦士達。残りが踊り子おどこやら商人で、僧侶そうりよの姿はほと  
 んど見当たらない。魔法を使える者が如何いかに希少きしょうかが伺うかがえる。

「——じゃない!? 使えたっけ」

「えっ、本当ですか! 凄すごいい!?」

「……うん。めっちゃやくちや……微妙びみょうなヤツを、一つだけね」

まだ父親がいた頃、つまり俺が小学生の頃。疲れて帰ってきた父親を喜ばせたくて、よく使っていた魔法があった。

「一つだって凄いいじゃないですか！ どんな魔法なんです？」

「ひ、疲労を軽減する、魔法かな？ 簡単に言えば……」

魔法と呼べるかは微妙なラインだ。怪我を治せるわけでも、

身体能力を向上できるわけでもない。何より子供の肩叩きや肩

揉みで簡単に代用できる代物だった。

「へ、へええ……あつ、でも凄いです。何であつても魔法を使

えるなんて」

完全な社交辞令ありがとう。まあ、自分でもたいしたこと出

来ないってのは分かっているから良いんだけど。そもそも、こ

うして一人のパートナーも見つけられない勇者なんだし。

つで、この状況……果たしてどうしたもののか？

城下を探し回ってもアラン先輩もデニス勇者長も捕まらな  
い。他に面識めんしきがある関係者なんて言ったら、それこそグレース  
少納言しょうなごんやバツカス左大臣くらいだ。何より問題なのは、本来  
相談すべき相手に頼たよれないという事実。こんな状況であつて  
も、あの上司にだけは相談しに行けない……

『いっぺんその面貸つらかせや！ ラリーより』

数日前、いつものようにパートナー探しに励はげむ俺に、一通の  
手紙が届いた。「あなた、フレデリックさん？」と早馬宅はやうまたつきやう急

便びんの緑の制服のアルバイト君が声を掛けてききのだ。受け取った手紙の内容が、これ。

……ラリーって、誰？

便箋びんせんにはそれしか書いていなかった。宛名あてなは『勇者フレデリック』なので、配達間違いでは無さそうだ。封筒ふうとうは見慣れたサン營の備品びひんで、グループのロゴが入っている。ということは差出人は、魔王討伐関係者の誰かだろう。

ひとまず城に顔を出してみようか？

こうして翌朝、俺は直属ちよくぞくじようし上司であるラリー勇者長補佐ほさと対面した。勇補ゆうほとはその名の通り勇者長の補佐ほさを担になう、次期勇者長候補こうほ。そして一勇者いちゆうしやが一番身近な上司として相談を寄せせるべ

き相手……らしいのだけれど……

「上司に報告無しとはいいい度胸だな！ ええ、おい？」

四〇代後半だろうか？ 何やら頭髪が寂しい。残り少ない

髪も乱れに乱れていた。寝癖が酷いにも程がある——つて、

えっ？ 今、上司って言わなかった？

「一度も挨拶無しだと？ テメエ、ナメてんのか！ ええ？

随分好き勝手やってくれるじゃねえか！」

受付に通されたコメノキ会議室は、フシミ会議室の四分の一にも満たない広さ。そのこじんまりとした空間に、ラリ―勇補の怒鳴り声が反響する。長机二つが平行に並び、パイプ椅子が三脚ずつ向かい合わせで置かれているだけの簡素な部屋。

真つ白な壁紙かべがみだが窓がないため薄暗うすぐらく、何やら黴臭かびくさい。そこへ遅れて入ってきたのが、このヤクザ……もとい上司。やたらと蟹股がにまたで顎あごを突き出して歩く様は、見るからに性質たちが悪そうだった。

「ええ、おい？　これは一体どういことだ！」

直立する俺との間に机を挟はさみ、彼は三席の真ん中に掛けた。

後ろに倒れてしまふんじゃないかという程ふんぞり返り、机上に両足を放ほうっている。苛立いらだちを伝えようとしているか、その足を絶たえ間まなく揺ゆらし、机をガタガタ震ふるわせていた。

「勇者になつたからつて調子に乗つてんのか？　ええ？　テメ

エ、『ホウレンソウ』くらいは知つてるよな？」

ほうれん草？　それは茹ゆでたら美味おいしい……あの？

「報告ほうこく・連絡れんらく・相談そうだん!!　どの仕事でも基本だよな？　ええ？」  
報ほう・連れん・相そう——なるほど!

「それとも俺に喧嘩けんか売ってるのか？　ええ、おい？」

「いえ、その……知らなかった、と言いますか……」

「はあ？　アランからは、きちんと伝えたと聞いてるがなあ？」

やっぱりあの先輩……あれで結構酔ってたんだな。すっかり伝えたつもりかもしれないけれど、あの日、アラン先輩はウエイトレスのジーンちゃんをお持ち帰りした上、俺を置いて帰っちゃいましたから！　俺の上司が誰かという情報も伝え忘れ



て。

「ああ……その、すいません……」

「つとによお！　そんでどうなんだ？　状況は？」

貧乏揺すりびんぼうゆを続ける上司は、横柄おうへいな上に清潔感せいけつかんも欠かいてい

た。無精髭ぶしょうひげが下顎したから目の下にまで散らばり、センスの悪い

紫むらさきの鎧よろいには、傷ではなく汚れが目立っていた。歯たぐいだつて真つ

黄色。プライベートでなら関わりを持ちたくない類たぐいの人種だ。

しかしせっかく現れた頼るべき相手。今は外見など求めている場合ではない。どんな見てくださいでも勇補は勇補、そう割り切って相談したのだけけれど……それが失敗だった。

「それですわね、こういう場合はどうすれば……」

言い終わる前に机の天板てんばんに踵かかとが打ち付けられた。ガンツと鳴るや、忙せわしなく揺れていた机がピタリと止まった。一瞬広がった静寂せいじやくは嵐の前の——というヤツだ。

「つぎけんじゃねえ！ テメエ、これからどうするつもりだ！」

……いや、それを相談させてもらおうと。

「だいたい誰がそんな報告しろつつつた、ええ、おい？」

えっ？ あの、それは……どういふことでしょうか？

「俺への報告は『スケジュール通りです。問題ありません』以外は認めねえ！ トラブルだと？ そんなもん、自分でどうにかしとけ、ボケツ!!」

えええええつ!?

「だが、虚偽きょぎの報告だけはあげるなよ。ええ？　もしあげれば  
全てはテメエの責任だからな！」

いや、そんな無茶苦茶むちゃくちやな……

どうやらハウレンソウの「ソウ」は「相談するな」という意味  
だったらしい。取り違とちがえた俺に痼癢かんしゃくを起こした上司は、唾つばを  
飛ばして捲まくし立ててきた。

「テメエは俺が望んでいる報告だけをあげてこい。それを週に  
一度よこせ！　スケジュールも作成しとけ。それから作業タス  
クは漏もれなく『WBS（作業分解図）』に落としこめ。『原価  
管理』もやっつけ。その上で『原価率』を確保しろ。もちろん

問題点は一覧にまとめて——」

ちよ、ちよつと待って！ メモ、メモ!! 新人への配慮はいりよなど

一切無しだ。ラリー勇補の口からは『知らない単語』がポンポン飛び出し、言うまでもなく質問する暇ひまはない。いつかのグレースしょうなごん少納言よりも早口だ。それでも前回の反省を活かし、懐ふところにペンとメモ帳を忍ばせておいたのは正解だった。これでどうにか後から調べることにくらは出来る。

「とにかく俺が勇者長へ報告する時に、テメエの作った資料をそのまま使えるようにしとけ！ 分かったか、ええ？」

癩癩かんしゃく上司の口撃こうげきに、メモ帳は瞬またたく間に埋ままっていった。そして「もう書きこむスペースが……」と心配を始めた頃だ。ラ

ストは耳を疑うような言葉で締め括られた。

「赤字プロジェクトなんて絶対認めねえぞ。自腹でも何でも

切って、最低でもトントンで倒してこい！」

こうして理不尽極まりない暴風雨に晒されること二時間半、開放されるや思わずよろめいてしまった。すっかり足にきていたようだ。心には当然それ以上にきている。俺は父親同様、普段は酒は飲まない。それでも今日は、一杯だけ飲んで帰ろう。勇者だった父親が、稀に飲んで帰ってきた日の、あの寂しそうな背中が少しだけ分かった……

そうこうして今夜で一週間、俺が酒場KEYYAKUへ通い

始めてから既に一〇日が経過していた。

「じゃあ、今度私にもお願いしますね」

シヤノンちゃんの言葉で我に返る。

「えっ？ あれ、ごめん……何の話だっけ？」

「疲労回復の魔法のお話ですよ！ ぜひ、お願いしますね」

「あっ、ああ……うん。あんなものでよければ、いつでも」

「勇者さんほどじゃないですけど、ウエイトレスって結構疲れ  
るんですよ。こうやって食器とかドリンクをいくつも運ぶか  
ら、肩が凝こっちゃって」

「確かに大変そうだね。あっ、そういえばシヤノンちゃんの方  
は？ どうして、このお店で——」

つと、言い掛けて、俺は「しまった！」つと後悔こうかいした。彼女の顔が一瞬寂いっしゅんさびしそうになつたのを感じた。あまりに思慮しりよに欠ける発言だつた。

「あつ、ごめん。ごめんね！ 別に答えなくていいから!？」

シヤノンちゃんはこうしてバニーガール姿で接客せつきやくしている。

それには相応そうおうの理由があつて然しかるべきだろう。たとえば金銭的な問題が……

「……人を捜しているんです」

「えっ？ 人？」

「はい、大切な——キヤツ!？」

口に含んだウーロン茶を俺が盛大せいたいに噴ふき出したのは、シヤノ

ンちゃんが突き飛ばされたのと同じだった。

「いつまでサボッてるのよ！ シヤノン、早くカウンター片付けてきなさい!!」

現れたのは見たことのないウエイト……レス？

「あっ、ポツコスさん!? すいません、すぐに!」

ゴホツ、ガホ……ガフツ……鼻の奥がツンと痛い。逆流したウーロン茶が鼻にも入ったようだ。

「つとにもう、最近の若いコは……って、アナタ、なんで頬ほおをつかってるのお?」

「いや、それは……その……」

悪夢から目を覚まそうかと……



「んんっ？ その顔、何か困っているようねえ？」

そんな風に女の人みたいな喋り方しゃべをしても、声で、体型で、いやもう何もかもでバレバレなんですけど……

「ああ、そうそう。ワタクシの名はポツコス」

——嘘うそつけ、変態へんたいジジイッ！

バツカス左大臣 IN バニースーツ。どこから指摘してきすればいいのだろう。国のナンバー2がまさかの女装。無理矢理着込んだシヤノンちゃんと同じ衣装コスチュームは今にもはちきれそうだ。網タイあみツを穿はいた太ももはボンレスハムにしか見えない。

「このマスターとは昔からの知り合いでねえ、人手が足りない時に、こうしてヘルプで呼ばれるのお。普段ふだんは別の仕事をし

てるんだけどねえ」

……普段は左大臣として働いていますもんね。

「アナタ、顔色が良くないわねえ？　寝不足かしらあ？　その年で白髪しらも目立っているわよお？」

その小柄こがらな肥満ひまん体の一挙手一投足いっきよしゅいつとうそくに、はみ出た腹回りの脂肪しぼうがダブつく。尻のたるみも酷いものだ。何より驚かされるのが、そのメイク。アイシャドーもルージュも美しさを引き立たせるといふ本来の役割を果たすに足りず、ある種しゆ、芸術いぎの域に達していた。

「それで？　どうかしたのお？　見たところ、新人勇者のようだけどお？」

ええ、あなたに無理矢理転職させられました……

「つで、調子はどうなのお？」

「それが……パートナー捜しが上手いっていなくて」

「ふーん。なのにどうしても帰ろうかって雰囲気なのお？」

「へっ？ 何でって……もうこんな時間なので……」

「急ぎでパートナー捜す人って、たいてい二四時に来て、翌朝五時まで飲んで行くものなのよお。そうじゃないってことは、アナタ、まだまだ余裕があるのねえ？」

いや、余裕なんて無いです！ 今日中、いや明朝、ラリー勇

補が出勤する前に何らかの報告をあげなければ何を言われるか

分かったものじゃない。それまでに何かしらの進展が欲しい。しんてん

今日でちようど一週間、初回の報告日だ。

「……二四時過ぎから五時まで。そうか、そういうものなのか。あの、ありがとうございます！ バツカスさん」

気づけば先輩と同じような気安さで話していた。地位ちいや威厳いげんは衣服と共に纏まとうものなのだろうか？ バニー姿の左大臣からは、まるで圧力を感じない。役員室であつた時の、あの腹黒い、オイリーな野心も全く見えなかつた。

「ポツコスよっ！ つとに仕方ないコね!!」

その左大臣の言葉から五時間後、日付替わって深夜の二時。シヤノンちゃんはとつづくに帰つた後だ。この時間になつて、

バツカス左大臣の言葉の意味がよーく分かった。

ひづけへんこうせん 日付変更線を跨またいだ辺りきやくそうで、客層がガラリと変わったのだ。

数は一〇分の一に激減げきげんし、強面こわもての割合が増えていた。それまでと比較すれば平均したゴロツキ感は五割増し。他には家出少女のようなコに、帰る家の無さそうな老人まで、右も左も脛すねに傷きずのありそうな面々ばかりだ。

なるほど、そういうことか……

この時間に活動しているパートナーは一癖ひとくせも二癖ふたくせもありそ

う。きつと一般的な勇者は雇わないメンバーだろう。彼等も自

覚があるらしく、わざわざこの時間に出向せつぱつまっているようだ。つ

まりこの時間帯は、雇う側も雇われる側も切羽詰せつぱつった者同士が

顔を寄せているということになる。

しかし、そんな曰いわくつきのパートナーで大丈夫なのか？ 人生初の魔王討伐を目指す俺には、勇者の経験不足を補おぎなって余あまりある優秀なパートナーが必要。この中に、そんな人がいるとは思えな——うわっ!? ウーロン茶を片手に歩き出した途端とたんだ。俺は激しく何かにぶつかってしまい、手からグラスを滑すべらせた。しまった！ そう思った瞬間だ。

「あつ、すいません。こ、これ、どうぞ……」  
瘦身そうしんの声の主ぬしが、落としたはずのグラスを俺の目の前に差し出していた。

「……あ、ありがとう」

「いえ、すいません。本当に……すいません……」

信じられない。彼は瞬まばたきの間まにグラスをキヤツチしていたようだ。さらに驚くことに、受け取ったグラスからはウーロン茶がこぼれていなかった。

「こちらこそ、ぶつかってしまつて……」

つと俺が頭を下げようとすれば、彼がその三倍も頭を下げる。

「いや、いやいや。すいません、すいません。本当に、すいません。それは……たぶん、違います。僕の……せいです。すいません。よく、あることなので……」

小柄で大人しそうな彼は、もごもごと聞き取りづらい声で言

う。眉尻まゆじりを下げてみせる申し訳無さそうな顔が、こういうと失礼だが、実に幸薄さちうすそうに見えた。

「よくあるんですか？」

「ええ、そう……なんです。僕、存在感が薄くて……。その、人に気づかれにくいんです。だから、すいません……」  
確かに驚おどろくほど影かげが薄い。瞬きして再び目を開けた瞬間になくなっていても不思議ではないくらいだ。

「……本当にすいません。すいません」

「そんなに謝らなくても……君が悪いわけじゃないんだし」

「いえ、そんな。すいません。本当にすいません……」

何とも気の弱そうな人だ。『すいません』が口癖くちぐせになっ



まっっている。このちよつと、いやかなり影の薄い彼はコンラトさん。特徴は特徴が無いこと。無味無臭、そんな言葉がピッタリだった。童顔で三つは下だと思っていたけれど、なんと俺と同じ年らしい。

「さっきは驚きましたよ。あつという間の早業だったので」  
「ああ、すいません。あれは、その……。僕、すばしっこいんです。昔から逃げ回ってばかりいたから……」

「逃げ回る？」

「よくイジメられ……ああ、すいません。何でもないです」

「えっ？　なんですか？」

「いえ、すいません……何でもないです」

彼は相手の目を見て話すのが苦手なようだ。いつも伏せ目ふせめがちで、何となく挙動不審きょどうふしん。

「コンラートさん、職業は何を？」

「ええつと、職業ですか？　そうですね、特には……」

「へっ？　無いんですか？」

「ああ、はい。すいません。決まったものは特に……すいません。一応、槍は使えます。あとはナイフを……少々。ただ、そういうのを何と言えればいいものかと……」

「戦士……じゃないですかね？」

「ど、どうでしょうか？　自分で言うのもなんですが、僕は戦士には見えないような……」

確かに俺よりも細身ほそみで、背も頭三つ分は低い。戦士という剛のイメージは微塵みじんもない。

「うーん、確かに戦士っぽくはないですね」

「……その、違っていたら、すみません。フレデリックさんって、もしかして勇者さん……ですか？」

「ええ、一応」

だからこうして困っているんです。魔王を倒さなければいけないのに、そのためのパートナーを集められなくて。

「そ、そうですか……じゃあ、あの……その……」

「えっ？ 何ですか？」

「その……すみません。何でもない……です」

「いや、何かあるんじゃないですか？　言ってください」

「その、あの……良かったら僕を雇ってもらえたら……つと」  
雇ってもらえたら——って、俺に？

「いや、あの、すいません。忘れてください……すいません」  
「いやいやいや、ちよつと待ってください！　ぜひ、もう  
ちよつと話を聞かせてくださいよ」

いきなりだったもので、こっちが面喰めんくらってしまった。今までは  
時間帯が違ったこともあって、悪評高い新米勇者のパーティー  
に自ら申し出てくれるパートナーなんていなかったのだ。

このコンラートさんは見た目からはそれほど期待できそうに  
ないけれど、とにかく話を聞くだけ聞いてみることにした。俺

は背筋を正し、きちんと椅子へ座り直した。

「これまでに魔王を討伐したことは？」

「いや……その……すいません、一度も……」

実戦経験無し、俺と一緒に。うーん、確かに契約を結べなくて困っているけど、役に立ちそうもない人は雇えない……

「特技は？ 何かありますか？」

「せんにゆう潜入……とかですかね？」

「潜入……ですか？」

「ええ、存在感が薄いので……コソツと。こう脈拍みやくはくを落ち着けるように静かにしていると、さらに気配は薄くなります。あとは目立つような人が側にいれば……」

目立つような人？

「人目を強烈に惹ひいてくれるような存在が近くにいれば、僕は完全に空気のように……」

姿を消す……消える？　それ、下手な魔法より凄くない？

「……駄目、ですよ？　こんな特技じゃ……すいません、いいんです。気にしないでください」

「いや、ちよつと待ってください！」

確かに身体は小さく気も弱そうだけれど、透明人間よろしく気配が消せるなら話は別だ。それなら女湯を覗のぞき放題……いや、魔王城に気づかれずに侵入することが出来るかもしれない。

「その気配を消すっていうのを、ちよつと見せてもらえますか？　今、ここで」

こうして、俺の一人目のパーティーメンバーが決まった。直じかに見れば凄いものだ。本当に消えたように感じた。個性豊かな変わり者が集まる深夜のKEIYAKUでは、彼の特技は尚更なおさら際立きわだった。実際はそこにいるのに、意識で捕らえることができない。大手パートナー会社でも、これだけ特殊な能力を持ったメンバーはいないだろう。この時間にうろついているパートナーは風貌ふうぼうからも察さつせる通り、はみ出し者ばかり。しかし、その中にもこういう稀有けうな人物はいるようだ。

「あの、本当にいいんですか？　すみません、やっぱり僕なん

かでは……すいません」

「大丈夫ですよ。ぜひ、来週からお願いします」

翌朝、喜び勇んで報告に出向いた俺だったが、あいにくラリー勇補は留守。仕方なく手紙を残して帰ったのだが、夕方彼から届いた返信は……

『まだ一人目だと、もたもたしやがって！　ラリーより』

コンラートさんと契約を結んで以来、俺はパートナー捜しの時間帯を深夜に変更した。そうして彼とも出会った。二人目のパートナーになるバートランドさん。大口開けて豪快ごうかいに笑う、見た目通りの豪傑ごうけつだ。どう見ても三〇代後半、思わず敬語けいごを



使つてしまいいそうになる彼も、なんと同い年。稀に見る俺よりも老<sup>ふ</sup>け顔<sup>がお</sup>の戦士は、身長二メートルを超える<sup>きんこつりゆうりゆうくつきよう</sup>筋骨隆々の屈強な体格で、その立ち振<sup>ふ</sup>る舞<sup>ま</sup>いにも貫<sup>かん</sup>禄<sup>ろく</sup>があつた。俺やコンラトさんのようなルーキー組と違つて、魔王討伐実績四回という実戦経験者でもある。

「あの、なんで空いてるんですか？　バートランドさんだつたら、引く手数多<sup>あまた</sup>つて気がするんですが……」

眉<sup>そ</sup>を剃<sup>そ</sup>りあげた強面から粗<sup>そ</sup>暴<sup>ぼう</sup>で扱<sup>あ</sup>つ<sup>か</sup>いづらそうに見えたが、恐る恐る声を掛けてみれば意外にも気さく。性格に難<sup>なん</sup>がある様子も全く無かつた。その上、この体格に、この実績、戦力として申し分ない。

「ガツハハハハハハッ。そりやあそうだ。さつきサンデンに着いたばっかなんでな。ガハハハハッ」

言うまでもなく声も大きい。コンラートさんとは正反対だ。

「さつき？　それまではどこに？」

「ああ、しばらく前に隣国のコウリンで魔王討伐をしててな。

四回つていう実績もあつちの魔王を倒したものだ。サンデンではまだ暴れたことはねえんだけどな」

「あつ、そうなんですか？　じゃあ、なんでサンデンへ？」

「向こうでは仕事が無さそうだな。聞けばサンデンの周りには魔王がうじゃうじゃいるらしいじゃねえか？」

確かにバツカス左大臣は頻出する魔王に手を焼ひんしゅついていると

いつていた。一体どこから湧わいてくるのか？ 倒しても現れ、倒しても現れ、逆に勇者は怪我けがやら何やらでどんどん減っているそうだ。その結果、こうして俺が勇者をやるハメに……

って、そうか！ これは大チャンス。バートランドさんのことを知っている勇者は他にいないのだ。これだけの戦士、明日にはすぐに雇い主が決まってしまうだろう。そうなる前に決めなければ。ここは早い者勝ちだ！

「あの、もう細かいところは後で聞きますので、ぜひうちのパーティーに加わって下さい！ 出来れば今すぐ契約書にサインをお願いしたいんですが」

「ガツハハハハハッ。何だ、何だ。そんなにガツつかなくて

も、俺で良けりやあ頼むよ、フレデリック」

「……あの、言いにくいんですが、実は僕はまだ新米で」

「ああ？　俺は構わんぞ、こっちも細かいことは気にしねえし、気にしてられねえからな！　ガハハハハッ」

「どうやら俺にも運が巡ってきたらしい。まさかこんな掘り出し者ものを探し当てることができるなんて。彼は我がパーティー、最大の戦力になること間違い無しだ！

「じゃあ、来週よろから宜しくお願いします！」

これで二人、スピードのコンラートさんにパワーのバートランドさん。どちらも戦闘要員だ。つとくれば、最後はやはり僧

侶しかいない。パーティーに一人は僧侶を、というのは定石<sup>じようせき</sup>。俺としてもぜひとも入れたい。彼等は後方支援を一手に担う、魔法のスペシャリストだ。回復魔法で傷を癒<sup>いや</sup>すだけでなく、人によつては身体能力を向上させるなど、様々な補助魔法も使えるらしい。何より、よしんば戦闘で命を落としたメンバーを、天国へ導く祈りを捧げる役割も担う。彼等が一人以上パーティーにいたことが契約条件というパーティーも少なくはない。

当然、悪評が立ってしまった勇者が仲間に加えるのが一番難しいのも僧侶だ。ただでさえ頭数が少なく、予約待ちが発生する職業。下手な噂が立ってしまえば、相手になどしてもらえない

い。この時間にうろついているような僧侶など、普通ならいるわけが無いのだけれど……

「君、本当に僧侶なの？」

「そうだよ。どっからどうみても僧侶っしょよ？」

いや、どっからどう見ても今時ギャルの遊び人っしょよ？

ピチピチの一八歳を称<sup>しょう</sup>する彼女は、黒く焼いた肌<sup>きよくげん</sup>に極限まで脱色<sup>だっしょく</sup>したシルバーの髪。髪色とあわせたグロスに派手<sup>はで</sup>なツケ睫<sup>まつ</sup>毛<sup>げ</sup>、上下はピンクのジヤージといった容姿だ。

「その格好、流行<sup>はや</sup>ってるの？」と聞いてしまった俺は立派な中年<sup>オッサン</sup>らしい。先ほど手酷い一言を喰<sup>く</sup>らってしまった。その中年には「今のコはたいていこんなだよ」っと言われても、スツと

受け入れることが出来ない。

「それでえ、フレちゃんはお小遣こづかいくれんの？」

フレちゃんって。一〇も年上の相手に……

「……その前にもうちよつと聞かせてもらっていい？」

「うん、いいよ。じゃあ、何かカクテル頼んでいい？」

「それは……ダメでしょ」

「ええ、めっちやケチじゃん！」

「いや、アイスコーヒーとかなら頼んでいいよ。ケイちゃん、

未成年だよね？ 履歴書りれきしょにも一八歳ってあるし……」

「うっわ、硬かたいなあー。そんなんだから彼女できないんだっ

て」

……確かに、彼女はいないけども。

「それでえ？ 何答えればいいの？」

「得意なことって……あるかな？」

「あるある！ ダンスだね、ダンス！」

「いや、そうじゃなくて。僧侶の仕事で得意なこと……」

「僧侶として？ まあ、高校で習ったことくらい……かなあ？」

高校？ ……って、えっ？

「WD回復女学院!? 凄い！ 名門のお嬢様学校!!」

「まあ、親がうるさかったから……ねえ……」  
見た目とは随分なギャップだ。



「その辺はいいじゃん、テキトーで。つで、どうなの？　雇ってくれんの？　誰も雇ってくれなくて困ってるんだよね」

僧侶なのに全然雇ってもらえないなんて……逆に凄い。

「ねっ、アタシ頑張るからさ！　このままじゃ、お金なくて困るんだって。ねっ、お願い！」

「もうちよっと僧侶っぽい格好すれば？　そうすれば仕事もいっぱい見つかると思うけど……」

「それはダメ。この格好はアタシのポリシーなの。魂なの。こっだけは譲れないんだ。フレちゃんはどう？　フレちゃんも、見た目がこんなだからダメ？」

「いや、まあ見た目はそれほど重要視しないけど……」

「本当!? 私さ、どうしてもお金貯めなきやいけないの。一身上の都合って奴でさ」

「じゃあ、少しの間だけでも身なりを……」

「それは無理だつてば!? ギヤルメイクは私の命なの! やつぱりフレちゃんもこんな格好の僧侶は雇ってくんない?」

「いや、格好とかはそんなに気にしないんだけど……」

「やった! じゃあ、決まりね。ここで会ったのは運命なんだよ、きつと!」

「いや、ちよつと待って! うーん、そうだな……一応さ、本当に怪我<sup>けが</sup>を治せるかどうかだけは見せてもらっていい?」

押し切られそうになって、慌てて最低限の確認を申し出た。

こうして最後に決まった彼女が、三人目のケイちゃん。こう見えて、それなりに回復魔法が使えた。

これでパーティーは、勇者の俺を含めて四人。僧侶のケイちゃんに祈りまでは期待できそうもないが、回復魔法が使えれば後方支援としては十分だろう。この状況で回復要員を仲間にできただけでも御おんの字かもしれない。よし、これで戦力は整った。来週からは魔王討伐だ！

ようやくパーティー編成を終えた翌日のこと、俺は遅れを取り戻さんと単身現地アエルシテイへ向かった。来週からの討伐に向け、まずは依頼主先へ挨拶あいさつと情報収集うかがに伺ったのだ。出来ることを少

しでもやっておきたかった。

「これはこれは勇者殿、遠いところご足労願そくろういまして……」  
「ああ、いえ。仕事ですから」

そしてアエルシテイの市長、ゴズリンさんから様々な話を聞くことができた。本当に様々な話を――

「どういうことですか、これは！」

家事使用人メイドや警備員けいびいんの制止せいしを振り切り、俺は役員室へ怒鳴り込んだ。市長との対面を終えるや馬を駆かり、一度も休むことなくここまで飛ばしてきたのだ。勢いそのままにドアを押し開ければ、奥のソファアールにバツカス左大臣。さすがに左大臣スタイ

ル時の貫禄は別格。ポツコス仕様時の愛嬌など、今はまるつきり見られない。

「どうしたんだね、フレデリック？」

「どうもこうもないでしょう！」

俺が怒っているのは他でもない。討伐資金についてだ。それは先程のゴズリンさんの話で発覚した。

「討伐資金？ フレデリック、それは少しは差し引かれるものだろうか？ 君の前職、警備員の給料だって、そういうところから捻出しているのだから」

重厚感漂う役員机に肘をついた左大臣は「何を怒っているのだ？」といわんばかりの表情をその上に乗せていた。

「少し？　本当に少しなんですか？」

「ああ、そうだ。国の運営に関わる経費として、少し、だ」

「ゴズリン市長は四〇〇〇万デンも払ったとおっしゃっていますが？」

ピクリと左の眉が揺れた。眉間の皺しわがグツと深くなるや、威い圧感あつかんは三割増しだ。

「……あの男、よけいなことをペラペラと」

「私を与えられた資金は一〇〇〇万デン、残りの三〇〇〇万デンは警備員の給料と他に、何に使う予定なのでしょう？」

「それは言えんな。国の重要機密だ」

鋭い眼光が俺を射抜く。身体が重く感じるほどの圧力だ。し

かし簡単に引き下がるわけにはいかない。市長からは、他にも聞いていることがある。

「サンデン側から納期短縮のうきたんしゅくを持ちかけ、引き換えに費用の割増しも請求したようですね？　ゴズリン市長は『半年でも大変だと思うが……』っと心配しておられましたか？」

尋ねた瞬間、重たい空気が広がっていくのが分かった。返答は無い。事実とみて間違いないだろう。緊張を孕はらんだ静寂が俺と左大臣の間に横たわっていた。そのまま視線を合わせること数十秒、根負けした左大臣がふうっと大きな溜息をついた。

「だからだらやるのは良くない、そうは思わないかね？」

張り詰めた空気は、先の一息で嘘のように飛んでいた。左大

臣が頭の後ろで両腕を組み、ゆったりとしたソファに上体を凭もたれかける。見る間に攻撃的な雰囲気はなりを潜めたが、代わりに面倒くさそうな表情が見て取れた。

「何事もさっさと終わらせた方が良いだろう？　なあ？」

「半年でも十分早いと思いますが？　それに提案された期限を半分にして、費用を一・五倍要求して、それでもし納期が守れなかったら……」

「サンデンの勇者は優秀だからな。達成できないうんてことは無いんだよ。そうだろう、フレデリック？」

優秀って……俺は新人なんですが……

「そういえば市長は、私のことを『百戦錬磨ひやくせんれんまのベテラン勇者』



だとも勘違かんちがいしていたようですが？」

「ふーむ、それはおかしい。どこで情報が歪ゆがんでしまったのだろうか？ 実に不思議だ……」

費用を吊り上げるために意図的に嘘をついたのだろう。討伐実績ゼロの新米勇者と討伐実績一〇〇回のベテラン勇者では、依頼時のレートが随分変わってくる。

「でも、まあ良いではないか。風格ふうかくがある、そう見られたということだ。マイナスではあるまい。今回はそう思わせておけばよい。それで得をするなら儲けものだろう？」

どうやら完全に居直ったようだ。片頬かたほおだけに浮かべた笑み

は、まさに悪代官。この悪人面を見る限り、消えた三〇〇〇万

デンが国のために有意義に使用されているようには思えない。

「そんなことより、進捗しんちよく状況はどうなんだね？　こんなところに来ていいる暇はあるのか？　んんっ？」

つと、まだまだ言いたいことはたくさんあつたけれど、役員室からは忽ちたちま叩き出されてしまった。

「くっそ！　とんでもない奴だ!!」

それでも今はこの状況を受け入れ、プロジェクトを成功させるしかなかった。ぶつくさ言っけていても始まらないし、心配すべきは失敗した場合のこと。上にはバツカス左大臣とラリーー勇補がいる。失敗すれば……ただでは済まないだろう。必要以上に責任を押し付けられること請け合いだ。それに彼等はどうかあ

れ、事情を知らないアエルシテイのゴズリン市長の純粹な期待は裏切れない。

「……あのジジイ、今に見てるよ」

鉄の鎧よろいを身に着けながら、俺は決意を新たにした。

勇者である俺の装備そうびはサン営からの支給品だ。選択制で、この鉄のバスターソードも自分で選んだ。ようやく俺の分の用意が整ったようで、帰り際に受け取ったのだ。

うん、なかなか良い。こうしてサン営製の装備を身に着けると、グツと勇者っぽく見える。さっそくシヤノンちゃんにでも見せに——って、あれは？

遠くを足早に進む後ろ姿……どこかで見覚えが、ってアラン

先輩だ。間違いない！俺は一も二もなく大慌おおあわてで走り出し、その背を追いかけた。

「あれ？先輩？どこいった？」

あと少しというところだったのに、角を曲がったところで見失ってしまった。それらしき人影ひとかげが見当たらない。

「つで、上手くいつているのか？」

「ええ、仰おおせの通りに」

あつ、先輩の声だ。どうやらアラン先輩は、このコメノキ会議室に入ってしまったようだ。俺にとっては良い思い出のない、あの陰気いんきな部屋。何かの打ち合わせだろうか？

「新米しんまい達の様子？」

「なかなか苦しんでいますよ、あなたの望み通りに。パー  
ティーは組めず、相談相手はいない。これは相当キツイツス  
ね。自覚のある者、無い者といいますが、狙い目は後者でしょ  
う。そういうものは知らず知らずに溜まっつて、一気に爆発  
——」

「待て。おいつ、誰だそこにいるのは！」

条件反射だった。危険を察知さつちする獣けもののごとく、俺はその場か  
ら逃げ出した。定かではないが、聞いてはいけない話だったよ  
うだ。先輩、何してるんだ？ それにもう一人の声、あれはど  
こかで聞いたことがあるような……

結局そのままアラン先輩には何も相談できず、俺は装備を身

に着け、その日のうちにアエルシテイへと馬を飛ばした。この調子なら翌朝には遅れずに到着できるだろう。明日はパーティー全員で集まることになっている。メンバーの顔合わせと、もろもろ諸々の確認のためだ。

「ちゃんと装備は整ったのかなあー」

俺の分は会社支給だが、しきゆうメンバーの装備は別。これは討伐費用で購入する必要がある。こうにゆう少しでも早く討伐を進めるため、皆には今週中に装備を見繕みつくるってもらっていた。さらに来週すぐに動き出せるよう、今日から現地への前乗りまえのもお願いしていた。それが裏目うらめに出ようとは思ひもしなかつたけれど……

「ちよ、ちよつと！ ケイちゃん、何、それ!？」

宿に着いた俺は一時間だけ仮眠を取り、翌朝九時に宿屋一階のカフェテリアで合流した。そして目の前のケイちゃんの格好に度肝どぎもを抜かれた。

「んんっ？ 何があー、これ超良くない？ はい、フレちゃん」

領収書りょうしゅうしよを受け取って、驚きは三倍に跳はね上がる。一気に眠気も吹っ飛ぶ値段だ。

「嘘でしょ！ 何でこんなに高いの!？」

「ええー、これブランドものだし。むしろ安くない？ 頑張つて値切ってきたんだから。アタシ、超出来るコじゃね?。」

「……ケイちゃん、それで魔王討伐に行って本当に大丈夫？」  
上下ジャージ姿の家出少女スタイルから一変、これから夏を  
迎える季節とはいえ、信じられないほど露出ろしゅつが多かった。水着  
と紙一重だ。

「大丈夫、大丈夫。アタシ、踊り子ダンサー目指してっからね！ その  
うち転職予定なの。ちよつとした先取りってところかな」

なるほど、それでその……派手なメイクにこだわっていたの  
ね。確かにその格好だと映える。でも、俺が父親ならその格好  
での外出は許さないだろう。中年オッサン、上等だ。

「まあ、いいっしょ？ 気にしないってことで。肩書きは僧侶  
のまんまなんだしさ」



……本人がいいならいいんだけど、心配だ。それ、防具の意味をなしてないよね？

「ガツハハハハ！ 確かに癒し系だな。俺の目の保養ほようにはなってるぞ。ガハハハハッ」

「でしょ、でしょ？ やっぱ分かってんなあー、バドちゃん  
は」

うん。まあ、バートランドさんが二倍奮起ふんきしてくれるならいいか……戦闘中に彼女は後ろに下げておけばいいし。

「ところで、ケイちゃんって本当にWD回復女学院に通ってたんだよね？ 全っ然、そうは見えないんだけど？」

「うん、だって三カ月だけだから。アタシ、退学になってるん

だよ。授業サボって踊ってばかりいたから。でもまあ、ダンスが好きなんだから仕方ないっしょ？」

ええっ、卒業してなかったの！ 嘘でしょ!?

「だから魔法なんて一つも覚えてなかったんだよねえ。一応、できそうなヤツを履歴書には書いといたけど」

そ、それは経歴詐称けいれきさしょうだよ！ 百歩譲ゆずって卒業してなかったこ

とは俺の見落としても、使えない魔法を書くのは反則……

「つて、あれ？ この前、使えてたよね？ 魔法？」

「アタシ、本番に強いタイプだからね！ ぶっつけでやってみたら、出来ちゃったの」

……それはそれで凄いな、このコ。

「ああ、それとね。これと、これと……はい、これも。領収書でーす」

ええつと、マスカラとコンシーラー、グロスに……

「つて、ちよつと待つて！ これ、何？」

「何つて？ 装備とは他に必要なアイテムがあれば買つてい  
いって言ったの、フレちゃんじゃん？」

「……これはさすがに経費じゃあ落とせないよ。悪いけど返品  
してきてくれない？」

「ええー、なんでえ！ 超必要なんですけど？ てか、もう返  
品無理っしょ？ これ、使っちゃってるし」

「ガハハハハハッ！ 俺もなんか買っておけばよかったな」

……勘弁<sup>かんべん</sup>してくださいよ、バートランドさん。

「ところで、コンラートさんは……あっ、いた！」

元々存在感が薄いので、人が多いところで彼を捜し出すのは至難<sup>しなん</sup>の業だ。

「コンラートさん、どうも！ あっちですよ、あっち。あの席にいるのが僕のパーティーの皆さんです。さあ、行きま——」  
席に連れて行こうとする俺の右腕を、コンラートさんが両手でガシツと捕んだ。

「すいません……気づいてました、すいません……」

「えっ？ 気づいてたんですか？ じゃあ、早く来てくれれば良かったのに」

「すいません。その……大丈夫……ですかね、僕……」  
……なるほど、彼らしい。極度の人見知りのようだ。

「大丈夫ですって、良い人ばかりですよ」

「僕……ああいう大きな人と、その、女のコが苦手で……」

　　つとと言うコンラートさんをどうにか引き摺ずって、四人で丸テーブルを囲んだ。ようやく席に着いたその時だ。俺は深い溜ため息いきをつくことになってしまった。ドアを開けて入ってきたのは、緑の制服の馴染なじみの顔。彼はアエルシテイへの配達も担当していたらしい。

『テメエ、バツカス左大臣のところへ乗り込んだだと!?　今すぐ面貸せ！　ラリーより』

あーあ、やっぱりだ。この上、初期装備としてこれだけいろいろ買ったなんて報告したら……

「あれっ？ フレちゃん、何か老けた？」

……ケイちゃん、一部は君のせいでもあるんだけどね。

二回目の報告ではパーティー結成という朗報ろうほうは伝えられたも

のの、『役員室への怒鳴り込み』と『初期装備の費用』の件

で、ラリー勇補にこつぴどく絞しぼられていた。まさにボロ雑巾ぞうきん、

「もうこれ以上は破れちやいますやぶ」というくらいに絞られた。

さらにサンデン城下からここへの移動もあって、俺は今日ほとんど寝ていなかった。

「ガハハハハハッ。苦勞してんなあー、勇者様は。ガハハハ」  
豪快に笑うバートランドさんは、一〇時間くらいは寝てやつたっという顔だ。

「ご、ご苦勞……様です。何か、すいません……」

コンラートさんはゆっくり休めたはずなのに、なぜか俺と同じくらい顔色が悪かった。けれど、いつものことだ。これでも俺と違って調子は悪くないらしい。

「まあ、たいしたことじゃないですから……ご心配なく」

そう、俺は勇者……眠くても。だから俺が仕切らなければ。

こうして初めての朝の討伐会議の進行は、欠伸を<sup>あくび</sup>噛<sup>か</sup>み殺<sup>ころ</sup>して行こうハメになった。

「さあ、それでは今週から魔王討伐を開始します」

朝の九時、顔合わせを行った宿屋一階のカフェテリアだ。

「ではまず、今回のプロジェクトについて説明します。事前にお話しましたが、目的はこのアエルシテイに出現した魔王の討伐。期限は約二カ月半。魔王についてはアエルシテイの市長から話を聞いています」

ゴズリン市長の話では、アエルシテイの中央に位置するこのセンタータウンから南西へ一二〇キロの地点にハクキンフォレストという巨大な森があり、魔物はそこから現れているそう。魔王城はその森の中のどこかにあるようだ。

「森は桁外れけたはずに大きいです。今週は魔王城のありか突き



止めることを優先しましょう。それから森の中を徘徊はいかいしている魔物達がどのくらいのレベルなのか、可能であれば確認しておきたいですね。それによって魔王の力量も計れますから。でも、無理はしないようにしましょう」

きちんと作戦を立てるためには情報が足りない。市長も森の中がどうなっているのかまでは把握できていないらしい。分かっているのは、その森は一カ月前までアエルシテイ最大の自然として人気の観光名所だったということ。今ではすっかり魔物が住み着き、一般の人は足を踏み入れられないということだ。

「ガハハハッ。了解だ。何にせよ、まずは森にいつて何匹か

ぶっ飛ばせばいいんだな。楽勝だ、楽勝。ガハハハハッ」  
バートランドさんはさすがに頼もしい。

「じ……自信はありませんが……やるだけやってみます」  
コンラートさんは少しだけ心配だ。

「ちよつと、コンちゃん！　ちゃんと食べてる？　声、ちつちやいんですけど。もつと元気にいこうよ！　遠足だよ、遠足」

ケイちゃんは……かなり心配。

「まずは様子見です。魔物と遭遇した場合も数が多ければ逃げましょう。三匹以下であれば、どの程度のものか戦ってみたいと思います。その際、まずケイちゃんは出来る限り安全な場所

へ下がってね。怪我をした人は一旦引いて、彼女のところへ。

今日のところは基本的にバートランドさんと僕で攻撃していきましよう。コンラートさんもチャンスがあれば、攻撃参加をお願いします。しかし、今日はケイちゃんの警護に注力してください。さ。じゃあ、まずは馬を借りて、森まで――」

「あつ、アタシ、馬走らせられないよ。誰か乗つけてってね」

「えっ!? ケイちゃん、マジで?」

「マジマジ、ウケるっしょ?」

いや、全然面白くないって……

仕方が無いのでケイちゃんは最軽量のコンラートさんの後ろに乗ってもらい、三頭で出発して一日半。民宿での一泊を挟ん

で、その入口にまで辿り着いた。

「ハクキンフォレスト、八番出入口か……」

森の広さは想像以上だ。サンデン城二〇〇個分といわれてもピンとこなかつたが、こうして目の当たりまにすると実感できる。高い木々が延々えんえん連なり、見渡す限りを覆おおっていた。アエルシテイ最大の森というだけはある。出入口は二〇以上もあるそうだ。この中のどこかに魔物と、そして魔王が……

「この入口がアエルシテイから一番近いみたいですね。とりあえず中を覗のぞいてみましょう。その前に皆さん、馬をつないでください。忘れずに水と餌えさもお願いしますね」

こうして踏ふみ入った森は、外から眺ながめて感じた以上に暗かつ

た。空を覆う葉が陽光を跳ね返し、中へは断固だんこ通すまいとしている。おかげでこの暑いのに寒いくらいだが、どうにも不気味だった。魔物が住み着くのも領うなずける。これでどうして観光名所だったのだろうか？ 不思議でならない。

警戒けいかいを緩めゆるずに進むこと一時間、まだ魔王城らしき建物は見つけられていない。つと、そこに奴等が現れた。赤い瞳らんらんを爛々とさせた魔物の群れ。一目でそれと分かった。この漆黒しっこくの、まるで影かげのような姿。この森に巢食う魔物に違いない。初めて対たい峙じするそれは墨すみのような色で狼かたちづくを形作っていた。全身の毛を逆立て、牙を剥むいて身構えている。数は二〇余り——かなり多

い。

「……こりゃあ、相手にするのはヤバいですね。皆さん、ゆっくり下がって。ここはひとまず逃げましょう」

さすがに実戦は緊張きんちようかん感が違う。俺が最後に一戦交えたのは数年前、警備員として盗賊とうぞくを撃退げきたいしたものの。魔物と戦ったのなんて六年前に一度きりだ。コンラートさんも不慣れらしく、魔物相手に「すいません」を連呼れんこしていた。ここはとりあえず奴等を刺激しないように、ゆっくりと……

「えいっ！」

咆哮ほうこうが上がったのはケイチちゃんの声の直後だった。石礫いしつぶてをぶつけられた漆黒の狼が、一斉に俺達に飛び掛ってきた。

「コンラートさん！ ケイちゃんを」

俺が振り返った時には、彼は彼女を抱えて後方一〇メートルの位置にまで回避かいひしていた。さすがはコンラートさん、逃げ足は半端じゃない。向き直った俺はすぐさまバスターソードで、飛び掛ってきている二匹を宙で斬り落とした。

「ガハハハハッ！ おうりゃあ」

そしてバートランドさん。彼の膂力りよりよくは良い意味で俺の想像を超えていた。石斧の一振りはじで五匹を弾き飛ばしと、返しの二振目でも四匹。その圧倒的な攻撃力を前に、奴等も危険を察知さつちしたらしい。唸りうな声を上げながらも少しずつ下がっていつている。

「よしっ、チャンスです。この辺で引きまし……」

「まだまだいくぜ。ガハハハハッ！」

止める間もなかった。鬼神のごとき暴れっぷりを見せるバートランドさんは、尚も喜々ききとして群れへ突入していった。一瞬だけ心配したが、それには及ばずだ。サポートは一切不要。数分後には二三の影が地面に倒れ、次々に蒸発じょうはつしていった。魔物は倒されると黒い煙のように霧散むさんするようだ。

「皆、大丈夫？　コンラートさん、ケイちゃん？」

今回はバートランドさんの活躍のおかげで怪我人はいないだろう。俺は念のために確認を行った。

「ぼ、僕は……大丈夫です。すいません……」

この気弱なコンラートさんも、実はバートランドさんの影で



三匹を仕留めていた。気配を消して背後から槍で一突き。なか  
なかどうして、意外にも戦闘についても戦力になっていた。

「アタシも全っ然平気。余裕、余裕！」

「うん、それは良かった。でもね、ケイちゃん……お願い。次  
からは石投げたりするのは止めよう」

「えっ、ダメだった？ でも大丈夫っしょ？ 最悪、またコン  
ちゃんが助けてくれるから。フレちゃんもいるしね」

そうそう上手くとは思えないんだけど……まあバートランド  
さんさえいれば何とかなるか。

「お疲れ様です、バートランドさん。いやー、さすがですね。

助かりまし——」

「駄目だ。動けねえ……」

「へっ？　なんですか？」

バートランドさんは、さつきから広い背中をメンバーに向け  
たまま微動びどうだにしていなかった。勝手に魔物への警戒にあたつ  
てくれているものと思っていたのだけれど……

「……わりい、やつちまった。カハハツ……カハハハ」

「フレデリックさん。いつものウーロン茶でいいですか？」

深夜の二五時、この時間に再びこの店に来るハメになろうと  
は。シヤノンちゃんは珍しく遅番だったらしく、今夜はもう少し  
働いていくそうだ。

「ああ、ウーロン茶で。よろしくね」

彼女に会えたのは嬉しいが、嬉しいが、嬉しくない。俺がわざわざこの時間に、ここへ来る理由は一つ。パートナー捜しに他ならないからだ。もちろん我がパーティー最大戦力の離脱りだつ。その穴を埋めるためだ。

バートランドさんは持病じびょうの腰痛ようつうが再発し、戦闘不能となつていた。今頃は病院のベッドの上。よくよく聞けば、その頻繁ひんばんに発生する腰痛のせいで、コウリンでは雇ってもらえなくなつていたらしい。慢性的まんせいなギツクリ腰。それでサンデンまで出稼せぎに来ていたようだ。

確かにどれだけ強力でも突然倒れられては困ってしまう。戦

闘中であればメンバーの命に関わる可能性だってある。そういうリスクを敬遠けいえんされて、彼は雇ってもらえなかったようだ。

「やっぱ超重量級の武器は腰にくるぜ……」

っというのが病院での彼の言葉。残念なことだが、腰痛は魔法では治せないらしい。切り傷や打撲など、外傷であれば回復魔法で治療できるが、これは疲労の蓄積によるもの。魔法での回復は望めず、自然治癒を待つしかないそうだ。

こうして再び戦士を捜すことになった俺は、コンラートさんとケイちゃんにしばらく待機たいきをお願いし、この酒場に顔を出していた。

「はい、ウーロン茶です。なんか……大変そうですね」

「……ああ、ちよつとね。でも大丈夫、問題無いよ」

こればっかりは仕方が無い。気持ちを切り替えて、次のメンバーを見つけなければ。三人で討伐を続けるという案もあったが、もしまたあれだけの魔物に一気に襲いかかってこれらたらと思うと、やはりあと一人は欲しい。

「あまり無理せず、頑張ってくださいね」

「ありがとう、シヤノンちゃん」

「それと……あの、アランさんって……」

「んっ？ 先輩がどうかした？」

そういえば、あのサンデン城での一件以来、アラン先輩を見ていない。ここには顔を出したりしているのだろうか？

「あつ、いえ。何でも……無いです」

「どうしたの？　何か――」

「フオフオフオフオ。その辺にしといた方がいいぞ、若いの」  
後ろから聞こえたその言葉は、一瞬、自分へ向けられたものに思えた。振り返ってみれば「なんだあ？　このジジイ？」という相変わらずの返し。いつぞやのチンピラ戦士達だ。今夜も下品な緑のモヒカンにスキンヘッド、黒のおかっぱの三人組で、身長は皆二メートルを越えている。どうやら、前に立つ老人と揉<sup>も</sup>めているようだ。爺さんの後ろにウエイトレスの女の  
コ、とくれば俺の時と同じパターンだろう。  
まーた酔っ払って女のコに絡んでるのか？

「まったく、やれやれだ」

「フレデリックさん、あの……」

彼等の元に向かおうと立ち上がった俺に、シヤノンちゃんが心配そうな顔を向けた。しかし今回ばかりは本当に心配無用。俺にはもう失うものが無い。

「久しぶり。『傲慢勇者』のフレデリックだ。君達、相変わらずだねー、ソルジャーコーポの戦士さん達」

皮肉を交えて割って入れれば、三人が一斉に睨みつけてきた。

「ああ、誰だ？ テメエは？」

って、おいおい、せめて覚えててくれよ！

こいつらのせいで苦勞しているかと思うと無性に腹が立つ。

むしろう

「フオフオフオ。珍しいのお、若いの。あんだ、素面しらふかね？」  
飄々ひょうひょうとしたその老人は強張りのない、柔らかな声で尋ねてきた。大男達を前にたいした余裕だ。

「あまり飲めないんですよ。最近は飲んでる場合でも無くて」  
「そうかね、そうかね。フオフオフオ」

あの左大臣より年上に見える彼は、真っ白な顎髭あごひげを胸につくほど伸ばし、白髪はくはつも後ろで結ゆわえている。どこかの村で長老として現れても何ら不思議ではない。

「おい、何なんだなんだ、テメエら！ ああ？」

リーダー格のモヒカンがぐつと顔を近づけてきた。それでも爺さんはお構いなしで話を続ける。



「フオフオフオ。見たところ勇者じゃな？」

「えっ？ ああ、はい。そうです」

「今夜ここにきた目的は？ どんなパートナーを捜しておるんじゃない？」

「ああ、前線で身体を張ってくれていた戦士が離脱してしまつて。彼の後釜を……」

「フオフオフオ。なるほどのお。なあ、若いのに、思い切つてパーティーのカラーを変えるつもりはないかね？」

「えっ？ どういうことですか？」

「フオフオフオ。ワシは前衛で身体を張るのは無理じゃでな。

代わりに弓が得意なんじゃよ」

そう言いつつ老人は「無視してんじやねえ！」とキレたモヒカン戦士を軽々と背負い投げた。

「まあ、これくらいなら身体も張れるがね。フオフオフオ」  
こうしてハーマンさんに出会ったのは、再び酒場KEIYA KUへ通い出して三日目の夜。本格的に納期が厳しくなってきた頃だった。前日の報告に対する上司から返信は……

『メンバー離脱だと！ 何やってんだテメエ!? そんなんで間にあうんだらうな？ 絶対に間に合わせろよ！ ラリーより』

俺にはもう時間が無かった。そんな時に、この只者ただものではない爺さんに出会ったのは幸運としかいいようがない。

ところで、どうでもいいけど、ラリー勇補の手紙……何で

い  
つ  
つ  
もちやくばら着  
払  
い  
な  
ん  
だ  
よ  
!?

(勇者のお仕事 第二話／おわり)

少し不思議

SFな真夏の夜のボーイ・ミーツ・ガール!

# 宇宙人と綴じたメモリア

第1話 Seven Diaries



著=折口 <sup>さとし</sup> 哲 Illustration=三月 薫

第17回BOX-AiR新人賞受賞作、いま颯爽と登場——。

秘

第十七回BOX-AiR新人賞受賞作選評

# 『宇宙人と綴じたメモリア』

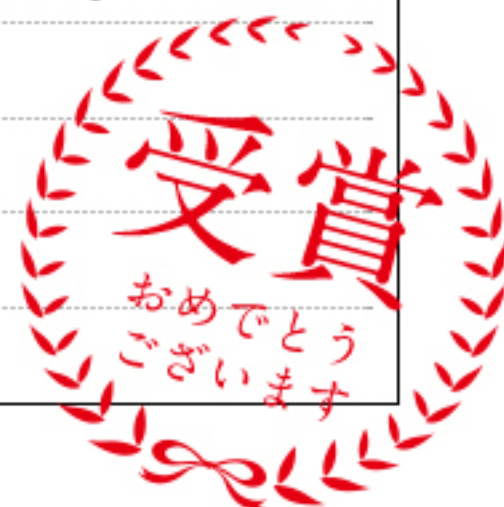
折口 哲

・タイトルからはSFを連想させるが、むしろ真っ直ぐで爽やかな青春小説となっている。

・挫折を抱えた主人公と、あっけらかんとしたヒロインとの対比が丁寧に描かれていて好感が持てる。

・暗くなりがちなテーマを、高校生のひと夏の思い出のように描くことで、さわやかに仕上げられている。やや、先の展開が読めてしまうのが残念。もうひと捻り欲しかった。

・記憶が文字として踊り出すという設定は面白いと思うが、ややルールが理解し難かった。



## 折口 哲——Origuchi Satoshi

1986年10月14日生。愛知県在住。好き：BUCK-TICK、液体、モノクロ、綺麗な色と音。

## 三月薫——Sangatsu Kaoru

漫画家。「デザート 2013年2月号」（講談社）にて読切り『退屈しのぎは華やかに』にてデビュー。「THEデザート 5月号」に『恋命（コイノミコト）と性悪娘』が掲載され、そのまま連載に。来年2月には初の単行本を刊行予定。





佐倉美弥子は宇宙人だ。

それも、相当おっちよこちよいな。

# 1

その夜、僕——朝田晶人あさだあきひとは二週間後に迫った林間合宿の下見のために町の裏山に来ていた。用が済み、そろそろ家に帰ろうかと思った時、それは音もなく空に現れた。

——光りながら空を飛翔する、円盤形の存在。

それが俗にいう未確認飛行物体だと理解するのに時間はかからなかった。宇宙船は空間をねじ曲げながら現れたかと思うと、星に満ちた夜空の中を死にかけの小鳥のようにふらふらとしながら、煙を上げて墜ちてくる。廃墟となった洋館を通り過ぎ、僕の頭上を越える頃には地面に激突する寸前で、そう遠くない位置に不時着したにもかかわらず、どんな科学的作用が働いたのか音はほとんどしなかった。

風に圧れた木々が葉を揺らめかせる。

ピクリとも動かなくなつた未確認飛行物体は、墜落の衝撃で爆発することもなく、オーバーヒートした機械のように白煙を

上げ始めた。夜闇の中かろうじて視認出来るライトは点滅し、  
遭難信号<sup>SOS</sup>を発しているようだった。

それを受け取れる人間は、こんな深夜の裏山には僕しかいなかった。

「……ドジな宇宙人もいるもんだな」

何が出てくるか分からない恐怖心よりも、助けなくちゃ、と  
いう感情が上回る。しようがないな、とつぶや、僕はその未確

認飛行物体へ駆け出した。と同時に、後は頼んだと言わんばかりに  
タイミング良く、ライトの光が消えた。駆動音らしき音も  
聞こえず、機械や油の焦げる匂<sup>こ</sup>いだけが鼻をつく。未確認飛行  
物体に近づくにつれ、それはどんどん強くなった。

未確認飛行物体のドアらしき部分が、ガチャガチャと動いているのが見えてくる。どこかで見たことがある光景だなど思つて、障子しょうじが引つかかってしまった時のアレに似ていることに気付く。つまり、中にいる奴はドアが開けられなくて困つてい

る。

「ちよつと待つてて。今開けるから」

困っている誰かを助ける、という行為が、既すでに残骸になつてしまつた自分の夢への代償行為だつたとしても、見捨てて逃げる、という選択肢は僕には選べなかつた。人を殺す宇宙人が乗っているかも知れないのに、つくづく自分はお人好しだと思

僕はドアのくぼんだ部分に指をかけて引っ張る。中の奴はさつきからドアを外に押している。「せーので押せよ」と声をかける。そもそも宇宙人に日本語が通じるかどうかはこの時点では分からなかったのに、何故かそんなことを口にしていった。何度目かにして、バン、とドアが開いた。

途端、何かが僕の頬をかすめ、爆ぜるように飛んでいった。反射的に振り返るが、視界には一面に広がった夜が映るだけだった。

「何だ、今の？」

気圧か何かの関係で風が吹いたのだろうか。それとも地球外生命体の分泌した何かかも知れない。そう推測を立てながら

も、僕の感覚は違うと告げていた。そんなものじゃなくて、あれはきつと別のモノだろう。ただそれが、少々常識離れしているだけで――

ぐ、と。

何かにジーンズを引っ張られた。

「わっ」僕は驚きつつ、引っ張ってきたものを見る。

ジーンズを掴む<sup>つか</sup>白く細い指は、足下に倒れ込んでいた女性の

もの。見た目は僕より少し年上で、肩で息をしながら、不時着のシヨツクに目を丸くしていた。未確認飛行物体に乗っているなれば……宇宙人だと言われなければ、宇宙人だとは思わなかっただろう。白い半袖シャツに黒のクロップド丈<sup>たけ</sup>のパンツと

いう地球の人間らしい服装に身を包むのは、美しいと形容出来る容姿を持った女性だった。ポニーテールにした長い黒髪と、健康的な肌の艶つや。大きな瞳にすっきり通った鼻立ち、甘そうなピンク色の唇と、顔のパーツは一つ一つがどれも美しく、シヤツの上からでも分かるスタイルの良さと相まって、人間離れしている。いや、実際宇宙人なのだけけれど。

「大丈夫？」僕は声をかける。

「ここは……？」僕を見る彼女は不安そうな顔をしていて、何が起きたのかまだ整理出来ていないみたいだった。「……つて、もしかしてもう地球に着いてる！？　嘘うそ！」

「しかも不時着でね。ライトは遭難そうなん信号？」悪い人には見えな

かつたので、僕は何が起きたのかそれとなく伝える。「んで、  
貴女あなたは何者なワケ？」

墜ちてくる円盤に乗っている存在なんて、どう考えても一つ  
しかない。聞かずとも分かっていたが、それでも訊いてしま  
う。あまりに非日常なことだったから、受け入れるための最後  
の一線を越える言葉が、欲しくて。

彼女はジーンズを掴んでいる手に気付くと、慌あわてて放して立  
ち上がった。身長は僕より少し低いくらいだが、それでも女性  
にしては高めだ。

彼女はこほんと咳せきばら払いすると、

「私は佐倉美弥子。宇宙人だよ。えへへ、ちよつと座標間違え



ちやつた」

そう言つて、照れ隠しに笑つた。

## 2

繰り返し言う。佐倉美弥子は宇宙人だ。

それも、相当おつちよこちよいな。

詳しく話を聞いてみると、どうやら彼女は宇宙船（未確認飛行物体だと思つていたやつだ）の操作を誤つたらしく、不時着を余儀よぎなくされたらしい。着地に失敗したというより、僕が宇宙船を空に見つけた時には煙を噴いていたことから、操作ミ

スが船体を故障せしめたのだらう。うっかりなんてレベルじゃないのに、当の本人は気に病むでもなくけろつとしていている辺り、なかなか肝が据<sup>す</sup>わっていると思う。

だからか、宇宙船を僕のような地球人に見られたことについても何とも思っていないなかった。普通、こういう場合は目撃者の記憶を消したりするものじゃないのだらうか。少なくとも、大っぴらになつたらマズイということは、高校二年生の僕でも何となく分かる。だが彼女の口から出てきた言葉は、「別に良いわよ。悪いことなんてしてないんだから」と、さっぱりしたものだった。

「そうかい。それじゃ、この後貴女は」

「美弥子でいい」

「この後美弥子は、どうするつもり？」

「宇宙船で過いちべつごすつもりだったんだけど……」彼女は壊れた宇宙船を一瞥する。「しばらくは生活機能も復旧しそうにないし、こりや野宿でもするしかないかな」うーん、と緊張感のない眼差まなざしで、彼女は辺り一帯を眺めている。

「……野宿するくらいなら、あそこに行ったらどう？」

僕は裏山の頂上付近にある無人の洋館を指差す。僕が子供の頃から廃墟と化しているが、一晚過いちべつごす分には十分だろう。

その申し出は美弥子にとっても渡りに船だったようで、彼女は二つ返事でそうすることにした。

「それじゃ道案内くらいはするよ」

「ありがと！　すごく助かるわ。君って良い人なのね」屈託くつたくのない声で、美弥子は微笑ほほえむ。

「……別にフツーだ」ぎこちない返事をして、僕は洋館を目指して歩き始める。正面から屈託なく褒めほめられるというのは、どうにもこそばゆい。

美弥子は謎の技術で宇宙船を不可視状態インビジブルモードにすると、大きなトランクケースを一つだけ持って歩き始めた。

洋館に到着すると、彼女はそこを気に入ったようで、早速泊まる準備を始めた。中を不良達がたまり場たまりばにしているといったこともなかったもので、安心して彼女に勧められそうそうで、少し嬉

しかった。

「ところでさ、美弥子は何で、地球に来たの？」

「会いたい人がいてね、その人を探しに来たんだ」

静かな面持ちで答える彼女は、仄かな月明かりに照らされたことも相まって、とても綺麗きれいだった。

「」

明日もここにいいのか、と訊たずねる言葉が不意に出た。え、あつ。何でそんなことを訊いてるんだ、僕は。

内心動揺している僕に、「分からないね」と美弥子はあるさ  
り答えた。それが少し、寂しかった。

## 3

翌日。僕は授業を終えると、毎週定例で行っている林間合宿の生徒会議に参加していた。毎年二年生を対象に行われるそれは、各クラスから男女一人ずつの委員を選出し、自分達で林間合宿の内容を決めていくのである。先生曰く、生徒の自主性を尊重する、ということらしい。本当かよ、とひねくれ者の僕は思ったりする。

林間合宿委員会の委員長を務める灰野楓は、セーラー服のりボンを揺らしながら、僕に話題を振った。「それでは裏山の下見の報告をお願いします。朝田君、よろしく」

はい、と返事をして僕は下見の結果を報告する。林間合宿で寝泊まりする宿舍や、各種レクリエーションで使用する場所に問題がないかを事務的に述べる。昨日徹夜して仕上げた資料にまとめてあるので、詳しくはそちらを読んでもらえれば問題ない。どうしてわざわざ声に出して言っているのかというと、例えば僕の左横でもっともらしく聞いた振りをしながら居眠りをしているしまいかずはる嶋井和春や、右横で資料の端に無駄に上手いイラストを描いては出来不出来に一喜一憂しているおがさわらきあ小笠原貴亜に「お前からもうちよつとまじめに参加しろやコラ」と示唆しさしろと、灰野から暗黙の指示があったからだ。鋭い眼光は笑っていないなかった。

僕は読み上げながら、それとなく左右の友人達に意識を向けるが、その努力は芳しい<sup>かんば</sup>効果を発揮しなかつたようだ。嶋井は時々相槌<sup>あいづち</sup>を打って頷<sup>うなず</sup>くが、半睡状態でかくんかくんになっているだけだったし、小笠原は会心の出来映えのイラストを描き上げ「デリシヤス」と小声で喝采<sup>かつさい</sup>している始末だ。デリシヤスつて、料理かよ。

僕が報告を終えると灰野は静かに表情を引きつらせながら「朝田君ありがとう。質問のある人はいる？」と僕の両隣の二人に聞こえるようにわざと大きな声で言うが、意に介さない二人がいるだけだった。灰野はとうとう諦<sup>あきら</sup>めると、「それじゃ朝田君、他に言っておくことはある？ 何か変わったことがあつ



たとか」と溜息ためいき混じりに言った。

「変わったことは——」

真っ先に思い浮かぶのは、美弥子のことだった。宇宙船に乗ってきた宇宙人。すごく美人で、ぱっと見人間と変わらない彼女。

「特になかったよ」

だが、そのことは言えなかった。

だいたい、宇宙人が宇宙船に乗ってやって来たなんて言うて、誰が信じるというんだ。逆に僕の心配をされるだけになるのは目に見えているので、答えないでおいた。それで大丈夫だ。悪い人には見えなかったし、それに、まだ洋館にいるとは

限らないのだから――

「……………」

「それじゃ、他にないようでしたら今日の委員会を終了します。お疲れ様でしたー。あ、嶋井君と貴亜はちよつと残つてね、話があるから」

名指しで呼ばれて、ようやく目を覚ました嶋井が「朝田ちやん、もう終わった？」とあくびをしながら言う。「終わったよ」と僕は答えた。

「つて、ちよつと返してよ楓っ」落書きだらけの資料を取り上げられて、小笠原は灰野から取り返そうとするが、身長が足りなかった。

その後、嶋井と小笠原は灰野からみっちり怒られた。何故か僕まで付き合わされた。とはいっても説教される側ではなく、「こんなにも朝田君が頑張ってるんだからもうちよつとしっかりやったらどうなの」と引き合いに出される側でだった。

灰野恒例の説教が終わると「それじゃアイス食って帰ろうぜ」と嶋井が言った。怒られ慣れているからなのか、あんまり落ち込んだりしている様子もない。もつとも、嶋井が落ち込むところは余り想像出来ないのだけれど。

「賛成ー」と小笠原が元気良く手を上げる。「貴亜、グレイプ味好きー」

「まったく」と腰に手を当てながら灰野が言った。言っても直

らないことを半分悟りつつあるが、持ち前の使命感からきちんと委員長としての役割を果たしているあたり、同じクラスの委員としては好感が持てる。「朝田君も行くでしょ？」

「あー……………それなんだけど」僕は両手を合わせながら、「ごめん、今日はちよつと用事があるんだ。また今度な」

そう謝って、僕は灰野達と別れた。行きたいところがあったのだ。

洋館に寄ってみると、まだ美弥子はいた。ほつと胸を撫で下ろす。彼女は荷物の搬入などして、宇宙船が直るまでのしばらくの間ここを拠点にするつもりらしい。たった一日の間

に、洋館の内部を見違えるほどに修理するくらいだから、よほどお気に召したのだらう。手足のあちこちに包帯を巻きながら——恐らく、作業中に怪我をしたのだらう——出迎えてくれた彼女の表情からも、それは一日りょうぜん瞭然だった。

だがしかし。

これだけの大修理を、一体どうやったというのか。

昨日見た時は、壁には穴が空き、天井は所々崩れ落ちていて、床も抜けていたりしたのに、今は新築と見紛みまごうばかりになっっている。真っ白な壁は汚れ一つなく、天井の瀟洒しょうしゃなシヤンデリアはいつの間にか復活しロビーを煌びきらびやかに彩いろどっている。床は新品同様で、間違っまちがって踏み抜いて二階から落下しかけると

いったことも、多分もうないだろう。……抜けている美弥子のことだから、一応気をつけた方が良いと思うけど。

ご機嫌な彼女に連れられて、書斎へと案内される。もちろん書斎も修理済みで、本棚やデスクは言うに及ばず、花柄のカーテンまでかけられている始末だ。

これも宇宙人の科学力とやらで直したのだろうか。

「どうやったのさ、これ？」

「私の宇宙人力よ。それより見て、これ」

答になっていない答を返すと、美弥子は自慢げに胸を張って、ぎつちりと本が詰められた本棚を見せてくれた。本棚の容積を超えている大量の本は、風船に入れすぎた空気のように、

それを内側から圧迫していた。

「美弥子、これトランクに入れて持ってきたんだよね？」

「そうだよ」

本の数は彼女が昨日持っていたトランクに到底収まりきる量ではなかったが、僕は深く考えるのを止めた。洋館を修理したことといい、地球の科学とは根本から違う技術を使っているのは明白だ。

「本か……最近読み始めるようになってきたな。これって全部小説？」

「うん。私が今まで旅してきた惑星の出来事が書いてあるのよ」えへん、と美弥子は得意気だ。こういうところは妙に子

供っぽくて、年上の女性には見えないが、無下<sup>むげ</sup>に出来ない妙な可愛さがあるから腹が立つ。

「自伝ってことか。そりゃ面白そうだ」別の次元での冒険譚ぼうけんたんと  
いうのは、嘘でなく興味が湧く。「他の惑星ってことは……  
やっぱり宇宙人なんだな」

「そう昨日言ったじゃない。正確には多元宇宙移動生命体って  
カテゴリになるのかしら。次元を超えて旅する一族なワケよ、  
私は」

「パラレルワールド？」

「そんな感じに捉えてくれれば大丈夫。で、どうよ、私の蔵書の  
数々は！」



「すごいってのは分かるんだけど」単純に、その数の多さに圧倒されたのは事実だ。が……「タイトル、全部日本語で書かれているのは何で？」

背表紙に書かれた文字は、明らかに日本語だった。本はサイズも保存状態も装丁も様々だったが、そこだけは全て共通していた。普通こういうのは、美弥子達種族の固有言語で書かれているものではないのだろうか。この宇宙人は、妙な部分でばかり狙いを外してくる。

「日本語に見えているのは、晶人が日本人だからだよ」

「日本語に見える？　どういうこと？」

「そこに書かれている文字はね、私達種族の間で使われている

文字。普通なら象形文字みたいに地球人の目には映るんだろうけど、その本は私が直接綴つづったものだからね。文字ではなく、情報として、目にした生物に認識されるんだ。地球人には超科学とか魔法に見えるだろうね」

「人の意識に直接訴えかけるのか……ますます人間離れしてるな」

宇宙人だから当然なのだろうけど。僕の目には日本語に見えるているが、ロシア人にはロシア語に、フランス人にはフランス語に映るのだろう。異国人同士が集まったら、ちよつとした混乱を引き起こしそうだ。

「更に言うと、私が話している言葉もそう。聞いている晶人は

私の言葉を情報として認識していて、意識上で理解出来るように、日本語として聞いているんじゃないかな」

「どうして日本語が話せるのか気にしないようにしていたけど……そういうことだったのか。テレパシーの亜種みたいなもんなんだな」なら、佐倉美弥子という名前なのも得心がいく。彼女の本当の名前を、日本語という形で僕は認識しているのだ。

「うん。晶人は飲み込みが早いね。それでそれで、読めるなら早速、読んでみない!？」

美弥子の台詞には本せりふに対する愛情がたっぷりすぎるほど滲にじんでいた。どうやら読んで欲しくて仕方がないようだ。熱心に自伝を勧める美弥子は、好きなものを共有したがる子供の純真さ

を秘めているようで、見ていて悪い気はしなかった。

「私の自伝以外にも他の惑星で手に入れた本とかあるけど、そっちは言語変換されないから読めないのが残念だな。けどね、本っっていうのはすごく良いものなんだよ。読んでいるだけで別の人生を追体験出来るし、自分の感情を再確認することも出来る。それに何より、楽しいからね！」

「美弥子は、本が好きなんだな」

「うん、大好き」

てんしんらんまん  
天真爛漫に、美弥子は笑った。本当に、心から本が好きなんだろう。

「……そうだな、一冊読んでみようかな。オススメはある？」

「うん、晶人には是非これを読んで欲しいな」

そう言つて渡されたのは、厚さが二センチほどある焦茶色こげちゃのハードカバーだった。タイトルは、日本語にすると『流星色のジルバ』。

僕は本を開き、ぱらぱらと頁ページを捲めくる。

「これはね、今から五年くらい前に行つた惑星の話だつたと思う。その惑星は地球に似た星なんだけど、毎日のように大きな流星が降り注そそいでは地面にクレーターを穿うつていくところだつたの」

「とんでもない星だね」美弥子はあつさり言うが、けつこうな災害じゃないだらうか。地球には巨大な星や隕石は高頻度ひんどで降

り注いだりしない。「命一つじゃ足りなさそうな惑星だ」

「鋭いね。その惑星の人達は平均五つの命を持っていたよ。でも私の命は一つしかないからさ、毎日死にそうになつて大変だった」

おっちよこちよいなこの宇宙人が、そんな過酷な環境でよく無事だったものだ。

「けど、命をかけたかいはあつた。降り注ぐ流星は七種類の特殊な蛍光色を発していて、一定の間隔を空けて定期的に落下してきたんだ。その落下を分析していくと、地球で言う五線譜に打つ音符を示していることが分かってね、どうやら流星は楽曲を奏でに飛来していたんだよ」

「それで流星色、か」スケールの大きな演奏だ。「美弥子、読んで楽しみたいから、それ以上のネタバレはなしにして——  
つつ」

と、何故か痺しびれるような痛みが指先に走った。

何だ？ おまけに、軽い目眩めまいも感じる。

「あわわっ、ごめんっ！ つい」どうやら自分がネタバレをしていたことに気付いていなかったらしく、彼女は慌てて謝罪する。「あ、そうだ。読む時はこれをつけて読んでね」

そう言って手渡されたのは、星柄をあしらった黒縁くろぶちのメガネと、肘ひじまで覆おおう白い手袋だった。どちらも見、何の変哲もない。

「これは？」

「耐毒メガネと、文字の侵食を防ぐ耐毒手袋グローブです」

「……おい、今なんか変な単語が聞こえた気がするんだが」

「変じゃないよ。私が直に綴った文字は、地球人にとっては劇薬みたいなものだからね。直視すれば脳がやられるし、触れれば触れた箇所箇所に文字が侵食して異常を来きたしてしまうのよ」

「ってことはさ」

「うん」

「素手で本を渡された時点で、ヤバイよな？」

「……はっ！」

「はっ！　じゃねえ！　だから指先が痺れたのか、って侵食さ



れるって僕の身体どうなるんだよ!？」

「大丈夫だよ晶人、侵食って言ってもすぐにじやないから。長時間接しているとヤバイだけだから。個人差はあるけど」

「個人差って便利な言葉だよなチクシヨウ!」僕は本をその辺にほっぽり出して、大急ぎでメガネと手袋を装着した。

メガネをかけた途端、脳の奥に感じていた目眩がすうと消えていく。手袋を装着したまま本を持ってみるが、痺れたりすることはない。ことはなくなった。

「あはははは……めんごめんご」

「ついうっかりで酷い目に遭ってちゃ割に合わないんだよ」

美弥子に凄むが、彼女は苦笑いを浮かべるだけだった。他人

事とはいえ緊張感らしきものが伝わってこないのは、昨夜の宇宙船のことといい、恐らく命の危機に瀕することが、彼女にとってにはさほど珍しくないことなのだろう。それは即ち、彼女がいかな豪運ごううんの持ち主で、どうして今日まで生き抜いてこれたのかを物語っている。

「つたく……」

「まあそう怒らないですよ。お詫わびに、私の宝物を見せてあげるからさ」そういうと、彼女はトランクケースの中の、沼のような闇に手を突っ込んだ。かき混ぜるように何かを探すと、目当てのものを見つけたらしく、それを引っ張り上げた。

それはクリアケースに収められた七冊の本だった。どれもサ

イズは同じで、唯一違うのは装丁の色くらい。赤、だいたい橙、黄、  
緑、青、あい藍、紫と、偶然か必然か、虹の配色と同じ色をしてい  
た。タイトルは……何と発音して良いのか分からない。確かに  
認識は出来ているのに、いざ言語化しようとする<sup>こぼ</sup>と脳が拒ん  
だ。

「じゃじゃーん。これは地球時間に換算して約一年間の私の  
おもいで人生を分割して保存した、私の宝物なのであーる！」美弥子は  
目を輝かせながら、高らかにクリアケースを掲げた。

「それのどこがお宝なのさ」

「ふふん。実はこの七冊の本、私自身まだ読むことが出来てい  
ない極秘シークレットな七冊なのだ」

「極秘とシークレットが被<sup>かぶ</sup>つてるよ。……って待て、まだ読むことが出来てないって、どういうことだよ。美弥子が書いたんだろ、それ」

「うん。綴ったのは私だよ」美弥子は嘘はついていないようだった。「けどね、ここに綴られていることを、私自身どれだけ読んでも認識出来ないんだ。それだけじゃない、私の手にも負えなくて、迂<sup>う</sup>闊<sup>かつ</sup>に開けもしない。だから、宝物。宝物って言うのはなかなか手に入らないものでしょう」

「自分で綴ったのに認識出来ない？でも、自伝なんだろ。だったら読めなくても、美弥子自身が覚えているもんじゃ

」

「覚えていないよ」

美弥子はそう言うと、頭を振った。悲しそうに下げる視線は  
儂<sup>はかな</sup>くて、保護本能をくすぐられる。

「私が綴るのは、私が記憶出来なくなった思い出だけだもの」  
「……？」

その意味を理解するのに、そう時間はかからなかった。

## 4

メガネと手袋を受け取ってから数十分後、書斎で美弥子と雑  
談に興じていると、突<sup>とつじょ</sup>如<sup>うろん</sup>彼女は胡乱とした表情になり身体中を

震わせた。何事だろうかと身構えた次の瞬間には、鮮やかな花が粉を撒くように、文字が色を帯び形を伴って、彼女の身体中から飛散したのだ。

流れるように文字が舞う。

踊るように文字が碎け散る。

文字が《その時私が目にしたものは、灼熱色しやくねつに咲く八枚の溶

岩だった》一行の線となつて《常夏の国の空は爽やかさわで、柑橘かんきつ

類の実が》伸びる。それは《青い鳥の群れが空を飛ぶと》まる

で風に吹かれた《そこだけナイフで切り取られたように赤い軌き

跡せきが残っている》彼女の長い黒髪のように、ふわりと宙に靡

く。

ある一行の線は、彼女から一通り伸びるとプツリと切れて、切り落とした髪のようにはらりと舞いながら床に落ちた。またある一行は床に落ちると、ガラスのコップのように、一文字一文字バラバラに砕け散った。

このままにしてはいけない。半ば<sup>なか</sup>確信めいた予感に後押しされて、僕は手袋をしたまま散らばった文字に手を伸ばしかけて——そして、これは、裸眼で直視してはいけないモノの正体で、素手で触れてはいけないモノの正体だと直感した。小説の文体のように見える文字達は紛れも<sup>まぎ</sup>なく彼女の記憶であり、思い出だ。それを彼女は身体から放出させて失ってしまふからこそ、その対策として、本という形で残すという手段を採ってい

るのだ。

僕は美弥子に目をやるが、彼女はぐつつたりと床に横たわつて、とても意識が働いているとは言いがたい状態だった。彼女がいつ目覚めるか分からない以上、僕がこの場を何とかしなくてはいけない。

触れた部分が文字に侵食されるというのなら。

それは何も、人に限った話ではないだろう。

どうしてそんなことになるのかは、美弥子から聞かない限り分からない。もしかしたら彼女自身も知らない、どうにもならない性質のようなモノかも知れない。むしろそんな気がする。精子と卵子が結合する具体的な仕組みが何かと聞かれても、子<sup>し</sup>



細<sup>さい</sup>まで説明出来ないように。

だから——文字が世界を、洋館のあちこちに侵食して、例え  
ば書かれていることが現実になったとしたら大惨事だ……《そ  
の時私が目にしたものは、灼熱色に咲く八枚の溶岩だった》な  
んて、もし溶岩がこの場に現れたら、洋館が燃え落ちるよりも  
先に僕と美弥子の身体が蒸発してしまう。逃げようにも美弥子  
を抱えながら逃げて間に合うかも怪しい。

だが、こういった事態は彼女にとって初めての経験ではない  
はずだ。

ならば、この部屋に対策となるモノがあるはずだ。文字を封  
じる、具体的な手段が。

黒い線や砕け散った点は、視覚を持たない昆虫のように、一つ一つ感触を確かめるように様々な方向へと動いていく。その内の一行が、鈍い動きで開けっ放しになっているドアの方へと向かっていったので、慌ててドアを閉めた。危ない。書斎から逃がしたら收拾がつかなくなる。急いで窓も閉める。この時ばかりは、洋館が修復されていたことに感謝した。

「う、ん……」焦点の定まっていない美弥子の瞳が、かろうじて僕を捉えた。「あきひ、と？」

「ああ、朝田晶人だ、佐倉美弥子。早速だが、美弥子から散らばった文字きおく、どうやって回収すれば良い？」

「き、おく——」

「そうだ、記憶だ。美弥子が本に綴っている文字だ」きおく

「それな、ら——」弱々しい手取りで、彼女は床の上に乱雑に積み重ねたたくさんの本を指差す。「そこに、はくしの、ほんがあるから」

「白紙の本だね、分かった」

僕は彼女が示した一角へと走り——手当たり次第に本を探した。目算で五〇冊程はある本の中から、一冊で良い、白紙の本を見つければ良いのだ。早く見つかってくれ。そう祈りながらばらばらと弾丸のように探す。チクシヨウ、なかなか見つからない。二〇冊程確認したところで、床の上を動いていた黒い線が僕の脚に触れようとしていた。

「チツ」

僕は反射的に払いのける。すると文字は撥ね飛ばはされることなく、代わりに真っ白な手袋の上に黒色の文字を刻んだ。

《その植物の粘液が触れたものは、すべからく腐り落ちるといふ》。触れた黒い線に書かれていた文字だ。文字は手袋の上で化石のように固まっていたが、それもいつまで保つのか不安だ。手袋を破って逃げ出すかも知れない。

それにしても危険な文章だ。

三〇冊。まだだ。三五冊。違う。四〇冊。これも違う。四一冊目に着手しようとした瞬間、背後から熱気を感じた。

《常夏の国の空は爽やかで、柑橘類の実が》 《美味しそうに

実っている。けれどそれも二日おきに切り替わり、数分後には灼熱の雨が降り注ぐらしい》

かろうじて読み取れる文字は宙に融け込み始めていて、そこには猛々たけだけしい紅蓮ぐれんの空が渦巻いていた。何故美弥子はよりにもよって危険な場所へばかり旅をしているのか、文句の一つも言いたくなる。穿うがたれた穴に亀裂が生じるように、別の文字列が、一行達が、徐々に広がっていく赤色の空へと吸い寄せられていく。前後の文章だ、それらが肉付けされカタチを明確にしている。

四四冊。四五冊。四六冊。こうしている今も、背後しょうかんに召喚しょうかんされようとしている異世界の情景は、具体性を増している。四七

冊。四八冊。四九冊――

五〇冊目にして、ようやく白紙の本を見つけた。

頁に触れた瞬間、手袋に刻まれていた文字は、吸い込まれるように本の中へと溶けていく。ならば――

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」  
本を右手に、空いた左手を、紅蓮の宙へと突きつける。

天に逆巻く赤色は、虚空を巻きながら手袋の上へと全て吸い込まれていった。吸い終えたそれらを、すぐさま本に落とす。

「はっ、はっ。危ないところだった」

僕は尻餅しりもちをつきながら首筋に伝わる汗を拭ぬぐう。白紙の本を開きっぱなしにしていると、ブラツクホールに吸い込まれるよう

に、単体の文字が頁へと引き寄せられていく。《空》 《熱》 《あ》 《は》 《、》 《、》。どうやら一文字だけでは抗あらがう力が弱いらしい。となると、後は比較の見つけやすい文章を探せば事足りる訳だ。まだ油断は出来ないが、それでも一文字ずつ拾うことを思えば気が楽だ。

文章は比較の見つけやすく、程なくして文字きおくの回収は終わり、意識をはっきり取り戻した美弥子に話しかけた。

「どういふことか説明して貰おうか」今や文字をきっちり収めた本を僕は突きつける。死にかけてのだ、怒りが無いはずがない。

美弥子は何が起きていたのかを瞬時に察したらしく、流石さすがに

今回は軽い謝罪で済ませようとはしなかった。「……………ごめん」長い沈黙の後の短い台詞が、それを表していた。

どうやら美弥子は地球で言うところの記憶障害を抱えているらしい。地球人と異なるのは、その記憶障害は美弥子達種族が抱える遺伝的疾患しっかんであり、特効薬が開発されていないため根本的な治療は出来ないという点と、その記憶の欠落の仕方である。

彼女達は記憶を、文字通り脳内から散失させる。

神経細胞が死滅するのではなく、文字通り、身体中から放出してしまうのだ。



いかなる遺伝子構造の産物か。その文字の群れはそのままにしておくと、現実を侵食し、記憶を再現するという。一定時間再現されると消えるらしいが、それでも内容次第では恐ろしく危険であることに変わりはない。実際、彼女達の一族にもそれによって命を落とした者はいるらしい。

彼女達一族は長い年月をかけて、ようやく対抗する手段を得た。それが白紙の書だった。特殊加工した頁は一族がばらまく記憶に反応して、吸い込み閉じ込める細工が施ほどこされているらしい。そうすることによって、記憶は現実にはならず、あくまで本の上に形として留まるのだ、と。

「なるほどね。じゃあ本に閉じ込めた記憶は、美弥子の頭の中

からは完全に消えているんだ」

「ええ」

「もしかして、さっき言ってた七冊の本を読めないっていうのは、保存する時に特殊な加工でもされたから？」

「そうよ。私じゃなくて、別の誰かがやってくれたみたいだけどね。その人が誰なのか、多分他の記憶と一緒に封印されちゃってるから分からないんだけど……」

合点がいった。自分で綴った言葉のことを、どうして読めないと言ったのか。

「ああ、そうか——会いたい人っていうのは、その人のことなんだ」

「うん」美弥子ははっきりと言った。「その人に会って、私は記憶を取り戻したいの。あの一年の間に何があったのか、知りたいから」

自分の知らない間に自分のモノを失っていたら、それは取り戻したいと願うに決まってる。

そして僕は――

「恨みたくもなるよな、そりゃ」

――暗い目で、自分の右腕を見下ろした。

「？ 何で？」美弥子は首を傾げた。<sup>かし</sup>「別に私、恨んだりなんてしてないよ？」

「そうなのか？」

「うん。そりゃ何でって思ったことはあるけど、きつと意味のあることだと思っから。私の人生にとっても、記憶を加工した人にとってもね」

「加工した奴が、気まぐれでやったことかも知れないぜ」  
「仮にそうだったとしても、それで私の生き方が変わる訳じゃないわ。私は私が大切だと感じた感情を貫いて生きていたいと思うから、それを受け入れた上で生きていくことが、人生で一番大切だと思うわよ」

美弥子は何でもないことのように淡々と語るが、それが自然体から生まれた言葉なだけに、僕の心にすんなりと融とけ込んでいく。

「——そう、か」

きれいな色が染み込んだから、

反動で、きたない色が浮かび上がる。

——ああ、駄目だ。

——おり返す。おり返すな。おり返すな。

——もう終わったことなのだから、おり返すな。

「けどな、それで死にかけてちゃ割に合わないんだよ」

「う……そう言われると返す言葉がないわ……」

「だいたい、そんな重要なことがあるなら最初からそう言えよ  
な」

誤魔化すように僕は早口でまくし立てる。怒り任せに美弥子

をなじるのは、死にそうになっただけではない。

ずるい、と思っただから。

そんな風に思い続けられるだなんて、ずるい。

そんな台詞が思わず飛び出しそうになる。

「あっ」

——飛び出す。

美弥子が地球にやってきた夜、宇宙船のドアを開けると同時に何かが僕の頬をかすめていった。

「美弥子……驚いたり、何か衝撃を受けたりすると、文字きおくが飛び出すことはあるか？」

「え……あってもおかしくないけど」

美弥子はあっさりと認めた。

「くそ！ もっと早く言えよ、このバカ！」

僕は手袋とメガネ、それから白紙の書を無造作むぞうさに引っ掴むと、裏山の中へ走っていく。

だいぶ時間が経ってしまった今、とつくに記憶が現実になっっているかも知れない。それが危険なものだったとしたら、今まさにこの町の、ひいては地球の危機に直結するからこそ、放っておけなかった。

裏山は木が生い茂り、森林の迷路のようになっていたが、目印に時々看板が立っている。道を外してしまわない限りそうそう迷子になつたりはしないが、美弥子の文字きおくがそこまで気にかけて行動する理性を備えているとは限らないので、時々けものみち獣道に逸それて探した。落ちた小枝を踏みしめると、パキリと折れた。

なかなか見つからないまま、時間だけが過ぎていく。息が切れ切れになるが、弱音を吐いてもいられない。僕が手を休めている間に事が起こつたらと考えると、立ち止まつていられなかった。

太陽が沈み始め、ほんのりと薄暗くなってきた頃。晴らしよりのない、どうにもならない気持ちを送り替えるように探し歩



いていると、ようやくソレを見つけた。

何か起きたことを知らせる変異。

視界に映る風景は……みずみず瑞々しく茂る緑色もしつとりとした土

色も、脱色したように抜け落ち、灰色になっている。視界の中で部分的にモノクロに変色している風景というのは、眺めて鑑賞するにしてはあまりにも不自然だった。

それが意味することはただ一つ。

美弥子の文字きおくが、現界したということだ。

ヘンゼルとグレーテルのように、文字の通っただらう軌跡が灰色になって残っているので、追跡は容易だった。進むにつれて、いつの間にか手袋に文字が刻まれていく。《意識が》《ま

いそ》《凍り付》《うな綺》《麗な夜》《いてし》。粉塵ふんじんのよ  
うに細かく散った文字を回収していたのだ。文字きおくに近づいてい  
るのだらう、刻まれる文字は徐々に増えていく。

手袋の三分の一くらいが文字に侵された頃、ソレに辿たどり着い  
た。

ソレの周囲だけが、奇妙な程に色がなくなっていた。緑も、  
黄土色も、茶色も、花の赤色も、夕陽の橙色も、何もかもが吸  
い取られてモノクロームの幻想絵のように彩られていた。

《吸色鬼。そう呼ばれる幽鬼は、膨ふくらんだ檻ぼろ頭巾ずきんの闇の中に  
沈んでいて》《檻そうぼう頭巾すら灰色で 《魔的に光る双眸が、味見  
をするように、私の色を観察している》吸色鬼は僕に気付い

た《この幽鬼の危険性に気付いている者は、私を含めて少数だ》。完全に現界を果たしている文字きおくは独自の意志を持つように、僕へ向けて嗜虐心しぎやくを剥き出しにした。

人の形をした闇が、袖口を持ち上げながら、人と同じ速さで歩いてくる。動く度に触れられた風景は色が吸い取られ、その分吸色鬼は活き活きとしていた。

その輪郭のない唇が、吊り上がったように見えた。

不気味と感じるのはメガネだけでは防ぎきれない精神そのものに訴えかけてくる醜怪さ故。それは吸色鬼との距離が縮まるにつれて激しくなる。吐き気が、頭痛が、いやおう否応なしに増す。忘れかけていた疲労がまたぶり返してくる。

——ぶり返すな。

踏み出して《生き物が色を認識出来るのは、ひとえに》立ち向かった《境界線があるからだ》。相手がどれだけ危険な相手でも、《境界線が、二つが一つにならぬよう分け隔てるから、色を認識出来るのだ。》手袋で触れることさえ出来れば——或いは、白紙の書を突きつければ——、吸い込み、《色を吸うとは、その境界線を取り除くことを言う》閉じ込めてしまえる。いかな恐怖の対象であろうとも、《即ち——》文字きおくである以上その法則ルールには逆らえない。

《色を吸い尽くされた時、吸われたモノは輪郭を無くし、消滅する》

吸色鬼の足下に生えていた雑草が一層色味を薄くすると、露のように静かに消えていった。モノクロームの絵は、消しゴムで消されたように、少しずつだが確実に、輪郭を消失させていく。

「あああああああああっ！」

吐き気に屈しそうになる心を、裂帛れっぱくの声で叱咤しったする。左手を槍やりで突くように吸色鬼へと伸ばした。ただ触れば、全て終わる。単純なことだ。

なのに。

次の瞬間、吸色鬼はいつも簡単に、左手を避けていった。

「

痛恨のミスに呼吸が止まる。僕の右側から、嘲る鬼の哄笑が聞こえた気がした。衝突しそうな程接近した吸色鬼の双眸が僕を捉えた時、脳の奥でガラスが割れる音が聞こえた。

右腕の、手袋で覆いきれなかつた二の腕を掴まれる。人間のように柔らかく熱さも冷たさもない、ただ何かが触れていると、いうだけの感覚は、吸色鬼の身体の構造だけが原因ではなく、僕の感覚が毒に侵されて麻痺しつつあることの証明だった。徐々に感覚が薄らぎ始め、それが右腕を中心に何か吸い取られているのだと理解するのに、そう時間はかからなかった。

思考が鈍り、自分自身何を考えているのか分からなくなる。ただ目の前に、映像が、写真をばらまくように断片的に映る。

それは妄想であり、過去の記憶の二頁であり、そして、何より忘れた瞬間を克明に映しだしていた。

もう、思い出したくもないのに。

右手の色彩はほとんどなくなりかけている。

けれど、それも、もうどうでも良かった。

どうせもう、人並み程度にも動かない右腕だ。

「諦めるな——!!」

沈みかけていた僕の意識とは対照的な、激しい感情に満ちた咆吼ほうこうが聞こえた。僕がよく知っている宇宙人だった。霞かすみがかつ

た視界の中に見えた美弥子は、いつもとは違う、鬼気迫る表情で吸色鬼に拳銃を向けていた。拳銃は、その銃身がガラスのようになり透明だった。

彼女が引き金を引くと、弾丸は発射されず、代わりに目に見えない何かが吸色鬼を穿ち——その体軀たいくを啜すすり上げ、拳銃の中に吸い取っていく。

「まだ終わってない。だから——」

そう諭さとすように言う美弥子の表情は、切なそうに、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

だから、目を離すなんて、とても出来そうになくて——

「諦めるなよ。まだ早いよ」



吸色鬼を全て吸い終えたその拳銃は、黒い液体で満たされて  
いた。液状に見えたそれは彼女の文字きおくだった。

吸い取られていた色が戻ってくる。その中には、もちろん僕  
の右腕も含まれている。

動かしてみる。

けれど、やはり機能は以前のままだ。

「……遅いぞ、馬鹿」ふらついて仰向けに倒れそうになる身体  
を、美弥子の胸に支えられ、そのまま二人して座り込んでしま  
う。「別に諦めてなんてない。ちよつと考えごとをしていただ  
けだ」

「そっか。ならいいんだ。それと……ごめん。また危ない目に

遭わせちゃったね」

ひざまくら  
膝枕をして貰いながら、彼女を見上げる。

「全くだ、本当にお前って奴は……」

はた迷惑な奴だ、と言いかけて、僕は口をつぐんだ。僕を見る彼女の目が、あまりにも優しく、本当に僕のことを心配してくれたのだと、分かってるから。

「……別に良い。慣れてはないけどな」僕の方こそ馬鹿みたいだ。美弥子は地球に来たばかりで右も左も分からないでいるというのに、そこまで思い至らず、僕は自分の都合ばかり考えている。「それでも、最後には何とかなるんだから。……こつちこそ、ごめん」

おっちよこちよいで抜けているけど、美弥子は何だかんだ言いなながら、最後には上手く帳尻を合わせてしまおう奴なんだ。でなければ、様々な惑星を旅しながら、今日まで生き抜いていなだらう。

「ありがとう。助かった」

「どういたしまして」

にこりと、美弥子は微笑んだ。

それだけで、全部吹っ飛んでしまった。

一日で二回も死にかけておきながら、そう思えてしまおう自分  
は、お人好しというよりは単に惚れっぽいだけなのかも知れな  
い。彼女の笑顔に不覚にもときめいてしまった。

「……なあ美弥子。探している人、ある程度目星はついているのか？」

「全然」苦笑しながら美弥子は首を振った。「ここには、探している人のだろう気配の残り香を辿ってきただけだからね、その人の性別も、何歳なのかも分からないわ」

「そうか。なら——手伝うよ」

「え——」

「だから、探すの手伝うよって」

「……良いの？」彼女はきよとんとする。

「良いよ。今日助けて貰ったお礼だ」美弥子を直視するのが恥ずかしくなって、僕は目を閉じた。

そう。これはあくまでお礼だ。命を助けて貰ったのなら、その分恩返しをする必要がある。人として当然のことなのだ。

……そうでなくても、こんなおっちょこちょいな宇宙人を放っておく訳にもいかない。彼女にとっては普通のことであつても、僕や地球にとっては一大事、ということもある。

それだけは避けないと。

避けないと、彼女の人探しにまで影響が及んでしまうかも知れないから。

「うん……ありがと。嬉しいわ」

ふふ、と朗らかに笑う彼女の声が聞こえた。

それは、とても心地良く耳に染み入った。

「これからもよろしくね、晶人」

(宇宙人と綴じたメモリア 第一話／おわり)





# 宇宙人と綴じたメモリア

第17回BOX-AiR新人賞受賞作、  
絶好調連載第2回!

少し不思議  
SFな真夏の夜の  
ボーイ・ミーツ・ガール!

第2話

Glass Spiders

著=折口 哲

Illustration=三月 薫

## 1

その日のことは覚えている。

右腕が壊れてしまった日のことを、覚えている。

地球にやって来た佐倉美弥子さくらみよこと出会った約一年前、高校一年生の夏休み。その日は雲一つない炎天下で、とにかく暑かったのを覚えている。

僕——朝田晶人あさだあきひとは当時クラスメイトだった嶋井和春しまいかずはると小笠原

貴亜きあ、それから小学生の頃からの友人である灰野楓はいのかえでと都心へと

遊びに出かけている途中だった。僕達の住む田舎町は、とにかく娯楽というものに縁のない町だった。子供の頃は裏山で遊べば良かったけれど、年齢を重ねるごとに嗜好しこうは少しずつ変わっていく。僕は身体を動かすよりも絵を描く方が好きになっただし、嶋井はクラス内外問わず色々な人と話したり流行の話題を仕入れてきては披露ひろうするのを好んだ。小笠原は何を考えているのかよく分からないところがあっただけどイラストを描いている時は活いき活いきとしていて、髪型もまだツインテールではなかった。そんな中、灰野はこれといった趣味こそなかったけど

他の二人よりも一緒にいた時間は多かった。ここにいるだけで楽しいよ、とそう言っているように見えた。

気付けば四人で行動することが、自然なことになっていて。

休みの日に誰かの家に集まっては学校にいる時と変わらない時間の過ごし方をしていた。僕と嶋井が馬鹿なことを話して、それを聞いている灰野が相槌あいづちを打ちながら時々笑って、小笠原は会話そっちのけでイラストを描いていて。基本インドアな人間の集まりだったから、たまに都心へ遊びに出かけるのは違った楽しさがあって、その日を僕も楽しみにしていた。

田舎の電車は本数が少ないからと乗り遅れないように待ち合わせたのに、小笠原が寝坊をして三十分以上待たされることに

なつてしまつても、嶋井がそれにぶつたれて、小笠原がムキになつて反論して、灰野がいつもみたいに諫める光景も、今振り返れば、楽しい光景だつたんだと思う。

その記憶を光と捉えるか闇と捉えるかは、突き詰めれば当人の心持ち一つなのだから。

嫌な気分で見つめれば——名画だつて、ストレッツサーにしかならない。

やつて来た電車に乗り、車窓から眺める風景は一面緑色。そこに、ふと太陽みたいに熱い黄色が目に入る。並んで咲き盛る向日葵ひまわりだつた。気になつて眺めていたら、隣に座る灰野に声をかけられた。「何見てるの?」「向日葵。向日葵だと、画

家ならゴッホが有名だよ。僕はムンクの方が好きだけど」  
「うーん、ちよつと絵のことは詳しくないかな。はは、ごめんね……」都心に着くまでの間、四人で、本当に普段と変わらぬ会話をしていたように思う。

到着するなり、僕と小笠原は画材を買いに出かけた。水彩画や油絵などの実写タッチの絵と、コミカルでデフォルメされたイラスト。僕と小笠原の描くモノは似ているようで違ったから、画材屋で買う物もまた異なつた。僕は筆や絵の具を、小笠原は大量の鉛筆やカラーペンを選んでいく。嶋井は離れたところで退屈そうにしていて、灰野は僕の後ろを歩きながら、僕の手取る物に興味を示していた。

「朝田君って、本当に絵を描くのが好きだよね」

「うん」返事をした僕は気付けば笑顔になっていた。そんな僕に灰野はてつきりいつもみたいな曖昧あいまいな表情を浮かべているのかと思っただけ、この時は違った。少しだけ、呆れるような、困ったような、そんな表情を浮かべていた。

「絵も良いけど、もつと他のことに興味はないのかなあ？」

「他のこと？」

「他のこと！」

「うーん……」

考えてみるが、しかし、やはりと三言うべきか、思いつかなかった。ない、と断言してしまうのは簡単だったけど、そう答

えてしまうことに何故なぜだか嫌な予感がした。

「旅行とか、かな」少し目を泳がせながら、僕は答える。好きという程ひんばん頻繁に出かける訳じゃないけど、嘘うそという訳でもない。スケッチの練習をしに行くことは、あつたから。

「旅行？」

ちゃんと答えたおかげか、灰野の表情に少しだけ色が戻る。

「うん。行ったことない場所に行ったりとか、見たことのないものを見るのは好きだからね」

「……うん。分かる。私も、好きかな、そういうの」

灰野の言葉は少し意外に感じた。子供の頃からの付き合い合いだっただけど、アクティブ積極的に外出する印象はあまりなかっただけに、



好きだということ。……付き合いが長くても、まだまだ知らないこと。……はあるもんなんだな。

「あ、だっ、だったら、だからさ」

「？」

「海とかが行ってみたいって、思わない？」

「海……？」

「うん、海。私、まだ一回も見なかったし」

「僕もないや」

僕達の住む町は山に囲まれているため、旅行にでも出かけるに限り触れる機会はない。せいぜい川遊びくらいが限度だった。

「だっ、だからさっ」灰野は少し俯うつむきながら、言った。「私、海に行ってみたいな」

「海、か」

「朝田君はどうかかな？」

悪くないと思う。確かに、面白そうだ。

灰野は僕からの言葉を期待しているのか、こちらを見上げてくる。まあ、彼女が本当に言いたいことがある時程、上手く口に出せないのは昔からだ。そのせいで小さい頃、苦手な岩登りをやるはめになって、登っている途中で降りられなくなって泣き出してしまったこともある。

「……そうだね、一回行ってみたいかな。今度一緒に行こう

か」

「——うん！」

灰野は凄く嬉しそうな笑顔を浮かべた。

僕と小笠原の買い物が終わると、次は灰野が服を買いに行く。灰野は店に入るなり小笠原と一緒ににはしゃぐようにあれこれ服を見始めた。僕と嶋井は時々意見を求められたが、二人とも女子のファッションについては明るくなかった。

昼時になって、そろそろお昼ご飯を食べに行こうという話になった。嶋井はしきりに行きたい店があると言っていたので、

そこへ行くことになった……のは良いのだが、どうやら普通の料理を出す店ではないらしく、風変わりな料理を出す店らしい。なんでも、パスタに果物を練<sup>ね</sup>り込んでいたり、うどんを汁粉にぶち込んでいたり、濃すぎて砂糖が溶けきらないコーヒを出したりするそうだ。灰野が若干引いていたけど、ちやんとしたメニューもあるらしく、その辺は安心して良さそうなのが救いだった。

交差点を渡りながら、何を注文しようか、なんてことを話す。信号が途中で点滅し赤になってしまったので、慌てて渡りきった。

それから、もうすぐ着くという店を目指して歩いて行く。

あと少し歩いて行くだけだったのに。

「」

よくある話と言えばよくある話。

何ら難しい話ではない。

ただ、何かの手違いみたいに車道へと滑っていくベビーカーに気付いてしまっただけ。歩行者用の信号は、ずっと赤のまま。

考えるよりも先に身体が動いていた。だからベビーカーを歩道側に突き飛ばすことは出来たけれど、その反動で僕は車道でバランスを崩してしまった。昼間なのに、迫ってくるライトが凄く明るかったのを鮮明に覚えている。眩まぶしかったのか、反射

的だったのか、目を閉じた僕が次に<sup>まぶた</sup>瞼を開いた時、そこにあつたのは病院の天井だった。

ベビーカーを歩道へ突き飛ばした両腕には、神様からのお礼とばかりに重厚なギプスが二つも装着させられていた。それだけでもう、いや信じたくない、まだこれだけじゃ分からない。骨が折れているだけかも知れないから。けれど現実には悪趣味で、医者からは元通りになるか分からない、なんて冷徹な言葉を頂いた。

助けたお礼に別のモノを奪っていくなんて、<sup>プライマ</sup>差引は合うのかも知れないけれど、それはいくら何でもあんまりじゃないだろうか。

泣き言を言いたくて仕方がなかったけど、それも意識を取り戻した僕を泣いて心配してくれた灰野達を前にしては、言うに言えなかった。これ以上悲しませては駄目だと思った、から。辛くても、歯を食いしばる理由があったから、地獄みたいなリハビリにも耐えられたのだと思う。比較的軽い怪我で済んだ左腕が、まず人並み程度に動くようになった。食事も着替えも一人で満足に出来ない地獄みたいな生活から一歩抜け出したが、利き腕である右腕だけは、一向に治らなかった。結果の変わらないうりハビりに費やす時間が、僕を絵から遠ざけた。

描く時間よりも、まだら斑な空想に沈む時間が増えていった。

考える時間が増えるだけなら良かった。けれど、満足にペン

を、筆を、パレットを持ってなくなった腕を見る度に現れるのは、あの時助けなければ良かったという怨嗟えんさだった。やり直したい。なかったことにしたい。あの日、都心に出かけなければ良かった。やめておけば良かった。一日ずれるだけで結末は変わっただのに。

負の感情が、自分の行いを腐らせていく。

あの時唯一得たものすら否定してしまっただら、もう、僕には何も残らないと言うのに。

そんなことを、少し時間に空白が出来る度に考えている。



「(まったく……どうして)」

僕は会議室で席に着きながら、ほんの少しの気まぐれに、右腕を机の上に伸ばしてみた。こうして動かすことは出来るけれど、細かい作業となるともう駄目だった。食事や板書は左手で何とかカバーしている状態で、かろうじて日常生活もこなしていたけれど、長い時間は動かせない。だから会議中の発言を追いながらのメモが出来ないから、会議中の発言等は聞き取るのに集中して記憶する。後で誰かに議事録を見せてもらうのでも良いが、それより先に両隣の友人達へ、今日の内容を教えることとなるのは見えている。左隣に座る嶋井はもはや隠すことなく居眠りをしていて、前後どころか円を描くようにかくんかく

ん、否、ぐわんぐわんしていたし、右隣に座る小笠原は資料を裏返し、白紙の面いっばいに盛大なイラストを描き、「デリンジャー」と拳を握りながら小さく喝采かつさいしていた。デリンジャーって、キヤッツ・アイオープニングテーマのOP曲かよ。

そんな僕の両隣の友人達に、林間合宿委員会委員長の灰野はそれとなく注意をしていたが、いつも通り効果は少ない。他の委員の皆はそんな光景を微笑ほほえましく見守っていたが、間に挟まれている僕はそんな気分になれようはずもない。「お前、両隣何とかしろよ」というまじめな委員からの視線も痛かった。

結局二人は自分の世界に没頭ぼっとうしたまままで、最後の委員会は終了した。「それでは終了します。お疲れ様でしたー。貴亜と嶋

井君は残ってね、話があるから」と灰野が告げると、委員の皆は順次帰って行く。もちろん嶋井と小笠原は残留組であり、毎度のように僕も付き合っている。残る理由はないのだけれど、こうするのが日常だった。

こっぴどく説教されているにもかかわらず特に意に介さず受け流している二人に諦めたのか、灰野は溜息をついた。それじゃそろそろ帰ろうかな、と僕が椅子代わりにしていた机から降りると、嶋井が声をかけてきた。

「朝田ちゃん、帰りにアイス食ってこうぜ」

「あ、貴亜も行くー」小笠原が手を挙げる。「貴亜、メロン味好きー」

「この前はグレープって言ってなかったか？」僕は問い返す。  
「グレープもメロンも好きだよー。果物味のはたいてい好きー」

「それ、アイスのほとんどじゃん」嶋井が笑う。「果物以外の味なんてあるか？」

「キヤラメルとかチョコとか色々あるでしょ。カップアイスとかなら」食べながら帰るには不向きだけど、と灰野は額を押さえながら言った。「まったく、どうしても話を聞いてくれないのかなあ……」

「俺はちゃんと聞いてたよ」真顔で大嘘を吐く嶋井。

「貴亜も聞いてたよー。イラストしてる時に楓の声聞いてる

と、ラジオ聞いてるみたいで気持ち良いんだよー」

「……………」灰野は擦すれた顔で沈黙した。

「ま、こいつらはこんなだけどさ」僕は間に入るように言う。

「それでも僕とか他の皆はちゃんと聞いてるし、灰野に感謝してるよ。普通こういうとりまとめ役って皆嫌がつてやらないもんだけど、灰野は進んで引き受けた訳だろ。ちゃんと気付く人は気付いてるよ」

「ありがとう朝田君……………」灰野は微笑する。

「ま、二人とも。当日はちゃんとやれよ」僕は二人をたしなめ窘める。

「はい」ぼけーつとした表情で小笠原は答える。

「分かってるって。それより、アイス食いに行こうぜ。朝田

「ちゃんも来るだろ」

「……あー、それなんだけど」

歯切れの悪い僕の返答に嶋井は、

「いいじゃんか、今日くらい来いよ。委員会最後の日だぜ」

「嶋井君が言わないで」素で怒りながら灰野が言う。

「この前も一人で帰っちまったじゃん。最近何してるの？」

「あー……それは、だ……」

嶋井だけでなく、小笠原と灰野も僕を凝視しながら無言で問い詰めてきた。

無論やましいことをしている訳ではない。僕が最近一緒に帰らないのは、美弥子のところへ通っているからだ。

宇宙人である、佐倉美弥子の元へ。

とある理由で地球にやって来た彼女は次元や惑星を越えて旅をする宇宙人であり、地球人にとってにはちよつと、否、かなり危険な特異体質の持ち主でもあった。下手をすれば町ごと崩壊させかねないその性質については、細心の注意を払わなければならぬのだが、困ったことに彼女は「ごめん、ついうっかりやっちゃった」といった感じでトラブルを発生させたり、命の危機に直面したりしている。しかも無自覚に。彼女の元に通い始めてしばらく経つが、僕の死にかけて回数ふたけたは既に二桁に突入していた。

けれど。

それでも僕が美弥子の元に通うのは、彼女が地球にやって来た理由……探している正体不明の宇宙人を見つけること……が、このまま彼女を一人にしておくともまず間違いなく上手くいかないだろうと心配になるからだ。彼女の性格が悪かったなら容赦なく見捨てられるというのに、そうじゃないから始末に負えない。仕方がないから、つい、手を差し伸べたくなくなってしまった——

「（けど、本当のことを言う訳にもいかないしな……）」  
宇宙人がやって来たなんて知られたら、大事になるか全く取り合ってもらえないかのどちらかだろう。騒ぎになってしまうと美弥子の目的——人探し、もとい宇宙人捜し——の邪魔にし



かならないし、そもそも宇宙人が間近に存在しているなんて誰も思いもしないだろう。

「えっと、そんなに言えない理由なのかな」灰野がおずおずと訊<sup>たず</sup>ねてくる。

「いや、そういう訳じゃないんだけど」

「ならさ」一転、笑顔を浮かべて迫ってくる灰野。「久々に一緒に行こうよ。その用事って、今日じゃないと駄目って訳じゃないんでしょ」

「そうだけど」ほぼ毎日ペースで美弥子の元へ通ってはいるものの、一日くらい行かなかったからといって不都合がある訳でもない。実際、美弥子の手伝いと言ってはいるものの、雑談に

興じている時間の方がほとんどだった。「晶人の話、もつと聞きたい」と彼女にお願いされたから、という言い訳りゆうもあつたけど、僕は僕で彼女の話聞くのが楽しみでもあつた。

「じゃあ行こうよ。私、たまには朝田君と一緒にアイス食べに行きたいよ……。それとも、嫌だつたかな……。？」少し困つたような表情を浮かべる灰野には、断られることへの不安みたくないものを無理矢理隠しているような雰囲気があつた。

そういう顔つて、ずるい。でも、勝てないよな。

「ああ分かった、行くつて。だからそんな顔するなよ、な」

僕は慌てて答える。答えに窮きゆうしただけで泣きそうにも見えなかったので、そんなことはないよと態度を添えて。それだけのこと

だったのに、灰野は凄く嬉しそうな顔をした。

「うん、じゃあ行こう、朝田君」

灰野に左手を掴つかまれて、僕は歩き出す。彼女が気を遣つかって、僕の左腕の方を取ったのは分かってる。そんな優しい心遣いが、余計心をかき乱す。

「うーん、楓も先が大変そうだねー」

「朝田ちゃんは女心分かんないからねー」

僕達を置き去りにして会議室から出ていた二人が、先を行きながらそんなことを言っていた。「？」疑問符を浮かべてみるが、やはりよく分からなかった。

## 2

あめぐり。

表現するなら、それが一番相応ふさわしかった。僕達四人はいつもアイスを食べ、帰る駄菓子屋だがしやの前で、言葉をなくしていた。

息抜きや軽い飲食のために置かれた木製のベンチには、食べ終えて空になったアイスのカップが山積みになっていた。バニラ、チョコレート、ストロベリー、キヤラメル。そんなに種類のないカップアイスをいくつも味わったのだろう。シャツにクロップ丈のデニムというラフな格好をした美弥子は靴ヒールを脱ぎ、裸足でベンチに座りながら、ラムレーズン味のアイスを美

味しそくに頬張ほおばっていた。

「……………」

「うん、美味しいわねコレ。おばあちゃん、もう一個貰うねー」

「……………」

「ラムレーズン、ラム酒に漬けたレーズンね。前いた星だと、どちらも超が付く程の貴重品だったんだけど、地球だと大量生産されるくらいには普遍的なのね」

「……………」

「あ、ところで晶人も食べる？　美味しいよ、コレ」

「気付いてたのかよ」

「当たり前じゃない。それよりほら。はい、あーん」

『口を開けなければ唇に突きつけるよ。地味に冷たいよ』と言わんばかりに差し出されたアイスの欠片かけらを僕は頬張る。皆の前でそういうことをされるといふのは、多感な男子高校生にとっては恥ずかしいものがあつた。あ、でも美味しい。

「それより美弥子、こんなところで何してるのさ？」

「美弥子？」めざとく灰野が僕の言葉を捕まえる。呼び捨てにしていることが気に食わないのか、どこか視線が鋭い。

「晶人の友達？」美弥子のポニーテールが揺れる。

「そうですけど、お姉さんは？」灰野達から一步前へ出て嶋井が言った。「朝田ちゃんの親戚しんせきか何かで？」

「親戚？ 違うよ、私は――」

答えようとする美弥子の唇を左手で塞ぐ<sup>ふさ</sup>。宇宙人であることを隠すつもりが毛頭ない彼女なら、きつと素直に答えてしまおうだろう。要らぬ混乱だけは避けたかった。

「えーっと、彼女はね、その、あれだ。僕の知り合いだ」

「そうだとは思うけど」灰野は明らかに疑いの眼差し<sup>まなざ</sup>を向けていた。「この町の人じゃないでしょ？ それで親戚でもないって、どういう関係？」

「ぶはっ。私は佐倉美弥子。晶人にはここに来た時に洋館を教えて貰ってお世話になったんだよ」塞ぐ僕の手を引き剥がす<sup>は</sup>と、美弥子はあつけらかんと答えた。

「洋館？　洋館って、あの裏山の？」　小笠原が首を傾げる。

「え、でもあそこって廃墟だったよねー……？」

「それならもう改修したから大丈夫だよ」　美弥子は朗らかに答える。

「改修？　そんな話、聞いたことないけどな……」　嶋井も、首を傾げた。

訝いぶかしがる皆を前にしながらも、美弥子は廃墟を一日とかけずに改修した——というかあれは大規模な修理だった——ということが、地球では絶対に不可能なことだと分かっていたいなかった。それに、修理するには工事業者が必要であることも。業者が来れば狭いこの町では絶対に噂になるからこそ、耳にしたこ



とがないという嶋井の発言はもつともなのだ。

けれど美弥子はやっぱりそれが理解出来ずに、なお尚も楽しそうに所有する自伝の話や、旅の思い出を語ったりするから、会話が徐々にだがずれていく。次第に、嶋井達が抱く美弥子への印象がくすみ始めているのが見て取れた。

彼女が純粹な想いで言葉を綴つづっているのを知っているだけに、誤解されているその状況が、僕は見過ごせなくて――。

「あの洋館な、結構前から修理中だったんだよ、別荘にするために。極秘でな」僕は会話に割り込む。「で、美弥子は修理を依頼したさる財閥のお嬢様で、修理が完全に済む前の洋館で、夏休みの間だけ過ごしたいって言ったんだよ」

強引なのは自分でも分かっていたが、本当のことを言うよりはマシだ。そう判断した僕の考えはあながち間違いではなかったらしく、嶋井の疑問が美弥子から僕に移った。

「けど、洋館の改修工事なんてやったら、とつくに噂になっておかしくないはずだろ」と嶋井は首を傾げる。

「だから極秘でやってたんだって。噂とかにならないように。美弥子の家は静かな別荘として洋館を使いたかったんだよ。な、美弥子」

僕は美弥子に、合わせる、とアイコンタクトを送る。

彼女は少しきよとんとした後、

「うん、そうだよ」

と、いつもの笑顔で大きく頷うなずいてくれた。理解して貰えたかはさておき、通じはしたようだ。

「そうだ美弥子、ちよつと相談したいことがあったんだ。今から時間いい？」わざとらしく僕は手を叩く。三人が別の疑問を口にする前にこの場を去ってしまいたかった。

「え？ 私もうちよつとアイス食べてたい」

「いいよね！ ていうかちよつと来てくれるかな!？」

僕は美弥子の手を強引に引っ張って駄菓子屋を後にする。美弥子が食べた分のアイス代と、「ごめん皆、また今度埋め合わせするから！ あと内密にお願い！」という謝罪の言葉と、嶋井と小笠原の呆あっけ気けに取られた表情、それから、灰野の鋭くて、

けれどどこか辛そうな表情を残して。

## 3

美弥子を連れて、駄菓子屋から大分離れた図書館の近くまでやって来た。入り口付近にいと目立つので、駐輪場を通り抜けて、建物の裏側に移動する。

「ちよ、痛いよ晶人」

「ごめん」

「いいけども。女の子はか弱くて繊細せんさいなんだから、もうちよつと優しく扱ってよね」

「うん……って美弥子、そもそも何でこんなところにいるのさ」

「人探しのためだよ……？　洋館の改修も完全に済んだし、そろそろ町に繰り出そうかなって。そのための道具も持ってきたし」

そう言うと美弥子は、ポケットの中に手を入れて、何やら探し物を始めた。彼女のはいているデニムのポケットにしては明らかに底が深く、ほとんど肘<sup>ひじ</sup>あたりまで入っていた。ポケットの口の向こう側に、いつか見たトランクのような、底なしの容積を誇る闇色が見えた。きつと同じ構造をしているのだろう。

やがて目当てのモノを見つけた彼女は、「あった」と玉虫色

に光る精緻せいちな硝子細工がらすを取り出した。手の平に収まる程のサイズのソレはメタリックな昆虫のフォルムをしていた。蜻蛉とんぼ……いや、蜉蝣かげろうだ。まだ陽の残る日中で羽ばたくには不自然な輝きを放つソレは、美弥子曰いわく「追跡装置」だという。

「これはね、私達種族の記憶を燃料ガソリンにして動く小型の追跡装置」

「記憶を燃料ガソリンに？」

「うん。記憶を消費して、その記憶の持ち主の元まで案内してくれるの。私達の記憶は放出されてしまうけど保存も出来るから、探したい人がいる時は、記憶の一部をコレに注入すれば良  
いって訳」

「記憶で動く装置か。面白いね、それに便利だ」僕はメタリツクな蜚螿を美弥子から手渡される。僕の手の平に停まった蜚螿は当然ピクリとも動くことはなく、置物のように沈黙していた。美弥子達限定って感じではあるけど、コレを使えばすぐに見つかるんじゃないか」

「うん。宇宙船が墜落した時に壊れちゃってたんだけども、今日のお昼頃によろやく修理が終わったんだ」

「直すの得意だもんね、美弥子——」

と言つて、ふと疑問が浮かぶ。この蜚螿を使えばすぐにでも片が付くのは間違いないだろう。だがそれなら何故、美弥子はこんなにもものんびりと道草を食っているのだろうか？

話し振り

からしても探している宇宙人はまだ見つかっていないようだし、駄菓子屋で食べていたアイスの量から、結構な時間をあそこで潰していたことは見て取れる。

おかしい。

「なあ美弥子、まだ探してる人は見つかってないんだよな」

「そうだけど」

「ならその追跡装置、何で使わないの？」

「……………」

途端に美弥子の表情が曇る。目線も泳ぎだして、明後日の方  
向を向いていた。

「まさか本当は直ってないんじゃない——」



「そ、そんなことないよ」美弥子は怒りながら否定する。「ただ、そもそも探している人の記憶を私は持つてなかったから、直したけど動かないだけよ！」

「前提からして駄目だろ……」

「いやー、あはは……。修理してる時は夢中になっててねー、これで解決だー！　って思ってたんだけど……終わってよく考えてみれば、これだけ直してもしょうがないのよね」しゅんとする美弥子。

「まあ良いけど。いや良いかどうかは分かんないけど。それじゃそもそも美弥子はどうしてここに探している人の手がかりがあるって分かったのさ。残り香みみたいなモノを追跡してき

たつて前に言つてたけど」

「『穴』だよ」

「あな？」

「うん、『穴』。次元と次元の間に穿たれた『穴』。その

『穴』を穿ちながら、私達は色々な惑星を旅していく。故郷の惑星からこの町に繋つながつっていた『穴』の穿ち方に、私の記憶を七冊の本に閉じ込めた人と限りなく近い雰囲気があったの」

「その、次元の『穴』っていうの？　そこから探してるって人の特徴を抽出して探すってことは出来ないの？」

「出来ないんだ。あくまで類似点があった、ってくらいだからね」はは、と苦笑する美弥子。「もちろん、私の探している人

が、この町のどこかで宇宙人としての特性を使用してくれれば、そこからの追跡は凄く簡単。だけど、さすがにそうはいかないみたい。故郷の惑星からこの町に繋がった『穴』は一つだけで、この町から他の惑星には一本たりとも繋がっていないから、ここにいる可能性は高いと思うんだけど」

その考えが一つの可能性を見落としていることに、僕は気付く。故郷の惑星からこの町に繋がった『穴』が一つで、この惑星から別の惑星に繋がる『穴』が他にないのだとしても、一本だけ穿った『穴』から故郷へ戻り、別の惑星へ移動している可能性がある。

けど、それを口にするのを、なんとなく僕は躊躇ためらってしまっ

た。彼女がそのことを理解しているかどうかは別として、そう口にして、彼女のやる気を削いでしまいたくなくなかったから。本当のことを言えないのは、僕も灰野と同じだ。

「意外。美弥子は色々な道具を持っているから、もつと手っ取り早い方法があるのかと思ってた」そう言っつて、僕は何かを誤魔化す。

「だったら良かったんだけどね。あ、でも、探すための方法は他にもあるんだよ」彼女は再びポケットの中に手を入れると、使い捨てライターのようなモノを取り出した。

使い捨てライターのようなモノの本体は藍色ポディ あいろをしていて、地球のそれより少しばかりサイズが大きかった。その本体の真ん

中あたりが透明クリアになっていて、閉じ込められるようにその中に収まった小さなルービツクキューブが特徴的だった。

ルービツクキューブの面は不規則だったが、彼女が僕に手渡すと同時に、生温なまぬるい電子的な音と共に回転しだし、正面の面を青色一色で揃えた。

「これは？」

「人種判別装置のキューブボックス」えへん、と美弥子は胸を張る。「これに触ると、触った人次第で中のキューブが色を変えるの。地球人が触れるとキューブは青色に揃って、私達一族の宇宙人が触れると赤色に揃う仕組みな訳よ」

ちなみに所有者は触れていても反応しないよ、と美弥子は説

明した。彼女の説明が終わる頃、ルービツクキューブの面が溶けるように不規則な状態へと戻っていく。初期状態にリセットされたらしい。

「なるほど……ってちよつと待て」少し納得しかけて、慌てて僕は言葉を繋ぐ。「これ、触った奴一人分にしか反応しないんだろ？」つい口調がきつくなる。理由は自分でも分かってた。

「そうだよ」

「それじゃ、この町にいる人間全員に試さないといけないじゃないか！」もう、何回も繰り返してる。「何人いると思ってるんだよ」いい加減やめろって、自分。

けれど心を見捨てて僕は言葉を紡ぐ。少子化や都会への人口

流出を抜きにしてもこの町の総人口はお世辞にも多いとは言えないが、それでも美弥子だけで一人ずつ確かめていくとなる、と、どれだけ時間がかかるか分かったものじゃないって、ことを。

さすがにそれは想定済みだったらしく、美弥子は「分かっているよ」と答えた。今は情報収集の最中らしく、そこから分析と考察をして、候補を絞り込む予定らしい。なるほど、そうすれば時間は限りなく短縮出来る。

「待ってるだけじゃ何も変わらないからね。やれることがあるならやっておこう、そう思って町に繰り出したけど、やっぱり難しいねー」

困ったと言葉にする美弥子だったけど、その表情は曇りのない笑顔で。

前向きに生きていこうとする心の強さがそこにはあって。それが、改めて羨ましいうらやいと思ってしまう。

「

その笑顔に、卑屈ひくつになっっている自分を思い知らされる。

こんな風に生きられるなんてずるいと、会ってすぐの頃に思った。

思った、けれど。

その本音が、憧れであることは分かっていた。

あんな風になりたい。



美弥子のようにになりたい。

そう思ってたやまないのに――。

「どうしたの、晶人？」

――なのに、まだ最後の視線が越えられないでいる。

あと少し、なのに――

「何でもないっての」僕は視線を下にやって、拒絶するように答えた。「それより美弥子、そのライターみたいなもの、もう一個あるの？」

「？ あるけど」彼女はそう言って、ポケットからもう一個を出した。

「なら一個貸してくれ。僕も時間があつたら探すの手伝ってお

くから」僕は手の平を差し出す。

美弥子は頷くと、キューブボックスを渡した。

「うん、ありがと。けど無理はしないでね」

「しないっての」僕は受け取ったソレをポケットにしまうと、妙なむずがゆさにそっぽを向いた。「まあ、あれだ。見つかる」と、いいよな」

## 4

太陽の光が燦々さんさんと降り注ぐ中、予定通り午前から林間合宿は行われた。学校指定の運動着姿（半袖、ジャージ併用可）で僕

達は裏山に足を踏み入れた。幸か不幸か、林間合宿を行う宿泊施設と洋館はかなり離れていたもので、灰野達と美弥子がバツディングしてしまいう可能性は低いだろう。宿泊施設から遠く離れた場所まで勝手に行くことも、規則で禁じられている。

二年生全員は宿泊施設に荷物を置くと、スケジュール通りに行事が進められていく。昼食は各自持参していたお弁当を食べるが、午後のレクリエーションが終わった後は班ごとに分かれてのカレー作りが始まる。

「朝田ちゃんは良いよねー、灰野さんと同じ班で」レクリエーション前の休憩時間中に、丸太の椅子に座りながら嶋井が羨ましげに言う。「料理上手いって評判だし」

「良いも何も、事前に決めた班分けでそうなたんじやないか」僕はその時のことを回想する。「むしろ、僕と灰野が同じ班になるように仕組んだのは嶋井だったろ」なんやかんやと理由をつけて、僕と灰野は何故か二人で作ることになってしまった。他の班は最低でも六人はいるっていうのに。そんな偏かたよった班編成になるよう口八丁で丸め込んだのは、他ならぬ嶋井なのだ。

「もうちよつと俺に感謝して欲しいよねー」嶋井は肩をすくめてみせる。「せっかく一緒に班になるようにしてあげたのに」「何でだよ。別に誰と班組んだって一緒だろ。それに灰野の料理なら時々食べるし」彼女とは家が近かったから、お裾すそわ分けを

貰うことがある。「こういう時くらい違う人と組みたかったぞ」

「……………」

「……何だよ」

「ごす。」

「はっはっは。殴って良い、朝田ちゃん？」

「いってえな。もう殴ってんだろぅが」

「灰野さんと同じ班になれたことを、君はもうちよつと喜ぶべきだと思うんだよ。灰野さんって可愛いじゃんね？ だから男子から結構人気あるんだよ？ 近づきたいって思ってる男連

中、他にもいるんだよ？」

「ん？ ってことは僕は羨ましがられてるのか？」

「……………」

「ごす。」

嶋井はそっぽを向いたまま答えなかった。

午後のレクリエーションをペアになった灰野と終わると、夕食の時間になる。事前の班作りで決めておいた班に分かれてカレーを作るのだが、僕ら委員は全体の作業状況を見て回ったりするため、委員同士で班を作っているのだ。僕は灰野と二人で、多めにカレーを作った。失敗した班が出ることを考慮しての救済措置そちも兼ねていた。

灰野の作ったカレーは、やっぱり美味おいしかった。嶋井にはあ

あ言っただけど、こうして美味しいものを食べていると、何だかんだ言って灰野と同じ班で良かったと思う。

その後、肝試しの準備に向かう嶋井達担当委員を見送り、肝試しの開始時刻まで休憩時間になる。休憩時間中に、参加者は肝試しのペアを決めるくじを引いてももらうことになっていった。全員引き終えてしばらくした頃には、たそがれ黄昏色の空は夕闇へと移り変わっていった。

肝試しにはお誂あつらえ向きの時間帯だ。

肝試しのルールは、指定されたルートを回って、ゴール地点に置いてある箱にお札を入れてくる、というものである。道中にはお化けが出る、と説明係の委員が言うが、それが脅かし役

のことだけを指しているのではないことは、皆承知しているだろう。

夜の裏山には、それなりの噂がある。廃墟となった洋館に住む幽霊が夜な夜な裏山の中を徘徊はいかいしているだとか、人魂ひとたまを見たとか。過去の林間合宿では本物が出た、なんて噂もあるくらいだ。子供の頃から遊び場に使っていた僕からすれば、そんなモノは一度も見ることがなかったし、それは僕の友人達も同じだった。結局は噂に過ぎないので、これっぽっちも信じていなかったが、付いた日いわくが場を盛り上げる一興となっているのは間違いないなかつた。

それでは始めます、という合図を皮切りに、静かに先頭から



出発していく。インターバルを置きながら次々と進み、少しずつ人の数が減っていく。そんな様子を後方から眺めながら、僕は腕組みをしていた。肝試しは担当委員が主導となっているので、僕ら他の委員はお休み。特別に肝試しに参加して遊ぶことが出来る。

「もし幽霊が出たら守ってね、朝田君」おどけて言う灰野。

「ああ、任された」

公正なくじ引きの結果、僕のペアは灰野となっていた。何故だか今日は彼女と共同作業をする機会が多いように感じる。昼のレクリエーションの時間も、夕食のカレー作りの班も同じだったし、嶋井の発言のこともあったから、どうにも作為的な

モノを感じてしまう。もしかして、僕が灰野に対し好意を抱いていると思われているから、要らぬ気遣いでもされているのだろうか。灰野は子供の頃から一緒に遊んだ仲間だけで、何も無いというのに。

やがて僕達の順番が回ってくる。

「行ってらっしゃいお二人さんー」肝試し担当の小笠原に懐中電灯を渡される。そう言えば彼女はくじ引きの担当もしていた。

「……それじゃ行こうか、灰野」

「うん！」

僕の右横を灰野が歩く。

夜の裏山には下見を兼ねて何度も来ているから、僕にとっては怖くもなんともなかった。灰野も怖がっている様子はなく、背筋を伸ばして堂々と歩いて行く。彼女も子供の頃から、夜遅くまで遊んでいたのを思い出す。帰るのが遅くなつて、お互い怒られた記憶もあるくらいだ。

それも笑つて話せる思い出話で、そんなことを話しながらルート順路を歩いて行く。進んだ先々には、必ずどこかに思い出があつて、遊んだ思い出、笑つた思い出、怪我した思い出、喧嘩けんかした思い出、泣いた思い出、色々なことが詰まっっていて、濃縮された感情がシャボン玉みたいに通り過ぎていくよう。手に持った懐中電灯の光が小さいから、それが余計に過去への感傷

に浸<sup>ひた</sup>らせているのかも知れない。

歩きながら。

少しの間、二人の間に沈黙が広がって。

大きな岩の横に差し掛かったところで、灰野は口を開いた。

「そう言えば、初めて朝田君と遊んだのもこの辺だったよね」

「そうだったっけ？」

「そうだよ。私こっちに転校したばかりで、まだ友達とかほとんどいなかったから……」

「ああ、思い出した」

灰野は現在祖父と二人暮らしをしているが、この町に来る前は普通に両親と一緒に過ごしていたという話だ。にもかかわら

ず、小学生の半ば頃に引っ越してきたということは、それなりの理由があるということだ。詳しい理由は聞かなかったから、知らなかったけど。

事情が事情だからだろうか。当時の灰野はとても引っ込み思案で、自分から積極的に人に話しかけたりすることが出来ない女の子だった。

「まだ町にも馴染めなかったし、お祖父ちゃんしか話せる人がいなくて寂しかった時だから、私、嬉しかったんだよ」

「あの頃はまだ、男女せいべつの垣根がなかったからね。誘いやすかったんだよ」

「朝田君に連れられてきたのが、あの大岩だったよね」灰野は

大岩を指差す。「……あの時のこと、覚えてる？」

「……覚えてない」

「朝田君って嘔吐くっの下手だよね」くす、と灰野は可愛いものを見つけた時のように微笑した。「本当は覚えてるでしょ」

「どうだったかな」答える僕はそっぽを向いた。

「朝田君達が大岩に登り始めるのを見てて、でも、私も混ざって良いのか分からなくて……岩のくぼみに手を引っかけては、わざと登れないふりをしてた」

引っ込み思案だからなのか、灰野は人目を気にして、登ることを——行動を起こすこと自体を——躊躇ためらっているようだった。

見かねた僕が手を差し出すと、ようやく彼女は大岩の頂上まで登ってきた。一緒に遊んでいた連中は頂上から下へ飛び降りてはまた登る、という遊びを繰り返していたけど、灰野は頂上に座ったまま、何もしようとしなかった。

「私降りられなくなってたんだよね」灰野は再び歩き始めた。「怖かったんじゃない。けど、なんていうか、下に戻りたくなかった」

「分かるよ」と僕は相槌を打つ。

当時は「変な奴だな」とそれこそ子供ながらに思っていたが、今なら分かる。灰野は現実に追いつけずにいたのだ。今まで一緒に過ごしてきた家族をいきなり失い、がらりと変化した

環境にいきなり投げ出されて、彼女の心は、現実には追いつけず  
にいたのだ。そんな折、今までとは少しだけ違う状況に身を置  
くことが出来たから、大岩から飛び降りてしまえば、その時間  
が終わってしまおうようで――

「そうしたら勘違いした朝田君がさ、受け止めてやるから飛び  
降りてこい、って言ってくれたんだよ」

「怖くて飛べないんじゃないかって、本当に心配したんだよ」  
高いところが怖かったのかな、って。それなら悪いことしたか  
な、って。だから、灰野に言ったのだ――

飛び降りてこい、と。

絶対に受け止めるから。



助けるから、と。

「怖かったのは本当。少し意味は違っただけどね」灰野は少し俯いた「でも、受け止めてくれて、私、凄く嬉しかった。朝田君のおかげで、全然怖くなくなったもん」

「別に普通のことだよ」

「そんなことないよ。朝田君、優しいもん。ずっと昔から」  
ふと。

灰野の左手が、僕の右手に触れる。少し震えていて、それから何かを決意したように、僕の手を握ってくる。そのことを認識すると、反射的に僕は灰野を見て、灰野は、潤うるんだ瞳で僕を見上げて――

「だから、私、朝田君のことが――」

その時だった。

まるで衝突事故に遭った自動車のフロントガラスのように、夜空が一面ひび割れた。夜空だけじゃない、僕らの周囲一帯に黒い線が走っていた。線に見えたそれは蜘蛛くもの糸で、幾重いくえにも交差し、蜘蛛の巣を作っていた。

呆気にとられていた僕は、それが織り成す変化を見届けてしまった。

巣を張った平面状の蜘蛛は影色で、糸の交差によって出来上がった面に濃淡様々な色を放射状に拡げていった。それは獲物を狩るためのものではなく、空間を汚染するために創り上げる

硝子細工。万華鏡まんげきようのように色は伸びて、次の面へ移るために糸を越えると、その都度模様を変えていく。滴したたる血液のように赤く、腐る葉を見つめるように琥珀こはく色。一つとして同じ色はなく、一秒たりとも同じで在り続ける色もない。やがて全ての面が色で満たされると、その海の中を黒い蜘蛛が泳ぎ出す。蜘蛛が歩く度、その尖とがった脚先の触れた箇所が水面のように波打つて、極彩色の波紋を広げながらぬばたまの闇を星模様ほしむように照らし出す。

この惑星とは異なる次元の生き物——宇宙人の記憶の、具現である。

夜空を彩るにしては幻想的に過ぎ、肝試しにしては少し浪漫ろまん

的に過ぎる。

「これも、嶋井君達の用意したやつなのかな……？」

それがこの惑星とは異なる次元の生き物——記憶であると気付くと同時に、僕は懐中電灯を放り投げ、ポケットから美弥子から貰ったメガネと手袋を取り出した。

「灰野、それをつけて」僕は灰野にメガネを渡す。メガネ越しに見れば、視覚から受ける毒は遮断しゃだんされるはずだ。

灰野が何か呟つぶやくが、それを聞くよりも早く僕は飛び出していた。

僕は両手に手袋を装着すると、そのまま手当たり次第に蜘蛛の巣を薙ないでいく。触れると同時に、鮮やかな色彩は水に溶け

る煙のように手袋の表面に吸い込まれていく。作業自体は簡単だ。巣の主たる蜘蛛は僕に警戒心と攻撃性を見せるが、蜘蛛の巣の上を這いずり回ることしか出来ない以上、地肌が触れない限り脅威ではなかった。

むしろ厄介なのは、その面積の大きさだった。僕達を広く囲う蜘蛛の巣を全て刈り取るとなると結構な時間がかかる。その間も、裸眼での直視による被毒は避けられない。

半分ほど消し去ったところで、脳の奥が軋きしみを上げた。

「うおおおおおおおっ！」

痛みで脳が停止してしまう前に、獣じみた咆哮ほうこうを上げて意識を保ちながら、蜘蛛の巣を吸い尽くしていく。薙ぐ、薙ぐ、薙

ぐ。綿飴よりも柔らかかに幻影は引き裂かれ、逃げ場を失った蜘蛛を握り潰す。感触は露<sup>つゆ</sup>ほどもなかつたが、蜘蛛が消えると、残りカスのような玉虫色の残滓<sup>ざんし</sup>は宙へと霧散していった。

激痛に苛<sup>さいな</sup>まれながら、ようやく最後の一匹を消すと、蜘蛛の巢は嘘のように溶けて消えた。その後にはさつきまでの夜闇と静寂が待っていて、虫の鳴き声だけが静かに響いていた。

僕は息を切らしながら、その場に膝<sup>ひざ</sup>を突いた。頭が痛い。くそ、美弥子の奴、何やってんだよ——。

「大丈夫？」 駆け寄ってきた灰野は、心配そうに僕の顔をメガネ越しに覗き込む。良かった、少なくとも彼女は大丈夫なようだ。「大がかりな仕掛けだったね。凄<sup>すご</sup>い、どうやったの？」

「……灰野、今のは」

「それに、その手袋のイラストも。それが関係してるの？」  
「え——？」

僕は手袋に目を落とした。

そこには、吸収した先程の記憶が刻み込まれていた。手袋は、散らばった宇宙人の記憶を吸収するとその表面に吸い取ったモノを映し出す。先日、散らばった美弥子の文字きおくを回収した時、手袋にびっしりと文字が刻み込まれたのだ。

だが。

今手袋に刻まれていたのは、文字ではなくイラスト状の、誰かの記憶だった。

美弥子の記憶じゃない。

美弥子は記憶を、文字として放出する。

ならばこれは、

「他の宇宙人……」

そうとしか、考えられない。

美弥子が地球へ来た理由は何だった？

彼女は——自分の記憶を封印した宇宙人を探しに来たと、

言っていた。

なら——

がさ、と音がして、そちらを見た。



息を切らしながら走ってきた美弥子だった。

「美弥子——」

そう言って立ち上がる僕に、美弥子は走って寄ってきてくると、僕の服を掴んだ。その表情は、普段のぼんやりとした表情からは想像がつかない程に焦っていた。

「晶人、まずい」

息を切らししていた彼女は、一度呼吸を整える。

それから、今の出来事を超える一言を、詫<sup>わ</sup>びるように告げた。

「七冊の本が、一冊盗まれた」

「」

美弥子自身が解読出来ない、彼女の一年間の記憶。それを収めた一冊が盗まれたことが、どれだけ危険なことか正確には測れない。どのように運用されるかによって結末が変わってくるからだ。が、少なくとも、盗んでいくくらいだから、善いことは、期待出来ないだろう。悪用された場合、最悪、冗談抜きで、町ごと消滅しかねない。

それに何より。

七冊の本を解読することこそが、彼女の真の目的なのだから。これでは彼女は永久に、目的を果たすことが出来なくなってしまう。本を盗んで行った宇宙人は、彼女の記憶を封印した宇宙人なのか……何故盗んで行ったのか……考えても、埒らちが明

かなかった。

第二の宇宙人の存在。

盗まれた本。

これらを前にして、すべきことは決まっている。

考えるまでもない。

町や世界の危機だとか、それもあるけど、何より、困っている美弥子のことを放っておける訳がないのだ。

このまま盗まれてしまつては、いつかの僕と全く同じことになつてしまう。大切にしていたものを、予期せぬ外野によって奪われてしまう苦しさは、他ならぬ僕が一番知っている。

「追いかけるぞ、美弥子落ち込んだり反省したりは後。今はま

ず、本を取り返す」

「——うん！」美弥子の表情から焦りが消えて、決意が新たに宿る。大切なのは不安に思うことではなく、起きたトラブルを解決することだ。

今ならまだ間に合うだろう。

逃がす訳には、いかなかった。

(宇宙人と閉じたメモリア 第二話／おわり)



# ズナけん

アソレイトッド・エディション

著=百壁ネロ

Illustration=櫻木けい

血で血を洗う、ほのほのキャンパスライフ！

一幕目

キャンパスで  
鼻血を出して  
辱めにあった女子大生、  
まだキャンパスにいる

第16回  
BOX-AiR  
新人賞  
受賞!!

秘

第十六回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『ごあけん アンレイテッド・エディション』

百壁ネロ

・読んでいて思わず吹き出してしまうようなところがふんだんにあり、サービス精神に富んだ楽しい作品になっている。

・会話文が楽しいので読みやすく、登場人物の個性も伝わってくる。そのため、楽に物語に入り込むことができる。

・登場人物の名前や学校名などに特徴があり、印象的。著者のセンスとこだわりを感じさせる。

・一人称で書かれ、ドタバタがメインなので、一本調子になりやすいのが難点。また、テーマがスプラッター映画である点は、マニアック過ぎるかも。

受賞

おめでとうございます  
ございます



## 百壁ネロ——Hyakkabe Nero

1984年生まれ。高校時代、一限〜六限までぶっ通しで居眠るといふ破壊的なパフォーマンスでいちやく一躍、担任の注目を集める。その型破りなプレイスタイルは社会人となった今も健在。昼休みに職場のトイレで熟睡じゆくすいするなどの豪快なプレイでフロアを熱狂させた。そして2013年、本作にて第16回BOX-UP新人賞を受賞し、デビュー。今、最も目が離せない中野区民の一人である。

## 櫻木けい——Sakuragi Kei

北陸在住。かわいいものと甘いものを撮取せつしゆして生きています。

「みづのすい」 <http://www.kagacable.ne.jp/~k-sakura/>

スクリーンが血と肉片で真っ赤に染まるその光景は、  
本質的で究極的な、きょこう虚構きょこうならではのゆえつ愉悦ゆえつに満ちている。

——ミツクリフト・ワノワール（映画評論家）

春。

大学。

新生活。

ぽかぽかと暖かな日差しの中で。

私は、これから始まるキャンパスライフにわくわく心を躍ら  
せ——過ぎたせいで。

今、地面に鼻っ面を押し付けて、ぶっ倒れている。

……ああー、やばい。思いっきり、こけてしまった。もうほ

んとに、ばったんって音が鳴らんばかりの勢いで、お前はドミノかって勢いで、豪快に転んでしまった。

うつ伏せ大の字の格好のまま、ぐるぐる思考を巡らせる。

……まさか大学登校初日、意気揚々と校門くぐった矢先に、

こんな風に転んじやうなんて。ああ、大学生になつたからつ

て、変な見栄張って慣れないヒールとか履いたせいだ。校門

の、あの柵みたいなやつ、あれを開けたり閉めたりガラガ

ラーツてするためのレール？ 的なあれの窪みに、ヒールの先

が完全にジャストヒットしちゃつたらしい。最悪だ。最低だ。

もう絶対、絶対、人に見られた。登校中の学生の皆さんに、こ

の醜態をきつと見られてしまった。見られてしまったっていう

か、下手したら絶賛見られ中かも知れない。倒れてる私の周りに絶賛人が群がり中かも知れない。絶賛写メられたりツイートされたり中かも知れない。……もうダメだー。お父さん、お母さん、ごめんなさい。私、ちるまちちちの散町千々乃の大学生活は、たった今終わりました。これから四年間、私は世にも間抜けなドミノ女としておちやらけたキャンパスライフを送ります。ああ、バカでそそっかしくて引っ込み思案で垢あかぬ抜けてなくて、なんだかもつちやりした自分とは高校でお別れしたはずだったのに。変われなかった。私、変われなかった。ううう、顔が熱い。恥ずかしさと擦り傷きずと涙と涙以外の何か温かいぬるぬるした液体のせいで、顔がすごく熱い。ううう、ダメだ。おしまいだ。さよ

ならだ。よし決めた。もう私はこのまま立ち上がることなく顔を上げることさえなくこうして地面に突っ伏したまま春夏秋冬を過ごしてそうして何年も何年も時がたつて時の流れに身を任せるがままに塵ちりとなつて灰となつてこの世からゆっくりゆっくり消え「ね、キミ」ちよいつと肩を叩かれて思わず「はいっ」うおあ。

………上げちゃった。

……顔、上げちゃった。

終わった。

終わってしまった。

これで私の周りに群がっていた皆さんに顔がバレた。バレて

しまった。あああダメだ。最悪だ。これでもう私はこの大学で花のズッコケ新入生としての確固たるすちやらかポジションを確立「おーい」「……………え？」

はっと我に返る。

目の前には、中腰で、私の顔をじーつと覗のぞき込んでいる男の人が一人だけ。

「……………あれ？」

どこにもない。

私が頭の中で思い描いていた群集の姿は、どこにもない。

左右を見回す。誰もいない。

後ろを振り返る。誰もいない。



そこにあるのは、さんさんと日差し降り注ぐ大学の校門と、その脇わきで花びらを散らす桜の大木だけ。

そのうららかな光景を見ながら、三秒間、思考停止。

……うわあー、よかった。

思わず、どっはあああつと大きなため息。九死きゆうしに一生だ。

万死に一生だ。神様、本当に、ありがとうございました。――

ん、あれ？ でもなんだろう、なんだかちよつと胸の奥すきまに隙間

風が吹くような、なんとも言えない寂しさが「おーい、ね、大丈夫？」つんつんつと肩をつつかれ、くるつと反射的に振り返る。

「なんかキミ、ずっとボーっとしてるけど。変なことか打っ

た？ 平気？」

とか言いながら、首を小さく、ふわっと傾かしげるさっきの男の人。

その「ふわっ」に合わせて「ふわあんっ」と揺ゆれる髪は、ほんのり茶色いセミロング。私をまつすぐ見るその目は、なんというか、女の子より女の子みたいな切れ長の目で、あ、まっげなんて私より全然長いし、唇くちびるとかもう嘘みたいにピンク色だし、え、肌なんて今すぐ交換したいぐらい白くて、……うわー。思わずまじまじ見てしまった。見とれてしまった。というかこの人、あれだ、もしかして、もしかしなくても、イケメンでは。顔上げた瞬間は気が動転しきってて全然わかんなかった

たけど、こんなイケメンが、よもや私の眼前に。うーん。やばいなあ。大学やばい。やばすぎる。まさか登校初日からこんなキャンパスライフキャンパスライフしたシチュエーションに出くわすなんて。うーん、なんか、よかった。私、大学、入ってよかった。私、大学生になってよかった。「ねキミ、名前は何？」「私、大学生になってよかったです！」うおあつ。

「ん？ え、なに？」

「……いえ、あの」

「ダイガクセイニナツテヨカッタさん？ それはなに、どこま

でが苗字？」

「いえいえあの」

「あ、あれだ、大学生ⅡニナツテⅡ四勝田さん、とか？　ほらミドルネーム的な。そう思つて見るとキミ、どこことなくハーフっぽく見えなくなかないことも、うん」

「ああいや違います生粋きっすいの日本人です私、ハーフでなくなかないです」

「ふうん、そう。でもなんか少し赤くない？」と私の髪をすうつと指先で摘つまむ男の人。

「えあつ、これはあの、地毛じげです。生粋の、地毛」無駄にどきどきしてしまふ私。

「そっか地毛かあ。ふうん、いいねー赤いの」にこにこ微笑ほほえむ男の人。

「は、はあ、ありがとうございます、ございます」ぎこちなく微笑み返す私。

「それで、赤い大学生ⅡニナツテⅡ四勝田さんは、正式名称は？」

「え、あ、正式名称は、散町千々乃っていいいます。正式名称はっていうか、正式名称オンリーです、はい」

「チルマチチチノ……へえー」と、顎あごに手をやり、少し考えるような仕草しぐさのあと、「なんかチだらけだねー」とか言う男の人。

「チだらけ……あ、チの字が、いっぱいってことですか？」

「あ俺、ふくみの含野。含野うるてです。三年。よろしくー」

と、私の問いかけを軽くスルーしながらにつこり。というか、わー、三年なんだ。三年つてことは、私の二個上つてことだからつまり、確実に二十歳越え。うわあー、なんか、あれだ。大人だ。お酒とかタバコとかいけちゃうんだ。わー大学つてすごー、と口半開きでぼんやり考えていると、

「うーん、それにしても、チだらけだねー」と一人でこくこくうなず頷くうるて先輩。

「はあ、まあ、そうですね、名前、チの音ばかりで、あはは」と照れくささ混じりで軽く笑うと、うるて先輩は急にグツと私に顔を近づけて、

「チだらけというか、チまみれというか、チみどろというか」

えー近つ、目と鼻つ。思わず目をそらし、こくつと俯うつむいてしまふ。と、

——服の胸元に、なにか、小さい点が、点々と見えた。

……ん？ あれ？ これつて、もしかして。目をこらそうと  
したそのとき。

ぱふつ。

先輩が、私の口を手のひらで押さえた。

へっ？ はっ？ へっ？ その唐突とうとつな圧倒的ボディータッチ

に動揺しまくっていると、うるて先輩は、ふつと私の口から手を離し、

「散町、ほら、血チまみれ。出てるよ鼻血。ずっと、会ったとき

から。だいじよぶ？」

と、手をふりふり。その手のひらの中心には、先輩の言うとおり、べったり付着した、真っ赤な――ぷしゅつ。

瞬間。

その血を、血だと、認識した瞬間。

私の鼻から勢いよく新たな鼻血がスプラッシュして、びびびびつとうるて先輩の首もとに飛び散った。うおあつ。

× × ×

「すみませんっ！ほんとに、本当に、すす、すみませんでし



たっ！」

校門からまっすぐ百メートルほどのところにある、芝生の広場。その中央に立つ、初代学長らしき人の銅像前にて。

ぺっこぺこ×2と、もげんばかりの勢いで頭を下げまくる私を笑顔で見ながら、

「だいじよぶだいじよぶ、血、全然慣れてるし俺」

と、銅像の台座にくつついてる蛇口をひねって水を出し、手を濡<sup>ぬ</sup>らして首もとを洗う先輩。血、全然慣れてるってどういう意味だろう、あと学長らしき人の銅像、これ手洗い場になってるのはどういうデザイン意図、とあれこれ疑問が——って、あ、そうだ。いそいそとハンドバッグから、愛用の真っ赤なハ

ンカチを取り出す。

「あつあの、先輩これ、使つてくださいつ」

「ん、さんきゅー」と先輩は受け取り、首を拭き拭き、「で、散町、さっきの鼻血スプラッシュは一体全体どういう仕掛け？」

「え、ああ、いやあの……あれは、特に仕掛けとかでは、ないんですが……その」

口ごもりつつ、おそるおそる、先輩を見る。

先輩は、小さく首を傾げて、

「ん、なになに？」

「ああ、いや、あのー……」

しばらくの間、見つめ合う私たち。

うわあー、なんか、言わなきやいけない的な空気が出来上がっちゃうってる気が。

うう。

……い、言うかあ。

はああ、と深くため息をつき、極力、極力、小さめの声で。

「私、血を見ると、その、……は、鼻血が、出ちゃうんです」

あー。

ダメだ。絶対変<sup>へん</sup>って思われた。引かれた。絶対ドン引かれた。

はああああーと深々ため息をつきながら、がつくりうな垂れ<sup>だ</sup>てしまう。

だって、だって血を見ると鼻血が出るって、自分で言うのも  
なんだけど全っ然意味がわかんない。変すぎる。この体質に気  
付いた小学生の頃から今までずっと、月一ペースでお薬をもら  
いに通ってる山下耳鼻咽喉科<sup>やましたじびいんこうか</sup>の山下先生も「なんなんだろうね  
え、変だよねえ」って毎回眉<sup>まゆ</sup>をひそめてコメントしてるし、そ  
んな、専門家にも変なんて言わしめるこの体質が、先輩に変わ  
って思われなはずが「いいね」

「……………へっ？」

思わず顔を上げる。

先輩は、至って平然とした表情で、

「それってさー、血を見て、鼻血出して、その鼻血見たら、どうなるの？」

「……また、出ます」

「また出たその鼻血をまた見たら？」

「……また、出ます」

「また出たその鼻血をまた見たら？」

「……ま、また出ます」

「わー、夢の永久機関だね」

なぜか少年みたいに目を輝かせる先輩。

「はあ、まあ、だからその……きょくりょく極力、目をそらすようにしてま

す、血から」

「えー、もつたいない。どんどん出していいと思うけどなあー」とかよくわからないことを言いながら「あ、これ、ありがと」私にハンカチを差し出そうとして「ん、まだちよつと出てるね」おもむろにハンカチで私の顔を覆おおう。

「え、あ」

こしこしと柔らかく顔を擦こすられる。うう、うあー、やばい。

「す、すみません、なんだか」

「鼻血出しっぱなしっていうのもね、可愛い顔してるのに、ちよつとあれだもんね」

「か、かわ」

「ああそうか、それで赤いハンカチ使ってるの？ 血、拭いても目立たないから」

「え、あ、そつ、そうです」

「なるほどー考えたね。だてに血まみれてないじゃん」

「あ、はは」よくわからないけど褒められたので照れちやう私。

「さて」ふわっとハンカチを折りたたんで、差し出しながら「そんな血まみれてる散町に、ちよつとお願いがあるんだけど」

「え、な、なんでしよう」

「ちよつとね、一緒に来て欲しい場所があるんだ」

そう言って、うるて先輩はとびつきり柔らかく笑った。くはー、イケメン。

× × ×

携帯のディスプレイの時計表示をチラ見しながら、前を行くうるて先輩についていく。

現在、時刻は9時43分。

「……あ、あのー先輩、すみません」

「ん？」

「実は私、その、10時からオリエンテーションなんです」



……」

今、私は、先輩の後を追って、なんだか大きめの建物の脇を通り過ぎて、なにやら小綺麗な建物の裏を通って、ただっ広い駐車を抜けた先にある鬱蒼うっそうとした林の中をぐんぐん歩いている最中。自分が今、キャンパス内のどの辺にいて、オリエンテーション会場の教室までどのくらいかかるのか、さっぱりわからない。あと17分で行ける？ 行けない気がする。湧き上がる焦りあせ。思わず早口になりながら、

「なっ、なのでなので、そのあのっ、あれだったらその、オリエンテーション終わったあと、とかでもいいでしょうか、どうでしょうか」

「そうりつきねんびー」

明るい声で、振り返りもせずと言う先輩。

「そうりつき So it's kill navy……?」

「創立記念日だよ今日、大学ここの。だから休みだけど」

「え、え？ え？ そ、そうなんですかつ？」

「そうだよ。だって人全然いないでしょキャンパス」

た、確かに。言われて見れば、うるて先輩以外の人をまっ

く見てない。……うーん、どうやら、持ち前の呪のろわれたそそっ

かしパワーが炸裂しちゃったっぽい。休日と知らずに意気揚々

とキャンパスライフを始めようとするなんて、あれか、私はマ

ンガか。はあー、穴に入りたい。すぽっと入りたい。という

か、

「せつ先輩、それ、なんで早く教えてくれないんですかーっ」

「いいねー、その創立記念日知らないで来ちやう感じ。新入生つぽくてかわいいじゃんか」

「かっかかわ、先輩」

「その先輩先輩って呼んでくる感じも高校卒業したて、新入生ならでは。うん、かわいいかわいい」

茶化<sup>ちやか</sup>すように言いながら、さくさく歩いていく先輩……って

呼ぶのは新入生つぽいのかあ。じゃあ、あっ、ナンチヤラさ  
んって呼ぶのが大学生スタイルかなあ、もしかして。なら、う  
るてさんって呼ぶことにしよう、あーでもどうだろう、下の名

前でさん付けとか、なんか慣れ慣れしいかあ、どうかなあ、どうだろう、ううーん、と頭を悩ませていると不意にうるてさんが（心の中でなら容易たやすく呼べちやう）立ち止まる。

「着いたよ」

そこは、アパートみたいな、二階建ての建物だった。

コンクリートの壁は赤茶色にくすんでて、よく見たらヒビとかもわりかし入ってて、全体的に、なんというか、昭和感あふれる佇たたずまい。

「え、えーと、ここ、なんなんですか」

と尋ねる私をシカトして、さっさと中に入っっていくうるてさん。慌てて後を追う。

ホコリくさくさくて薄暗くて狭くて長い廊下に、うるてさんと私の足音が響く。廊下の左右には、とうかんかく等間隔にずらーつと並ぶドア、ドア、ドア。それぞれ『映画』だとか『落語』だとか『文芸』だとか『オカルト』だとか書いてあるプレートが掛かっていて、あ、ということは、これってもしかして、と察しかけたところで、

「はい、ここ」

廊下の突き当たり、一番奥のドアの前で、うるてさんが立ち止まった。

そこに掛かっていたプレートは――

## 『残酷』

……あれー？

なんとなく察しかけていた一つの可能性が、頭の中ですうつと消える。私、てつきり、ここは部室棟ぶしつとうてき的な場所で、これからサークルに勧誘されちゃうのかなあとか思ってたんだけど、え、『残酷』？ そんなサークルがあるの？ だとしたら大  
学って怖つ。

思いつきり戸惑とまどう私を、にこにこ笑顔で見つめながら、

「よーし散町、じゃー入ってみよう」  
うるてさんがドアに手を掛ける。

えーいやいやムリムリ怖い怖い、と思う間もなく、きさきさきーつと音を立てながら開くドア。で、いやおう否応なく私の目に飛び込んでくる室内の光景。

八畳くらいの狭くて殺風景な部屋。

の、真ん中に、どでんと据え<sup>す</sup>られた長テーブル。

を、囲むように配置された、すうきやく数脚のパイプ椅子。

に、座る男女二人。髪の長い女の人と、ツンツン尖<sup>とが</sup>った金髪  
の男の人。

そして部屋の奥、真っ白な壁には、なぜかところどころ真っ赤な血しぶきが飛び散つ……あ。

血、見ちゃった。

——ふしゅつ。

本日二度目の、鼻血、噴出。

× × ×

「すみません、すみません、ほっ、本当にすみませんっ！」  
鼻をハンカチで押さえながら、ぺこぺこ×2何度も何度も頭  
を下げる。

私の足元では、ストレートの髪が腰まで伸びた、背の低い色  
白の女の人（きつと先輩だ）が、ぞうきん雑巾で床をこしこし拭いてく  
ださっている。ああー、本当に本当に申し訳ない、んだけど



そつちを見るとまた鼻血が出ちやうかもなので、しつかり目を見て謝ることもできない。ううう、申し訳ない。と、

「つかさあ、お前、誰？」

ハリネズミみたくツンツン尖った金髪の男の人（きつと先輩だ）が、パイプ椅子に座ったまま、ぎろつと私を睨む。にら

「うわあ、申し遅れましたっ、私、散町千々乃っつていいいます！  
一年生ですっ！」

「……一年？　なんで？　今日、講義とかねーぞ？」

「あっ、はい、それがその、まちが、間違いましたその」

「てか、お前、さつきからなんで目え泳がせっぱなしなんだよ。こつちしつかり見て喋れよ」しゃべ

「えっあっ、あのその、私、ち、ち、血を見ると鼻血が出ちゃう  
う体質で、なのであの、先輩の背後にある壁の血から、なんと  
か目をそらしながら喋ってる感じなんですっ！」

「……よくわかんねえ」

「す、すみません、私も自分の体ながら、よくわかんないんで  
すっ」

なんかもう泣きそうになりながら頭を下げていると、私の傍<sup>かたわ</sup>  
らに立っていたうるてさんが不意に、

「ふーん、なるほどね。そっかあ、散町は血糊<sup>ちのり</sup>でもダメなんだ  
ねー」

とかこくこく頷きながら、壁のほうへと歩いていく……っ

て、うおあつ、まずい。壁見るとまたスプラッシュしちゃう、  
ので、ぐいーっと思いつきり目をそらす。天井を見る。じつ  
と、ただただ、天井を見る。

……数秒後。

ワシヤワシヤワシヤツとなにやら紙の擦れるような音が響い  
て、

「よし、散町、もう大丈夫だよー」

「だ、大丈夫って、なにがですか……？」上を向いたまま  
私。

「こつち見ても大丈夫ってこと」

「えっいやいや、だって血が」

「大丈夫、もうないからー」

……ない？ 拭いたってこと？

そおーつと壁のほうを向いてみると——確かに、もう血しぶきの跡はなかった。

「あれさ、ポスターなんだよね。壁に貼<sup>は</sup>ってただけど、剥<sup>は</sup>がしといたからもう安心」と、椅子に座りながらうるてさん。

「部長が買ってきたんだよねー。去年やってた『東京非道医<sup>とうきょうひどうい</sup>師団<sup>しだん</sup>』のポスター。全109分の中で、一番血まみれてたシーンをポスター化したっていうファン垂涎<sup>すいぜん</sup>の代物<sup>しろもの</sup>」

「は、はあ……そうですか……」

全然なに言ってるんだか意味がわからなかったけど、とりあ

えず頷いておく。というか、部長ってことは、ここはやっぱりなんらかの部室なんだ。何部なんだろう。ドアのプレートの『残酷』という文字が私の頭の中をぐるぐる回る。

と、突然、

「シロゴウカタン」

小さくて、でも凜りんと透すき通った声が、耳に飛び込んできた。

え？　と思っていると、私の足元で床を拭いていたストレー  
トロングの先輩が、音もなく立ち上がり、

「私、白郷しろごう香丹かたん。三年。よろしく」

と言いながら、私を上目遣うわめづかいで見上げてくる。

吸い込まれそうな、真っ黒い大きな瞳。

「……あ、わ、私、散町千々乃です、よろしくお願いします  
……」

う、う、うわー。

なんだろう。フランス人形みたいな人、とかそういう比喩<sup>ひゆ</sup>を  
飛び越えて、もはやこの人はフランス人形だ。無表情だけど気  
品があつて、体の線が壊れそうなくらい細くて、雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気がなん  
だか儂<sup>はかな</sup>げで、声も目鼻立ちも重要文化財かってレベルの綺麗さ  
で、うわあー、私、私こんな風になりたかったよー、っていや  
いやおこがましい、おこがましいぞー散町千々乃、私ごときが  
こんな人間離れした容姿<sup>ようし</sup>になれるはずが、私みたいなズッコケ  
鼻血女には私程度の見た目が分相応<sup>ぶんそうおう</sup>「チチノちゃん？」「え

はっ、はいっ！」ちゃん付けで呼ばれた。びっくりした。

「大丈夫？ チチノちゃん、気分とか悪い？」

ゆら、と首を傾げる白郷さん。ふわっと揺れる髪。そして漂<sup>ただよ</sup>う、なんだかわからないけどとにかく甘くていい匂い。

「いえいえ全然っ、というかあの、すみません、床、拭いて頂いて、ありがとうございます、すみませんっ」

「ううん、どういたしまして」

小さく歯を覗かせて微笑む白郷さん。う、う、うわー、もう、天使だ。天使って本当にいたんだ。血見てないけど、別の理由で鼻血出ちやいそう。と、

「ほら、半ちゃんも挨拶<sup>あいさつ</sup>して」

白郷さんが、金髪の先輩に声をかける。

「はあー？　なんでだよ」

「なんでだよじゃないよ。来てくれたお客さんには、挨拶ぐらい普通」

「普通ってお前なあ」

「半ちゃん。いいから早く」

はあー、とめんどくさげにため息をつきつき、金髪の先輩は頭をむしやむしや搔かく。

「あー……尾留寺半人。びるでらはんと三年」

「あ、はっ、はい、あのえと、よろしくお願いしますっ！」

「おう……って、いや、だからお前は何モンなんだよ」



「えっ、あー、私はあのその、うるてさんに連れてこられましたて、その」

「……おい、うるて。もしかしてこれ、新入部員？」  
うるてさんは、うん、と笑いながら大きく頷く。

「そのつもりで連れてきちゃった。なんかさ、この子の鼻血見たらピンときちやっただよね。ほら、うちの部、血と親和性しんわせい高いし、いい人材なんじゃないかなーって」

「んだその理由。……つつても、まあ、新入部員が入るんなら、どんな奴でもありがてえはありがてえけどなあ」  
ん？

………血と親和性の高い部？

「え、あのー、うるてさん、こっつてその、何部なんでしょうか……?」

私がおそるおそる尋ねると、

「はあ? え、うるて、お前、なんにも教えないまんま連れてきたの」

尾留寺さんが割って入る。

「まあねー。だつてほら、部の名前とか活動内容とか明かしちゃうとさ、<sup>へんけん</sup>偏見フィルターが掛かつちゃうの目に見えてるじゃんか」

「だからつてお前……いや、まあ、確かにそれはあるけどさあ」

腕を組み、むうつと押し黙る尾留寺さん。えー、ほんとに何部なんだろう。全身全霊ぜんしんぜんれいで不安になってきた。

「まあ、そうは言っても」うるてさんが、私を見ながら、くすくす笑う。「なんだか散町もずいぶん不安そうな顔してるし、そろそろ教えちやおうかなー。とゆーことで、ちよつと待ってね」

そしてスマホを取り出し、鼻歌はなうたま混じりでなにやら操作し始める。

……どきどきしながら待つこと十数秒。おもむろに、ひよいつと画面をこっちに見せて、

「ほらこれ、見てみ。うちの大学のサイトなんだけど」

「は、はあ……」

おそるおそる、うるてさんに近寄って、画面をそおーつと覗き込む。

---

左前堂大学 HIDARIMAEDO University

ホームV 在学生の方へ V サークル紹介

第22回 残酷映画研究会

文・部長 どどみげんらい 土度見言来さん (文学部・三年)

諸君。

ご存知ではないかも知れないが、実はこの<sup>ひだりまえどう</sup>左前堂大学には、映画研究会以外にもう一つ、映画に関するサークルがあるのだ。

それが、我々『残酷映画研究会』。

通称「ゴア研」である。

部員数四十八名を誇るマンモス文化系サークル・映画研究会に関する話は、このサークル紹介の第4回で、映研部長の<sup>ろくかず</sup>六数大奈氏<sup>だいな</sup>がぐだぐだと書き散らしておられるので、ここで私のほうから詳しく語りはしないが、要するに彼らは、自主映画の撮影や上映といった、まあ、言っちゃなんだが、ありきたりな、

どこの大学でも普通にやっているであろう、非常に非常にオーソドックスな活動を行っているようである。

一方、我々ゴア研はというと、その真逆<sup>まぎやく</sup>。

部の名前に『映画研究会』という文字こそ入っているものの、活動内容は映研のそれとはまったく異なる。我々の活動は、この左前堂大学にしか存在しないであろう、非常に独創的かつアグレッシブかつセンシティブなものなのだ。

すなわち、我々の活動は、映画鑑賞と議論である。

しかしながら、鑑賞といっても、我々は普通の映画（ここでいう普通とは、恋愛映画やアクション映画やSF映画や青春映画やファミリー向けアニメやミステリーやサスペンスやその他

もろもろ）は見ない。

我々が鑑賞するのは、スプラッター映画のみである。

ちなみにノルマは各部員、最低、月に二十本。

「スプラッター」とは、アメリカの映画評論家、ジョン・マツカーテイによる造語ぞうごである。その由来は、水が跳はね散るという意味の英語「splash」。すなわち、血しぶきが飛び散るような残酷な表現の含まれる映画を、スプラッターと称す。70年代後半頃から映画におけるスプラッター表現は徐々じょじょに増えていき、そして80年代にはついに一大ムーヴメントとなって、今日、こうして映画の一ジャンルとなるに至った。

ちなみにだが、ゴア研の略称に含まれている「ゴア」とは、

流血や血糊を表す英語の「gore」から転じて、スプラッター映画における流血シーン全般を指したり、また、その程度の凄まじさを形容するときにもち用いる言葉である。「あの映画のゴア描写、超ゴアゴアだったね」などという使い方が一般的だろう。

さて、諸君の中には、このスプラッターという単語を聞き、そこから想像される残酷で悪趣味な映像に対し、顔をしかめる人も少なからずいらっしやるかと思う。

しかし私は、非難を恐れることなく、ここで一つの宣言をする。

『残酷で残酷で血みどろでショッキングでゲロゲロのグチャグチャな表現だけが、このつまらない世界を変えていけるのだ』



と。

昨今の表現世界は、極度に矮小化わいしょうかしていると、私は感じている。

これは映画業界の話だけではない。小説もマンガもアニメもJポップも、果ては普段の何気ない世間話まで、およそ表現と呼べるものの全てが、何かどこかで誰かに遠慮えんろしているような、他者の目を気にして怯おびえているような、そんな窮屈きゅうくつで圧迫された雰囲気いりこを色濃いろこくまとっているように、私は強く感じる。

この鬱屈うっくつとした時代に、本当の意味での表現の自由を呼び戻すのが、残酷映画の大いなる使命ではないだろうか。私はそのように考える。

そのためにも、我々ゴア研は、この場で声を大にして叫ぼうではないか。

我々は、残酷表現を賞賛する、と。

我々は、血しぶきがなによりも好きだ、と。

我々は、臓物ぞうもつが飛び散る様子をもっと見たいんだ、と。

我々は、とにかく脳みそがベチャツと弾はじけ飛んで真っ赤な血

がドバドバぶちやぶちや流れ出て心臓がゲログチャツとぶつ潰つぶ

れて腸はらわたがズルズルべろべろーつと腹おもから思おもつくそ引きずり出さ

(※以下、不適切な表現が多数あったため削除しました・学生

部)

「……………」

削除された部分、とんだけエグいこと書いてたんだろう。なんか、想像しただけでちよつと鼻血出そう。

「どう？　うちのサークルのこと、わかった？」

うるてさんが、私の顔をひよいつと覗き込む。

「……ま、まあ、なんとなくはわかりましたけど……」

「けど？」

「そのー……じゃあ、うるてさんも、そういう、ぐ、グロっちな映画が好きなんですか……？」

「うん、大好きー」

とびつきりの爽やかスマイル。おおー、なんだろうこの気持ち。私、もしかして今、ちよつと引いちやつてるかも知れない。と、

「あー、散町、引いてるでしょ?」

笑顔で言い当ててくるうるてさん。に、

「へっ? あ、いえ、そんな」

引きつった笑顔で返す私。

「散町、俺のこと、かつこいいけど気持ち悪いとか、かつこいいけど怖いとか、かつこいいけど触らぬ神にうんたらだーとか思ってるでしょ?」

「そっそんなこと、いやかつこいいとは確かに思ってますが、

というか自分で自分のことかっこいいとか言っちゃうんですね」

「うん、言っちゃうねー」

言っちゃうんだ。でも嫌味いやみがないからすごい。イケメン怖い。うん。

「じゃあさ」うるてさんは、私の鼻先をビシツと指差して、

「俺が、実はスプラッター好きが高じて、こうやって新入生を部室に連れ込んではチェーンソーやらペンチやら電動ドリルやらでぐちやぐちやのリアルスプラッターにしちゃう変態的な人間なんじゃないか、とかは思ってる？」

「ええっ、いや、そんないくらなんでも」

「あ、そう。でも実はねー」にこつと悪戯いたずらっぽく微笑んで、  
「そうなんだよ？」

「……へ？」

「じゃ、尾留寺、白郷、よろしくー」

その声を合図に、いつの間にかドアの傍そばに立っていた尾留寺  
さんが、カチャリとその鍵を閉めた。そして、いつの間にか窓まど  
際に立ぎわっていた白郷さんが、カチャリと窓の鍵を閉め、カーテ  
ンもシャツと閉める。え？ え？ え？

「散町、『ホステリア』って知ってる？ スプラッターファン

にとつては、これ見とかないとモグリだろっていう、いわゆる

とうりゆうもんてき

登竜門的な映画なんだけどさ、俺、あれが一番好きなんだよ

ねー。ベタなチヨイスだなーって我ながら思うけど」

よくわからないことを喋りながら、うるてさんが静かに椅子から立ち上がり、のんびりゆっくり、私の背後に回る。

「俺が一番好きなのは、シリーズの中でも『ホステリア2』で、簡単にストーリーを説明するとね」

とん、と両肩に手を置かれる。妙に重たく<sup>の</sup>押し掛<sup>か</sup>かる、その感触。

「仲良し女子大生グループが、ノルウェーのとある田舎の村に旅行に行くんだけど、そこでアングラな組織に捕まってネットオークションで売られちゃうんだよ。買い手は世界中の資産家。買って何するのかっていうと、ま、単純な話、思いっきり

いたぶって殺すんだよ。チエーンソーで眉間みけんをスパツと切つちやうシーン、あれ傑作なんだよねー」

後ろから淡々と聞こえてくる、うるてさんの声。

なぜか、じわあつと、冷たい汗をかき始める私。

「要するにさ、知らない場所に来て浮かれちやった女子大生が、ぐちやぐちやにされるっていう話。これを、散町でリアルにやってみたいなーって、それだけなんだけどね」

いやいやそんなご冗談をーっ、と思いつつ、——なんだか、どうしても、汗が止まらない。後ろにいるうるてさんを、どうしても、振り返れない。——突然。

どうどうどうどううるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる



うっ！

部屋中に、耳をつんざくようなとんでもない轟音ごうおんが響き渡る。確かなことはわからないけど、もしかして、いや、もしかしなくても、この音は。

……チエーンソー？

「じゃあ、散町。——スプラッターを、始めよっか」  
柔らかくて、低くて、どす黒い声が、耳元で響ひびいて——次の瞬間。

ぶしゅううつ、と。

勢いよく、真っ赤な鮮血が宙に飛び散った。

……私の鼻から。

× × ×

「うーん、すごいねー散町。想像だけでも鼻血出ちゃうんだー」

腕を組み、心底しんぞこ感心したように言ううるてさん。

「ほんとに、ごめんね、チチノちゃん」

私の顔を申し訳なさそうに覗き込む白郷さん。

「へへへ。いやー、目と目の合図だけでいきなりあそこまで雰  
囲気出せんだから、伊達だてにスプラッター見てねえなーって思っ  
たわオレ。あっはは」

むちゃくちや楽しそうに笑う尾留寺さん。

そして私は、ハンカチで鼻をこしこし拭きつつ、ぐったりうな垂れている。

うん。

つまり、結局。

さっきのくだりは、うるてさんの即興そっきよう思いつきドツキリ

だったわけだ。……ってまあ、冷静に考えればそんなの当たり前前なんだけど、でも妙にリアリテイがあつた。うーん、日頃からそういう映画を見てる人たちだからこそ出せるリアリテイなのかも。とりあえず、信じた自分が恥ずかしい。うはあ、穴に入りたい。すぽっと入りたい。

「でもさ、散町。そうやってあらぬことを信じちゃったって  
いうのは、つまり、スプラッター映画好きっていう人種に対  
して、少なからず偏見を持つてることだと思わない？

あー、別に責めてるわけじゃなくってね」

うるてさんが、にこにここと語りかけてくる。

「……そう、なのかも知れないですね」

恥ずかしさで消えかけの声しか出ない。

「てかお前さ、そういう映画、実際ちゃんと見たことねえだ  
ろ？」尾留寺さんが呆れたような口調で言う。「オレはさ、ス  
プラッターつつつてもゾンビ系が一番好きなんだけど、ゾン  
ビつつつて例えばどういうイメージだ？ん？」

「え？ えつと……お、お墓から出てきて、よろよろ歩き回る……」

「ほらな」はあー、と大きくため息をつき、「最近のゾンビはな、超走<sup>ちよう</sup>るぞ。『悪魔の毒々卒業式<sup>どくどくそつぎようしき</sup>』なんかじゃ、墓場からドーンつつつってミサイルみたいに飛び出して、着地後、そのまま全力疾走<sup>しつそう</sup>で追いかけてくる」

「……マジですか」

「マジだ。つか、まあそんな感じでさ、大して見たことない奴に限って、スプラッター愛好者は猟奇犯罪<sup>りようきはんざい</sup>を犯すぞ！ とかなんとか勝手に思っちゃってたりするワケよ。な？」

「……はい、すみません」

「んなこと考えるヤツのが、よっぽど現実とフィクションの区別ついてねーつての。そう思わねえ？」

「……………はい、すみません」

なんで私、ドツキリ仕掛けられた上にちよつと怒られてる感じになってるんだろう。ううう、大学つて、大人つて、怖い。と、そんな私の気持ちを探したかのように、

「ね、半ちゃん、言い過ぎ」

白郷さんが制する。

「ああ？　言い過ぎつて、香丹、オレは一般論を喋ってるだけで」

「もういいから。チチノちゃんが疲れちゃうから、少し外出

て、煙草たばこでも吸ってきて」

「んだよそれ」

「あ、尾留寺、じゃあ一緒行かない？」うるてさんが尾留寺さんの隣りに並び、ひよいつと肩に手を回す。「じゃ行つてくるー。あ、そうだ、白郷。もし部長来たら電話して」

そう言い残して出て行く二人。……と、思ったら、すたすたとうるてさんが一人で戻ってきて、私の前に立ち、

「言い忘れてた。ごめんね、驚かせて」

とか言いながら、よしよしって感じで私の頭を撫でた。う、う、うはあーっ。イケメンはナチュラルにこういうことできるから、ほんとにとんでもない。

「とんでもないですっ」思ったことをそのまま言ったら意外と意味が通った。

「ん、ならいいんだけど」にこつと笑ううるてさん。「あ、そうだ。このあと、3時から俺らみんな映画見に行く予定なんだけど、よかったら一緒に来る？ お詫びってことでおごる

よ。『スプラッター・タイム 新・血塗ちぬられた女子会』のリバイバル上映。どう？」

「いやあの、血塗られたのを見ると私が血塗られちゃうので……」

「おー、確かに」あははーと爽やかスマイル。「あ、あとさ、今日なんやかんやあったけど、これでもし入部する気になった



ら、入部届、書いてくれたら嬉しいなーなんて」

「あ、はあ……」

うわー、すごい強引な勧誘だ。でも嫌な感じがしないのはイケメンだから成なせる業わざなのか。うーん、重ね重ねとんでもない、とかあーだこーだ思っている内に、うるてさんは手をふりふり、すたすた部屋から出て行った。

ほどなくして、なんだか急に静かになる部室。

「静かになったね」

白郷さんが、私の思ったこととおんなじことを言いながら、とことこ窓のほうへ歩き、さつき閉めたカーテンをシヤツと開ける。



の轟音を発する白郷さん。

「……………あの、なんでそんな特技を」

「『バチカン・チェーンソー』何回も見てて、気付いたら会得えとくしてた」

「……………『バチカン・チェーンソー』とは」

「バチカンの、チェーンソー映画」

「……………なるほどー」

「チェーンソーで人を切ったら、血とか内臓だけじゃなくて、よくわからない黄色い汁しるもいっぱい飛び散る、一風変わった映画」

「うは」話聞いただけで鼻がむずむずしてきた。

「あ、ごめん」白郷さんが、手で口を押さえる。「苦手だよね」

「苦手、というか……私、昔からこういう体質なので、そういう映画に対して、ちよつと過敏かびんになつちやつてるといふか……はい」

「そっか、ごめんね」

白郷さんが、私の隣りの椅子にちよこんと座る。

それから、少しの間、無言の時間が流れて。

「うちの部、部員少ないの」

不意に、白郷さんがぽつりと呟いた。

「部長も合わせて、三年生が四人だけ。去年、誰も入ってこな

かった」

「……」

私は無言で、ただ、小さく頷く。

「だから、含野くんも、強引に勧誘しちやっただと思う。半ちゃんも私も、はしやいじやっただと思う。ごめん」

「いや、あの、全然、全然」ふるふると首を振って答える。

「部の存続、危ないらしいの」

「……え？」

白郷さんは、小さく俯いて、床のどこか一点を見つめたまま、

「長い間、部員が少なかったから、学生部から警告されてて。

活動内容も活動内容だし、あまり良い風に思われてないみたい。それで部長が呼び出されて、話しに行ってるの、今日」

白郷さんの横顔は、相変わらずの無表情で、だけどどこか寂しそうで、ああ、なんとか力になれないかなあと強く強く、けど、でも、うう、私、スプラッター映画なんて絶対見れないし、いや見れるのは見れるけど頑張れば、踏ん張れば、でも鼻血がとんでもないことになっちゃうし、怖いから見れないとかいう女の子っぽい理由じゃなくて（怖い話とか肝試きもだめとかまるで平気）ただ単に鼻血のせいで見れないって我ながら変で悲しいなあと思うんだけど、うう、うううう、うううう、うううううう。……うううつ！

「あっ、あの！」

がたつと椅子から立ち上がる。勢い余って椅子がばったんと倒れる。

「あのそのえつと、今日、映画、『血塗られたなにか』、見に行くんですよねっ、連れてってもらっていいですかっ！」

「……え？」 きよとんとした表情の白郷さん。

「私その、あの、ろ、ろくに見たこともないのに、見れないって決めつけるのってあれかなって、うるてさんとか尾留寺さんが言ってたとおりに、偏見だなって思ってた！ 私、こんな体質なんで、中学でも高校でも、変な目で見られること多くって、でもそのあの、偏見じゃないですかそれって！ その偏見を、私

がそういう映画に持つちやうのつて、なんだか、すごく、その、あの」

「ありがとう」

白郷さんが、ほわっと微笑んだ。

私が今日見た中で、間違いなく一番の笑顔で。

「……あ、椅子」

白郷さんが、倒れた私の椅子を戻してくれる。わたわたしながら、座りなおす私。

……ふう、とお互いに一息。

「でもチチノちゃん」

「え、はい」



「今日の映画、わりとしつかり血塗られてるから、見ないほうが賢明だと思う」

「……………う、あ、そうなんですか」

「死んだふりしてる女の子の胸をティースプーンで思いっきり突き刺して本当に死なせちゃうっていうシーンが序盤に」

「えつと、はい、やめときます」

聞いてるだけで鼻がしつかりむずむずしてきた。うん、これは無理だ。

「でも、気持ちうれは嬉しかった。ありがとう」

白郷さんが、ぺこりと頭を下げた。

「い、いえいえ、そんな、はい」

私も同じように、ぺこりと頭を下げ返す。

「……ね。チチノちゃん、来週の水曜、暇？」

「え？ えつと……？」

「映画館のラインナップ、週替わりなんだけど、来週のならば、きつと大丈夫。チチノちゃんでも見れると思う」

週替わりなんだ。ちっちゃんい映画館なんだろうか。ミニシアターみたいなの。

「私でも見れそうっていうのは、どういう……？」

「直感。リアルな出血描写がないから、きつと平気なはず」

「なるほど……ちなみにそれって、なんて映画なんですか？」

「『恐々！ キノコヒューマン』」

う、うわー、詳しくはわからないけど、確かに見れそう  
だー。

「あの、じゃあえっと、それは是非ぜひ、是非行きますっ！」  
「うん。じゃあ来週の水曜、夕方ゆふの5時、学長像の前で待ち合  
わせ。大丈夫？」

「はいっ！」

× × ×

それから。

水曜の待ち合わせのためについてことで、白郷さんとアドレス

&番号を交換した。

大学に入って初めての連絡先交換をこんな天使みたいな先輩とできるなんて、私、今、同学年の誰よりも進んだキャンパスライフしちやつてるなーと、一人でにまにましてしまった。

そのあと、白郷さんのお気に入りの映画の話なんかを聞いた。

「『マーダー・モーニング・ア・ゴーゴー』っていう映画。邦画。ストーリーは平凡なんだけど、すごいのは、終わり15分。

いきなりストーリーと関係ないヒップホッパーみたいな男たちが出てきて、延々10分間ブレイクダンスを踊るの。そして終わり5分からはヒップホッパー達のすんげき寸劇というかダベりが始まっ

て、最後の1分間はただひたすらドアが映ってるの。ドアだけが、ずっと。一度見たら、忘れられない衝撃。驚きの、時間の持て余しあまっぷり」

普段は凜りんとした雰囲気の白郷さんだけど、好きな映画のこととなると落ち着いた口調くちようながらも饒舌じようぜつで、ああ、やっぱり本当にそういう映画が好きなんだなあ、部の存続に少しでも力添えするため、私、やっぱり入部したほうがいいんだろ、でも、鼻血が、うう、とか、なんだか無性むしように自分が齒痒はがゆくなつた。あと、なんだその映画。スプラッターとかどうとか以前に、映画としてなんだその映画。私の体質がこんなじゃなければ今日にでも借りてすぐ見るのにと、そこでもまた無性に自分

が歯痒くなる。ううーん。

とかなんとか、そんな感じで。

春の日が射し込む部室で、ゆるゆると穏やかに、私の大学生活初日は過ぎていった——と、なんとなくーく頭の中で今日のエピローグを思い浮かべていたら。

**ばん、どんっ！**

じんじょう尋常じやない音を立ててドアが開いた。尋常じやない勢いでビクツとしてしまう私。えっ、うるてさんと尾留寺さん？ と思っで見ると。

そこには、顔の上半分ぐらいある巨大な黒ブチ眼鏡をかけた、ボサボサ髪の男の人が立っていた。ドアは開けっ放しにし

たまま、私たちのほうに目もくれず、どことなく思いつめたよ  
うな表情で、じつと天井の一点を見つめている。えー、誰だこ  
の人。

「あ、部長」

ぽつりと眩く白郷さん。う、え、あ、えっ？ がばつと慌あわて  
て立ち上がる。

「わわ、あのえと、おじやましてますっ！ 私、一年の散町」  
「廃部だ」

「……………へ？」

部長さんは、天井を見つめたまま。

ゆっくり、噛かみ締めるように。

「我が、ゴア研の、廃部が決まった」

そう言った。

——そんなわけで。

私が入部すべきか否かうだうだ迷っている間に、ゴア研は廃部になってしまった、らしかった。……って、えー。



(ごあけん アンレイテッド・エディション 第一話／おわり)



# ズブけん

アソレイテッド・エディンボロ



女子大生、鼻血ブー伝説!!

二幕目  
レイキャヴィク・恋の行方・  
ウォッチング・マサカ

著=百壁ネロ  
Illustration=櫻木けい

残酷映画は、実にけしからん。実に不謹慎だ。私はそう思う。  
だが、この世からなくなっただけいいものであるとは、どうしても  
思えないのだ。

——  
佐藤希輪 さとうきりん

(映画評論家)

大学に入学して、二週目の水曜日。

二限目の英語（必修）が終わって、お昼の十二時ちよつとすぎぎ。

キャンパス中央に広がる芝生の広場の真ん中、堂々とそびえ立つ初代学長像の前にて。

「……さすがに、早く来すぎたかなあ……」

とか呟つぶやきながら、今、私は一人で、ぼーつと突っ立ったいでいる。

うん。

白郷しろごうさんとの待ち合わせは五時だから、どう考えてもさすが

に早く来すぎちゃってるわけだけど、でも、なにぶん私は創立  
記念日に登校しちゃうような生粋きっすいのそそっかし女だし、用心に  
用心を重ねた結果、この時間に来とくのが正解かなーって思っ  
て今ここに立ってる……んだけど、これはさすがにフライング  
しすぎた感がある。なんだか逆に、待ち合わせ時間を大幅おおはばに勘  
違いしちゃった極上のそそっかし女みたいになっちゃってるよ  
うな、ううーん……って、あ、そそっかしいで思い出した。

私——あれ、ちゃんと持ってきてたかなあ。

ふっとハンドバッグに目を落とす。バそツれグは身代金みのしろきんでも詰め

込んでるのかって勢いでパンツパンに膨らんでいて、うん、まあ、そのシルエツト的に、どう考えてもちやんとあれは入つて  
ると思うんだけど、いや、でも一応念のため確認しとこう。  
ちよつとだけバッグを開けて中を覗き込のぞみ——もうとした瞬間。  
後ろから、ぽんつと肩を叩たたかれて、

「ヘル・スポーツっ！」

「○×△\*@っ！」

言葉で表せない系の声をあげて、まあまああの勢いでビクツと  
してしまふ私。振り返るとそこには、茶色いセミロングに切れ  
長の目、人懐ひとなつっこい微笑ほほえみを浮かべた——

「うるてさんっ」

「や、散町、<sup>ちるまち</sup>久しぶりー。で、今、なにに見てたの？」ひよいつと私のバッグを覗き込む。「……ん、箱ティッシュ？ 携帯してんの？ なんで？」

「そ、それは、そのおー……」

なんとも言えない恥ずかしさからモゴモゴと口ごもっている  
と、うるてさんは、うーん？ と顎<sup>あご</sup>に手をやり、私の顔をまじまじ見つめて、

「エツチな理由？」

「ちっちがっ違いますっ！ なにがどうなってそくなるんです  
かっ！」

「なにがどうなってって、だって、男にとって箱ティッシュっ



ていうのは良き相棒あいぼう」

「いいですいいです皆までいいですっ!」ぶんぶん手を振って全力で制する。「あの、違ちがくてですね、今日、白郷さんと映画見に行くんで……そのー……い、いっばい鼻血が出てもいいよ  
うにと思って、持ってきたんですよっ! テイツシユ!」

ああー、と大きく頷うなずくうるてさん。そして、大声を出しすぎたせいで、私のほうをチラ見（というよりジロ見）していく広場を行きかう学生の皆さん。うわー恥ずかしっ。スツとうるてさんの陰に隠れて視線をガード。

「なに見に行くのー?」

「え、えっど……『恐々きょうきょう! キノコヒューマン?』とかい

う」

「おー、さすが白郷。カルトなの好きだなー相変わらず」

か、カルトなんだー。うん、いやまあ、タイトルの的にキワモノ臭ぷんぷんしてるけど、そっかあ。うーん、面白いんだろうか。……というか、

「あの、すみません、危うくスルーしそうになっただんですけど『なんとかスポーツ』とか言ってますでしたか？ 私の肩叩きながら、さつき」

「あ、覚えてた？ 『ヘル・スポーツ』。昨日見た映画のタイトルなんだけどね」

ふふつと悪戯いたずらっぽくはにかむうるてさん。なんで昨日見た映

画のタイトルを口にしながら私を呼んだのかという疑問は、と  
りあえず黙殺<sup>もくさつ</sup>。

「いわゆる、俺の好きな『ホステリア』系スプラッターの亜<sup>あ</sup>  
流<sup>りゅう</sup>の、殺人ショーものだったんだけど、少し血の量が物足りな  
かったんだよねー。あ、でも」うるてさんは笑顔でぺらぺらと  
喋<sup>しゃべ</sup>る。「序盤のほうにあったシーン、主人公が殺人ショーの主<sup>しゅ</sup>  
宰者<sup>さいしや</sup>から命令されて、やむを得ず恋人のおなかに竹筒<sup>たけづつ</sup>をぶつ刺  
して中ジョッキいっぱい400ccの血を抜いちやうシーンなん  
かは結構おーって感じで」「す、すす、すみませんあのっ」

速<sup>すみ</sup>やかに鼻を押さえて、すつと斜め上を向きながら、

「それ以上詳しく聞くと、でっ、出ちやいそうなんで、話変え

てもいいでしょうか」

「ん？ あー、あはは、ごめんごめん。どーぞ」

ふはあーっ。鼻から手を離して、一息つく。

「……えと、うるてさんは、何してたんですか？ 授業終わり

とかですか？」

「ううん」ふるふると首を振るうるてさん。「今さっき、学生部に行ってきたところ」

「学生部？」

「うちの部のさ、廃部ってどうにかなんないのかなーって、確認してきたんだよね。……てか、廃部の話って散町、知ってるんだっけ」

廃部——。

その言葉の重みに、なんとなく、声のトーンを落としてしま  
いながら、

「あ、はい、一応……」と小さく頷いてみせる。

「そか。いや、なんかね、廃部っていつでも、すぐにハイさよ  
なら——ってわけじゃなくて」うるてさんが、指をピンツと一本  
立ててみせる。「今年度——つまり来年の三月までに学校規定  
の条件を満たせなかったら、そのときは廃部にしちやうから  
ね、っていう話みたいなんだ、どうやら」

「えっ、え、そうなんですかつ？　でも、部長さんは『廃部が  
決定した』って」

「あーそれは、土度見<sup>どどみ</sup>つてそういうおおげさな物言いが好きだからじゃないかなー。彼は日常生活が全体的に芝居がかつてるっていうか、うんうん」笑いながらうるてさん。

「そ、そうですか……」

何はともあれ……よかった。思わずホツとしてしまう。でも、

「その、学校規定の条件って、なんなんですか？」

「うーん、『活動実績』とか『署名』とか、なんだかめんどくさそうな条件も色々あるんだけど、とりあえずはやっぱり部員だね。学生部の話によると、部員数が一番ネツクらしい。ゴア研を創立したのって俺たちの代なんだけどさ、その頃から人数

が増えないまんま今に至っちやってるのが、どうやら規定違反になっちやうらしくてねー」

……部員、かあ。

少し責任を感じて、ずっしりした気持ちになっってしまう。

「ん、どうかした？　なんか浮かかない表情だけど」うるてさんが、私の顔を覗き込む。

「いえ、あの……もし私が、こんな体質じゃなければ……入部できたのになあつて、ちよつと……思っちやつて」

とかモゴモゴ言っていると、ぽんつと頭に手を置かれる。

「あはは、ほんとに散町はいい子だねー、うんうん」

とか言いながら、うるてさんがわしゃつと頭を撫なでてくる。

お、おふあつ。思いつきりビクツとしてしまう私。

「い、いい子つてべつ別にそんな」

「ありがとね。その気持ちだけで、俺は十分嬉しいよ」

う、うはあー、まばゆいばかりのいい笑顔イケメンスマイルが出たー。直視で

きずに思いつきり目を泳がせちやう私のドキドキなんか露つゆ知ら

ず、うるてさんは、あつそうだ、と急に何かを思いついたらしく、

「じゃあ、そんないい子な散町に、いきなりだけど俺からプレゼント」

と、ズボンの後ろポケットからごそごそと何やら取り出して、はい、と私に差し出した。小さな紙切れ。……切符？ 違



う。顔を近づけて見る。そこに印字されているのは、

「……カツ、カレー？」

「そ、カツカレー。食券。ウチの学食のイチオシなんだよねー。もしかして昼メシまだでしょ？ あげるからさ、食べてきなよ」

「え、え、いいんですか？」

「俺さ、カツカレーこれの食券、人にあげるの趣味なんだー。ウチのカツカレーはね、まあそうだなー、スプラッターで言うなら『キヤンピングカー・フイバー』って感じの味だから、ま、よーく味わってみてよ。うんうん」

とか全然よくわからないことを言いながら、にこにこ笑うう

るてさん。スプラッター映画に例えられた感じがなんだか少し心に引っ掛かったけど、とりあえず、「じゃあ、あの、頂きます、ありがとうございますっ」と素直に受け取る（正直、結構おなか減ってた）。

「うん。それじゃ、映画もカツカレーも楽しんできてねー」  
ひらひらと手をふりふり、去っていくうるてさん。その後ろ姿を見送っていたらぐうううーっと強めでおなか鳴った。うわー、なんかちよつとカツカレーのこと意識しすぎたかも知れない——というか、よかった、うるてさんに聞かれなくて。ホツとしてたらまたぐぐうううううーっと強めで鳴るおなか。うはあー、よし、行こう早急に学食へっ。

× × ×

……え？

……あれ？

……今、ランチタイムだよね？

テーブルと椅子がずらーっと並ぶ広いイートインスペースを眺めながら、カツカレーの乗ったお盆を持ったまま、ぼうぜん呆然と立ち尽くす。

なんだかわからないけど、この学食、人が全っ然いない。今いるのは、入り口付近の席でパスタを食べてる男の人と、私

の、たった二人だけ。えーなんだこれ、と首をひねっている  
と、パスタをズルズルすするボサボサ髪に巨大黒ブチ眼鏡の男  
の人と、ふっと目が合っ……あれ？

この人、もしかして、

「ゴア研の、部長さん……？」

つい、ぽつりと声を漏らもしてしまった。と、

「……誰だ、キミは」

ぽつりと漏らした声がまあまあの音量だったらしく、眼鏡を  
ずり上げ、目を細める部長さんと思しおほき男の人。慌ててピンツ  
と背筋を伸ばす。

「あつ、えと私、こないだ、創立記念日に部室におじゃまさせ

て頂いた、一年の散町千々乃ちちのといっていますっ」

「……………？ いたのか、キミ。あの日あの時あの部室に？」

部長さんは髪をむしやつと搔かきむしる。

「はっ、はい、いました。部長さん、あ那时候、『廃部だ』って言い残してすぐ出てつちやつたので、それで覚えてないのかもですが」

「ううん、なるほど。確かに放ほうしん心してたからな、あときは。

……………それで散町くんとやら」妙に芝居がかつた口調と手振りで、部長さんは私の持っているお盆を指す。「とりあえず、座つたらどうだ。食事を持ったままじゃないか」

「え、あ、はあ……………えと、じゃあお邪魔します」

促うながされるがまま、わたわたと部長さんの向かいに座って、お盆を置く。その瞬間——ふと思いつ。

……入部のお願い、してみようかなあ……。

正直、入部したところで、ちゃんとゴア研の活動をやっつけているのかすつごく不安だけど、でも、うるてさんや白郷さんと知り合えてゴア研に興味わが湧いてるのは事実だし、廃部まぬかを免れるために部員が求められてる状況なわけだし、偶然こうして部長さんに会えたのもきつと何かの縁えんだし、これって引あまたつ込み思案な自分を変えるチャンスかもだし、と頭の中で数多の『だし』を並べに並べて考えて……うん。よしつ。

言おう。

「あ、あのっ、私ゴア」「キミのそれはカツカレーか？」

私の入部希望宣言をサクツと遮る部長さん。完全に不意を突かれたせいで、三オクターブぐらい高い声になりながら、

「えっ、あ、はい、そうですっ」

「……そうか、勇気があるな、キミは」

……勇気……？

「えと、それって、どういう」

「散町くん。カツカレーはな、不味いものしか置いてないこと  
で有名なこの学食でも、随一の不味さを誇る代物だ」

「え？ え？ 不味いものしか……？」

「周りを見ればわかると思うが、ガラツガラだろう。

桁違いに

不味いがために、キミのように物知らずな素人しろうとと、僕のように怖いもの知らずな玄人くろうとしかここには来ない。そのぐらい不味いんだよ、覚えておきたまえ」

「ぶ、部長さん、食堂のおばさんたちに聞こえちゃいますよっ」

「気にすることはないさ。まあ、食べたまえよ。……それよりキミ、さきほど何か言いかけていたようだったが、ゴアとかどうとか」

「え、あ、はいっ……えと、あの、ですね」スプーンを握ってごはんとかレーを少し掬すくい、ぱくつと一口。そして、ふうーと深呼吸して、「私、ゴア研にぶゅっふえええっ」



瞬間、私の口から皿へと弾丸のように吐き出される、ごはんだったものとカレーだったもの。で、ごっはごっはと嵐のように咳<sup>せ</sup>き込んでしまう私。

「散町くん、今、吐き出しながら『ビュツフエ』と言ったぞ。

ホテルのランチかキミは」

「げほっげほごほっ、うう、ごほ」

「で、どうだ。不味いだろう」

「うう、えほっえほっ」こくこくこくと頷く。

「どういう味か言ってみたまえ」

「なんか、えほ、ごはんが、な、生クリームを、お湯で溶かしたみたいな味と、食感で、ごっほ、カレーは、ほとんど、土」

「そうだな、うん。ちなみにカツは、カツの香りの匂においつき消しゴムみたいな味だぞ」

ふふんと笑いながら、部長さんが水の入ったコップを差し出してくれる。

「うう、す、すみません……」

ごくごくと一気飲み。ううう、うるてさん、とんでもないものをー。私の頭の中で、想像上のうるてさんがにっこり悪戯っぽく笑う。うううう、想像上でもイケメンだー。

「さて散町くん、ゴア研がどうのと言っていたが」

「うあつ、はい、えと」バッグから手早くハンカチを取り出して、口の周りを拭ふきつつ、「えとその……私、ゴア研に、

にゆ、入部したいんですっ」

うはあ、言った。ついに言った。

と——少しの静寂せいじゃくのあと、部長さんは、ふむ、と呟き、どつしり腕を組んで、

「ではまず、キミに一つ、重要なことを訊きたいんだが」

「えっ、あっ、はい」

「……掛け持ち、とかするつもりはないだろうな？」

ぎよろ、と眼光鋭く私を見る部長さん。

「え、掛け持ち、ですか？ そんな、とんでもないですっ」ふ

るふると首を振る。

「そうか、うん」ふう、と大きく息を吐いて、眼鏡をずり上げ

ながら、「……いや、実はな、我がゴア研に入部したいと言っている人間がキミ以外にも一人いるんだが、そいつはあるうことか、掛け持ちしようとしていてだな」

「は、はあ……」

「それもあるうことか、映画研究会とゴア研の掛け持ちをする気なんだ。あの映研だぞ？ 人数が多いぐらいしか取り柄とえがな

い、どうしようもなくベタな活動内容この上ない、あの映研と！ しかもだ。更さらにあるうことか、そいつは映研の部長をやっているんだ。部長だぞ？ 部の長おさだぞ？ 長を務めつつゴ

ア研を？ そんな生半可なまはんかな気持ちでゴア研の活動が出来るとでも？ スプラッター道は修羅の道だぞ？ ……と、僕はずっと

彼女にそう言っつて入部を断り続けているんだが、あいつときたらまるで聞く耳を持たないというか、めげないというか、なんというか、まあ昔っからそういう性格のやつなんだが」

とか、後半だ**いぶ**独り言**み**たいな感じでボソボソと喋る部長さん。うーん、なんだろう。『昔っから』とか言っつてるし、結構仲良さげな感じなのかなあと思いつつ、とりあえずほけーつと聞いていると、部長さんは不意にハツと我に返り、ごっほん**と**咳**払い**一つ。

「……………あー、うん、すまない。ええと、散町くん、今のは忘れてくれたまえ」

「……………あ、はい」こくつと頷く。

「それで——ああ、そうか、ゴア研に入部したいという話だったな」ずりつと眼鏡をずり上げて、「では、また質問を一つ、させてもらおうか」

「は、はいっ」

思わず身構える。『好きなスプラッター映画は？』とかだろ  
うか。ううーん、どうしよう。正直に言おうかなあ。『そうい  
うのは見れないんですけど、でも、入部してみたくて』とか、  
あーでもこれっていわゆる〃生半可な気持ち〃ってやつじゃ、  
そんな態度じゃ怒られるかも、と不安で頭をいっぱいにしてい  
ると、

「キミは、スプラッター映画に対して、どういう印象を持って

るかな」

……え？ 印象？

「え、それは、そのー……ち、血がいつぱい出て、人がいつぱい死んじゃって、えーと……だから、怖い、とか、どきどき、でしよるか」

と、私の語尾に被るかぶぐらいで、ふうーっと部長さんが大げさに肩をすくめる。

「残念。さては散町くん、キミ、あまり見たことないな」

「えっ、えと、その」

「正解は『ねむたい』だよ」

「え、ねむ……？」

「眠たい。スリーピー」そう言って、ふふんと小さく鼻で笑い、「これは『血まみれの残酷映画なんかいつぱい見すぎちゃって、もはやなに見たって眠たいね』などという自慢的な意味ではなく、本当に、心の底から眠たいという意味だ」  
うわあ、さっぱりわからない。自然と半開いてしまう私の口。

「僕は、毎月三十本ほどのスプラッター映画を見ているが、そのうち、心から面白いと思えるもの——つまり『当たり』は約二本。残りは、ほとんどが低予算映画にありがちな、どーししようもない、しよーしよーもない、時間の無駄としか思えない代物ばかりだ。いいか散町くん。これは、決して安易な批判な



んかではない。数多のスプラッター映画を鑑賞<sup>かんしょう</sup>してきた僕だから言える、真実なのだよ」

「……………あ、はい」

——で。

部長さんは、喋っているうちに何かのスイッチが入っちゃつたらしく、それから実に一時間半に亘<sup>わた</sup>って、手に持ったフォークをぶんぶん振り回しながら熱弁をふるった。

いわく『ハリウッド肉塊ストリート』って映画は、とにかく画面が暗くて暗くて何かを誰かを襲<sup>おそ</sup>ってることはわかるんだけど全然よく見えなくて、しかも出てくるのがことごとくおっさんばっかりで女の子が一人も出てこないという、華<sup>はな</sup>もなければ

画面も暗いとしても眠たい映画だった、とか。

いわく『ミラクル・バイオレンス 拷問人セデイ』ごうもんじんって映画

は、もう思い出したただけで眠くなるような強烈な催眠効果を持った映画で、どうでもいい朝食のシーンを長々と三分以上かけて見せるという、想像を絶する間延びまの感あふれる眠たい映画だった、とか。

「つまりだ、散町くん。そういう眠たいスプラッター映画は、この食堂のメニューのようなものかも知れないな。不味かっただろう？ 二度と食べたくないだろう？ 金を無駄にした気がするだろう？ しかし、そうとわかっていながら、僕はなお、ここで食事を続ける。それは、この食堂のメニューの中にある

かも知れない美味うまいものを探すためでもあるし、『こんな不  
味いものを食った』と、後日、話のネタにして人と共有したい  
ためでもある。——どうだ、わかるか？」

「……はあ、えと、なんとなくは………というか、すみませ  
ん、あの」

「ん？」

「結局、そのー……私は、入部させてもらえるんでしょうか  
……？」

おそるおそる尋ねると、部長さんは、ふむ、と腕を組んで、

「部員が少なく廃部に追いやられている今、その申し出は非常  
にありがたい。だがしかし、単なる数あわせとして誰でも受け

入れるのは、僕の理念に反する。そこで、キミに一つ、やってもらいたいことがある」

「え、な、なんででしょうか……？」

「今月末までに、スプラッターを二十本ほど見てきてくれたまえ」

……えーえーつ。

「まあ、なんだ、一種の入部試験のようなものだと思ってくれ。なにせ、部員になれば毎月二十本の鑑賞ノルマが課せられるわけだから、これが出来るか出来ないかでキミの適性もわかるだろう。どういった二十本をチョイスするかも知りたいしな。では、見終わったら、また来てくれたまえ」

「……うあ、はい」

ダメだ。終わった。詰んでしまった。……うう、さよならゴア研。

「ところで、『チャイルドシート・オブ・ザ・デッド』というゾンビ映画があるんだが、あれも相当眠たい一品で、まずそもそも物語が一つも頭に入ってこないという珍奇な……」

——とかなんとか、そこから更に二時間、部長さんの『本当は眠たいスプラッター映画講座』を聞かされた。

「……ということがありまして、それであるの、こ、こんなに遅れちゃいましたっ！ すみません、ほんとにほんとに、すみま

せんつつつ！」

顔のパーツが全部落ちるんじゃないかぐらいの勢いで、目の前の白郷さんに、ぺこぺこ×4と必死で頭を下げる。

今、時刻は五時半すぎ。絶対遅刻しちやいけないと思つて一度は十二時に来てたつていうのに結局なんやかんや三十分も遅刻してしまつて、ああーほんとに私は何を。うう、どうしようもなく自分が情けない。私、もし武士だったら今ここで間違ひなく切腹してる——つて切腹のこと考えたら鼻が少しむずむずしてきて、ああ、この程度の想像で鼻血をもよお催すようじゃスパッター二十本鑑賞なんて絶対無理だ、私はやつぱり入部させてもらえないんだ、うううう、と情けなさで消えそうになつて

いると、

「大丈夫。映画、七時からだし、映画館も近いし、余裕あるから。気にしないで」

白郷さんが、ふわっと柔らかく微笑んでくれる。

……うう、もうほんとに、ただでさえ天使のような見た目なのに更にこんなに優しいなんて、外側も内側も天使だったらそれはもはや天使そのものなんじゃ、しかも今日の白郷さんの服装は、天使のような見た目が更に七割増しで天使に見える清楚なワンピースで、これはもうオリジナルバージョンの天使を軽く超えちゃってる感すら「チチノちゃん?」「えはっ、はいっ!」完全に意識が天界に行ってた。びっくりした。

「ほんとに、気にしないでいいからね」ゆるっと首を傾げる白郷さん。

「あ、はいっ、えとその、ありがとうございます」うー、もう、なんだろう、結婚したい。

「というか、チチノちゃん、入部しようとしてくれたんだね。

ありがとう」

丁寧ていねいに、深々と頭を下げる白郷さん。慌わがてて私は両手をふりふり、

「いえいえっ、そんな全然ありがとうございますとかじゃ、私はただ入りたくてそれで、というか結局入れませんでしたし、入れそうにもないですし、その」



「ありがとう。チチノちゃんは、優しいね」

「そっ、そんな」

「いい子いい子」

白郷さんが、にゅつと手を伸ばして私のおなか辺りをさすさす<sup>な</sup>と撫でる。ひ、ひゃあー、なんだかおなかの中で善玉菌が<sup>ぜんだまきん</sup>むくむくと急増していく感覚が。あつたかい。おなかがとつてもあつたかいよー。……と、白郷さんが、くすつと小さく笑う。

「え、あ、えつと、どうかしましたか……?」

「ごめん、思い出し笑い」

「はあ、え、なにを……」

「チチノちゃんがカツカレー食べて『ビュツフエ』って言いな

がら咳き込んだくんだり」

くすすくと手で口を覆おおう白郷さん。う、うわー、穴に入りたい。すぽっと入りたい。今すぐ入りたい（けど、白郷さんの笑顔がとんでもなく可愛かったので、まあ良し）。

× × ×

それから、白郷さんと一緒に映画館へと向かった。

部長さんを除くゴア研メンバー全員の御用達ごようたしというその映画

館は、大学の裏に広がる商店街のいちばん奥にあるという。なんと大学から徒歩、わずか6分。

「んん」

白郷さんが指差したのは、映画館というよりはお店のような建物だった。

店頭には透明なショーケースがあつて、中には唐揚げからあやコロッケや赤身のお肉が所狭しと並んでいて、その奥では割烹着かっぽうぎに身を包んだおばさんが「いらっしやい」と笑顔で迎えてくれていて、周りには六数精肉店ろくかずなんていうノボリも立っていて、到底映画館には見えない、まるでお肉屋さんのような、というか、あの、

「ここ、お肉屋さんですよね……?」

「二階が、映画館なの」

「え、あ、え、な、なるほど、そういうカラクリが」

とか言ってる間に、白郷さんはお店の横にある勝手口のようなドアを開けて、さっさと中へ入っていく。よく見ると、ドアの上には『シアター・ギニョル座劇場』という小さな看板が。うーん、気付かなかった。あと、どうでもいいけどシアターと座と劇場って全部意味被っちゃってるなー、とかあれこれ考えながら、おたおたと後を追う。

ドアを開けて、狭くて急な階段を上って、そしたらまたドアがあつて、そこを開けると――

「え、すごっ」

思わず大きな声を出してしまうほどの、およそお肉屋さんの

二階とは思えないような空間が目の前に広がっていた。

ピカピカに磨かれた木目調の床、淡いクリーム色の壁、暗くなく明るすぎずホワツと柔らかな照明。茶色い一人掛けのソファが三角形を作るみたいに三つ向かい合って並んでいて、その中心には映画雑誌が数冊置かれたガラスのテーブル。そして、歯医者さんの受付みたいな小さなチケットカウンター。全体的に、なんだか、シンプルでおしゃれなダイニングバー（行ったことないけど想像だけど）みたいな雰囲気。

うーん、こんな綺麗な空間を、まかり間違っても鼻血なんかで汚すわけにはいかない。自然と鼻に力が入る。

「まだ時間あるし、座って待とう、チチノちゃん」

白郷さんがソファにちよこんと座る。ので、はいっ！ と隣りのソファに座る。と——目の前、テーブルに積まれた映画雑誌の表紙が目飛び込んでくる。でかでかと書かれた『全力特集！ とうきょうひどういしだん 東京非道医師団』という文字と、その映画のワンシーンらしい首筋から真っ赤な液体をスプリングラーのごとく飛び散らせている女医さんの写真が……つて、うわあああーっ危あぶなっ！ 危なっっていうか少し出たっ！ たらっとな垂たれる感触が鼻の中でっ！ すかさず鼻を両手で押さえて、かつくーんと真上を向く。

「チチノちゃん、どうかした？ ……あ」と、白郷さんの声。続いて、ぱたんっという小さな音。「雑誌、裏返したから、も

う大丈夫」

「す、すみません、ありがとうございます……」

ゆっくりゆっくり首の向きをニュートラルに戻しながら、ふはあーとため息。

「『東京非道医師団』は上級者レベルだから、きつかったね。

平気……?」

白郷さんが、背中をさすさすしてくれる。

「はい、あの、なんとか、気力で食い止めました……」

でも危なかった。もう少しでこの素敵なロビーを血の海に変えてしまうところだった。うん、我ながらよく耐えたぞー散町千々乃、やれば出来る子だーさすが大学生っ、とか頭の中で自

分を褒めちぎっていたら——安心したせいか、なんだかそわそわ、ちよつとお手洗いに行きたくなってくる。……うーん、鼻も確認したいし、行つところかなあ。そろーっとソファから腰を浮かせ、

「えと、あの、すみません白郷さん。お手洗いってどこですかね……？」

「カタン」

「……え、下端カタン……？」

「香丹かたんでいいよ、呼び方。白郷さんじゃなくて、下の名前で呼んで」

「えっ、あ、えっ、はいっ！」



う、うわー、ものすつごく嬉しいことを、ものすつごく妙な  
タイミングで言われたー。

「それと、おトイレは、そこ」

ひゅつと指差す白郷さん……じゃなくて、香丹さん。うは  
あ、心の中で呼んだだけでも距離がぐつと近づいた気が。思わ  
ず、にへらにへらしてしまいなから、

「ありがとうございますっ」

ハンドバッグ片手に立ち上がり、指差されたほう、ちよつと  
くすんだ紺色こんいろのドアに近寄り、勢いよくガチャツと開けると

「あ」

目の前に、背の高い、ポニーテールのお姉さんが立っていた。

目が合う。肌が焼けてて少し茶色めで、露出度高めなのに爽さわやかな服装で、健康的を絵に描いたような人。なんだかビーチバレーとかやってそうな雰囲気……というか、

「わ、す、すみませんっ！」

慌ててドアを閉め、ようとして……あれ？　なんだろう、なんだかとんでもない違和感が。ドアを閉める手を止めて、お姉さんの後ろに広がる光景を、よくよく見てみる。

トイレにしては広すぎる。奥行きがやたらある。壁に絵とか飾ってあるし、足元には靴が並んでるし、横の棚には招き猫の

置物が……って、こい、もしかして。

——おうち？

× × ×

「そっかー、ここ来るの初めてやったんや。ならだいぶビツク  
リしたんちやう？ あたしんちな、あんな感じで、ロビーに思  
いっきり面してんねん。ほぼ映画館の一部やな」

ポニーテールのお姉さんが、ソファの上であぐらをかいてニ  
カニカ笑う。私たち三人だけのロビーに、お姉さんの声がよく  
響く。

「チチノちゃん。この映画館、おトイレは、大奈<sup>だいな</sup>ちゃんちのを  
使うシステムなの」

淡々と教えてくれる香丹さん。大奈ちゃん、というのがポニ  
テお姉さんの名前らしい。というか、すごいシステムだなー防  
犯面とか大丈夫なんだろうか、と思いつつ、

「あの、貸して頂いて、ありがとうございます」と、お辞<sup>じ</sup>  
儀<sup>ぎ</sup>。

「えーよえーよ。気にせんと、勝手にじゃんじゃん使つて  
なー」

「は、はい」

万一、映画を見て鼻血が大量に噴出した場合、もしかしたら

じゃんじゃん使わせて頂くことになるかも知れない（色々洗ったりとかで）ので、強めに頷いておく。

「んで、この子誰なん？」

「散町千々乃ちゃん。私の友達。一年生」

香丹さんが、中ジョッキになみなみ入ったコーラ（大奈さんがおうちから持ってきた）をこくこく飲みながら答える。というか『私の友達』って、くくはあー、嬉しすぎる。血を見るとか関係なく鼻血噴出しそう。

「へー一年なんやー！ えーなあ可愛いなー」

とか言いながら手を伸ばし、大奈さんが私の髪をさわーつと撫なでてくる。

「わっ、かつか可愛くないですよっ」

「やーそういう感じも垢抜あかぬけてへんっちゅーか、えーなあー  
えーなあー」

とか言いながら、私の肩に腕を回す大奈さん。そのまま、  
ぎゅーっと抱き寄せられる。ほのかに鼻先をくすぐる南国のフ  
ルーツ的な香り。うわー、私もこんな風に甘い匂ただよいを漂わせる  
大人の女性になりたい、と大学生活における目標が一つバシッ  
と決まった私。

「あ、あたしはなー、六数大奈ゆーねん。チツチ（どうやら私  
のことらしい）とおんなじひだりまえどう左前堂大学の生徒でー、タンタン

（どうやら香丹さんのことらしい）とおんなじ三年や。高校ま

で関西に住んでてんけど大学入ってこっちに上京してきてー、  
で、叔父<sup>おじ</sup>さんと叔母<sup>おば</sup>さんがここで肉屋やってはってー、じい  
ちゃんがここで映画館やってー、ほんで一緒に住まわせても  
らっててー、あとは、んー、タンタン、なんか他にあたしの情  
報ってあったやろか」

「映研の部長」すかさず答える香丹さん。

「おーそやそや。映画研究会の部長やってんねんあたし。知っ  
てる？ ドチャクソ部員おる左前堂一のマンモス文化サークル  
やで」

「あ、はい、聞いたことあります」——って、あれ？

なんだろう。映研の部長さんの話って、今日、どこかで一回

聞いた気がする。

「映研は、もう新入部員、入った？」

香丹さんが、コーラの中ジヨツキをテーブルに置きながら尋ねる。

「うん、五人ぐらいな。どんどん部員多くなってもーて、あたしも覚おぼえられへんホンマ」

わー、いいなあ。ゴア研にそのうちの何人かだけでも入ればなあ。と、大奈さんが、

「チツチはゴア研に入つとる感じなん？」

「あ、え、えつとー……」少し口ごもってしまふ。「私は、その……ゴア研見習い、みたいなもので、まだ、入部させてもら



えてないんです。まだ、というか、ずっと入部出来そうにな  
い、というか……はい」

「えーなんやそれ」大奈さんが、ぐっと私のほうに身を乗り出  
す。「それってあれかー？　もしかして、ドミーがなんか変な  
こと言ってるちゃうの？　んー？」

ドミー……？　誰？　外人……？　そんな私の頭上の疑問符  
を見抜いたかのように、

「部長のこと。土度見言来げんらいで、ドミー」とスマートに説明して  
くれる香丹さん。

「あ、なるほど……」部長さん、下の名前いかついなあーとか  
思いつつ、「はい、あの、まあ、そういう感じなんです」と、

食堂での出来事をかくかくしかじか話した。

大奈さんは、そら難儀なんぎやなあー、と苦笑しながら、

「ドミー、昔っから偏屈へんくつやねん。強情ごうじょうゆーか意地っ張りゆー

か」

「……？ その、昔っからっていうのは……」

「大奈ちゃん、部長と幼なじみなの」香丹さんが、そつと教えてくれる。「中学が一緒だったんだよね」

「ん？ そやでー。中二んとき親の仕事の都合でちよろつとこつちに転校してきててな、ドミーとは中二中三ずつとおんなじクラスやってん」

そうなんだ……って、うーん、なんか、どうも何かが引つ掛

かってる感覚がある。なんだろう、なんだっけ。部長さんが、学食で話してたこと——あつ。

「あ、あのっ、大奈さんってもしかして、掛け持ちで、ゴア研に入部したいって……」

「おおーっ！」目を真ん丸にする大奈さん。「え、知つとつたん？ わーなんでなんで？ ドミーに聞いたん？」

「あ、はい、まあ」

やっぱりそうだ。私以外にもう一人いるゴア研入部希望者つて、大奈さんのことだったんだ。

「んー、えへへー、なんやる、あたしがおらんとこでドミーがあたしの話してんの、変に照れるわー」ほっぺたを掻きながら

笑う大奈さん。「そーやねん。一年のときからずーっと入りたい入りたいゆるーてんねんけど、あいつ全然聞いてくれへんねん」

「大奈ちゃんが入ってくれば、部員増えて、助かるんだけどね」

香丹さんが、ちよつとだけ残念そうな顔をする。

「まーでもなー、正直あたし、スプラッター映画が好きやからってゆるーかドミーのこと好きやからゴア研入りたいたけやし、うーん、その辺がドミーも気に食わんのかも知れんよなー」「えっえっえっ」

急に青春テイストな情報が出てきて思わず『えっ』を連発し

てしまう。

「あれー？ あー、その話はチツチ知らへんねやー」と、小さくはにかみながら、「あたしな、大学一年ときから今まで、もー通算、五、六回はドミ<sup>こく</sup>ーに告つてフラれてんねん。えへへ、どやーっ」

「えっ？ あっ、えっ？ それは、あのその、えーとその、なんといいかあの」

あまりにあっけらかんとした大奈さんのドヤ顔に、動揺しすぎて言葉がさっぱり出てこなくなる私。

「大奈ちゃん、初めて部長に告白したの、中学の卒業式の時きだもんね」

香丹さんが、淡々と、でもどこか楽しげに言う。

「そーそーそー……ってその話、あたしゴア研のみんなにはもう散々さんざんしてるなー、恥ずかしわー」大奈さんが、けらけらっと笑いながら、私のほうに身を乗り出して、「あんなーチツチ、これマジで聞いて欲しーんやけど、あいつ絶対あたしのこと好きやっでんでー？」

「は、はあ……それは、えつと……？」私もつられて身を乗り出す。

「あいつな、中学んとき、女子となんか普段よー喋らんクセにあたしにだけいっつもむっっちゃ突っかかってきよってなー、あーそや、バレンタインのときなんか、チョコやったら『いら

ん！』ゆーたのに、放課後に『やっぱり、もらってやろう』とか言いにかよってドチャ可愛かってん、へへへ」

う、うわー、それは部長さん、典型的なツンデレだー。部長さんの『やっぱり、もらってやろう』を想像してなんだかドキドキしてしまう私。と、香丹さんが、

「部長が今、映研にやたら突っかかっているのも、その辺にルーツがあるよね、きつと」

「そーそー、結局ドミーは単なる照れ屋やねん。なータンタン、あいつ最近、映研のことなんてゆーてる？」

「『ありきたりな活動内容』とか『人数だけで中身がない』とか『あの部長は映画のなんたるかがまるでわかってない』とか

『あの部長はどうしようもない』とか『あの部長はなんかもうとにかくダメだ』とか」

「あ、それ、あの」思わず割って入る。「今日、学食でも、私にそんな感じのこと言っていました、部長さん」

あははーっ、と大奈さんが大きく笑う。

「やっぱドミー、なんやかんやであたしのことむっちや意識してんねんなー。ちゅーことは、あいつやっぱり、あたしのこと好つきやな、さては」

香丹さんが無言で、うんうんと頷く。私も一緒に、うんうんと頷く。うんうん。

「ふふん、よーし、ほんなら、また告ってみよっかなー」



「大奈ちゃん」

香丹さんが、大奈さんをじつと見つめる。

「ん？ なに？」

「大奈ちゃんは、部長の、どういうところが好きなの？」

「えー？ そんなん、好きに理由とかないよー」

大奈さんは、さくつと笑顔で答える。おおー、なんだろうこの空気。すつごく修学旅行の夜みたいなおいがする。変にそわそわしてしまいながら、二人のやりとりを見守る。

「アホみたいやけどな、中学んときから今までずーつとドミーのこと好きやねんで、あたし。理由なんかあつたら、逆にそんなに長々思い続けたり出来へんのちゃうかなー。……って、ま

あ、そやな、あえて理由ゆーんやったら、だつてあいつむっ  
ちや可愛いやん。あんなやつ、他におれへんもん」

とか言いながら、からつと笑う大奈さん。うはあー、かつこ  
いい。そして可愛い。大奈さん、素敵すぎる。うん、ちよつと  
鼻血出そう。

と、大奈さんが、

「てか、なんかあたしの話ばつかちやう？　じゃーちよつと攻  
守交替つちゆーことで、なーなー、これずーつと気になつて  
んけど、タンタンとビルビルつてどつちから告つたん？」

「……………告白？」香丹さんは、小さく首を傾げながら、「私  
と半ちゃんは、どつちからつていうか」「あつ、あかん！」

香丹さんの言葉を遮って、大奈さんが声をあげた。

「チツチ、タンタン、もうすぐ映画始まんて。七時から上映開始やし」

えっ？ とチケットカウンターに置いてある時計を見ると

——時刻は七時のおよそ二分前。うわっ時間ぎりぎりだ……っ

て、いやいやいや、というか、え？ え？ え？ 香丹さんと

尾留寺さんびるでらって付き合ってるの？ た、確かに香丹さん、尾留

寺さんのこと『半ちゃん』とか呼んでて仲良さげだなーとは

思ってたけど、まさかそんな関係だったとは。前触れもなく訪

れた衝撃の情報に、半ば放心状態な私。と、香丹さんがソファ

から立ち上がり、

「チチノちゃん、行こう」私の手をくいと引っ張る。

「は、はいっ！」

とソファから立ち上がり——つつも頭の中では、え？ で、

結局、『私と半ちゃんは、どっちからっていうか』の後に続く言葉はなに？ 『どっちからっていうか、どちらからともなく

自然に』とか？ 『どっちからっていうか、親同士が決めた許いいな

嫁づけだから』とか？ まさか『どっちからっていうか、べっ、別

に付き合ってたたりしないんだからねっ』とか？ うわあー、最

後のツンデレパターンの香丹さんもう絶対ありえないけどでも

一度でいいから見てみたいー、とあれこれ考えながら、前を行

く香丹さんに引っ張られるがままに早歩き。すたすたとチケツ

トカウンターの横を素通りして、奥の大きな扉の前へ……つて、

「えっ、あ、香丹さん、チケットは」

わたわたする私に、後ろから大奈さんが大声で、

「えーよーチケット代は見終わってからでー！ あっ、ポップコーンとコーラ、後で持っていくなー！ ほな、ごゆっくりー！」

「あっ、はい、ありがとうございますーっ」 大声で返す。ん？  
「……というか、ここ、ポップコーンとか売ってるんですか？

なんかそういうの、設備、なかった気が」

「大奈ちゃんがおうちで作って、持ってきてくれるシステム」

「……な、なるほど」

うーん、なんてアットホームなシステム。と、香丹さんが大きな扉に手をかけて、ゆっくりゆっくりと開けていく。

そこは——当たり前だけど、確かに、映画館だった。

ただ、普通の映画館と違うのは、観客席に段差がなく、平たい床に椅子が並んでいるところ。座席の数は、ざっと見た感じ、三十ちよつとぐらい、な気がする。ミニシアターという言葉がしつくりくる、いい意味でこぢんまりとしたスペース。でも、スクリーンは想像してたより全然大きかった。壁一面を覆い尽くす銀幕ぎんまく。

「ここにしょつか」

香丹さんが、すたすたと中央やや後ろ辺りの椅子まで歩いて、ちよこんと座る。で、私も隣りに座る。他にお客さんはいない。え、もしかして貸切？ わー、なんだかプレミアム感。否応なくわくわくしてしまう。と——

ゆっくり、ゆっくりと、場内が暗くなっていく。

あ——、始まる。

私は、銀幕をじつと見つめながら、ハンドバッグを膝ひざの上に乗せ、中から箱ティッシュをそつと取り出し、ぺりぺりと取り出し口のミシン目を開けていく。

……よし、準備万端っ！ さあ来いスプラッター！ うおーっ！

× × ×

——一時間二十分後。

『恐々！ キノコヒューマン』が終わって、私は、安心していった。

今の箱ティッシュの残量をパーセンテージで表すと……  
100パーセント。

要するに、一枚も使ってない。

そう。つまり……鼻血、出なかった!!

「チチノちゃん、大丈夫だった……?」



私の顔を覗き込む香丹さんに、

「だっだだだ、大丈夫でしたっつっ！」

嬉しすぎて自分でも引くくらいの大声で答える。わあー、初めてだ。初めて、血を見ても、鼻血が出なかった。小学生の頃から今までずっと毎月お薬をもらいに通ってるやましたじびいんこうか山下耳鼻咽喉科の山下先生！私、ついにやりました。改善の兆きざしが見えました。父さん！母さん！私、やったよ。鼻血、出なかったよ。新しい私に、生まれ変われそうだよー。うううー、なんか泣けてきた。涙でちよつと目を潤うるませる私に、

「……そんなに、面白かった……？」

香丹さんが、若干引き気味なニュアンスで尋ねてきた。の

で、慌てて、ぶんぶんと首を振り、

「いえあのっ、面白くはなかったですっ！」

うん。いや、ほんとに、面白くはなかった。つまんないってわけでもないけど、なんだろう、感想としては、『え、これ、こんなのでいいの……？』という感じ。

ストーリーは、ある科学者が、自作の特殊な薬品（なんの薬品なのか詳細は言及されなかった）を持って山奥に行くんだけど（理由は言及されなかった）、道中に薬をうっかり漏らしちゃったせいで（薬品の蓋と薬品を入れたカバンの蓋がダブルで開いてた）山中に生えてたキノコ（なんのキノコかは言及されなかった）が突然変異を起こして、口が出来たり牙きばが生えた

り足が生えたりして人を襲い始める、みたいな話。で、そのキノコってというのが、人形劇の人形みたいに手を入れてパクパクさせるタイプのもので、だから、どう見ても牙が生えた鍋つかみにしか見えなくて、そのキノコに襲われる人も、ギヤーという悲鳴と共にカメラが切り替わると、どう見てもぬいぐるみにしか見えない物体に早変わりしていて、そんなぬいぐるみの身体を鍋つかみがパクパク食べてる映像は、見ててちよつと気が遠くなったりした。うん。結論としては、とにかく、えつと、なんというか……えーなんだっただらう、この映画。

その後、ロビーに戻って、『なぜ散町千々乃は鼻血を回避で

きたのか?』について二人で話し合った。

「やっぱり、リアリティだと思う」

もしゆもしゆとポップコーンの残りを頬張りながら香丹さん。

「この映画、血はいっぱい出てたけど、でも全部ぬいぐるみから出てたから、リアリティ、感じなかったでしょ」

「はい……ぬいぐるみのスプラッターシーンは、なんかもう、高熱でうなされてるときに見る夢みたいな感覚でした」

「それが、勝因」ぺろ、と指先を舐める香丹さん。「これが大丈夫なら、次は『怪々かいがい！ ウサギヒューマン』とか、いけると思う」

う、うわー、詳しくはわからないけど、確かにそれも見れそうな気がするー。というか、香丹さん、すごい。私の視聴レベルに合わせたスプラッター映画を的確にチョイスしてくれて、もう、あれか、ソムリエか。……あつ、というか、

「えと、あの、香丹さん、こんなタイミングであれですが——今日は誘って頂いて、ほんとにほんとに、ありがとうございます——したっ」

ソファから立ち上がり、ぺっこーんっと大きく頭を下げる。うー危ない、お礼忘れるところだった。

「ん……どういたしまして」香丹さんは、くすぐったそうに小さく微笑んで、「これから少しずつ、見るスプラッターのリア

リテイレベルを上げていけば……もしかしたら最終的に、本物の血を見ても鼻血が出なくなる、かも、だね」

「えっ、わ、そっか……そうですねっ！　あり得ますよねっそんなミラクルもっ！」

香丹さんの神様のような言葉に、思わずテンションが上がってしまふ。いやいやほんとにありうるありうる。呪われた鼻血体質からサヨナラできる可能性！　うん、なんだか、本気でゴア研入って、がつつりスプラッター修行したくなってきた。

と、ロビーに隣接する六数家のドアがガチャリと開いて、

「お、終わったー？」大奈さんが顔を覗かせる。「ほな、お代もらおーかな。飲み物、ポップコーン、チケット、全部コミコ

「ミで一人千二百円！ よろしゅー」

「あ、はいっ」

いそいそとバッグから財布を取り出し、お金を大奈さんに渡す。はいはいありがとーさん、と大奈さんは私たちからお金を受け取り、ポケットにねじ込むと、

「えへへ、なーなー、ちよつと聞いてくれるかー？」と、照れたように笑いながら、「実はあたしな、ドミィの話とかして気分がちよつと乗ってきてもーたんか知らんけど、二人が映画見てる間にドミィにメールしてみてん。『ゴア研、入れてくれへんかなー』って」

こ、行動力すごっ。これが大人の女性の行動力かっ。

「それで、どうだったの？」興味ありげに香丹さん。

「すぐに『無理』ゆーメールが返ってきたわー」苦笑する大奈さん。「でなータンタン、もしよかったらタンタンからドミミに掛け合ってくれへんかなー……って、どないしたん」

見ると、香丹さんが、ケータイ片手にブイツとVサインを作って、

「メール打って、もう送った、部長に」

「「早っ」」大奈さんと綺麗にハモった。

と、すぐに香丹さんの手の中で、ケータイがぶぶぶぶつと震えだす。ディスプレイを見る香丹さん。

「もう返ってきた」



「早っ」大奈さんとまたハモる。

「……『無理』とだけ、書いてある」

ディスプレイを見たまま、小さく呟く香丹さん。ああー、うーん、やっぱりダメかあー、というか部長つけんどんすぎるー、と私が思っていると、

「やっぱアカンかー」カラツとした調子で言う大奈さん。

「ま、なら、なにか手エ考えるまでや。チツチ、タンタン、協力してくれるか？」

「もちろんっ」

今度は香丹さんと綺麗にハモった。

× × ×

翌日の夕方。

私は、ゴア研の部室の前に立っていた。

香丹さんから来たメールを、もう一度、見直す。

『作戦D 準備完了 部室に四時 我らに勝利あれ』

……たぶん、<sup>〃</sup>D<sup>〃</sup> っていうのは大奈さんのD、なんだと思う。それにしても、なんだろう、戦時中みたいな文章というか、香丹さんってメール普段からこんな感じなのかなあ（とり

あえず初メールが嬉しかったから保護したけど。

ううーん、まあ、色々わかんないこともあるけど、とりあえずいってみよう。作戦Dの詳細はさっぱりだけど、出たところ勝負だ、うんうんっ。と、自分を奮い立たせて――

「お、おじやましまーす……………」

ききききーつと、ゆつくりドアを開ける。

「あ、散町、いらっしやい」

すぐに声を掛けてくれたのはうるてさん。ドアのすぐ脇で、壁にもたれて立っていた。

「おー、いつかの鼻血っ娘<sup>こ</sup>。まー適当に座れよ」と、これは尾留寺さん。というか、鼻血っ娘っつて。妙に語感がいいのが無<sup>む</sup>

性に恥しょうずかしい。

「チチノちゃん、ここ」自分の隣りの椅子をぽんぽんと叩く香丹さん。

「あー、ほんならチツチ入れてやりなおそーや」と、椅子の上であぐらをかく大奈さん。

「……やりなおそーや、じゃなくてだな」大奈さんの向かいの席には部長さん。「なんでお前がここにいるんだよ、ずっと」  
「ええやん別に。おんなじ映画系サークル同士仲良くしようやーって話やんか」

大奈さんが、けらけらつと笑う。昨日は露出度高めな服装だったけど、今日はもこもこしたダウンジャケットを着てい

て、なんだろう、寒いのかなあ、と思いながら香丹さんの隣りの椅子に座ると、

「よーし、じゃあ散町入れてやり直そう。お題はー……白郷、なにがいい？」

うるてさんが、にこにこしながら香丹さんのほうを見る。

「……じゃあ、『牛人間』」

「おー、さすが白郷。カルトなところ突いてくるなあー。じゃ、

『牛人間』でいこう」

「えーなあ！ いこーいこー」

わいわい盛り上がる大奈さんとうるてさん。うん、なにやってるのか全然わからない。というか作戦Dは？ などなど、私

が無数の疑問符を発生させていると、ちよいちよいつとテーブルの下で私の膝を誰かが突つついた。え？ 思わず下を見ると、

『大丈夫 チチノちゃんは 座ってればOK』

と書かれたケータイのメール画面。

顔を上げると、香丹さんが私を見て、小さく頷いた。

おおー……そっか。よし、じゃあ、座ってよう。よくわからないけど。

「『牛人間』ってどういう話だったっけ。オレ、あんまわかん

ねーかも」

「あはは、尾留寺はほんとにゾンビ以外弱いよねー」

「うるせー、ゾンビが一番おもしろーんだよ」

とか、楽しげに喋る尾留寺さんとうるてさん。この二人は作戦D、知らないんだらうか。

「じゃあ説明するけど、えーつとね、『牛人間』つていうのは、まーよくある『田舎に遊び行ったら殺されちゃいました』系の話なんだけど、流れとしては、大学生たちの乗った車が田舎道でパンクしちやつてー、ケータイも圏外でー、立ち往生してたら牛の被り物かぶした人が出てきてー、そいつに一人殺されてー、残り全員拉致されてー、監禁されてー、殺されてー、逃

げようとしてー、捕まっつてー、殺されてー、また逃げようとしてー、殺されてー、おしまい、みたいな」

「あーそういうやつか、なるほどな」

えーなーなるほどなんだー。これ以上ないほどふわふわとした説明だったけど、それでなるほどなんだー。よくわからないけど、スプラッター通の人って、すごい。

「じゃあ一番は誰かなー。うーん、やっぱり尾留寺じゃない？」  
うるてさんが言う。

「えーまたオレかよ。オレ、だいたいなんでも一番じゃねーか」

「だってねー、やっぱり金髪の悪そうな男は一番に死ぬって定じよう



石<sup>せき</sup>だし。ねー六数」

「せやなー。ゆーても、あたしもビルビルと似たタイプやけどな。元気系ゆーか」

「でも六数みたいなのは、逆に結構生き残るよね。それに、この中だと六数が一番おっぱい<sup>わく</sup>悴だし、おっぱい悴って中盤まではだいたい生きてるもんだし。ねー部長」

「……………」

無言で目をそらす部長さん。顔が天狗<sup>てんぐ</sup>レベルに赤い。——と  
いうか、

「か、香丹さん、これ、なんのゲーム？　なんですか……………」  
小声で尋ねる。

「もしもスプラッターなことになったら誰が一番最後まで生き残るかゲーム」

「……………えーっと、それって、どういう」

「お題のシチュエーションに基づいて、みんなで話し合って考えて、最後まで生き残りそうな人が優勝。みんなからジュースおごってもらえるの。ゴア研考案のオリジナリティあふれる遊び」

「……………は、はあ……………」

もしかして、このゲームの勝敗ってとんでもなくさじ加減次第では、と思いなながらもその言葉を飲み込む大人な私。

あと、もう一つ、疑問。

「香丹さん、そのー……お、おっぱい棒、ってなんですか……?」

「胸が大きい女の子。スプラッター映画には欠かせない、お色気担当棒」

「……なるほどー」

なら確かに、大奈さんが一番おっぱい棒だ、悲しながら。うう、いや、でも私だってそこそこ、うう、ダメか。そこそこぐらいじゃ棒は獲得できない。生き残るために胸が必要なんて、スプラッターって戦争だ。とか、あーだこーだ考えている間にゲームはずいぶん進行してたらしく、

「じゃー残ったのは、俺と、散町と、六数だね。うーん、次、

誰かなあー」

うるてさんが顎に手をやり、にこにこ笑う——つて、え？

「うるてさん、私、生き残ってるんですかっ？」

「うん。だって散町、処女枠だからねー」

「なるほど処女っしよっしよ、うわっ、えっ、な、なにをっ」

「え？ あ、ごめん、俺、なんか雰<sup>ふん</sup>囲<sup>いき</sup>気とかで勝手にそう踏ん

でたんだけど……散町、処女じゃないんだ？」

「い、いえっ処女ですけどっていやいやいや、わた、私はなにをっ」

「えーでも、ほんならあたしかって処女枠やでー？」

大奈さんが、ほけーっとした感じで手を上げる。ええーっ思

わぬぶっこみが！ ぱっと反射的に大奈さんの向かいを見る  
と、部長さんは、全然ずり下がってないのに何度も何度もく  
いっくいつと取り憑つかれたように眼鏡をずり上げていて、額ひたいは  
ナイアガラかってぐらい汗びっしよりで、もう、史上まれに見  
るわかりやすい心の乱れっぷり。

「うーん、これは難しくなってきたねー。おっぱい粹兼処女  
粹って今までにないタイプ」くすくす笑ううるてさん。「ま、  
なんにしても次に死ぬのは俺かなー」

「ふくみの含野くんは、実は真犯人でした粹、っぽい気がする」  
凛りんとした声で香丹さん。

「あ、あるねーそれ。『牛人間』が牛の被り物を脱いだら、実

は俺でした、みたいなの。あつ、そういうえば」ぱんつと手を叩いて、「ちよつと待ってて。面白いものがあるんだった」

と、うるてさんはドアを開け、外へ出て行ってしまおう。

——うーん、それにしても……。

ちらつと部長さんを見ると、天狗をお鍋でぐつぐつ煮込んでいましたぐらいの真っ赤な顔で、じーつと壁を見ている。

完全に大奈さんを視界に入れられないようにしてる感じ。……作戦D、上手くいくなかなあ。そこはかたなく不安になっていると、

「おまたせー」

ドアが開き、牛の頭をした人が入ってきた。手には、巨大な

鉈<sup>なた</sup>。

……えー。うるてさん、ちよつと浮かれすぎでは。

「こないだ、ホンキ・ドーナテで見つけて買った。このマ  
スク、全然前見えないやー」

とかモゴモゴ言いながら、よたよたと歩くうるてさん。足元  
が限りなく危なっかしい。

「お、うるて、それは？ 鉈。結構凄<sup>すご</sup>めだけど、それもホンキ  
で買ったやつ？」

尾留寺さんが結構食いついた感じで尋ねると、

「ううん、これはガチ鉈だよー」

えー危なっ、というかそんなものどこで。と、うるてさん

が、鉈を持ったままマスクを外そうとする……けど、視界が悪  
いらしく、もたもたもたもた。

「あー、やばい、取れないや。六数、手伝ってくんない？」  
「なんやねん、しゃーないなー。てかあんだ、なにしたいね  
ん」

笑いながら立ち上がる大奈さん。よろよろ動き回るうるてさ  
ん。——と、そのとき、

ぐら。

うるてさんが、バランスを崩して、大奈さんのほうへゆっく  
り傾いて、

「あっ」



慌てて身体を支えようと腕を伸ばし、大奈さんのおなかに手を付くような形になる。鈍、鈍、持ったほうの手を。……え？私からは、大奈さんの背中が陰になってよく見えないけど、え、もしかして。

鈍。

大奈さんの、おなかに？

——瞬間。

ぷっしゅううと、うるてさんの顔に飛び散る、真っ赤な飛沫。  
しぶき

……え？

え……嘘？

え？ 嘘でしょ？ え？ え？

鈍が、鈍が？ え？ え？ 嘘だよ？ え？ え？

……え？

「ちよ、大奈っ、おいっ、だ、だだ、大丈夫かつ！」

部長さんが、椅子を倒しながら、ありったけの勢いで大奈さんへ駆け寄る。うるてさんを突き飛ばして、押し退けて、ふらつく大奈さんを背中側から抱き締める。

「おいっお前らぼーっとしてんじやねえよっ救急車っ早く救急車っ呼べ早くっ！」

誰もが無言の室内で、ただ一人、部長さんの声だけが響く。

え？ 嘘でしょ？ え？ 嘘？ え？ あ。

ふしゅつ。

——鼻血が出た。

× × ×

「……えへへへー、嬉しかったわー、抱き締められて超ドキドキしてもーた。へへへ」

私が鼻血を噴出して、三分後。

そこには、ほっぺたを赤らめながらニカニカ笑う大奈さんの姿があつた。

そして私はというと、椅子にぐったり座つたまま、香丹さん

にハンカチで鼻血を拭ふいて頂いている。

「ごめんね、チチノちゃん。内緒にしてて」

「……………あ、いえ……………」

種明かし。

うん。要するに、全部、お芝居だったらしい。って、冷静に考えれば、そりやそうだって感じなんだけど（ちなみに、私と部長さん以外、全員知ってたんだとか）。

大奈さん着用のダウンジャケットには、あらかじめ縫ぬい目が入れてあって、中に映研で使ってる血糊ちのりが仕込んであったそう  
で、うるてさんが、倒れた瞬間にその縫い目を手で切り開いて、どばー。血糊はケチャップ的な仕組みだったらしく、手で

押さえたら、ぴゅーっと飛び出す仕様だったとか。……うーん、それにしても、リアルだった。映研おそるべし。

「チチノちゃんのリアクションが、リアリテイを増幅ぞうふくさせると思っで、内緒にしてたの」

「……はあ、そうですか」

「予想どおりだった。ありがと、チチノちゃん」

ビツとサムズアップする香丹さん。

「………はい、どういたしまして」

よわっとサムズアップ返す私。というか、ううう、恥ずかしい。穴に入りたい。すぽっと入ってそのまま穴で余生を送りたい。……とか、そんな私の恥ずかしさはともかく、部長さ

んはというと、天狗をはるかにしのぐ赤い顔で大奈さんと向かい合っている真つ最中。

「ドミィは、本気になったらいつもの芝居がかった口調じゃなくなんねんなー。えへへ、むっちやかっこよかつたでー」

「……………五月蠅うるさいな」むしやむしや髪を搔く部長さん。

「ほら、吊り橋効果とかゆーやん。どきどきしたら好きになる、みたいな。スプラッターってそういうところ最適やなー思うわあたし。えへへ、どう？ 出た？ 吊り橋効果」

「……………知らん」

うーん、もうなんだか見てるこっちが吊り橋効果ばりにドキドキしてきた。というか大奈さん、むちやくちや押すなあー、

かつこいいー。

と、大奈さんが、部長さんをまっすぐ見つめて――

「あたしな、どうしてもドミリーのこと好きやねん」

――う、うわあー、いい、いい、言ったあー、うっ。

「えへへ、中学んときから今まで、もうずーっと何回もフラれてんのに、それでもどうしても好きなんや。むっちやアホちやう？」

「……………そうだな」

「…………な、付き合ってくれへんかな？ ドミリーさえよければ、

やけど」

静寂。

固唾<sup>かたず</sup>を飲んで、じつと、じつと、二人を見守る私たち。

長い、長い、沈黙。

そして。

「……………勝手にしたらいい」

ぽつりと、部長さんが呟いた。って、え、それって。

「それって、ええってこと!？」

大奈さんが一際、大きな声を出す。無言で、壁のほうを見た

まま、こくんと頷く部長さん。う、う、う、うわーっ！

めっっちゃ可愛いーっ！ 鼻血また少し出てき

たーっ！ と、大奈さんがぎゅううーっと部長さんに抱き

ついて、



「ななな！ほんならほんなら、あたしゴア研に入ってもええ？ええよねっ？」

「……もう、なんだ、全部好きにしたらいい」

「やったあー！と喜ぶ大奈さん。と、香丹さんがちよいちよいつと私をつつき、

「チチノちゃんも、どさくさに紛まぎれて、今、ほら、入部チャンス」

「えっえっ!? あ、え、えつとあのっ！」ガバツと立ち上がる。「あのその、私まだ二十本とか全然見てないんですけどでも入部したら絶対絶対ちゃんと見ますのでっ、だからあの、わっ、私もゴア研に入れてもらっていいでしょうかっ！大奈

さんとセットでっつ！　なんかこう、ぽっ、ポテト的な感じ  
でっつっ！」

ちらつと部長さんが私を一瞥いちべつして、はあ、とため息を一つ。

「……意味がまったくわからんが、好きにしたまえよ、もう」  
や、や、やったああー！　思わず香丹さんにぎゅっと抱  
きつく。

「香丹さんっ、なんだかわからないけど、入部できちやいまし  
たっ！」

「うん、よかった、作戦どおり。ちなみに、作戦Dの〃D〃  
は、どさくさのDだから」

「気付くわけないじゃないですかっ」

——そんなわけで。

私は、晴れてゴア研の新入部員になることが出来た……んだけど、でもゴア研が廃部を免れるまでの道のりは、まだまだ全然、始まったばかりだった。……うーん、気が重い。

(ごあけん アンレイテッド・エディション 第二話／おわり)

ラブベ界の鬼才！

折口良乃

「デユアル・レイザー」

「シスター・サキユバスは後悔しない」

アニメ界の異才！

板垣伸

「LUPIN: the Third 峰不二子という女」  
「一ききり」

残虐系純愛物語

が放つ、



「付き合ってもいいですよ、私を百回、殺してくれたなら」

刺殺、絞殺、焼殺、撲殺……。愛のため、

僕は彼女を惨殺する

刺殺、絞殺、  
焼殺、撲殺……。

愛のため、

僕は彼女を惨殺する

恋の百殺目

絶賛発売中!

¥1400(税別) 講談社

KODANSHA  
BOX

「付き合ってもいいですよ。  
私を百回、殺してくれたなら」

## 「編集後記」

第20回BOX-AiR新人賞選考でニコ生デビューしました。はじまる前はとても緊張していたのですが、実際に中継がスタートすると楽しい気持ちのほうはずっと大きいことに気づきました。新しい才能が生まれる場に、投稿者もファンも編集関係者もみんな一緒にいられるなんて、とつてもワクワクするし、応援したい気持ちも大きくなりませんか？

12月の選考会では増刊号に掲載されている第16回～20回の受賞作から1作品が、今年度のアニメ化作品として選出されます。公開番組の詳細は、講談社BOXのHP、「BOX-AiR」

ページにてお知らせいたします。みなさんにまた当日お会いでき  
きるのを楽しみにしています！

(文責＝L)

**BOX-AIR 新人賞増刊号2013**

**2013年12月1日発行**

**発行所**

株式会社講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

<http://www.bookclub.kodansha.co.jp/bc/kodansha-box/>

**デジタルプロダクション**

アルフエイズ

**主宰**

講談社BOX



A i R

スターチャイルド

**編集人**

栗城浩美

**発行人**

鈴木哲

本書の無断複製は

著作権法上での例外を除き

禁じられています。



**BOX**  **AIR**